鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　15

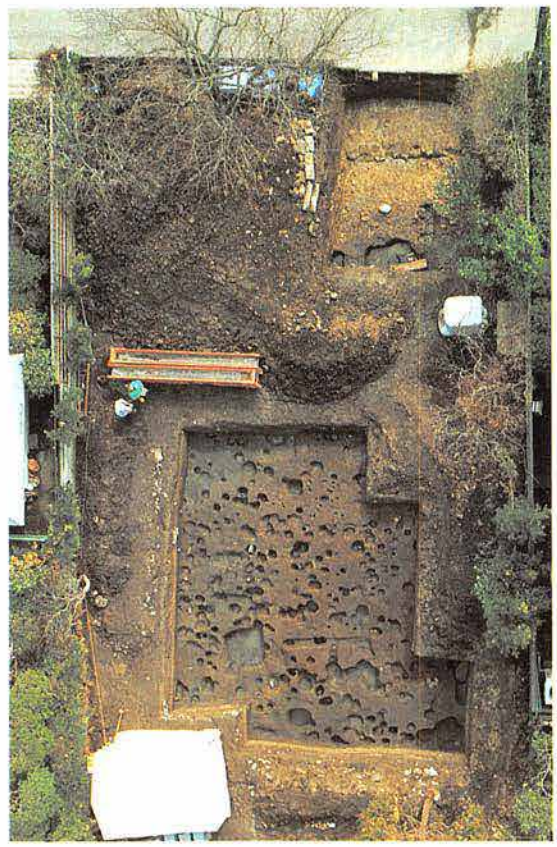
平成10年度発掘調査報告

（第２分冊）

平成11年３月

鎌倉市教育委員会

台山遺跡



横小路周辺遺跡

総　目　次

（第１分冊）

序　文 …… III
例　言 …… IV
平成10年度調査の概観 …… IX

1　若宮大路周辺遺跡群（No.242）御成町123番５外地点
第１章　環境と立地 …… 5
第１節　地理的・歴史的環境 …… 5
第２節　調査地点の立地 …… 9
第２章　調査の概要 …… 11
第１節　調査の経緯と経過 …… 11
第２節　調査結果の概要 …… 11
第３節　国土座標上の位置とグリッド配置 …… 12
第４節　基本層序 …… 13
第３章　遺構と遺物 …… 14
第１節　中世１面 …… 14
第２節　中世２面 …… 23
第４章　調査成果 …… 34
第１節　中世３面以下の遺構 …… 34
第２節　自然科学分析 …… 34
第３節　まとめに代えて …… 45
第４節　出土遺物一覧 …… 46
2　北条時房・顕時邸跡（No.278）雪ノ下一丁目273番イ地点
第１章　遺跡の位置と概観 …… 71
第２章　調査の経過と堆積土層 …… 75
第１節　調査の経過 …… 75
第２節　堆積土層 …… 76
第３章　検出された遺構と遺物 …… 78
第１節　第１面 …… 78
第２節　第２面 …… 86
第２節　第３面 …… 112
第４章　まとめ …… 150
3　宝蓮寺跡（No.374）佐助二丁目897番11地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 171
第２章　調査の経過と概要 …… 174

第1節　調査の経過 …… 174
第2節　遺跡の層序と調査成果の概要 …… 174
第3章　検出した遺構と出土遺物 …… 175
第1節　第3面の遺構と遺物 …… 176
第2節　第2面の遺構と遺物 …… 176
第3節　第1面の遺構と遺物 …… 184
第4章　調査成果とまとめ …… 198
第1節　遺構の変遷 …… 198
第2節　出土遺物の概要 …… 198
第3節　まとめ …… 199
附　編　宝蓮寺跡の花粉化石 …… 200
4　若宮大路周辺遺跡群（No.242）小町二丁目5番8地点
第1章　調査地点の位置と歴史的環境 …… 217
第2章　調査の経過と層序 …… 218
第3章　検出した遺構と遺物 …… 220
第1節　1面・2面・3面の遺構 …… 220
第2節　1面・2面・3面の遺物 …… 224
第3節　4面の遺構 …… 243
第4章　まとめ …… 251
附　編　土壌分析・樹種同定 …… 254
5　積善遺跡（No.440）十二所字積善952番8地点
第1章　遺跡位置と歴史的環境 …… 297
第2章　調査の経過 …… 298
第3章　検出遺構と出土遺物 …… 300
第1節　Ⅰ面 …… 300
第2節　Ⅱ面 …… 302
第3節　Ⅲ面 …… 306
第4節　Ⅳ面 …… 308
第4章　まとめ …… 318

（第2分冊）

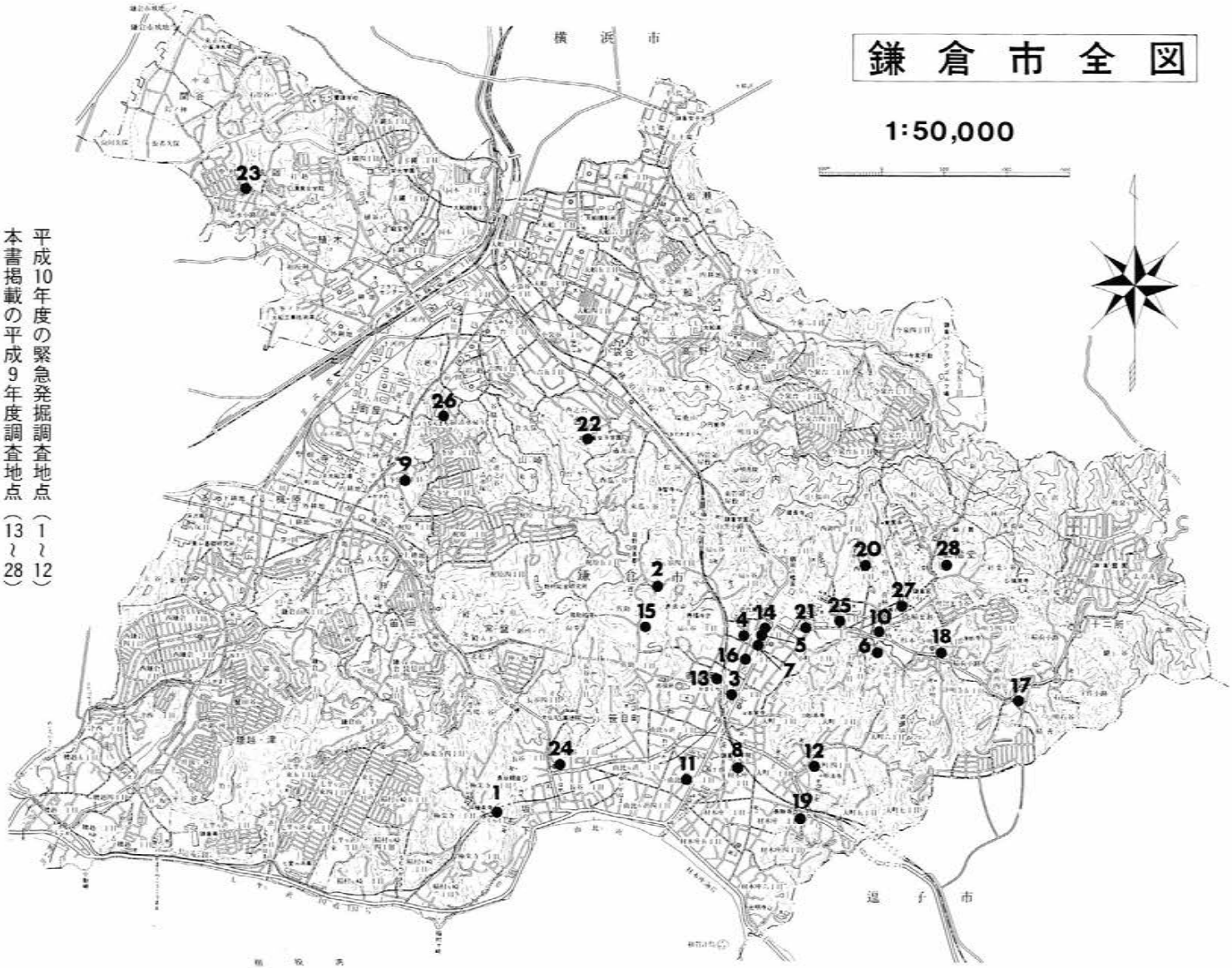
6　浄妙寺旧境内遺跡（No.408）浄明寺三丁目115番2地点
第1章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 5
第2章　調査の経緯 …… 8
第3章　検出した遺構と遺物 …… 9
第1節　遺跡の基本層序 …… 9
第2節　第4面 …… 10
第3節　第3面 …… 10
第4節　第2面 …… 19

第5節　第1面 …… 23
第4章　まとめ …… 31
7　長勝寺遺跡（No.313）材木座二丁目2168番3地点
第1章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 44
第2章　調査の経緯 …… 47
第1節　調査に至る経緯 …… 47
第2節　調査経過 …… 47
第3節　堆積土層 …… 49
第3章　発見した遺構と遺物 …… 51
第1節　Ⅰ面 …… 51
第2節　Ⅱ面 …… 52
第3節　Ⅲ面 …… 55
第4章　まとめ …… 57
8　大倉幕府北遺跡（No.193）西御門二丁目803番17地点
第1章　遺跡の位置と環境 …… 69
第2章　調査の経緯と方法 …… 70
第3章　調査の概要 …… 71
第4章　まとめ …… 71
9　政所跡（No.247）雪ノ下三丁目970番2外地点
第1章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 82
第2章　調査の経緯 …… 84
第3章　発見された遺構と遺物 …… 86
第1節　1面発見の遺構と遺物 …… 86
第2節　2面発見の遺構と遺物 …… 87
第3節　2面下発見の遺構と遺物 …… 87
第4節　トレンチ …… 90
第4章　まとめ …… 91
10　台山遺跡（No.29）台字西ノ台1733番3外
第1章　遺跡の諸環境 …… 106
第1節　調査地点の地理的環境 …… 106
第2節　過去の調査事例 …… 107
第2章　調査の概要 …… 109
第1節　調査の方法 …… 109
第2節　基本層序 …… 111
第3章　検出された遺構・遺物 …… 112
第1節　竪穴住居址 …… 112
第2節　土坑 …… 118
第4章　まとめ …… 120

11　玉縄城跡（No.63）城廻字清水小路673番10地点
第１章　玉縄城と調査地点 …… 132
第２章　調査について …… 134
第３章　検出遺構と堆積土層 …… 135
第４章　まとめ …… 136
12　長谷小路周辺遺跡（No.236）長谷一丁目33番３外地点
第１章　遺跡概要 …… 148
Ⅰ　遺跡の位置と歴史的環境 …… 148
Ⅱ　調査の経過 …… 150
Ⅲ　堆積土層 …… 151
第２章　発見された遺構と遺物 …… 153
Ⅰ　１面の遺構と遺物 …… 153
第３章　まとめ …… 162
法量表 …… 165
13　大倉幕府跡（No.253）雪ノ下三丁目651番８外地点
第１章　環境と立地 …… 178
第２章　調査の概要 …… 179
第３章　検出した遺構 …… 180
第４章　出土した遺物 …… 182
第５章　まとめ …… 186
14　倉久保遺跡（No.226）山崎字富士塚868番82地点
第１章　調査の経緯と経過 …… 199
第２章　遺跡の位置と環境 …… 200
第３章　発見された遺構と遺物 …… 202
第４章　まとめ …… 204
15　横小路周辺遺跡（No.259）二階堂字横小路93番11の一部地点
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 215
第２章　調査の経緯と経過 …… 219
第３章　発見された遺構と遺物 …… 220
第１節　Ⅰ区 …… 220
第２節　Ⅱ区 …… 250
第４章　まとめ …… 253
16　瑞泉寺周辺遺跡（No.338）二階堂字紅葉ヶ谷653番３地点
第１章　調査地点の位置と歴史的環境 …… 272
第２章　調査の経過と層序 …… 277
第３章　検出した遺構と遺物 …… 277
第１節　遺構 …… 277
第２節　遺物 …… 278
第４章　まとめ …… 282

鎌倉市全図

1:50,000



平成10年度の緊急発掘調査地点（1～12）
本書掲載の平成9年度調査地点（13～28）
※遺跡名は一覧表参照

浄妙寺旧境内遺跡（No.408）

浄明寺三丁目115番２地点

例　　言

1．本報は神奈川県鎌倉市浄明寺三丁目115番２に所在する個人専用住宅（駐車場）建設に伴う国庫補助事業発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は鎌倉市教育委員会が平成９年５月12日から同年６月13日にかけて実施した。

3．調査面積は31.08m²である。

4．調査の体制は以下のとおりである。

調査担当者　田代郁夫

調査員　　浜野洋一・松山敬一朗

調査補助員　若松美智子・岩崎卓治・阿南佐知子・高野和弘

調査協力　　出川清次・宮崎　明（以上、鎌倉市高齢者事業団）

5．調査に使用した測量軸は調査区の形状にあわせて任意に設定した。測量方眼の間隔は２ｍとし、南北軸はアルファベット、東西軸はアラビア数字で呼称した。

6．本報告の作成にあたって、遺物実測およびトレースは馬瀬直子・小野和代が行ない、遺構図版作成は深尾義子が行なった。第１・２章と第３章の遺構については松山が、第３章の遺物については宗臺富貴子が執筆した。第４章については宗臺と松山が執筆した。編集は松山が行なった。

7．出土遺物の詳細については本文後段の遺物観察表を参照されたい。

8．本報告に掲載した現地遺構写真は松山が、遺物写真は木村美代治（鎌倉考古学研究所）の協力を得て馬瀬が撮影した。

9．本発掘調査によって出土した遺物、および調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

10．発掘調査および本報告の作成に際し、下記の方々より御教示と御協力を賜った。記して深く感謝いたします（敬称略・順不同）。

原　廣志・汐見一夫・須佐直子・小林重子（以上、鎌倉考古学研究所）、鎌倉市高齢者事業団、（株）高橋組

本　文　目　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 5
第２章　調査の経緯 …… 8
第３章　検出した遺構と遺物 …… 9
　第１節　遺跡の基本層序 …… 9
　第２節　第４面 …… 10
　第３節　第３面 …… 10
　第４節　第２面 …… 19
　第５節　第１面 …… 23
第４章　まとめ …… 31

挿　図　目　次

図１　遺跡周辺地図 …… 6
図２　遺跡位置図 …… 7
図３　調査区グリッド設定図 …… 7
図４　第４面全測図及び調査区北壁土層断面図 …… 9
図５　第３面全測図 …… 11
図６　建物１、塀１ …… 12
図７　建物１、塀１出土遺物 …… 12
図８　土坑１ …… 13
図９　土坑１出土遺物 …… 14
図10　土坑６出土遺物 …… 14
図11　溝２出土遺物 …… 15
図12　ピット18・20・23・24出土遺物 …… 15
図13　第３面下出土遺物（１） …… 16
図14　第３面下出土遺物（２） …… 17
図15　第３面上出土遺物 …… 18
図16　第２面全測図 …… 19
図17　土坑２ …… 20
図18　土坑２出土遺物 …… 21
図19　第２面下出土遺物 …… 22
図20　第２面上出土遺物 …… 22
図21　第１面全測図 …… 23
図22　ピット４出土遺物 …… 24

図23　第１面下出土遺物 …… 24
図24　第１面上出土遺物 …… 24
図25　攪乱採取遺物 …… 25

表　目　次

第１表　第４面ピット計測表 …… 10
第２表　第３面ピット計測表 …… 11
第３表　第２面ピット計測表 …… 19
第４表　第１面ピット計測表 …… 23
第５表　遺物観察表（１）～（５） …… 26～30

図　版　目　次

図版１　・調査風景　・調査区北壁土層断面　・第４面全景 …… 35
図版２　・第３面全景　・第３面ピット20・36他　・ピット31・33礎板 …… 36
図版３　・第２面全景　・土坑２　・第１面版築面 …… 37
図版４　a．かわらけ　b．墨書かわらけ　c．瓦器碗　d．火鉢 …… 38
図版５　a．常滑　b．捏鉢　c．すり常滑
d．瀬戸　e．磁器　f．砥石　g．石製品 …… 39

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

本遺跡地は鎌倉市浄明寺３丁目115番２に所在する。調査地点はJR鎌倉駅から東北東方向に約2.0km、鶴岡八幡宮からは南南東方向に約1.3kmの距離に位置する。三浦半島の西岸基部に位置する鎌倉市は、その面積の多くを大小無数の谷戸を有する丘陵地形に占められている。中でも若宮大路沿いに広がる低地部分は相模湾に面した南側を除いた三方をほぼ完全に丘陵に囲まれる形となっている。この低地は、横浜市金沢区と接する十二所を源流とする滑川により形成されたものである。現在の滑川は源流から２kmほどは南に向かって流れ、十二所の明石橋付近からはその方向を西へと転じている。この明石橋付近からようやく低地が形成されてくるが、それは滑川右岸において発達するもので、左岸はほぼ丘陵裾に面している。1.5kmほど西流した滑川は鶴岡八幡宮の南東約500mの付近から流れを南東方向に転じ、前述した若宮大路沿いに形成された低地部分を流れて相模湾へと至る。調査地点は滑川が西流する部分のほぼ中間地点の右岸低地部分に立地し、川との距離は最短で40mを測る。

現在、この滑川に沿うように県道金沢鎌倉線が開設され、横浜市金沢区と鎌倉市中央部を結ぶ幹線道路として使用されている。鶴岡八幡宮より東へ進み、金沢区朝比奈へと至るこの道は環状４号線を介して、東京湾に面した六浦へと通じている。

六浦は中世、特に鎌倉時代には都市鎌倉を中心とした物資流通の中で、東京湾に面した要たる港湾として重要な位置を占めていたと考えられている。そして鎌倉七口のひとつ、朝比奈切り通しを通過して六浦と都市鎌倉を直接結び付ける陸路が「六浦路」と称され、現在の県道金沢鎌倉線とほぼ同じ位置にあったと考えられている。調査地点はこの県道金沢鎌倉線の北側に隣接している。

『吾妻鏡』によれば、仁治元年（1240）、北条泰時により「六浦路」の設置が計画され、翌年より工事に着手したことが記されている。「六浦路」沿いには寺院が多数存在し、本遺跡地周辺にも浄妙寺、杉本寺、報国寺等が現存している。調査地点の北、約200mに位置する浄妙寺は文治四年（1188）に足利義兼が創建したとされる。当初は寺号を「極楽寺」と称していたようで、正嘉元年（1257）から正応元年（1288）の間に浄妙寺と改名されている。

調査地点周辺の発掘調査事例としては、「六浦路」の側溝と思われる溝や武家屋敷に関連するとみられる遺構、遺物を検出した「浄明寺稲荷小路遺跡」（昭和56年調査）、13世紀前半～15世紀前半の数時期に及ぶ道路状遺構を検出した「浄妙寺旧境内遺跡　－浄明寺向小路90番１地点－」[1]、14世紀後半から15世紀代の掘立柱建物跡、井戸等を検出した「浄妙寺旧境内遺跡」[2]、13世紀前葉から15世紀前葉にかけての３面の生活面と建物群と道路状遺構等を検出した「公方屋敷跡　－浄明寺三丁目143番２地点－」[3]、13世紀中葉から15世紀前半にかけての３時期の遺構を検出した「公方屋敷跡　－浄明寺三丁目151番１外地点－」[4]、少量の弥生時代後期の土器と中世の遺物を検出した「浄妙寺旧境内遺跡　－浄明寺三丁目６番３外地点－」[5]等が挙げられる。

註

（１）田代郁夫・原　廣志　「浄妙寺旧境内遺跡　－鎌倉市浄明寺向小路90番１地点－」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告』７　鎌倉市教育委員会刊　1991年３月

（２）大三輪龍彦・原　廣志・福田　誠　「浄妙寺旧境内遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告』１　鎌倉市教育委員会刊　1985年３月

（３）原　廣志・橋場君男　「公方屋敷跡　－浄明寺三丁目143番２地点－」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告』10　鎌倉市教育委員会刊　1994年３月

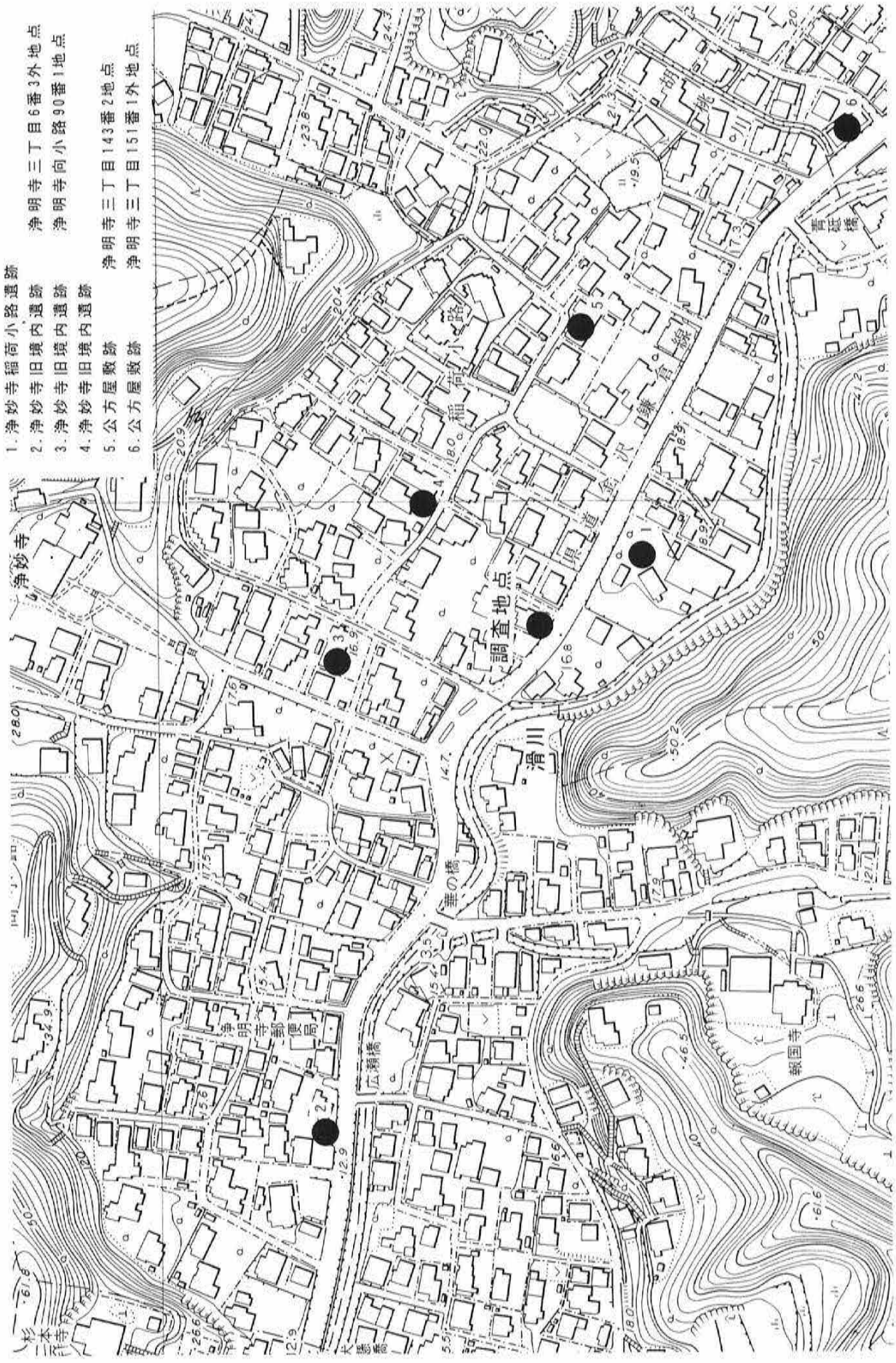

1. 浄妙寺稲荷小路遺跡
2. 浄妙寺旧境内遺跡
3. 浄妙寺旧境内遺跡
4. 浄妙寺旧境内遺跡
5. 公方屋敷跡
6. 公方屋敷跡
浄明寺三丁目6番3外地点
浄明寺向小路90番1地点
浄明寺三丁目143番2地点
浄明寺三丁目151番1外地点
浄妙寺
調査地点
滑川
浄明寺郵便局
広瀬橋
報国寺
青砥橋

図1　遺跡周辺地図

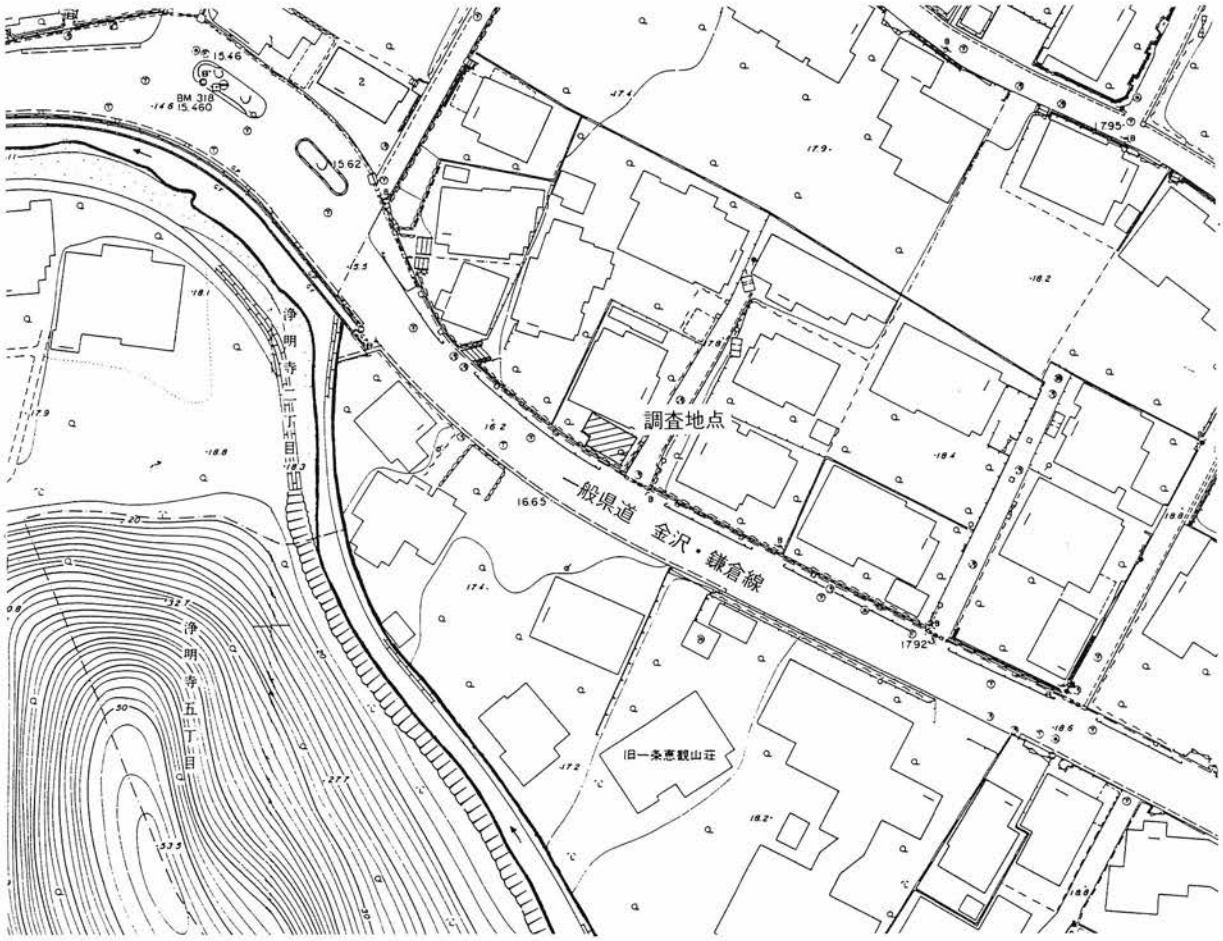


図２　遺跡位置図

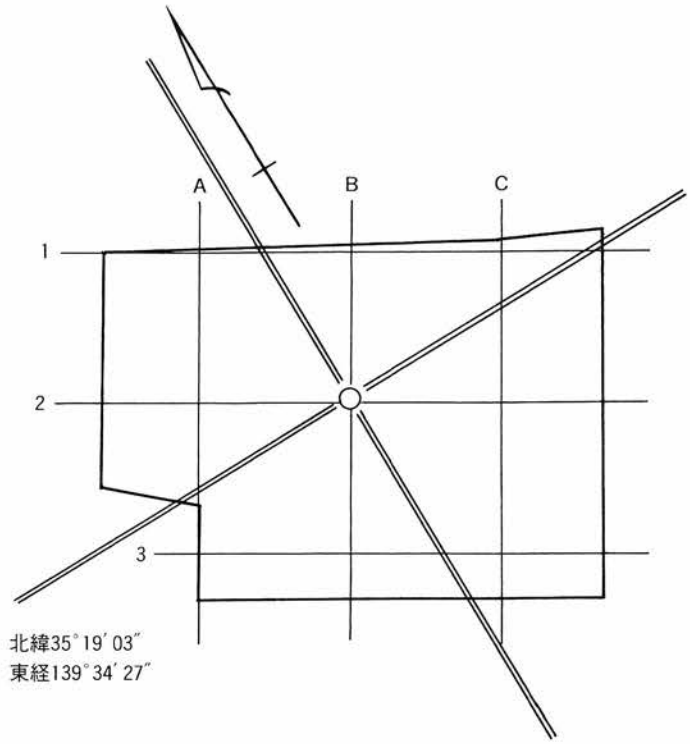


図３　調査区グリッド設定図

（4）宮田　真　他　『公方屋敷跡　－浄明寺三丁目151番１外地点－』　公方屋敷跡発掘調査団　1996年３月
（5）大河内勉　「浄妙寺旧境内遺跡　－浄明寺三丁目６番３外－」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告』12　鎌倉市教育委員会刊　1996年３月

参考文献
高柳光寿　　『鎌倉市史』総説編　吉川弘文館　1959年
川副武胤　他　『鎌倉市史』社寺編　吉川弘文館　1959年

第２章　調査の経緯

浄妙寺旧境内遺跡内に所在する、鎌倉市浄明寺三丁目115番２における個人住宅建設申請を受けて、鎌倉市教育委員会は平成９年４月15日に試掘調査を行なった。その結果、数面の生活面と遺構を確認し、埋蔵文化財の発掘調査の必要性を認めた。これを踏まえ、鎌倉市教育委員会は田代郁夫に浄妙寺旧境内遺跡国庫補助事業埋蔵文化財発掘調査の担当を依頼した。平成９年５月12日から同年６月13日までの約１ヶ月にわたって発掘調査を実施した。なお発掘調査対象となったのは県道とほぼ同じ高さまで掘削が行われる駐車場部分のみであり、調査対象面積は31.08㎡である。

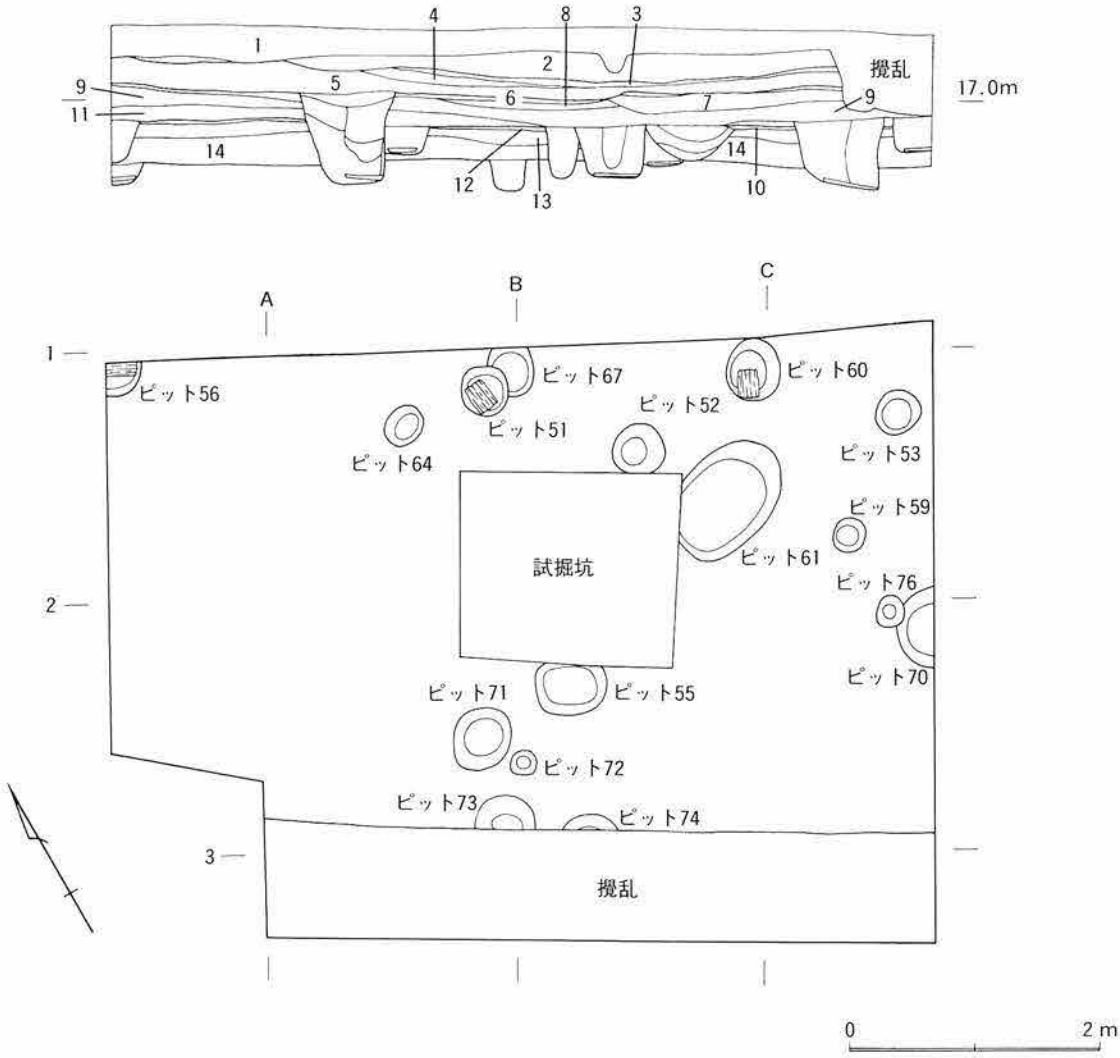
発掘調査は５月12日に調査器材の搬入と表土掘削をもって開始し、翌13日から遺構検出に入った。６月13日には最終面である第４面の遺構実測および器材撤収を行ない、発掘調査を終了した。

第３章　検出した遺構と遺物

第１節　遺跡の基本層序

調査地点の現地表の標高は約17.6mを測り、調査地点の南側に接する県道金沢・鎌倉線はこれより約１mほど低くなっている。本地点での中世地山となる自然堆積の暗黄褐色砂質土は、この県道とほぼ同じ標高で検出された。調査終了時に設けたトレンチにおいて、本層は滑川方向へ落ち込む斜面堆積層となっていることを確認している。

第４面は上記した暗黄褐色砂質土をほぼ水平に削平して造作されている。この下に堆積する暗灰色粘



調査区北壁土層注記

1．表土		8．灰褐色土	径５cm前後の泥岩多く含む。
2．茶褐色土	近世遺物包含層。	9．暗灰褐弱粘質色土	７層より締まりに欠ける。
3．黄褐色土	泥岩版築。	10．黒色土	炭化物多く含む。
4．灰褐色土	破砕凝灰岩版築。	11．暗灰褐弱粘質色土	泥岩片やや多く含む。
5．褐色砂質土	泥岩片、炭化物含む。	12．黄褐色土	泥岩版築。
6．黄褐色土	泥岩版築	13．灰褐色粘質土	泥岩粒やや多く含む。
7．暗灰褐色弱粘質土	泥岩片少量含む。	14．淡褐色粘質土	粘性強く、水気を帯びる。

図４　第４面全測図及び調査区北壁土層断面図

第1表　第4面ピット計測表

ﾋﾟｯﾄ番号	規模(長軸･短軸･深さ)	備考
51	40･38･15	礎板
52	42･42･25	
53	36･34･13	
55	58･44･16	
56	--･--･28	
59	28･26･14	
60	46･44･10	礎板
61	104･71･35	
64	34･32･16	
70	66･--･10	
71	52･48･17	
72	20･18･15	
73	--･48･12	
74	--･48･17	
76	24･24･23	

質土には多量の流木が含まれており、滑川の氾濫原となっていたとみられる。

第4面の上には淡褐色粘質土および灰褐色粘質土がそれぞれ10～20cm程堆積する。第3面は厳密にはこの灰褐色粘質土から掘り込まれるものと、その直上に施された泥岩によるごく薄い版築面を掘り込むものとの二時期に分けられる。

第3面の上には暗灰色弱粘質土が堆積し、第2面を形成している。本層上にも薄い泥岩による版築を検出した。この版築面は調査区中央やや東側では周囲より5cm程高くなっている。

第2面の上には褐色砂質土が堆積する。また調査区中央北寄りでは、窪んだ部分を充填するように泥岩および凝灰岩による版築を施して第1面を形成している。

第1面の上には近世遺物の包含層が堆積し、さらにその上には約20cm程の現代盛土が堆積する。

第2節　第4面（図4）

本遺跡における最も古い生活面である。第4面は滑川側に向かって落ち込む暗黄褐色砂質土をほぼ水平に削平して造作されている。第4面で検出した遺構はピットが16穴である。調査区北壁沿いにある3穴のピットは礎板を有し、建物等の一部を構成していたとみられるが、調査区内で対応関係にあるピットは検出されなかった。建物等の遺構は調査区外の北側に展開すると思われる。

なお、第4面に帰属する遺構及び面直上より出土した遺物はない。

ピット（図4）

16穴のピットを検出した。このうちピット51・56・60は15×20cm前後の礎板を有している。ピット51と60は芯々間距離が212cm、礎板の標高が15.5mとほぼ同一であることから建物ないし塀等の一部を構成していたとみられる。

第3節　第3面（図5）

第4面の上に淡褐色粘質土および灰褐色粘質土が10～20cm程堆積し、その直上に泥岩によるごく薄い版築が施されている。しかし、この版築は主に調査区外の北側に展開するとみられ、調査区内では北端部でわずかにその広がりを確認できる程度である。本遺跡における遺構の密度はこの第3面が最も高く、前後の面の遺構の様相と比較すると、この第3面の時期には調査区全体が居住空間として利用されていたとみられる。検出した遺構は建物跡1棟、塀跡1列、土坑2基、溝1条、その他に礎板を有するものを含めて24穴のピットである。また調査区北壁土層断面の観察から、第3面の遺構には灰褐色粘質土から掘り込まれるものと、版築面から掘り込まれるものと時期差が観察された。第3面の時期的変遷は、おおまかには溝2→版築→土坑1→建物1・塀1のように推移すると考えられる。

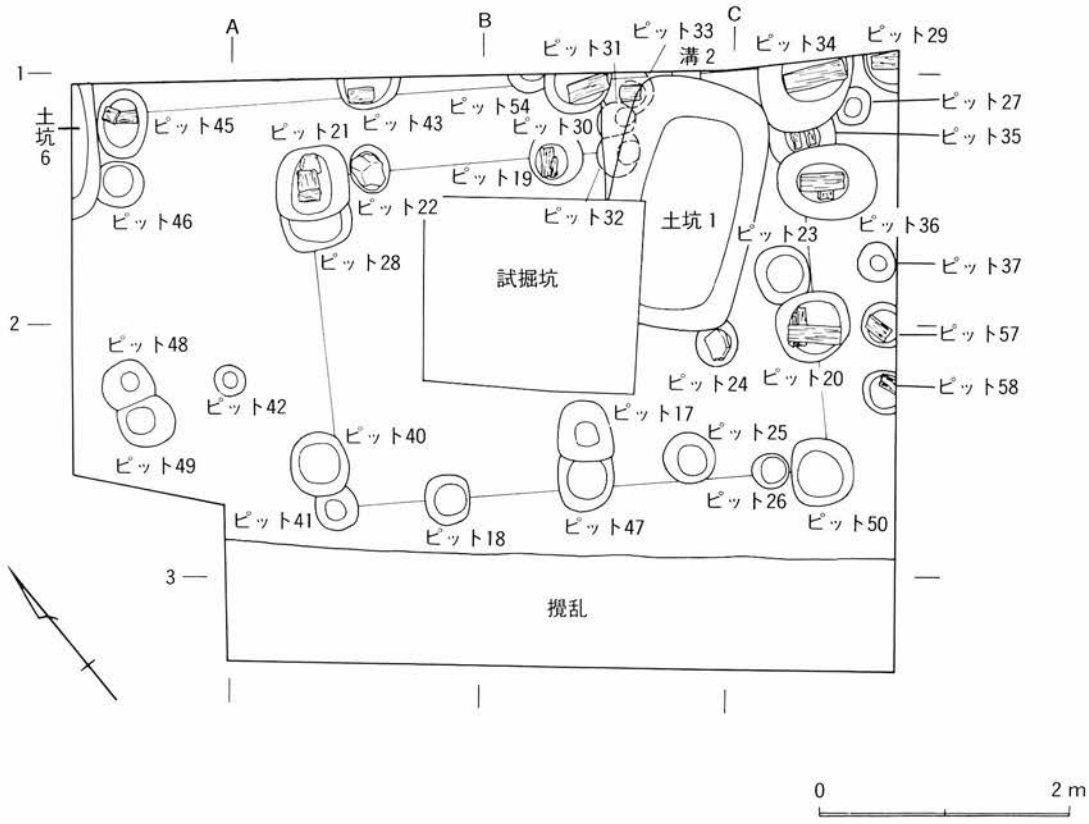


図5　第3面全測図

第2表　第3面ピット計測表

ﾋﾟｯﾄ番号	規模(長軸･短軸･深さ)	備考
17	48･42･62	
18	42･38･24	
19	44･42･26	建物1　礎板
20	60･54･31	礎板
21	58･56･29	建物1 礎板,泥岩
22	40･32･15	泥岩
23	48･44･37	
24	40･35･13	泥岩
25	58･56･29	
26	32･28･10	
27	30･30･23	
28	54･---･15	
29	--･---･32	礎板
30	54･---･53	塀1　礎板
31	34･32･50	
32	40･36･28	
33	42･---･23	礎板

ﾋﾟｯﾄ番号	規模(長軸･短軸･深さ)	備考
34	78･---･66	塀1　礎板
35	54･48･25	建物1　礎板
36	80･62･37	礎板
37	32･30･25	
40	52･48･21	
41	36･34･36	建物1
42	24･24･8	
43	50･---･28	塀1　礎板
45	54･42･12	塀1　礎板
46	42･36･10	
47	54･48･28	建物1
48	42･40･26	
49	48･46･25	
50	54･50･43	建物1
54	---･30･40	
57	38･---･25	礎板
58	---･34･28	礎板

建物1（図6・7）

調査区中央で検出した。検出した規模は1間×2間であるが、さらに調査区外へ展開する可能性も十分に考えられる。長軸方向はN－51°－Wを指す。芯々間距離はピット21からピット19は195cm、ピット19からピット35は204cm、ピット40からピット47は214cm、ピット47からピット50は190cm、ピット21からピット40は264cm、ピット35からピット50は268cmを測る。平均すると、東西方向では200cm、南北方向では266cmとなり、南北方向がやや長くなっている。それぞれのピット形状と規模はやや統一性を欠き、県道に面した側のピットが深くなっている。ピット21・19・35は20cm大の礎板を有してい

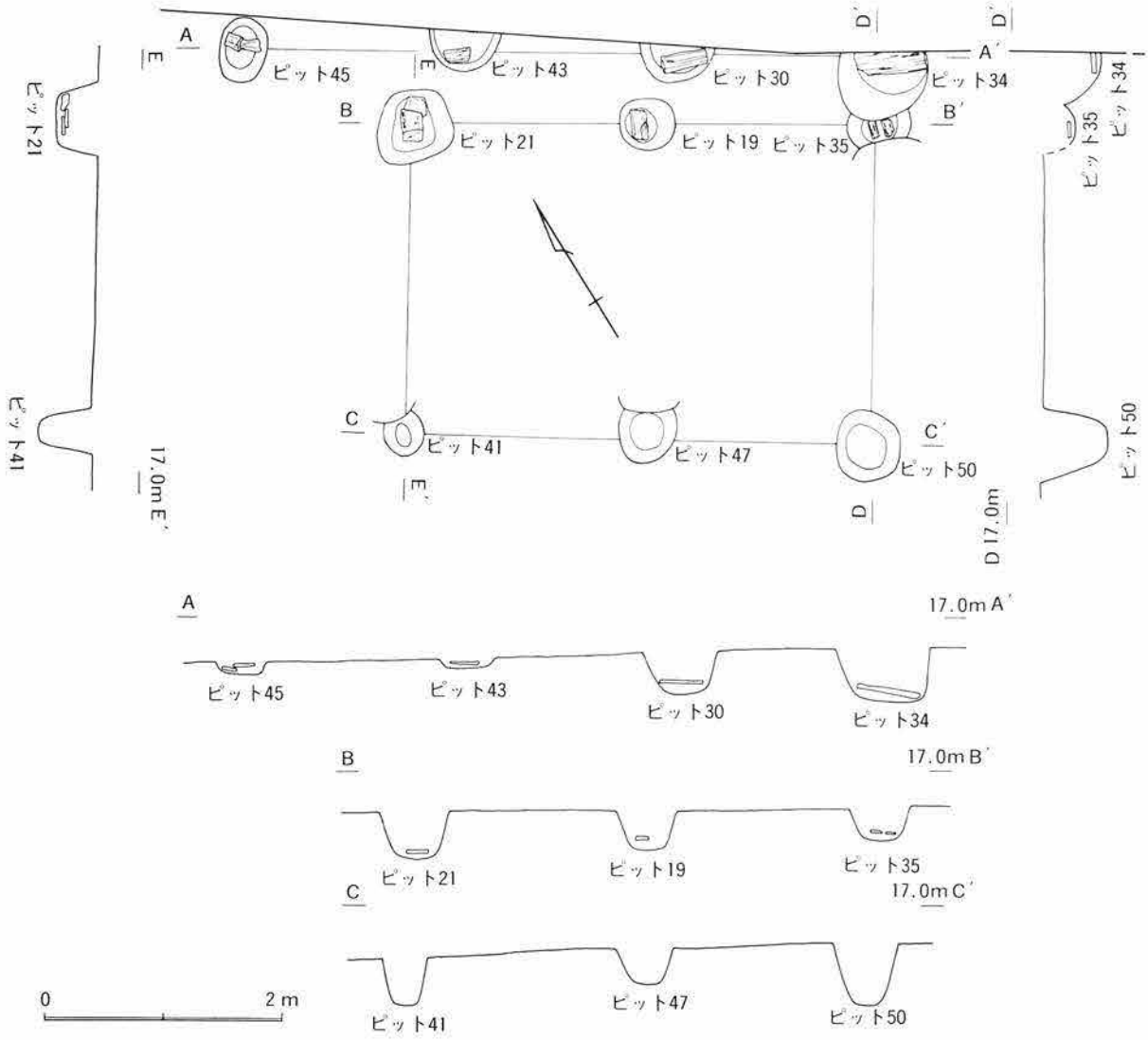


図6　建物1、塀1

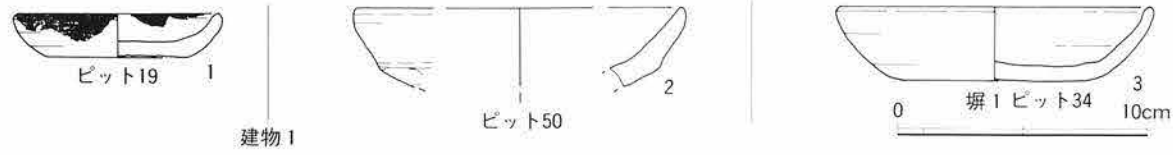


図7　建物1、塀1出土遺物

るが、後述の塀1の礎板に比べるとやや貧弱なものである。

図7―1～2は建物1に帰属するピットより出土した遺物である。1はピット19より出土した小型かわらけ。器壁は内彎しながら立ち上がり、口唇部付近でやや外反している。内外面に煤が付着する。2はピット50より出土した手づくねかわらけ。器壁は厚く、体部外面中位に明瞭な稜を持つ。底部は丸底になると思われる。底部に残る指頭痕は不明瞭。

塀1（図6・7）

調査区北壁際で検出した。4穴のピットで構成されるが、調査区外へ展開する可能性、あるいは建物を構成していた可能性も十分に考えられる。しかし、調査区内では他に対応するピットが検出されなかっ

たので、塀としてとらえた。ピット34は建物１のピット35を切って構築されている。軸線方位はＮ－49°－Ｗを指す。芯々間距離はピット45からピット43は200cm、ピット43からピット30は178cm、ピット30からピット34は194cmを測る。いずれのピットも礎板を有し、礎板の標高は西側のピット45・43は約16.6m、東側のピット30・34は16.4～16.5mを測り、東側のピットの方が深くなっている。

図７－３は塀１に帰属するピットより出土したかわらけ。器壁は薄く、内彎気味に立ち上がり、側面観碗型に近く、かなり「薄手丸深」に似た様相を呈する。

土坑１（図８・９）

調査区北東角近くで検出した。版築面を切って構築されている。溝２、ピット31～33より新しい。南西角を試掘坑により破壊されている。平面形はほぼ隅丸長方形を呈する。長軸方向はＮ－50°－Ｅを指す。規模は長軸203cm、短軸118cm、深さは最大28cmを測る。土坑壁面は緩い弧状に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は４層に分層される。１・２層は黄褐色砂を含む灰褐色土、３層は灰と炭化物を含む明灰色粘質土、４層は炭化物を少量含む灰茶褐色粘質土である。土坑１の周囲で薄い炭化物の広がりが認められており、土坑１の周辺で何かを燃やした後にその燃え滓を土坑１内に廃棄したとみられる。

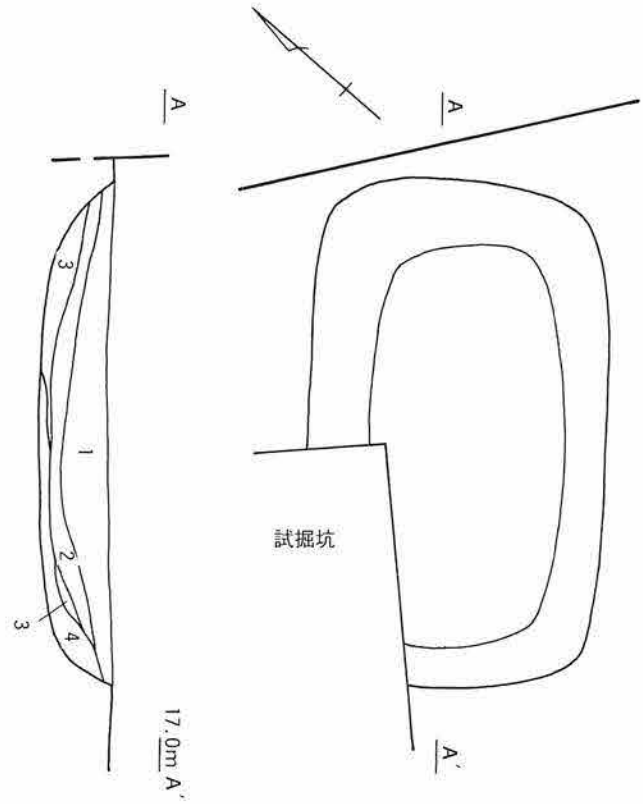
図９－１～３は下層より出土した遺物である。１は小型かわらけ。器壁は薄く、内彎気味に立ち上がる。

２は瓦質平瓦。凹面、凸面ともに砂目痕が残る。側面と端面は丁寧にヘラ削り調整される。

３は1078年初鋳の「元豊通寶」。

図９－４～20は覆土上層より出土した遺物である。４～９は小型かわらけ。背低で器壁が直立気味に立ち上がるもの、若干背低で内彎気味に立ち上がるもの、器壁が薄く開きながら立ち上がるものとが見られる。10～11は器壁が開きながら立ち上がる大型かわらけ。胎土は小型、大型ともに黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土である。なお、図示できなかったが、手づくねかわらけが２点出土している。12は極小白かわらけの破片、13は白かわらけである。ともに胎土は混入物の少ない紅味白色粉質土。13の体部外面に残る指頭痕は明瞭である。

14は13世紀中頃に編年しうる常滑の



土坑１土層注記

１．	灰褐色土	泥岩片少量含む。
２．	灰褐色土	１層に炭化物少量含む。
３．	明灰色粘質土	灰、炭化物多量に含む。
４．	灰茶褐色粘質土	炭化物少量含む。

0　1m

図８　土坑１

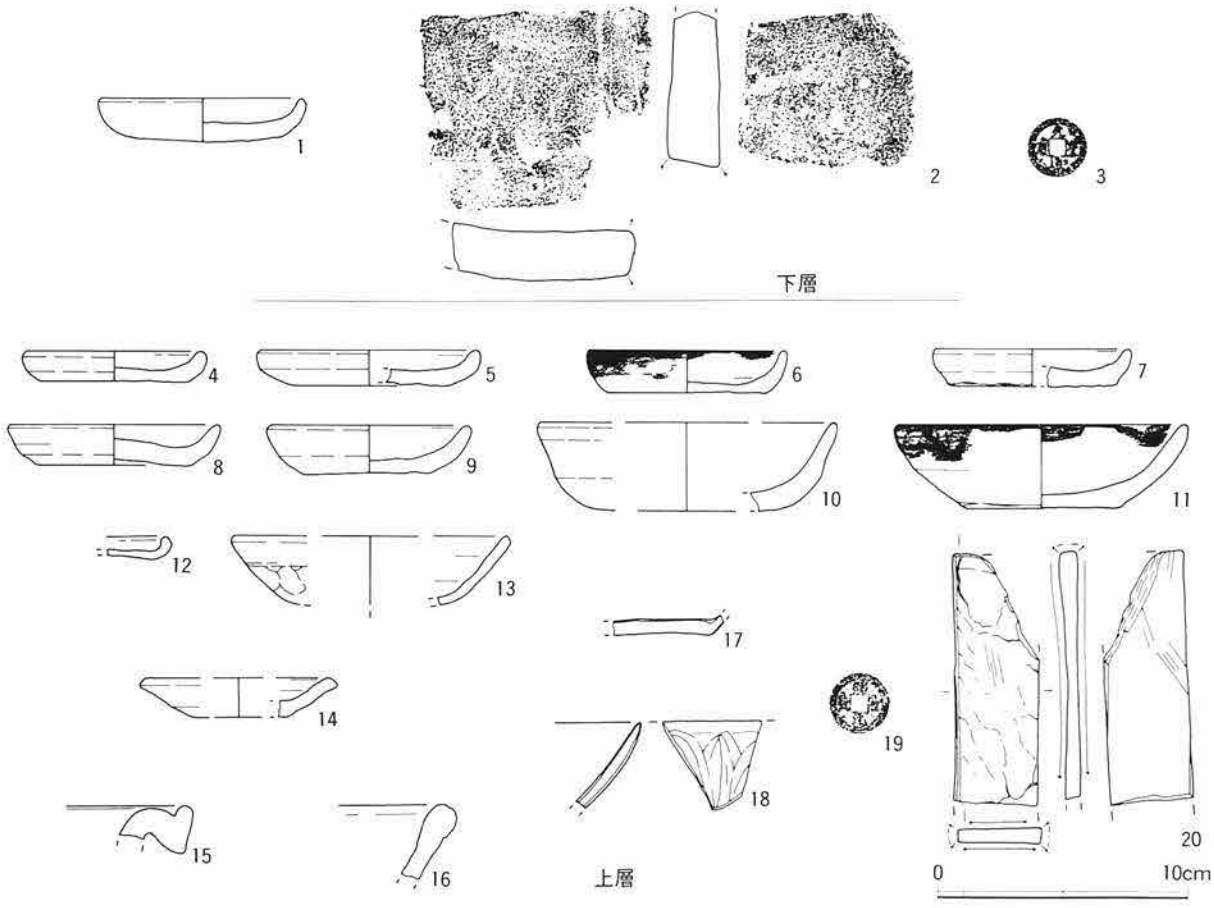


図９　土坑１出土遺物

山皿。体部内面に磨滅痕は残っていない。15は常滑の甕か壺の口縁部片。13世紀中頃前後に編年しうる。16は山茶碗窯系こね鉢の口縁部片。口唇部に浅い溝が巡り、また、口縁部直下はわずかにへこんでいる。磨滅痕は確認できなかった。

17は白磁口兀皿の底部片。緑味乳白色を呈する釉は外底部にまでおよぶ。18は青磁蓮弁文碗口縁部片。釉は厚めに施釉され、内外面ともに貫入が入る。

19は1094年初鋳の「紹聖元寶」。

20は鳴滝産の仕上げ砥。緑味黄色を呈する泥岩製である。表面は破損、剥離後に再利用している。

土坑６（図５・10）

調査区北西角で検出した。土坑の大半は調査区外に展開する。長軸方向はＮ－38°－Ｅを指す。検出した範囲では東西方向には20cm以上、南北方向には106cm以上、深さ最大38cmを測る。土坑壁面はやや開き気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

図10―１～４は小型かわらけ。いずれも背低で、器壁は開きながら立ち上がる。４～５は大型かわらけ。やや背低で、器壁は薄く、わずかに内彎しながら立ち上がる。胎土は小型、大型ともに黒色微砂を

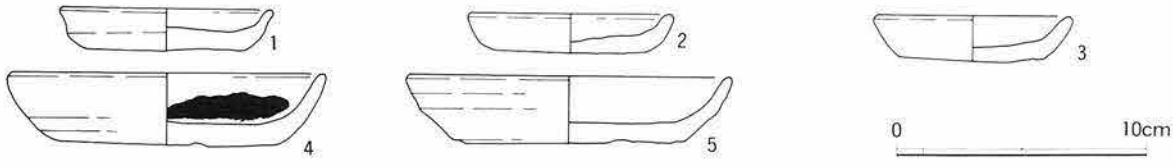


図10　土坑６出土遺物

多く混じえる淡橙色砂質土。4は内底面に煤が付着する。

溝2（図5・11）

調査区中央北壁寄り、試掘坑北側で検出した。ピット31・32・33より新しい。また土坑1に切られ、溝の大半を削平されている。規模は残存する範囲で幅72cm、深さ最大28cmを測る。覆土は粘性が強く、しまりに欠ける灰褐色粘質土を基調としている。覆土上層は泥岩片を多く含んでおり、第3面の版築を施す際に埋め立てたとみられる。

遺構の大半が別遺構の削平を受けているために、出土した遺物はごくわずかであった。

図11—1は小型かわらけ。器壁は厚く、直立気味に立ち上がる。2～3は大型かわらけ。2はやや背低で、器壁は開きながら立ち上がる。3はやや背高で、器壁は内彎しながら立ち上がり、側面観碗型に近い。胎土は黒色微砂、雲母、白針、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質～砂質土。また、図示できなかったが、手づくねかわらけが1点出土している。

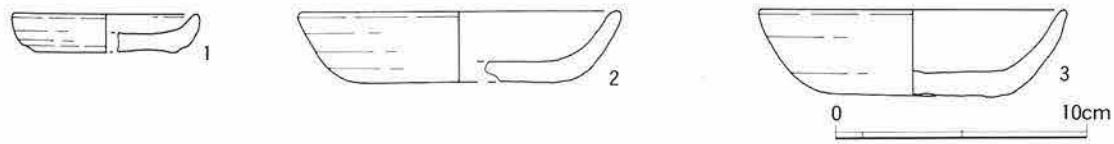


図11　溝2出土遺物

その他のピット（図5・12）

建物1、塀1を構成するもの以外にも礎板を有するものを含めて24穴のピットを検出した。これらのうちの幾つかは礎板の配置の仕方等からみて、調査区外へ展開する建物等の遺構の一部を構成するものがあると考えられる。

図12－1はピット18より出土した小型の手づくねかわらけ。胎土は糸切りかわらけ同様、黒色微砂、雲母片、白針を混じえる淡橙色弱砂質土である。体部外面中位の稜は明瞭で、器壁は外反している。底部の指頭痕は不明瞭である。また、図示できなかったが、糸切りかわらけが1点出土している。

図12—2はピット20より出土した大型かわらけ。胎土は黒色微砂を多く混じえる弱砂質土だが、背高で、器壁が薄く、側面観碗型を呈する。

図12－3～4はピット23より出土した。3は小型かわらけ。底部が厚く、器壁はつまみあげたように引き上げられている。体部外面中位に強い稜を持つ。4は青磁劃花文碗。淡オリーブ色を呈する釉は薄く施釉される。

図12—5はピット24より出土した小型かわらけ。器壁は内彎気味に立ち上がるが、口唇部付近は外反する。

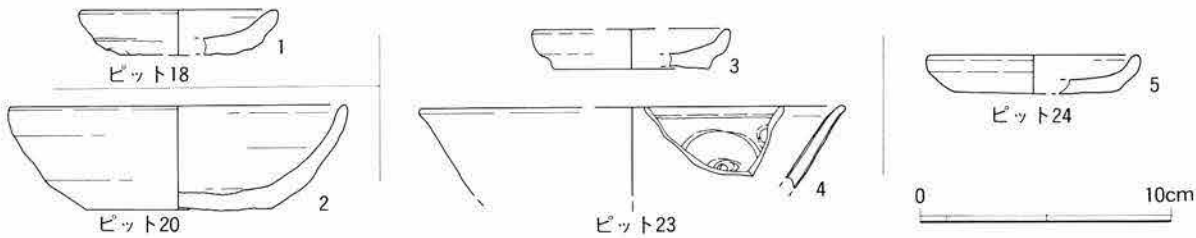


図12　ピット18・20・23・24出土遺物

第3面下出土遺物（図13・14）

図13に図示した遺物はすべて建物1の北西隅周辺の薄く貼られた版築面の下より出土していることから、版築の際の地鎮に用いられ、そのまま一括埋置された可能性も考えられ、第3面下出土遺物と分け

て図示した。

1～20は小型かわらけ。背低で、器壁は直立気味に立ち上がるものと開きながら立ち上がるものとが見られる。口径は7cm台、器高は2.0cm以内、底径口径比は1.2前後～1.4前後のものが多い。21～31は大型かわらけ。やや背高で、器壁は内彎気味に立ち上がる。また、小型には見られなかったが、30、31のように胎土に混入物の少ない弱粉質～粉質胎土で、器壁が薄い側面観碗型を呈する「薄手丸深」型のものも出現している。口径は12cm台、器高は3.0cm台を越えるものが多く、底径口径比は1.3～1.5以内に収まるものと1.7を越えるものとに分類できる。胎土は小型、大型ともに黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質～砂質土のものが多い。

32は瀬戸碗型入子。外底部には糸切り痕が残る。また、体部内面中位から内底面にかけて著しい磨滅痕が残る。

33は青磁蓮弁文碗。外面に施された蓮弁文は釉が厚めに施釉されているにもかかわらず、下位まで明瞭である。高台から外底部にかけては露胎だが、一部鉄発色している。

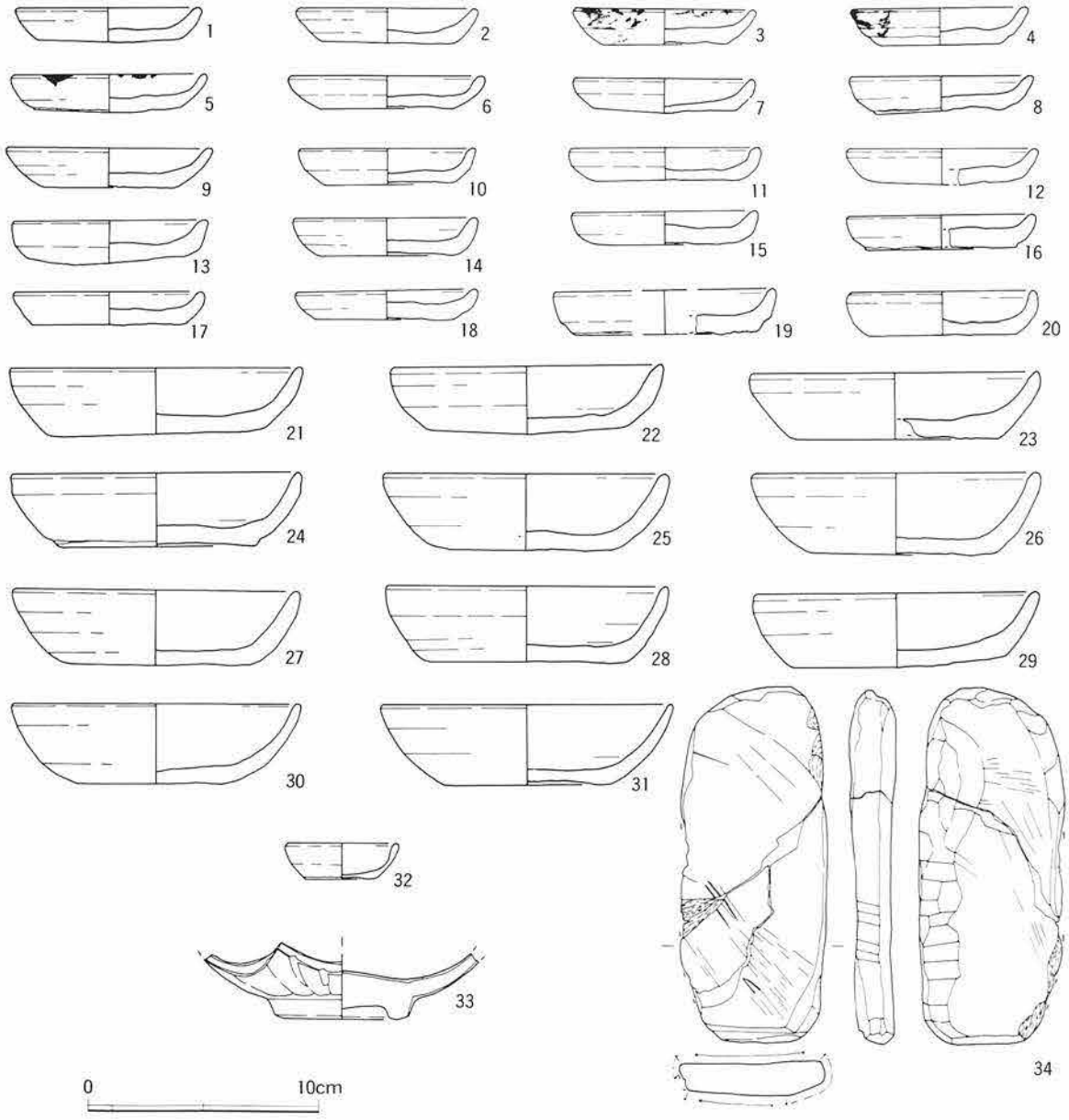


図13　第3面下出土遺物（1）

34は北陸地方産と思われる中砥。灰味淡緑色を呈するキメの細かい凝灰岩製である。右側面から下側面にはノミ状工具による削り出し痕が明瞭に残る。

図14は前述した建物１周辺以外より出土した遺物を図示した。

１～２は手づくねかわらけ。１は黒色微砂と雲母片を多く混じえる橙色砂質土。底部に比べて器壁が薄い。体部外面中位の稜ははっきりせず、底部は丸底である。また、外底面の指頭痕は不明瞭である。内外面に煤が付着する。２は淡茶色粉質土。器壁は大きく開きながら立ち上がる。底部の指頭痕は明瞭。３～７は小型糸切りかわらけ。背低で器壁が直立気味に立ち上がるもの、背低で器壁が薄く内彎気味に立ち上がるもの、器壁が開きながら立ち上がる器形が見られる。胎土はおおむね黒色微砂を多く混じえる淡橙色弱砂質土。８は中型かわらけ。背高で器壁が薄く、側面観碗型を呈するが、胎土は黒色微砂、雲母片を多く混じえる弱砂質土である。内外面に煤が付着する。９～10は大型かわらけ。ともにやや背低で、器壁は内彎気味に立ち上がる。また、両者は９が蓋、10が身として、２枚が合わせられた状態で出土した。これらは前述した第３面直下より出土した鎮壇具の可能性をもつかわらけ群よりもわずかに下方で発見されたものの、同様の性格であると考えられる。また、取り上げの時の不注意で、納められていた土に含まれる内容物の確認をしていないが、穀物の種子のようなものが入っていた可能性のあることを示唆しておく。11は外底部に墨書の残る糸切りかわらけ。12は白かわらけ口縁部片。混入物をほとんど混じえない紅味白色緻密土。口縁直下に強い稜を持ち、稜より下方は強くへこむ。

13は山茶碗窯系こね鉢の口縁部片。体部内面中位から下方は磨滅痕が残る。14は常滑の鉢。器壁はかなり薄く、大きく開きながら立ち上がる。体部外面上位は横方向のナデ、上位から下方は指頭押さえの後、木口状工具による縦方向のナデで調整される。外底部は砂底と思われる。また、体部内面上位から中位にかけては指頭による横方向のナデ、中位から下位にかけては使用による磨滅で不明瞭だが、指頭押さえで調整されたと思われる。器表は外面が淡茶色、内面が暗茶色を呈する。

15は滑石鍋転用の用途不明品。表面にわずかに擦り痕が残るが、鍋として使用されていた際に生じたものと思われる。

16は産地不明の銀灰色を呈する凝灰岩質製の中砥。石目に対してほぼ直角方向に数本のクラックが入る。表面と裏面の中央部が砥面として利用されるが、擦り痕は縦方向、横方向に深く残っている。

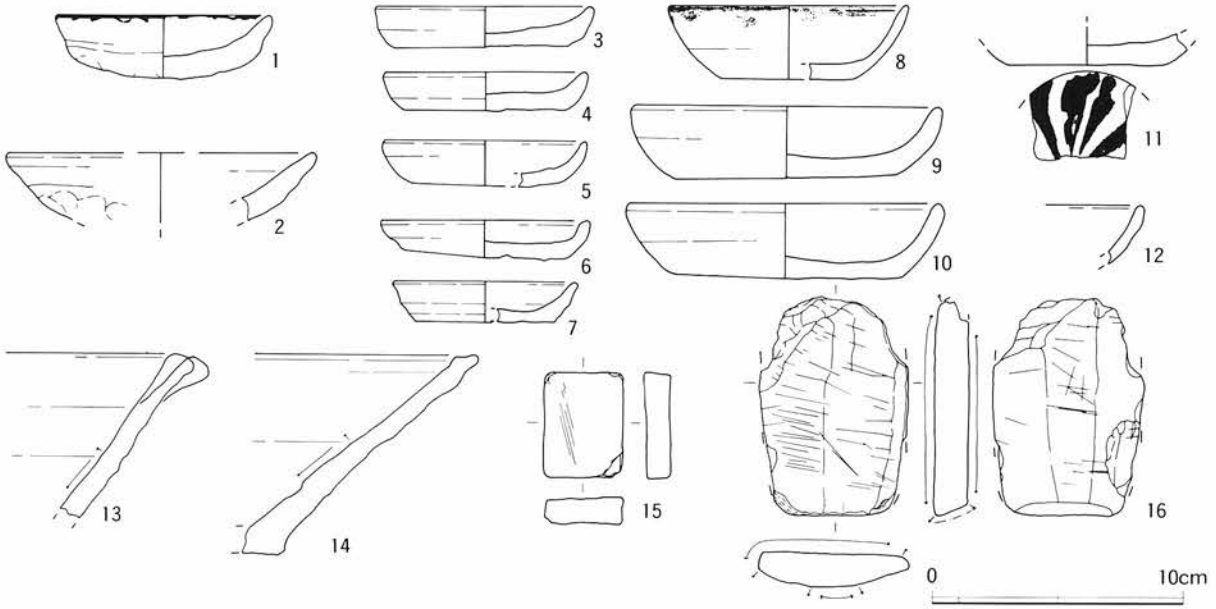


図14　第３面下出土遺物（２）

第３面上出土遺物（図15）

図15―１は極小内折れかわらけ。黒色微砂、雲母、泥岩粒などを混じえる砂質土。外底部は糸切り痕が残る。２～11は小型かわらけ。おおむね背低で、器壁が薄く、直立気味に立ち上がるもの、開きながら立ち上がるもの、内彎気味に立ち上がるものが見られる。11は外面に煤が付着する。12～13は大型かわらけ。やや小振りである。14は胎土に混入物の少ない「薄手丸深」型である。

14は平瓦。胎土は灰色緻密土。凹面は端縁に対して斜め方向の糸切り痕、両面ともに砂目痕が残る。

15は伊勢系土鍋の口縁部片。内外面ともに煤が付着し、外面は強い二次焼成を受けハゼている。

16は遠江系の山皿と思われる。体部内面上位に２段の強い稜を作りながら器壁は大きく外反する。内面と体部外面中位にかけて厚い降灰釉がかかる。内面に使用による磨滅痕は残らない。17は瀬戸の鉢口縁部片。口唇部断面は卸皿のそれによく似ている。体部外面下位までは指頭ナデで調整される。使用による磨滅痕は確認できなかった。18は常滑の壺の口縁部片。14世紀前後に編年しうる。19は山茶碗窯系こね鉢の口縁部片。使用による磨滅痕は確認できなかった。20はすり常滑。表裏面ともに著しい磨滅痕が残る。

21は青磁櫛掻文碗。22は青磁櫛掻劃花文碗。体部外面中位より下方は露胎。釉は二次焼成を受け、灰味青乳白色を呈する。

23～24は銭。23は1038年初鋳の「皇宋通寶」。24は1078年初鋳の「元豊通寶」である。

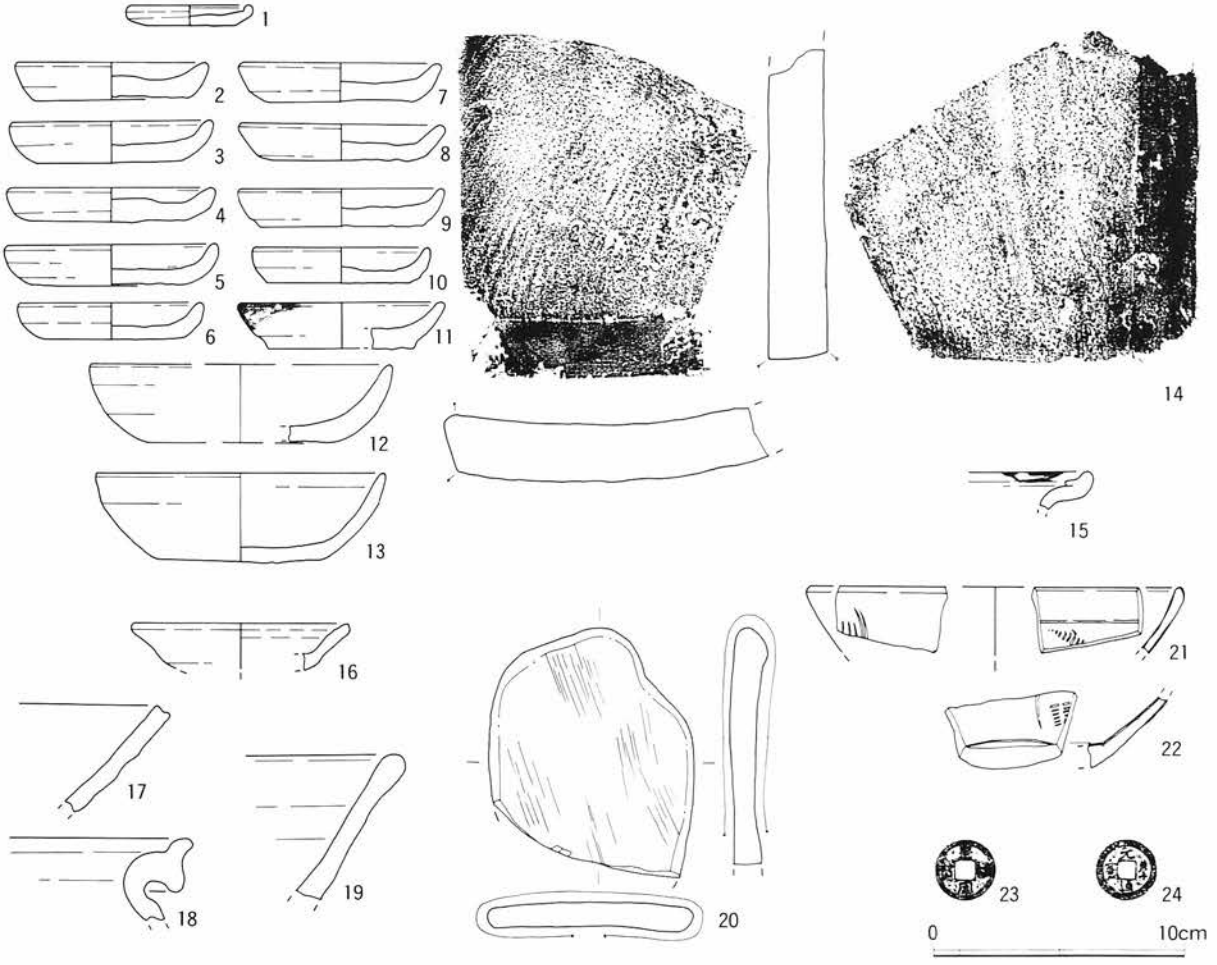


図15　第３面上出土遺物

第4節　第2面（図16）

第3面の上には暗灰褐色弱粘質土が20cm前後堆積し、この層上に薄い泥岩による版築が施されている。建物跡、塀及び多数のピットを検出した第3面と比較して、遺構の密度は低くなる。検出した遺構は土坑2基、溝1条、ピット7穴及び版築面である。礎板を有するピットを調査区北端で検出していることから、居住施設の主体は第4面と同様に調査区外の北側に展開すると考えられる。

版築面（図16）

調査区北東部で検出した。試掘坑と現代の配水管により一部を破壊されており、その広がりは不明瞭ではあるが、おおまかには調査区北東角より南西側に向かって舌状に延びている。版築は径1～3cm前後の細かい泥岩により形成されているが、厚さは5cm以下と薄く、全体に締まりが弱く、軟弱なものである。標高は17.1m前後で周辺より若干高くなっている。

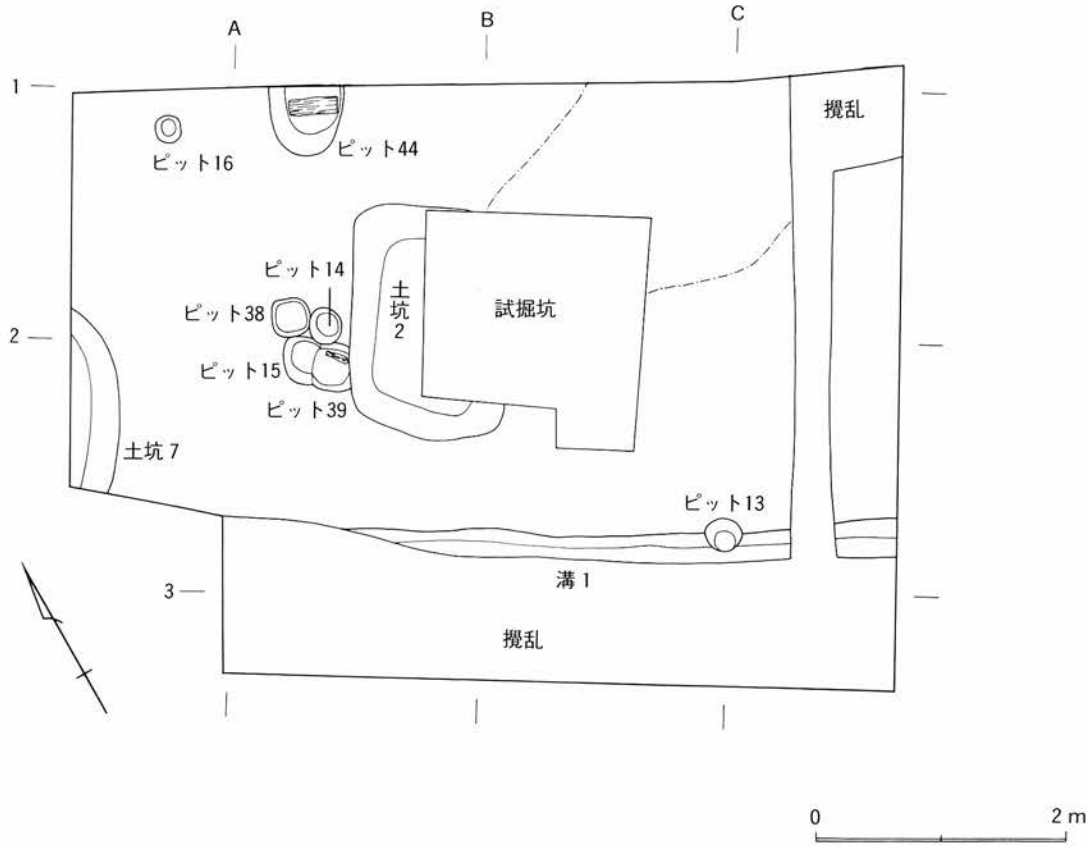


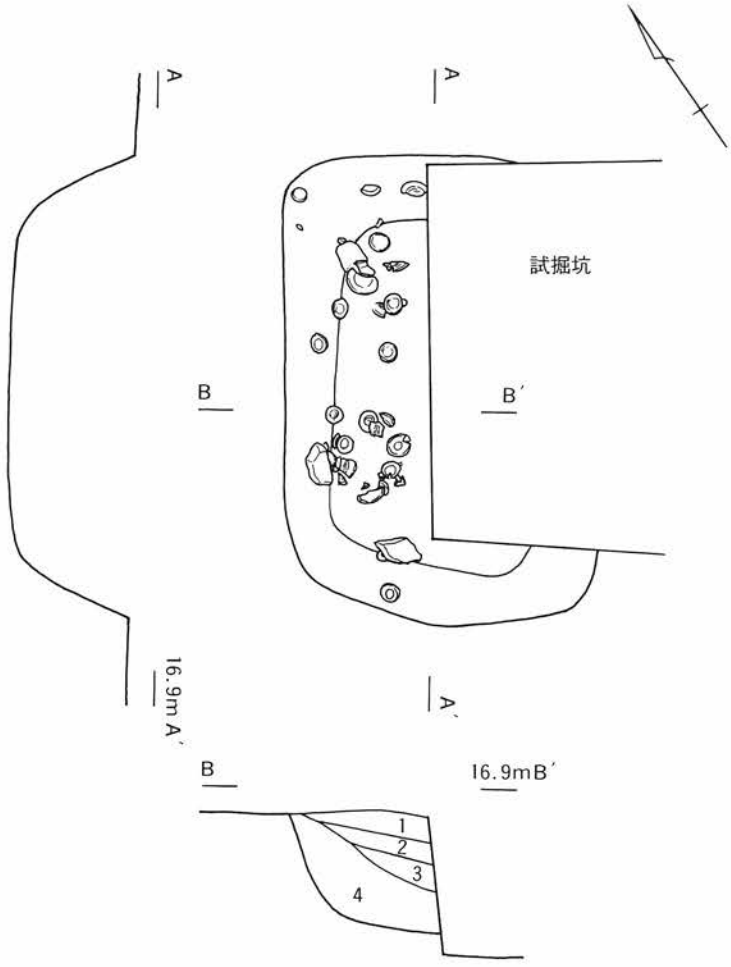
図16　第2面全測図

土坑2（図17・18）

調査区ほぼ中央部で検出した。試掘坑により半分ほど破壊されている。長軸方向はN－32°－Eを指す。規模は長軸は188cm、短軸は残存する範囲から推定して130cm前後とみられる。深さは最大50cmを測る。壁面はやや開き気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は4層に分層され、こ

第3表　第2面ピット計測表

ピット番号	規模（長軸・短軸・深さ）	備考
13	30・26・16	
14	28・26・7	
15	40・38・25	
16	22・22・9	
38	32・30・15	
39	40・40・27	
44	---・60・74	礎板



土坑２土層注記
1．暗褐色土　径3cm前後の泥岩多量に含む。
2．暗褐色土　１層より泥岩減る。
3．暗灰色粘質土　泥岩粒少量含む。締まり欠ける。
4．暗灰色粘質土　多量の土器片を含む。締まり欠ける。

0　1m

図17　土坑２

の第４層中には一括廃棄とみられる多量の遺物が含まれていた。

図18―１～15は覆土下層より出土した遺物である。１～８は小型かわらけ。背低で、器壁は薄く、開きながら立ち上がるものと内彎しながら立ち上がるものとが見られる。胎土はおおむね黒色微砂を多めに混じえる淡茶色～淡橙色弱砂質土。４は内外面に煤が付着する。９は中型かわらけ。胎土は混入物の少ない粉質土の「薄手丸深」型である。10～13は大型かわらけ。器壁は薄く、開きながら立ち上がる。

14は山茶碗窯系こね鉢口縁部片。使用による磨滅痕は確認できなかった。

15は鳴滝産の灰白色泥岩製の仕上げ砥。

16～40は覆土上層より出土した。16～35は小型かわらけ。下層の様相と大きな違いは見られないが、粉質気味胎土のものがわずかだが混じる。また、図示できなかったが、手づくねの大型かわらけ片が少量出土している。36～37は中型かわらけ。37は混入物が少ない粉質胎土の「薄手丸深」型である。内面に煤が付着する。38は極小の内折れかわらけ。

39は平瓦。凹面は布目痕、凸面は砂目痕が残る。

40は浅鉢型火鉢。体部外面中位付近には指頭による押さえ、内面は木口状工具による調整がおこなわれる。

土坑７（図16）

調査区南西角で検出した。土坑の大半は調査区外に展開するとみられる。長軸方向にN－25°－Eを指す。検出した範囲での規模は長さ144cm、幅50cm、深さ最大42cmを測る。壁面は比較的緩やかに立ち上がり、底面はわずかに弧状を呈する。

溝１（図16）

３ラインのやや北側で検出した。大部分を現代のコンクリート擁壁の裏込めに破壊されており、残存状態は悪い。深さは残存する範囲で最大19cmを測る。覆土の大部分を擁壁裏込めに削平されており、暗褐色土一層のみ確認できた。溝１は現在の県道に沿うような形で検出されているが、溝の規模は小さく、その作りは貧弱なものであり、「六浦路」の側溝としては考えにくい。

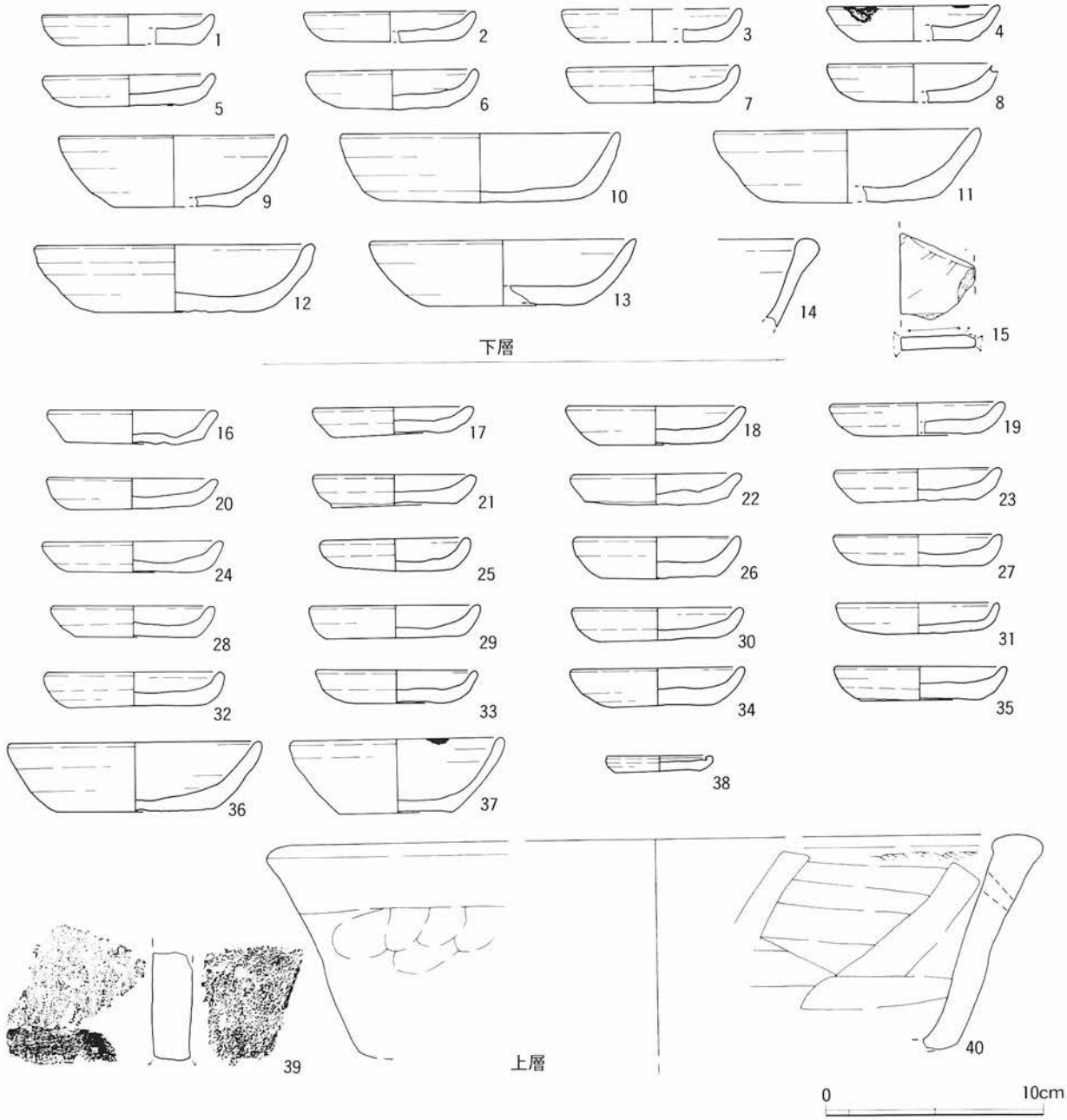


図18　土坑２出土遺物

ピット（図16）

第２面では７基のピットを検出した。このうちピット44は礎板を有しているが、調査区内で建物等を構成するとみられるものはない。

第２面下出土遺物（図19）

図19―１は粉質胎土の大型手づくねかわらけ。体部外面と内面中位に強い稜を持ち、器壁は大きく外反する。外底部に残る指頭痕は明瞭。２～７は小型かわらけ。器壁は直立気味に立ち上がるもの、内彎気味に立ち上がるものなどが見られる。８～10は大型かわらけ。８はやや小振りである。11は外底部に「乃」と思われる墨書が残る小型かわらけである。

12は山茶碗窯系こね鉢の口縁部片。口唇部にごく浅い沈線が巡る。磨滅痕は確認できなかった。13は古瀬戸中期の鉄釉合子の蓋。内面は露胎。

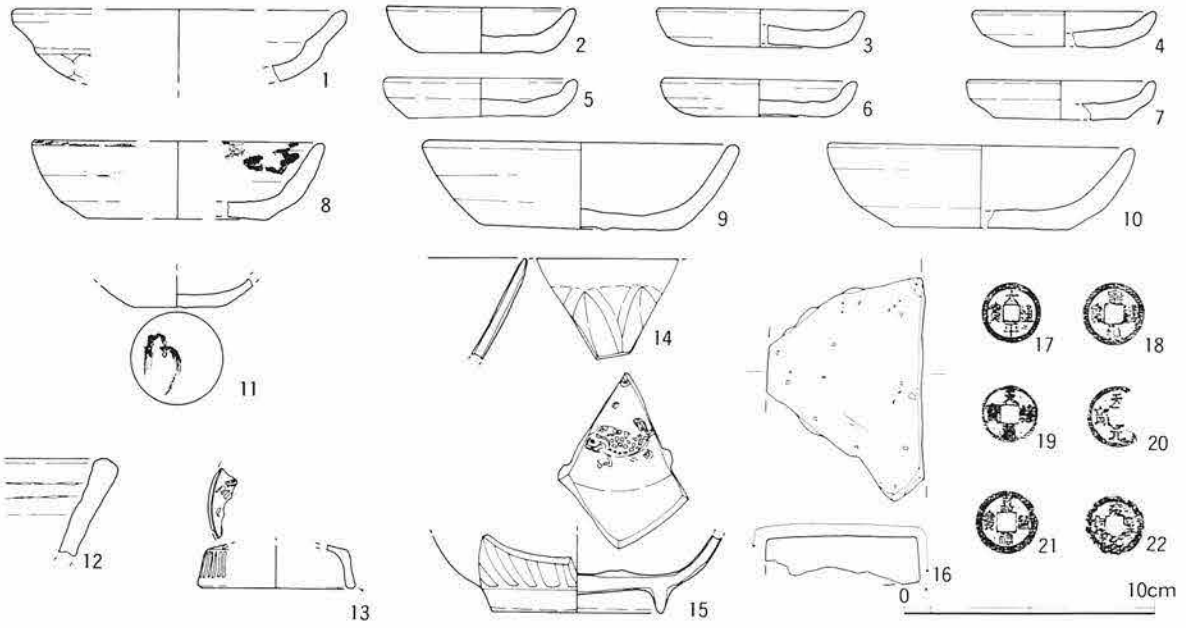


図19　第２面下出土遺物

14は青磁蓮弁文碗の口縁部片、15は青磁貼付双魚文鉢。外面に蓮弁文が施される。内底面に貼り付けられた魚文は灰味淡青緑色を呈する釉が厚く施釉されているにもかかわらず明瞭である。

16は天草産の中砥。淡紅色の縞が入る乳白色凝灰岩製である。両側面と表面を砥面として使用している。

17は976年初鋳の「太平通寶」、18は1038年初鋳の「皇宋通寶」、19は1017年初鋳の「天禧通寶」、20は「天□元寶」、1023年初鋳の「天聖元寶」と思われる。21は1056年初鋳の「嘉祐通寶」、22は1094年初鋳の「紹聖元寶」である。

第２面上出土遺物（図20）

１～６は小型かわらけ。おおむね胎土は黒色微砂、雲母片を混じえる淡橙色～橙色を呈する弱砂質～砂質土。背低で、体部内面中位に稜を持ち、外反気味に立ち上がるものが多い。７～８は大型かわらけ。７は背低で器壁は直立気味に立ち上がる。８は黒色微砂を多く混じえる橙色砂質土の側面観碗型を呈するが、器壁は厚めである。

９は常滑のこね鉢小片。14世紀代の製品と思われる。使用による磨滅痕は確認できなかった。10はすり常滑。表面の一部から上側面にかけて著しい磨滅痕が残る。

11は鳴滝産の紅味黄色～白灰色を呈する泥岩製の仕上げ砥。砥面は表面のみで、裏面は剝離している。

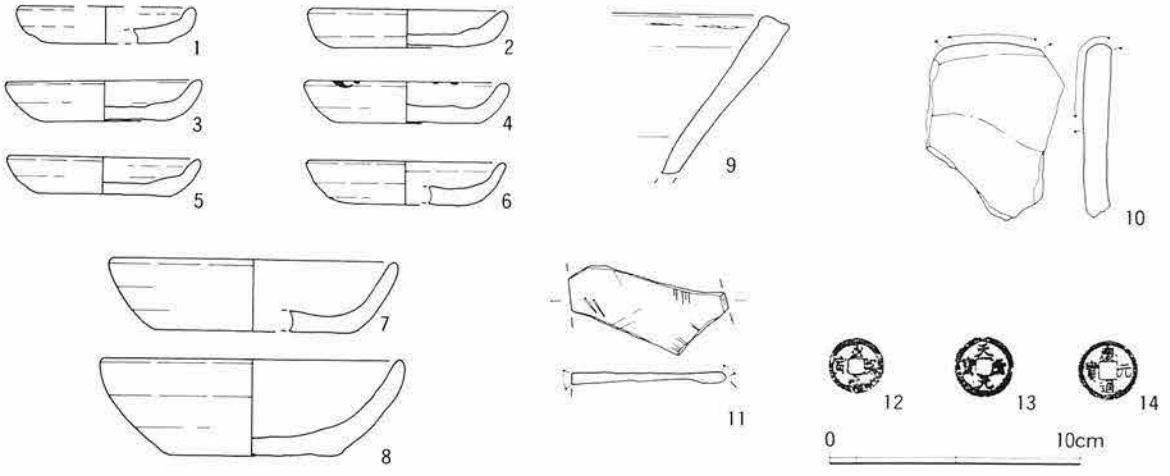


図20　第２面上出土遺物

12は995年初鋳の「至道元寶」、13は1023年初鋳の「天聖元寶」、14は1195年初鋳の「慶元通寶」である。

第5節　第1面（図21）

第2面の上には褐色砂質土が堆積している。この層は調査区中央部北側では堆積が薄く、この部分に泥岩及び破砕凝灰岩を版築して、面を水平にしている。第2面同様、遺構の密度は低く、検出した遺構はピット8穴と版築面のみである。版築面は調査区外の北側に広がるようであり、その他の遺構も北側に展開すると考えられる。

版築面（図21）

調査区北側中央部で検出した。試掘坑と現代の配水管により一部を破壊される。版築は二層に分層され、上層は泥岩、下層は破砕凝灰岩による版築となっており、厚さはそれぞれ5cm前後である。この版築は1面を構成する褐色砂質土の窪みを充塡するように施されている。

ピット（図21）

第1面では8穴のピットを検出した。いずれも掘り込みは浅く、平面形状は方形に近いものと不整形なものがある。このうち方形に近い形状を呈するピット1・5・6・8はほぼ直線上に並んでおり、塀等を構成していた可能性がある。

第4表　第1面ピット計測表

ピット番号	規模（長軸・短軸・深さ）	備考
1	28・22・5	
2	36・32・17	
3	28・24・17	
4	24・20・15	
5	38・28・6	
6	28・28・6	
7	28・25・8	泥岩
8	---・34・12	

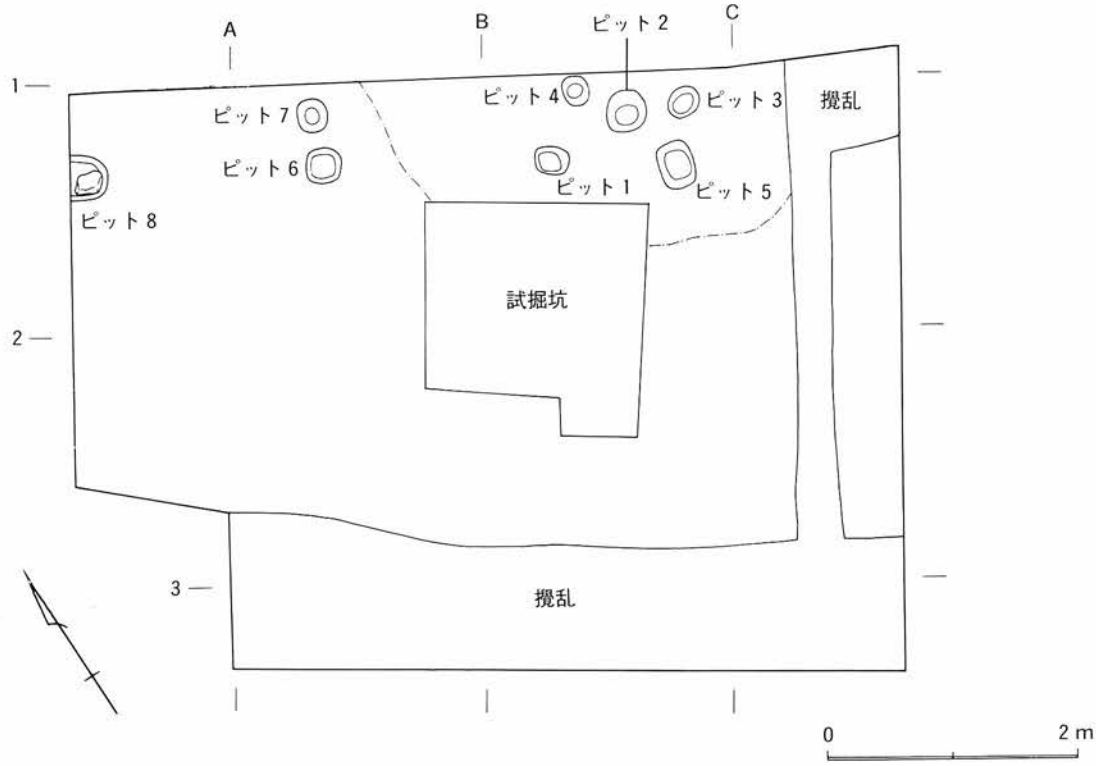


図21　第1面全測図

ピット４出土遺物（図22）

第１面の８穴のピットと第１面直上より出土した遺物は、ピット４より出土した図22―１の1086年初鋳の「元祐通寶」と、図示できなかった糸切りかわらけの小片のみであった。

第１面下出土遺物（図23）

図23―１は極小内折れかわらけ。胎土は他のかわらけ同様、黒色微砂、雲母片を混じえる淡橙色弱砂質土。外底部は糸切り後に指頭によるナデで糸切り痕を消している。２～９は小型かわらけ。背低で、器壁が開きながら立ち上がるもの、内彎気味に立ち上がるものが見られる。また、器壁はおおむね薄い。10～12は大型かわらけ。10はやや小振りで弱砂質胎土。側面観碗型を呈する。11は小振りで弱粉質胎土。背低で、体部内面中位に稜を持ち、器壁は外反しながら立ち上がる。12は背高で、器壁は薄いが、開きながら立ち上がっており、碗型を呈していない。

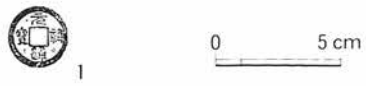


図22　ピット４出土遺物

13は山茶碗窯系こね鉢底部片。体部外面下位はヘラ状工具による回転ナデで調整される。内面は使用による著しい磨滅痕が残る。

14は1034年初鋳の「景祐元寶」、15は1111年初鋳の「政和通寶」である。

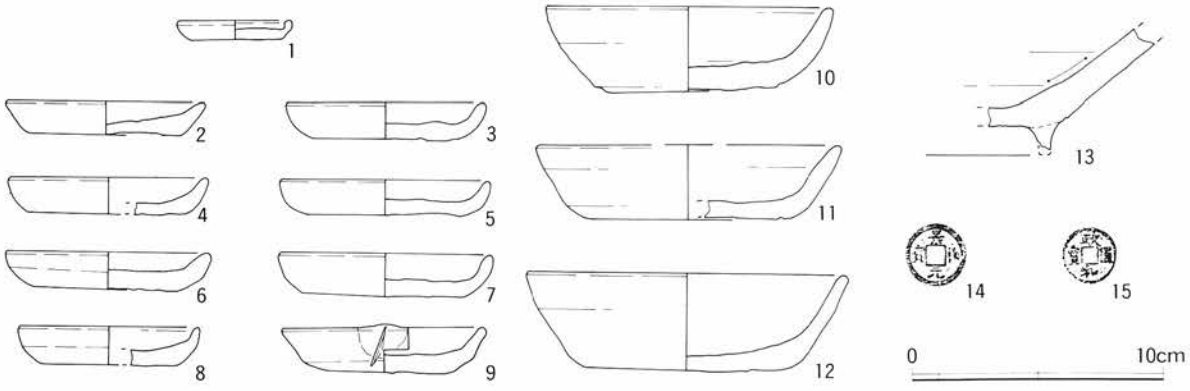


図23　第１面下出土遺物

第１面上出土遺物（図24）

図24―１～５は小型かわらけ。胎土はおおむね黒色微砂を多く混じえる淡橙色砂質土。５は器壁が薄く、大きく開きながら立ち上がる。

６は瓦器碗。体部外面上位と体部内面はヘラケズリ、体部外面上位から下方は指頭によるごく軽い押さえで調整される。また、外面にはヘラ押しがなされる。

７は青磁碗か鉢の底部片。畳付は露胎。高台上には融着痕が残る。

８は1086年初鋳の「元祐通寶」。

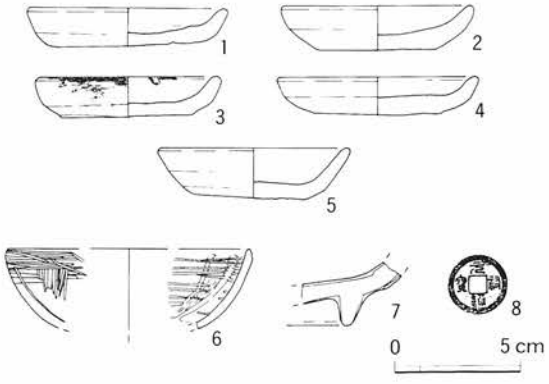


図24　第１面上出土遺物

撹乱採取遺物（図25）

図25—1～2は小型かわらけ。器壁は内彎しながら立ち上がり、口唇部付近で外反する。3は大型かわらけ。1～2の小型かわらけ同様、器壁は内彎しながら立ち上がり、口唇部付近で外反する。

4は釘。

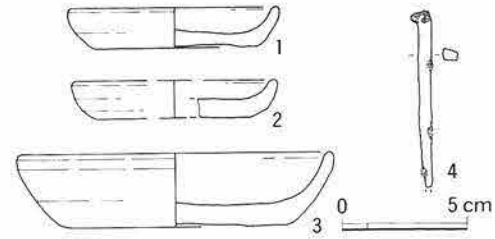


図25　撹乱採取遺物

第5表　遺物観察表（1）

遺構番号	挿図番号		種別	法量（cm）			備考
				口径	底径	器高	
建物1 ピット19	7	1	かわらけ	8.0	5.6	1.7	雲母、黒色微砂を混じえる淡橙色弱砂質土
建物1 ピット50	7	2	手づくねかわらけ	12.9	／	／	黒色微砂、雲母片をわずかに混じえる淡茶色粉質土
塀1 ピット34	7	3	かわらけ	12.4	7.3	3.0	雲母、黒色微砂、白針を混じえる橙色弱砂質土
第3面 土坑1下層	9	1	かわらけ	8.0	5.3	1.7	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡茶色弱砂質土
第3面 土坑1下層	9	2	平瓦	遺存長7.3　最大厚1.9			黒色、白色微粒、雲母を混じえる黒灰色土　器表は黒灰色
第3面 土坑1下層	9	3	銭	／	／	／	「元豊通寶」
第3面　土坑1	9	4	かわらけ	7.0	6.0	1.2	雲母、黒色微砂、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
第3面　土坑1	9	5	かわらけ	8.6	6.4	1.4	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱砂質土
第3面　土坑1	9	6	かわらけ	7.8	6.2	1.7	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱砂質土　内外面煤付着
第3面　土坑1	9	7	かわらけ	7.6	6.4	1.5	黒色微砂、雲母を混じえる赤褐色弱砂質土
第3面　土坑1	9	8	かわらけ	8.2	6.0	1.6	黒色微砂、雲母を混じえる淡茶色弱砂質土
第3面　土坑1	9	9	かわらけ	7.8	5.0	1.9	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙～橙色弱砂質土
第3面　土坑1	9	10	かわらけ	11.7	7.9	3.5	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる橙色砂質土
第3面　土坑1	9	11	かわらけ	11.4	6.0	3.3	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱砂質土　直外面煤付着
第3面　土坑1	9	12	極小白かわらけ	／	／	／	黒色微砂をわずかに混じえる淡紅味白色粉質土
第3面　土坑1	9	13	白かわらけ	10.9	／	／	黒色微砂をわずかに混じえる淡紅味白色粉質土
第3面　土坑1	9	14	常滑　山皿	7.2	4.0	1.6	白色微石、黒色微砂を混じえるザックリした白灰色土
第3面　土坑1	9	15	常滑　甕	／	／	／	白色微粒を多く混じえる暗灰色土　器表は茶褐色
第3面　土坑1	9	16	山茶碗窯系こね鉢	／	／	／	白色微粒～小石、黒色微粒を混じえるザックリした灰色土
第3面　土坑1	9	17	白磁　口兀皿	／	／	／	素地は黒色微粒を混じえる灰白色弱粘質土　釉は緑味乳白色
第3面　土坑1	9	18	青磁　蓮弁文碗	／	／	／	素地は黒色微砂を混じえる灰白色粘質土　釉は灰味淡青緑色
第3面　土坑1	9	19	銭	／	／	／	「紹聖元寶」
第3面　土坑1	9	20	鳴滝　仕上げ砥	遺存長10.0幅3.3最大厚0.7			緑味黄色泥岩製
第3面　土坑6	10	1	かわらけ	8.3	6.3	1.7	黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色砂質土
第3面　土坑6	10	2	かわらけ	7.8	6.1	1.6	黒色微砂を多く混じえる淡茶色砂質土
第3面　土坑6	10	3	かわらけ	7.6	5.8	1.85	黒色微砂を多く混じえる淡橙色砂質土
第3面　土坑6	10	4	かわらけ	12.2	8.6	2.9	黒色微砂を多く混じえる淡橙色砂質土
第3面　土坑6	10	5	かわらけ	12.8	8.4	2.7	黒色微砂、泥岩粒、白針、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土
第3面　溝2	11	1	かわらけ	7.2	5.6	1.5	黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色砂質土
第3面　溝2	11	2	かわらけ	12.6	8.4	2.8	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色砂質土
第3面　溝2	11	3	かわらけ	12.1	7.1	3.4	黒色微砂、白針、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
第3面 ピット18	12	1	手づくねかわらけ	7.6	6.7	1.8	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
第3面 ピット20	12	2	かわらけ	13.2	7.5	4.15	黒色微砂を多く混じえる明淡茶色砂質土
第3面 ピット23	12	3	かわらけ	7.7	6.2	1.6	雲母、黒色微砂を混じえる淡茶色弱砂質土
第3面 ピット23	12	4	青磁　劃花文碗	17.0	／	／	素地は灰色緻密土　釉は淡オリーブ色を呈する
第3面 ピット24	12	5	かわらけ	8.2	6.3	1.55	黒色微砂を多く混じえる淡橙色砂質土
第3面下	13	1	かわらけ	7.8	6.3	1.5	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色砂質土
第3面下	13	2	かわらけ	7.6	5.7	1.5	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色砂質土
第3面下	13	3	かわらけ	7.6	5.3	1.6	黒色微砂を多く混じえる淡橙～橙色砂質土　内外面煤付着
第3面下	13	4	かわらけ	7.3	5.1	1.6	黒色微砂を混じえる淡橙色弱砂質土　外面煤付着
第3面下	13	5	かわらけ	8.2	6.5	1.65	黒色微砂を多く混じえる淡橙色砂質土　内外面煤付着
第3面下	13	6	かわらけ	8.1	5.7	1.4	雲母を多く混じえる淡橙色弱砂質土
第3面下	13	7	かわらけ	7.6	6.3	1.5	黒色微砂を多く混じえる淡橙色砂質土
第3面下	13	8	かわらけ	7.6	5.4	1.5	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡茶色弱砂質土
第3面下	13	9	かわらけ	8.7	5.6	1.75	黒色微砂、雲母を混じえる橙色弱砂質土

第５表　遺物観察表（２）

遺構番号	挿図番号		種別	法量（cm）			備考
				口径	底径	器高	
第３面下	13	10	かわらけ	7.4	5.5	1.55	黒色微砂を混じえる淡茶色砂質土
第３面下	13	11	かわらけ	8.0	6.4	1.4	黒色微砂を多く混じえる淡橙色弱砂質土
第３面下	13	12	かわらけ	8.0	6.0	1.55	黒色微砂を多く混じえる淡茶色砂質土
第３面下	13	13	かわらけ	8.2	6.85	1.8	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色砂質土
第３面下	13	14	かわらけ	7.7	5.55	1.6	黒色微砂、雲母を多く混じえる淡橙色砂質土
第３面下	13	15	かわらけ	7.7	6.35	1.4	黒色微砂を多く混じえる淡橙色弱粉質土
第３面下	13	16	かわらけ	7.9	6.3	1.5	黒色微砂を混じえる淡橙色弱砂質土
第３面下	13	17	かわらけ	7.9	6.55	1.4	黒色微砂、雲母を混じえる橙色弱砂質土
第３面下	13	18	かわらけ	7.6	6.0	1.3	黒色微砂、雲母を多く混じえる淡橙色弱砂質土
第３面下	13	19	かわらけ	9.4	7.9	1.9	黒色微砂を多く混じえる淡茶色弱砂質土
第３面下	13	20	かわらけ	7.9	6.4	1.9	黒色微砂、雲母を多く混じえる淡橙色砂質土
第３面下	13	21	かわらけ	12.4	9.55	2.9	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙～橙色弱砂質土
第３面下	13	22	かわらけ	11.6	8.6	2.95	黒色微砂を多く混じえる淡橙色弱粉質土
第３面下	13	23	かわらけ	12.4	8.8	2.9	黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土
第３面下	13	24	かわらけ	12.4	8.7	3.2	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
第３面下	13	25	かわらけ	12.1	7.1	3.3	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる橙色弱砂質土
第３面下	13	26	かわらけ	12.1	8.0	3.55	黒色微砂、雲母、白針をわずかに混じえる橙色弱砂質土
第３面下	13	27	かわらけ	12.2	8.2	3.3	黒色微砂を多く混じえる橙色砂質土
第３面下	13	28	かわらけ	12.0	8.45	3.3	黒色微砂、雲母を多く混じえる橙色砂質土
第３面下	13	29	かわらけ	12.1	9.3	3.2	黒色微砂を多く混じえる淡橙色弱粉質土
第３面下	13	30	かわらけ	12.3	6.3	3.5	黒色微砂、雲母を混じえる淡茶色弱粉質土
第３面下	13	31	かわらけ	12.6	7.4	3.5	黒色微砂、雲母をわずかに混じえる淡橙色弱砂質土
第３面下	13	32	瀬戸　碗型入子	4.8	3.2	1.6	淡黄味灰色緻密土
第３面下	13	33	青磁　蓮弁文碗	／	5.8	／	素地は灰色粘質緻密土　釉は灰緑色
第３面下	13	34	北陸地方　中砥	全長15.5幅6.3最大厚2.0			灰味淡緑色凝灰岩
第３面下	14	1	手づくねかわらけ	8.4	7.7	2.5	黒色微砂をひじょうに多く混じえる橙色砂質土
第３面下	14	2	手づくねかわらけ	12.2	／	／	雲母、黒色微砂を混じえる淡茶色粉質土
第３面下	14	3	かわらけ	8.4	6.8	1.6	黒色微砂を多く混じえる淡橙色砂質土
第３面下	14	4	かわらけ	7.9	6.5	1.5	黒色微砂を混じえる淡橙色弱砂質土
第３面下	14	5	かわらけ	8.0	5.8	1.8	黒色微砂を多く混じえる淡茶色弱粉質土
第３面下	14	6	かわらけ	8.1	6.3	1.5	黒色微砂を多く混じえる淡橙色砂質土
第３面下	14	7	かわらけ	7.2	5.55	1.7	黒色微砂、雲母を混じえる淡橙～灰色弱粉質土
第３面下	14	8	かわらけ	9.4	5.4	2.9	黒色微砂、雲母を多く混じえる明淡茶色砂質土　内外面に煤付着
第３面下	14	9	かわらけ	12.0	8.8	2.9	黒色微砂を多く混じえる淡橙色粉質土
第３面下	14	10	かわらけ	12.2	9.0	3.0	黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土
第３面下	14	11	墨書かわらけ	／	6.4	／	黒色微砂、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
第３面下	14	12	白かわらけ	／	／	／	混入物をほとんど混じえない紅味白色緻密精良土
第３面下	14	13	山茶碗窯系こね鉢	／	／	／	白色細石を混じえる明灰色緻密土　片口部に煤付着
第３面下	14	14	常滑　鉢	／	／	／	白色小石～粒子を多く混じえる淡茶色緻密土
第３面下	14	15	滑石鍋転用 用途不明品	全長4.2幅3.1最大厚1.1			
第３面下	14	16	産地不明　中砥	遺存長8.7幅6.0最大厚1.3			銀灰色を呈する泥岩製
第３面上	15	1	極小かわらけ	4.6	3.5	0.8	黒色微砂、雲母を混じえる橙色砂質土
第３面上	15	2	かわらけ	7.3	6.2	1.5	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙～淡茶色砂質土
第３面上	15	3	かわらけ	7.8	5.7	1.7	雲母、黒色微砂、白針を混じえる淡橙～橙色砂質土
第３面上	15	4	かわらけ	7.9	6.1	1.4	黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色砂質土
第３面上	15	5	かわらけ	8.1	5.95	1.6	黒色微砂、雲母を混じえる橙色砂質土
第３面上	15	6	かわらけ	7.1	5.35	1.4	黒色微砂、雲母を混じえる赤褐色砂質土
第３面上	15	7	かわらけ	7.6	5.7	1.5	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色砂質土
第３面上	15	8	かわらけ	7.9	5.4	1.4	黒色微砂を多く混じえる明淡茶色砂質土
第３面上	15	9	かわらけ	8.0	6.6	1.5	黒色微砂を多く混じえる淡橙色砂質土
第３面上	15	10	かわらけ	6.9	5.8	1.4	黒色微砂、白針を混じえる淡茶色弱砂質土
第３面上	15	11	かわらけ	7.8	5.8	1.8	黒色微砂を混じえる淡茶色弱砂質土　外面煤付着

第５表　遺物観察表（３）

遺構番号	挿図番号		種別	法量（cm）			備考
				口径	底径	器高	
第３面上	15	12	かわらけ	11.9	7.4	3.2	黒色微砂を多く混じえる橙色砂質土
第３面上	15	13	かわらけ	11.4	6.6	3.5	黒色微砂をわずかに混じえる淡橙色弱粉質土
第３面上	15	14	平瓦	遺存長12.3　最大厚2.3			黒色微砂、白色粒を混じえる灰色緻密土
第３面上	15	15	伊勢系土鍋	／	／	／	黒色微砂～砂粒を多く混じえる紅味白色土　胎芯は暗灰色
第３面上	15	16	遠江系山皿？	8.8	／	／	白色微粒、雲母微粒をわずかに混じえる暗灰色弱粘質土
第３面上	15	17	瀬戸　鉢	／	／	／	白色細石を多く、黒色微砂をわずかに混じえる明灰白色緻密土
第３面上	15	18	常滑　壺	／	／	／	石英粒、黒色微砂を混じえる暗灰色緻密土　器表は暗茶褐色
第３面上	15	19	山茶碗窯系こね鉢	／	／	／	白色細石～微粒を多く混じえるザックリした灰色土
第３面上	15	20	すり常滑	遺存長9.4　最大厚1.3			
第３面上	15	21	青磁　櫛掻文碗	15.0	／	／	素地は黒色微砂をわずかに混じえる灰白色弱粘質緻密土　釉は淡灰緑色
第３面上	15	22	青磁櫛掻劃花文碗	／	／	／	素地は白色および黒色微砂を混じえる暗灰色弱粘質緻密土　釉は灰味青乳白色
第３面上	15	23	銭	／	／	／	「皇宋通寶」
第３面上	15	24	銭	／	／	／	「元豊通寶」
第２面 土坑２下層	18	1	かわらけ	7.7	6.0	1.4	黒色微砂、雲母を混じえる淡茶色砂質土
第２面 土坑２下層	18	2	かわらけ	7.7	6.0	1.4	黒色微砂、雲母を混じえる橙色砂質土
第２面 土坑２下層	18	3	かわらけ	8.0	6.1	1.5	黒色微砂を多く、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土
第２面 土坑２下層	18	4	かわらけ	7.6	5.2	1.6	黒色微砂、雲母を混じえる淡茶色弱粉質土
第２面 土坑２下層	18	5	かわらけ	7.7	4.95	1.45	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色砂質土
第２面 土坑２下層	18	6	かわらけ	7.55	5.65	1.8	雲母を多く混じえる淡茶色弱砂質土
第２面 土坑２下層	18	7	かわらけ	7.7	6.0	1.65	雲母、黒色微砂を少量混じえる淡茶色弱砂質土
第２面 土坑２下層	18	8	かわらけ	7.7	5.0	1.8	雲母、黒色微砂を少量混じえる淡茶色弱砂質土
第２面 土坑２下層	18	9	かわらけ	10.3	5.4	3.3	混入物少なめの淡橙色弱砂質土
第２面 土坑２下層	18	10	かわらけ	12.6	9.2	3.2	雲母、黒色微砂を混じえる橙色弱砂質土
第２面 土坑２下層	18	11	かわらけ	12.0	7.9	3.3	黒色微砂、雲母を混じえる橙色弱砂質土
第２面 土坑２下層	18	12	かわらけ	12.5	7.3	3.1	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる橙色砂質土
第２面 土坑２下層	18	13	かわらけ	12.1	7.3	3.0	黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土
第２面 土坑２下層	18	14	山茶碗窯系こね鉢	／	／	／	黒色微粒、白色微粒～小石を混じえる暗灰色土
第２面 土坑２下層	18	15	鳴滝　仕上げ砥	遺存長3.7幅3.5最大厚0.6			灰白色を呈する泥岩製
第２面 土坑２上層	18	16	かわらけ	7.4	6.1	1.55	黒色微砂、泥岩粒、白針を多く混じえる橙色弱砂質土
第２面 土坑２上層	18	17	かわらけ	7.0	5.7	1.25	黒色微砂、雲母、白針、泥岩粒をとても多く混じえる橙色砂質土
第２面 土坑２上層	18	18	かわらけ	7.9	5.3	1.8	黒色微砂、雲母を多く混じえる淡橙色弱砂質土
第２面 土坑２上層	18	19	かわらけ	7.7	5.8	1.5	黒色微砂、雲母を多く混じえる淡橙色砂質土
第２面 土坑２上層	18	20	かわらけ	7.5	5.4	1.4	黒色微砂、泥岩粒を多く混じえる淡茶色砂質土
第２面 土坑２上層	18	21	かわらけ	7.1	5.8	1.4	黒色微砂、泥岩粒を多く混じえる橙色弱砂質土
第２面 土坑２上層	18	22	かわらけ	7.4	6.6	1.4	黒色微砂、泥岩粒を多く混じえる淡橙～赤褐色砂質土

第５表　遺物観察表（４）

遺構番号	挿図番号		種別	法量（cm）			備考
				口径	底径	器高	
第２面 土坑２上層	18	23	かわらけ	7.4	5.4	1.55	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色砂質土
第２面 土坑２上層	18	24	かわらけ	8.1	6.2	1.4	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色砂質土
第２面 土坑２上層	18	25	かわらけ	6.5	5.2	1.45	黒色微砂、雲母を多く混じえる淡橙色砂質土
第２面 土坑２上層	18	26	かわらけ	7.3	5.2	1.95	黒色微砂を多く混じえる淡橙色砂質土
第２面 土坑２上層	18	27	かわらけ	7.5	5.9	1.4	黒色微砂、泥岩粒を多く混じえる橙色弱砂質土
第２面 土坑２上層	18	28	かわらけ	7.2	5.6	1.4	黒色微砂を多く混じえる淡茶色砂質土
第２面 土坑２上層	18	29	かわらけ	7.5	6.15	1.5	黒色微砂を多く混じえる淡橙色砂質土
第２面 土坑２上層	18	30	かわらけ	7.5	5.8	1.4	黒色微砂、雲母を多く混じえる淡橙色砂質土
第２面 土坑２上層	18	31	かわらけ	7.3	6.0	1.4	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
第２面 土坑２上層	18	32	かわらけ	7.95	6.35	1.55	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色砂質土
第２面 土坑２上層	18	33	かわらけ	7.2	4.5	1.5	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙～橙色弱粉質土
第２面 土坑２上層	18	34	かわらけ	7.7	5.0	1.75	雲母、黒色微砂、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
第２面 土坑２上層	18	35	かわらけ	7.7	5.6	1.6	黒色微砂を多く混じえる淡茶色砂質土
第２面 土坑２上層	18	36	かわらけ	11.4	7.25	3.2	黒色微砂、雲母を多く混じえる橙色砂質土
第２面 土坑２上層	18	37	かわらけ	9.5	5.1	3.4	黒色微砂、雲母をわずかに混じえる淡橙色弱粉質土　内面に煤付着
第２面 土坑２上層	18	38	極小かわらけ	4.7	3.9	0.7	黒色微砂、雲母をわずかに混じえる紅味淡茶白色土
第２面 土坑２上層	18	39	平瓦	遺存長5.0　最大厚1.8			白色微粒～小石を混じえる淡紅味灰白色土
第２面 土坑２上層	18	40	瓦質浅鉢型火鉢	36.0	／	／	黒色砂、雲母を多く混じえる灰～暗灰色土　器表は暗灰～黒色を呈する
第２面下	19	1	手づくねかわらけ	12.9	／	／	黒色微砂、雲母を混じえる橙色粉質土
第２面下	19	2	かわらけ	7.3	5.0	1.8	黒色微砂、雲母、泥岩粒、白針を混じえる淡橙色弱粉質土
第２面下	19	3	かわらけ	7.9	5.4	1.5	黒色微砂を多く混じえる淡橙色砂質土
第２面下	19	4	かわらけ	6.9	4.1	1.4	黒色微砂を多く混じえる淡橙色砂質土
第２面下	19	5	かわらけ	7.4	5.6	1.5	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
第２面下	19	6	かわらけ	7.4	5.6	1.45	雲母、黒色微砂、泥岩粒、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
第２面下	19	7	かわらけ	7.3	5.65	1.5	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
第２面下	19	8	かわらけ	11.4	7.2	3.1	黒色微砂を多く混じえる淡橙色砂質土　内外面に煤付着
第２面下	19	9	かわらけ	12.1	7.8	3.45	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
第２面下	19	10	かわらけ	11.9	7.0	3.3	黒色微砂を多く混じえる橙色砂質土
第２面下	19	11	墨書かわらけ	／	3.5	／	混入物の少ない淡橙色弱粉質土　外底面に「乃」の墨書が残る
第２面下	19	12	山茶碗窯系こね鉢	／	／	／	白色微粒～小石を多く混じえる灰色土
第２面下	19	13	瀬戸　鉄釉合子蓋	蓋径6.3			胎土は黄白色弱粘質土　釉は黄味灰緑色
第２面下	19	14	青磁　蓮弁文碗	／	／	／	素地は黒色微粒をわずかに混じえる灰色粘質土　釉は灰緑色
第２面下	19	15	青磁　双魚文鉢	／	7.0	／	素地は黒色微粒を混じえる明灰色粘質土　釉は灰味淡青緑色
第２面下	19	16	天草　中砥	遺存長8.8幅6.2最大厚1.9			乳白色を呈する凝灰岩製
第２面下	19	17	銭	／	／	／	「太平通寶」
第２面下	19	18	銭	／	／	／	「皇宋通寶」
第２面下	19	19	銭	／	／	／	「天禧通寶」
第２面下	19	20	銭	／	／	／	「天□通寶」
第２面下	19	21	銭	／	／	／	「嘉祐通寶」
第２面下	19	22	銭	／	／	／	「紹聖元寶」
第２面上	20	1	かわらけ	6.8	5.0	1.5	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる橙色砂質土

第５表　遺物観察表（５）

遺構番号	挿図番号		種別	法量（cm）			備考
				口径	底径	器高	
第２面上	20	2	かわらけ	7.6	5.55	1.5	黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土
第２面上	20	3	かわらけ	7.5	4.95	1.6	黒色微砂、雲母、泥岩粒を混じえる淡橙色砂質土
第２面上	20	4	かわらけ	7.7	6.0	1.65	雲母を混じえる淡橙色弱砂質土
第２面上	20	5	かわらけ	7.5	5.35	1.5	黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱砂質土
第２面上	20	6	かわらけ	7.7	4.9	1.75	黒色微砂、雲母を多く混じえる橙色砂質土
第２面上	20	7	かわらけ	11.2	7.8	2.9	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色砂質土
第２面上	20	8	かわらけ	11.7	7.0	3.9	黒色微砂を多く混じえる橙色砂質土
第２面上	20	9	常滑　こね鉢	／	／	／	白色微粒～小石を混じえる黒灰色土　器表は茶色を呈する
第２面上	20	10	すり常滑	全長7.2幅5.3最大厚1.0			
第２面上	20	11	鳴滝　仕上げ砥	遺存長2.8幅6.2最大厚0.5			紅味黄～灰白色泥岩製
第２面上	20	12	銭	／	／	／	「至道元寳」
第２面上	20	13	銭	／	／	／	「天元通寳」
第２面上	20	14	銭	／	／	／	「慶元通寳」
第１面　ピット４	22	1	銭	／	／	／	「元祐通寳」
第１面下	23	1	極小かわらけ	4.3	3.6	0.8	黒色微砂を多く混じえる淡橙色弱粉質土
第１面下	23	2	かわらけ	7.7	6.0	1.3	黒色微砂を多く混じえる橙色砂質土
第１面下	23	3	かわらけ	7.7	5.8	1.5	黒色微砂、白針を混じえる淡茶色弱砂質土
第１面下	23	4	かわらけ	7.6	6.45	1.45	黒色微砂を多く混じえる淡茶色砂質土
第１面下	23	5	かわらけ	8.1	6.0	1.4	黒色微砂を多く混じえる明淡茶色砂質土
第１面下	23	6	かわらけ	7.8	5.7	1.5	黒色微砂、雲母を混じえる淡茶色弱砂質土
第１面下	23	7	かわらけ	8.3	6.45	1.7	黒色微砂を多く混じえる淡茶色砂質土
第１面下	23	8	かわらけ	7.1	5.2	1.5	黒色微砂、白針を混じえる赤褐色弱砂質土
第１面下	23	9	かわらけ	7.9	5.0	1.9	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
第１面下	23	10	かわらけ	11.2	7.1	3.35	黒色微砂、白針、泥岩粒を混じえる淡橙色弱砂質土
第１面下	23	11	かわらけ	11.9	7.7	3.0	黒色微砂を多く混じえる淡茶色弱粉質土
第１面下	23	12	かわらけ	12.5	8.0	3.9	黒色微砂を多く混じえる淡茶色砂質土
第１面下	23	13	山茶碗窯系こね鉢	／	／	／	白色微粒～小石を混じえる灰白色緻密土
第１面下	23	14	銭	／	／	／	「景祐通寳」
第１面下	23	15	銭	／	／	／	「政和通寳」
第１面上	24	1	かわらけ	7.7	5.8	1.5	雲母、黒色微砂を混じえる淡橙色砂質土
第１面上	24	2	かわらけ	7.5	4.6	1.8	雲母、黒色微砂、泥岩粒を混じえる淡橙色砂質土
第１面上	24	3	かわらけ	7.0	5.3	1.65	雲母、黒色微砂、白針を混じえる淡橙～橙色弱砂質土　内外面に煤付着
第１面上	24	4	かわらけ	7.7	5.2	1.5	黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱砂質土
第１面上	24	5	かわらけ	7.4	4.4	2.0	黒色微砂、雲母、白針、泥岩粒を混じえる橙色砂質土
第１面上	24	6	瓦器碗	9.7	／	／	黄味灰色弱粉質精良土
第１面上	24	7	青磁　碗	／	／	／	素地は白色微粒を混じえる灰色粘質緻密土　釉は灰緑色
第１面上	24	8	銭	／	／	／	「元祐通寳」
撹乱	25	1	かわらけ	8.2	6.8	1.6	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
撹乱	25	2	かわらけ	8.0	6.4	1.5	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱砂質土
撹乱	25	3	かわらけ	12.4	8.5	3.0	黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡赤褐色弱砂質土
撹乱	25	4	釘	遺存長7.1　径0.6			

第4章　まとめ

今回の調査では4枚の生活面を検出した。第4面と第2面、第1面では建物等の一部を構成するとみられるピットを検出してはいるが、その本体はピットの位置から判断して調査区外の北側に展開するものと推測される。対照的に第3面では建物跡と塀及び多数のピットを検出し、居住空間が調査区全体に及んでいる状況を確認した。

各面を通して、出土した遺物は図示できなかったものを含め、手づくねかわらけをごくわずかに混じえる糸切りかわらけが大方を占め、他の搬入遺物の出土量を凌駕している。

小型かわらけは黒色微砂、雲母片を混じえる淡橙色～橙色を呈する弱砂質～砂質胎土。口径は7～8cm台前半、器高は1.5～2cm以内、底径口径比は1.2～1.6以内に集中する。器形は、おおむね背低で、器壁は薄く、直立気味に立ち上がるもの、開きながら立ち上がるもの、内彎気味に立ち上がるものに分類できる。また、精良粉質胎土で、器壁の薄い側面観碗型を呈する、いわゆる「薄手丸深」型は混じっていない。

大型かわらけの胎土は小型かわらけ同様、黒色微砂、雲母片を混じえる淡橙色～橙色を呈する弱砂質～砂質土。口径は12cm前後、とくに11cm台の小振りにものが目立ってきている。器高は2.8cm～3.5cm、底径口径比は1.3～1.95以内に散在している。器形も小型かわらけ同様、内底面が広く、背低で、器壁は直立気味に立ち上がるもの、開きながら立ち上がるもの、やや内彎気味に立ち上がるものが見られる一方、小型かわらけでは見られなかった粗製胎土で側面観碗型を呈するもの、あるいは精良粉質胎土の「薄手丸深」型が見られる。また、口径が9cm後半～10cm前半の「薄手丸深」型を呈する中型かわらけも見られる。このことから、器形変化において、小型かわらけよりも大型かわらけの方が先行している様子がみてとれる。

これらかわらけの年代観は、第1～第4面のいずれも13世紀後半～14世紀初頭の様相を呈し、年代的に大きな差は見られない。また、搬入された常滑、瀬戸窯の製品もおおよそ13世紀から14世紀前半に帰属するものが多い。このように本調査地点で検出した遺構と遺物の様相から、4枚の生活面は短期間のうちに第4面から第1面まで移行していったと考えられる。この中でも第3面だけは居住空間が調査区全体にまで及び、他の3面と遺構の様相を異にしている。

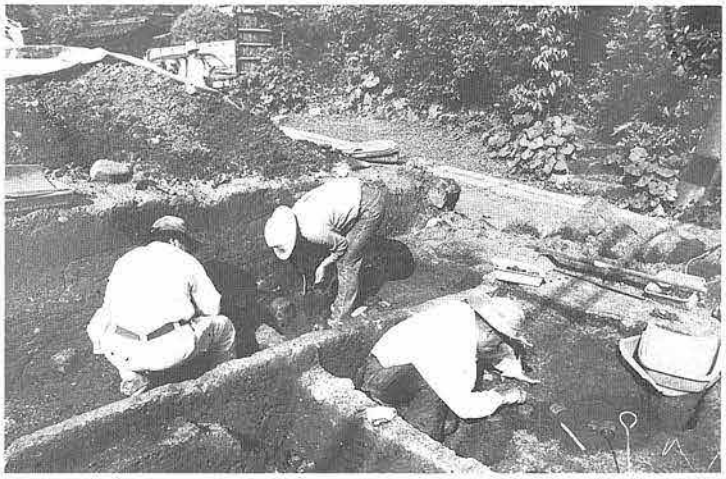
周辺他遺跡の調査事例をみると、「公方屋敷跡　－浄明寺三丁目143番2地点－」[1]では、大規模な地業が行われ、道路と溝により区画された建物跡が検出されるなど最も繁栄した時期とされるII面及びII面下の年代は13世紀後葉から14世紀前葉に位置付けられている。また、今回の調査地点と同様に「六浦路」に近接していたと思われる「公方屋敷跡　－浄明寺三丁目151番1外地点－」[2]では「六浦路」の軸線を意識しているとみられる2棟の建物跡が検出されるなど、遺跡の主体となる3A面、3B面は13世紀後葉から14世紀初頭に位置付けられている。これら上記の2遺跡において盛期となる遺構面の様相は、建物跡・塀等を検出した本調査地点の第3面の様相と類似していると言えよう。しかし、これら2地点を含めた周辺遺跡では、第一章で述べたように13世紀前半から15世紀前半代にかけて存続したものが多いのに対して、本調査地点で検出した4面全ての生活面は13世紀後半代から14世紀初頭に収まることから、検出した遺構の年代幅という点で違いがみられる。

興味深い点は、上記の2調査地点で遺跡が最も繁栄する面の年代観と本調査地点の遺跡全体の年代観がほぼ一致していることと、本調査地点では短期間のうちに地業が繰り返し行われていることである。

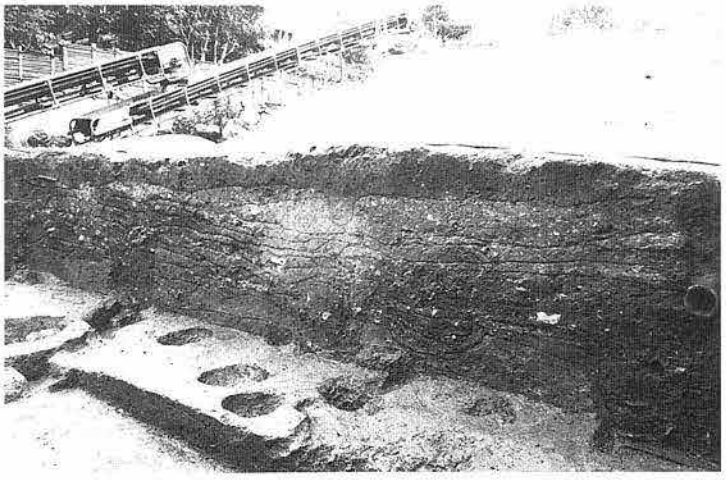
ただ、遺跡名称が示すように浄妙寺あるいは他の寺院や武家勢力が地業を短期間に繰り返し行なったことに関与していたのかどうかを言及するには、発掘調査面積が狭く、調査成果だけでは判断し難い。そして本調査地点の性格を考える上でも調査地点と滑川の間40mに位置するであろう「六浦路」との関わり合いは重要なものとなってくるが、今回の調査では残念ながら「六浦路」に直接関連付けられる遺構は検出されなかった。「六浦路」の正確な位置と盛衰が考古学的に立証できれば、本遺跡地とその周辺遺跡のあり方が今以上に明確になるであろう。

(1)原　廣志・橋場君男　「公方屋敷跡　－浄明寺三丁目143番２地点－」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告』10　鎌倉市教育委員会刊　1994年３月
(2)宮田　真　他　『公方屋敷跡　－浄明寺三丁目151番１外地点－』　公方屋敷跡発掘調査団　1996年３月

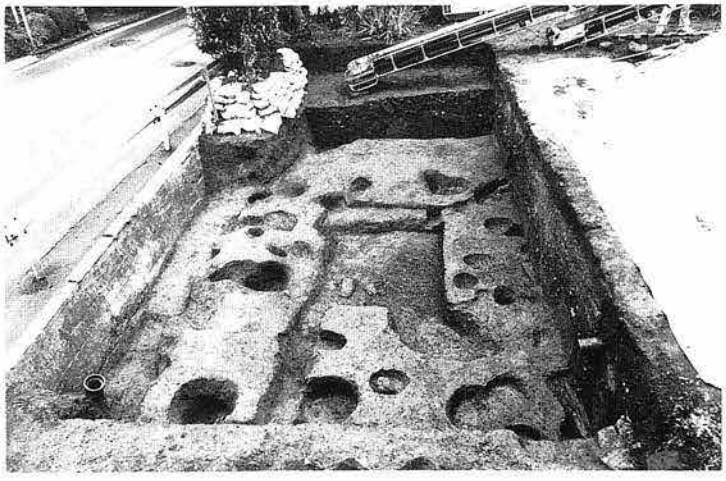
写 真 図 版



◀調査風景

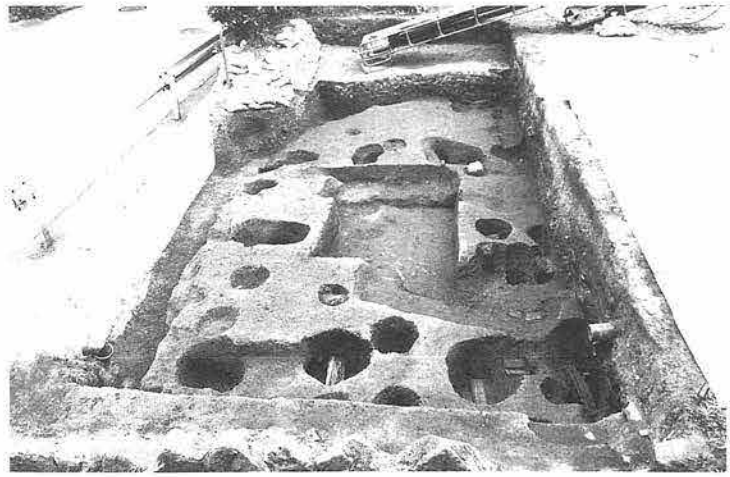


◀調査区北壁土層断面

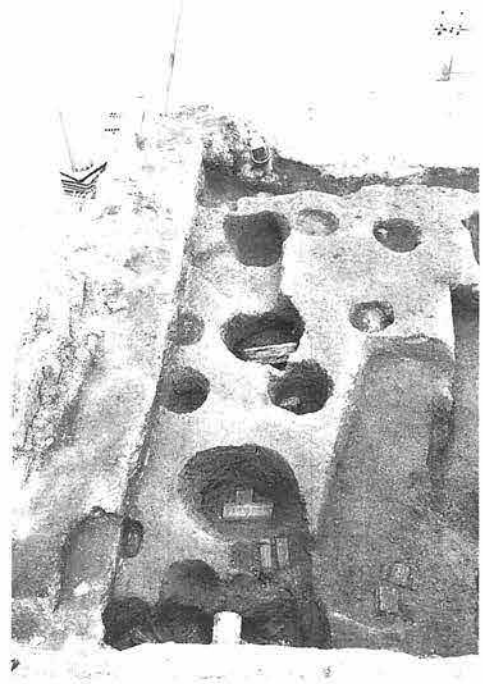


◀第4面全景

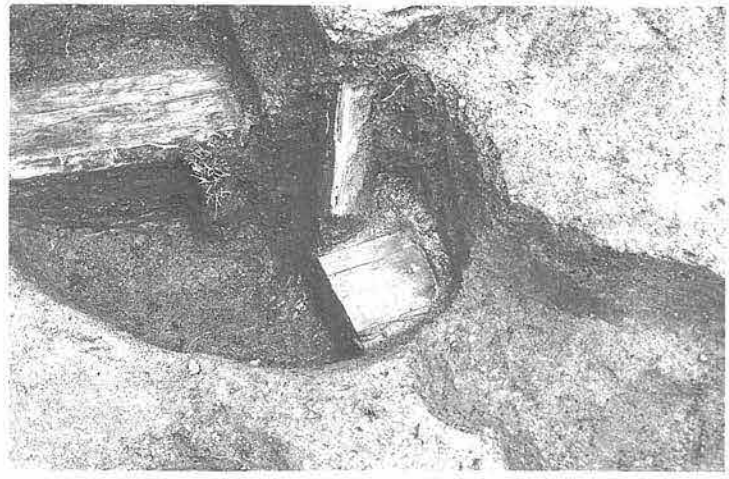
図版 2



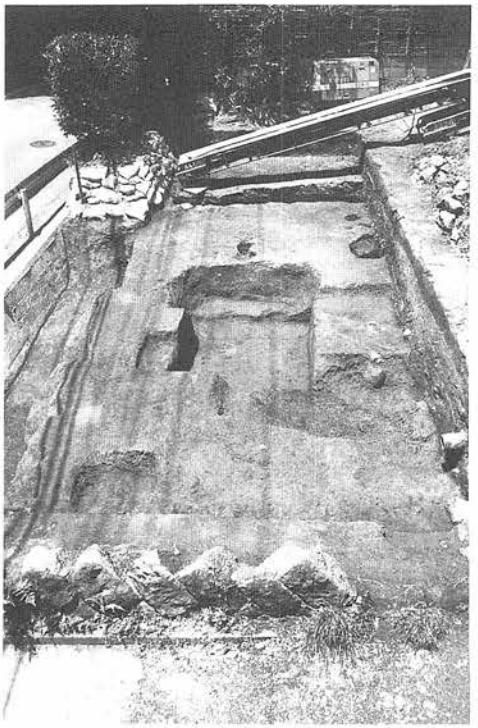
▶第3面全景



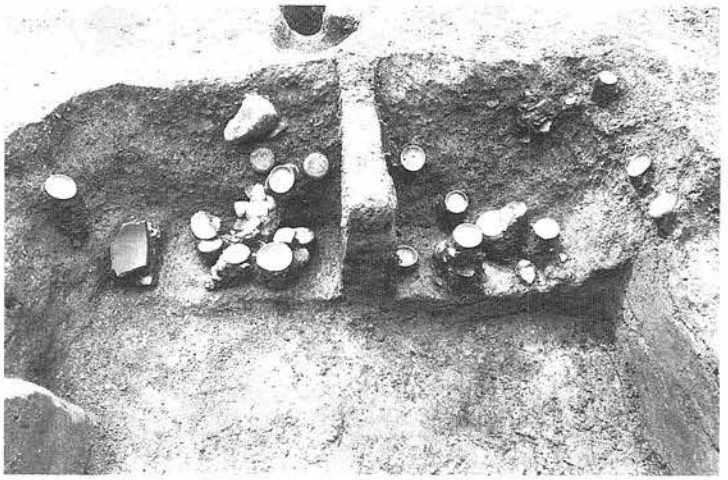
▶第3面ピット20・36他



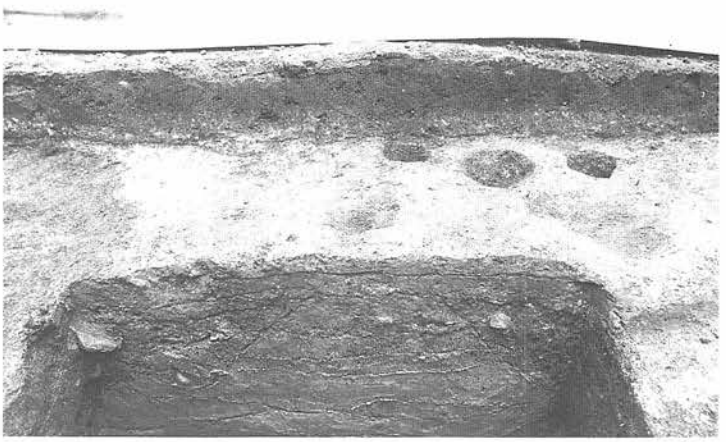
▶ピット31・33礎板



◀第2面全景



◀土坑2



◀第1面版築面

図版 4

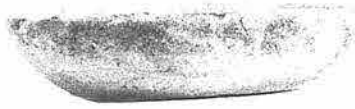
18－38

15－ 1

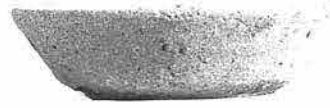
15－ 4

18－25

13－17



9 － 9

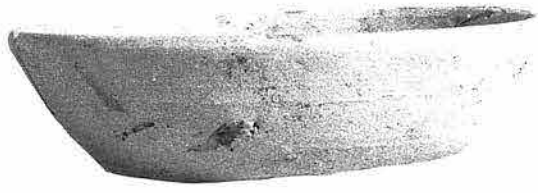


25－ 5

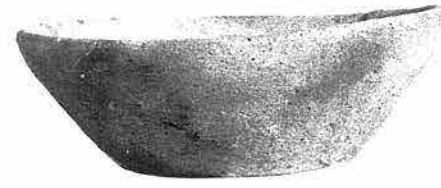
24－ 9

13－28

13－31



20－ 9



18－37

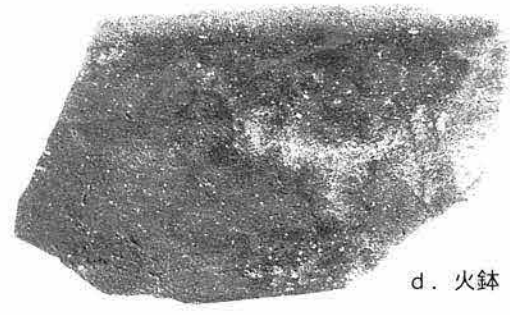
a．かわらけ

b．墨書かわらけ

14－11

25－ 6

c．瓦器碗



d．火鉢

18－40

a．常滑

14－13

b．捏鉢

21－10

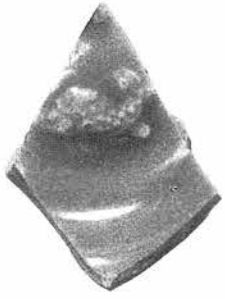
15－20

c．すり常滑

13－32

20－13

d．瀬戸



20－15

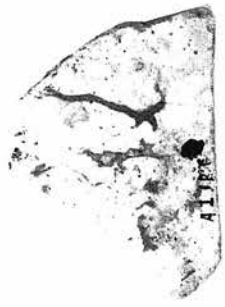
e．磁器

f．砥石

9－20

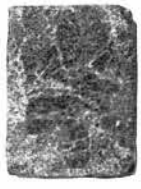
14－16

13－34



20－16

18－15



14－15

g．石製品

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成10年度発掘調査報告
巻次	15
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	松山敬一朗
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1999年3月

ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
じょうみょうじきゅうけいだいいせき 浄妙寺旧境内遺跡	かながわけんかまくらしじょうみょうじ 神奈川県鎌倉市浄明寺三丁目115番2	204	No.408	35° 19′ 03″	139° 34′ 27″	1997.5.12 ～ 1997.6.13	31.08m²	個人住宅駐車場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
浄妙寺旧境内遺跡	都市	鎌倉時代	建物跡　1棟 塀跡　1列 土坑　4基 溝　2条	かわらけ 常滑 瀬戸 砥石 金属製品	

長勝寺遺跡（No.313）

ちょうしょうじ　い　せき

材木座二丁目2168番３地点

例　　言

1．本報は、神奈川県鎌倉市材木座二丁目2168番３地点における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2．発掘は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施し、田代郁夫が担当した。

3．調査期間は平成９年６月16日より同月30日まで行った。調査面積は26.25m²である。

4．発掘調査団の構成は以下の通りである。

調査担当者　田代郁夫。

調　査　員　土屋浩美。

調査補助員　遠藤雅一、岩崎卓治。

　　高野和弘、阿南佐知子。

調査協力者　岸　親男、荻野　勲、杉浦永章（㈳鎌倉市高齢者事業団）。

6．本報告の作成にあたって、遺物の項を宗基富貴子が、遺構を土屋浩美が執筆し、まとめは調査関係者討議のうえ、土屋浩美が責任執筆した。また編集は土屋浩美が行った。なお遺物の実測・トレースおよび挿図版下作成は宗基富貴子、馬瀬直子、小野和代が行い、遺構のトレース・挿図版下の作成は深尾義子が行った。

7．本報告で使用した個別遺構写真は土屋浩美が、遺物写真は馬瀬直子が撮影した。

8．発掘調査及び本報告の作成に際し、下記の方々よりご教示・ご協力を賜った。記して深く感謝いたします（敬称略・順不同）。

上田　薫（神奈川県教育委員会・当時）、桜井準也（慶應義塾大学講師）上本進二（県立七里ガ浜高校）、木村美代治（鎌倉考古学研究所）、佐藤仁彦（逗子市教育委員会）、㈳鎌倉市高齢者事業団。

凡　　例

1．本報告書は４章で構成され、１～３章に事実記載、４章にまとめを掲載した。

2．測量方眼は一辺４ｍとし、南北方向は南から１～２、東西方向は東からＡ～Ｂと呼称した。なお、グリッドの呼称は南東をその基点とする。

3．遺構挿図中のレベルは海抜高である。なお挿図の縮尺は図中のスケールを参照されたい。

4．土層図中のスクリーントーンは以下の凡例に従っている。

岩盤

炭化物

焼土・焼礫

本　文　目　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 44
第２章　調査の経緯 …… 47
　第１節　調査に至る経緯 …… 47
　第２節　調査経過 …… 47
　第３節　堆積土層 …… 49
第３章　発見した遺構と遺物 …… 51
　第１節　Ⅰ面 …… 51
　第２節　Ⅱ面 …… 52
　第３節　Ⅲ面 …… 55
第４章　まとめ …… 57

挿　図　目　次

第１図　遺跡地周辺地図 …… 45
第２図　調査地点位置図 …… 46
第３図　調査区の地理学的位置図 …… 48
第４図　調査区土層模式図 …… 49
第５図　Ⅰ面全測図 …… 51
第６図　Ⅰ面直上出土遺物 …… 51
第７図　Ⅱ面全測図 …… 52
第８図　Ⅱ面上およびⅡ面直上出土遺物 …… 53
第９図　Ⅱ面１号土壙 …… 54
第10図　１号土壙出土遺物 …… 54
第11図　Ⅲ面全測図 …… 55
第12図　Ⅲ面直上出土遺物 …… 56
第13図　表採遺物 …… 56

図　版　目　次

図版１　調査前風景
　調査区土層堆積状況（ａ－ａ’ライン）
　…… 61
図版２　Ⅰ面全景（西から）
　Ⅱ面全景（西から） …… 62
図版３　Ⅱ面遺物出土状況
　Ⅱ面１号土壙遺物出土状況
　Ⅱ面１号土壙完掘状況 …… 63
図版４　Ⅲ面全景（西から）
　Ⅲ面遺物出土状況 …… 64
図版５　出土遺物 …… 65

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

現在の鎌倉市域の地形を見ると、丘陵と沖積低地に大きく分けられる。丘陵部は、新第三紀から第四紀にかけて形成された三浦層群および上総層群をその基盤岩としている。この基盤岩は、浸食作用による深い開析を受けるが、上面には縄文前期の海進による沖積層が厚く堆積する一方、その後の海退に伴って深い埋没谷と沖積低地が前面に形成された。その結果、北東端の太平山から南西方向に向かって展開する丘陵（丹沢・嶺岡隆起帯）と、太平山から南南西に向かい小坪に達する丘陵が、滑川沿いの沖積低地を三方から取り囲む地形が造りだされている。

遺跡地はこうした丘陵が南西に向かって開析された、奥行き600m程の谷戸入口部の標高29mの急斜面域の鎌倉市材木座二丁目2168番３、長勝寺裏の崖中腹部に位置している（第１図－１）。

当該遺跡地は、かつて「名越」と呼ばれた地域に内包される。中世期の「名越」は、現在の材木座と大町を含めた鎌倉東南部から、光明寺や逗子にかけての広大な地域を漠然と称していたようである。材木座の弁が谷に推定される「新善光寺」は、「名越新善光寺」とされている他（註１）、現在の逗子市側にも東名越、西名越の地名が残っている。名越については『吾妻鏡』にも多くの記載があり、北条政子の御産所で濱御所とも呼ばれた「名越御舘」（建久三年七月十八日条）をはじめ、有力御家人の屋敷や（註２）、また名越山王堂,慈恩寺,長善寺等の有力寺院も存在していた。

遺跡が位置する谷戸中央部には、大町大路から鎌倉七切り通しの一つである名越坂の切り通しを経て、三浦郡へと通ずる中世の幹線道路が縦断している。律令制初期の古東海道は、鎌倉から三浦半島の走水に出て、東京湾を横断し、房総半島に抜けるが、鎌倉の由比ヶ浜から逗子に抜ける部分については、名越坂を抜けるルートが古東海道の一端であったとする説（註３）の他に、由比ヶ浜から材木座光明寺背後の細道に出て、逗子の小坪坂に抜けるルートがそれにあたるとする説がある（註４）。『逗子市史』によれば、名越坂は後世になると、鎌倉と逗子とを結ぶ古東海道の道筋以外の要路として整備された、あるいは古東海道の脇往還路として名越坂が経由、利用されたことも十分考えられるとしている（註５）。いずれにしても鎌倉期の名越は、鎌倉への出入口の一つとして、東の極楽寺とともに重要な交通路であった。また前述のように北条一門が鎌倉時代初期から名越にも居を構えており、軍事防衛上の要衝でもあったことが窺えよう。

次に、遺跡地の名称でもある長勝寺について『鎌倉市史』は、「石井山長勝寺」と号し、日蓮宗で開山は日蓮聖人であると述べている（註６）。その創建について、寺伝では石井長勝が日蓮に帰依して長勝寺を造るといい、また京都に移った本国寺の旧地に貞和元年（1345）日静が寺を再興し、石井山長勝寺と名づけたともいわれている。もっとも本国寺の旧地については諸説あり、不明な点が多い。

長勝寺の境内は1976年に調査が行われ、15世紀以降の土壙墓群が確認されている（第１図－２）（註７）。このほか遺跡地周辺の調査では、本遺跡地南東200mの崖面でやぐらが確認され、1985年に調査が行われている（第１図－３）（註８）。

註

（１）貫　達人　1959『鎌倉市史　社寺編』鎌倉市教育委員会。

（２）『吾妻鏡』によれば、名越には北条義時・名越時章の「山庄」（建永元年二月四日条,宝治元年一二月五日条）、問註所入道（三善善信）の「家」（承元二年正月一六日条）、越後四郎時幸の「宅」があり（寛喜三年正月一五日条）、「名越御舘」は時政－義時の後、「名越氏」も称した朝時－時章－公時へと相伝したことが知られている（弘長三年十二月廿八日条）。

『新訂増補　国史大系吾妻鏡』　吉川弘文館　1988。

（3）高柳光寿　1959『鎌倉市史　総説編』鎌倉市教育委員会。

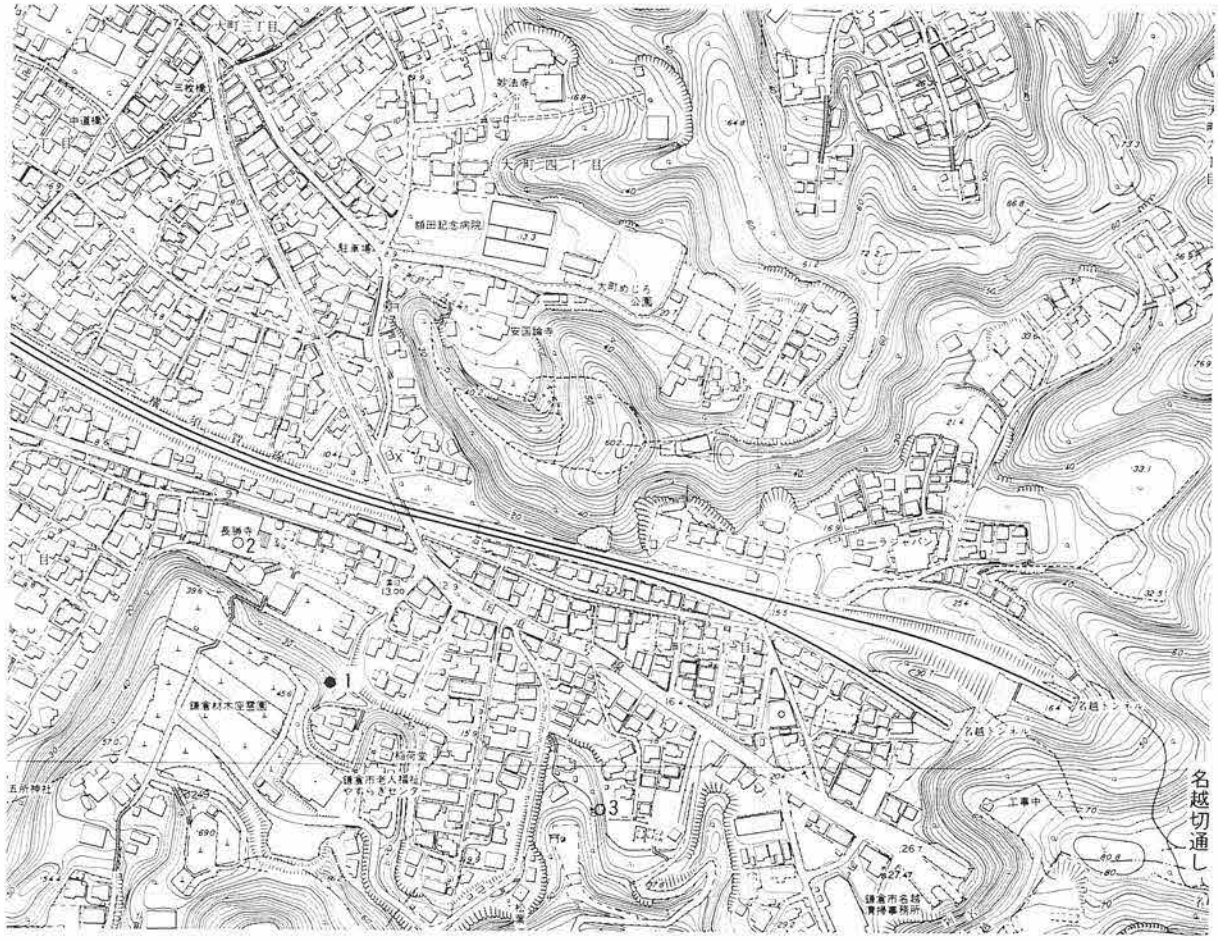
（4）三浦勝男　1997『逗子市史　通史篇』16～20頁　逗子市教育委員会。
現在も古道が残る小坪坂は「小坪合戦の故地」と思われ、それを裏付ける、正中二年（1325）の銘を持つ地蔵尊が光明寺裏山から小坪坂に掛かる入口に安置されていたという。

（5）三浦勝男　前掲書。

（6）高柳光寿　前掲書。

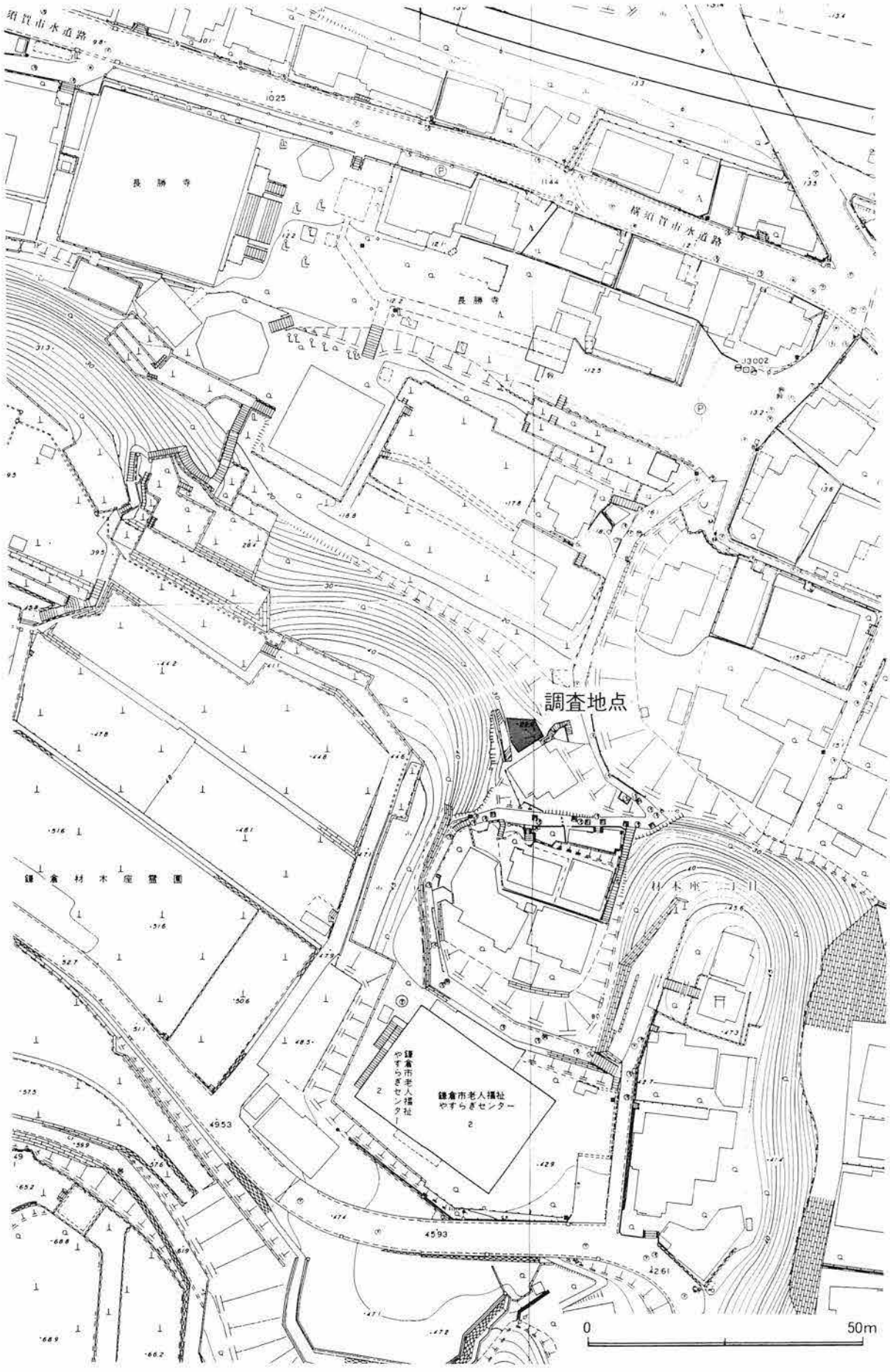
（7）松尾宣方他　1978『長勝寺遺跡－中世鎌倉の民衆生活を探る』第1章　かまくら春秋社。

（8）田代郁夫　1985『長勝寺遺跡（やぐら）発掘調査報告書－昭和59年度鎌倉市材木座地区内急傾斜地崩壊対策事業に伴う調査』長勝寺（やぐら）発掘調査団。



1．調査地点
2．長勝寺遺跡
3．長勝寺遺跡（やぐら）

第1図　遺跡地周辺地図（1／5000）



第２図　調査地点位置図

第２章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

平成９年４月、鎌倉市材木座二丁目2168番３地点における個人住宅建設申請が提出された。建築計画は基礎の一部を杭構造とするものであったため、鎌倉市教育委員会が試掘調査を実施したところ、15世紀から16世紀代の遺物を含む遺構が内包されていることが確認された。この結果をふまえて、事業者と鎌倉市教育委員会文化財課との協議の結果、建築工事に先立って、埋蔵文化財の発掘調査を行うこととなった。調査については、建設工事に伴う基礎掘削深度が調査区西壁から370cmのライン（第11図ａ－ａ’ライン）以西は現地表下70cmであるため、その部分の深度70cm以下については現状のまま後世の調査に委ねた。

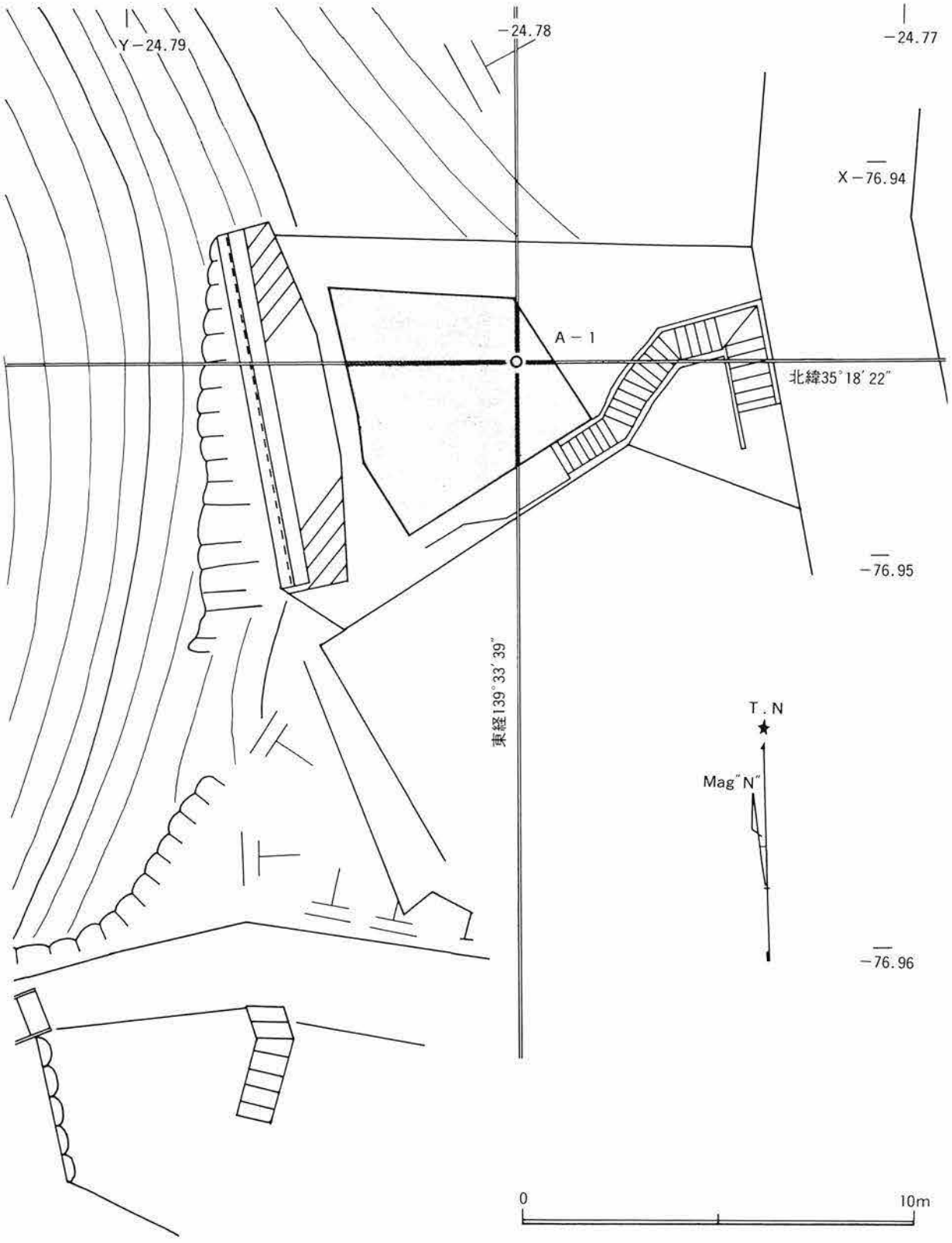
第２節　調査経過（第２・３図）

平成９年６月16日より発掘調査を開始した。事前の試掘調査結果から、表土は10cm程の薄さであることが判明したため、重機は使用せず人力による除去作業を行った。その結果、調査区西側約半分は既に岩盤面まで削平されていたが、それ以外の部分では暗褐色粘質土で構成される面が確認されたため、これをＩ面とし、調査を開始した。

調査はII面、III面と順次下層へと進められたが、III面では調査深度制限にかかり、また周辺安全対策の関係上、調査区東壁１ｍの余堀を残したため、2.8ｍ×1.5ｍの僅かな範内での調査にとどまった。６月30日にすべての現地調査を終了した。全調査面積は26.25m²であった。

調査日誌抄

６月16日　機材搬入。調査区設定、表土掘削開始。Ｉ面検出作業開始。
17日　遺構確認と調査、Ｉ面全測図作成。Ｉ面全景写真撮影。
19日　II面検出作業開始。
24日　II面精査の後、遺構確認と調査を行う。
26日　II面全景写真撮影、全測図作成。
27日　III面検出作業開始。遺構確認と調査を行う。
30日　III面全景写真撮影、全測図作成。機材撤収。



基準杭名	国土座標値（AREA 9）	緯　度	経　度
A － 1	X＝－76945.000 Y＝－24780.000	＋35°18′22″	＋139°33′39″

第3図　調査区の地理学的位置図

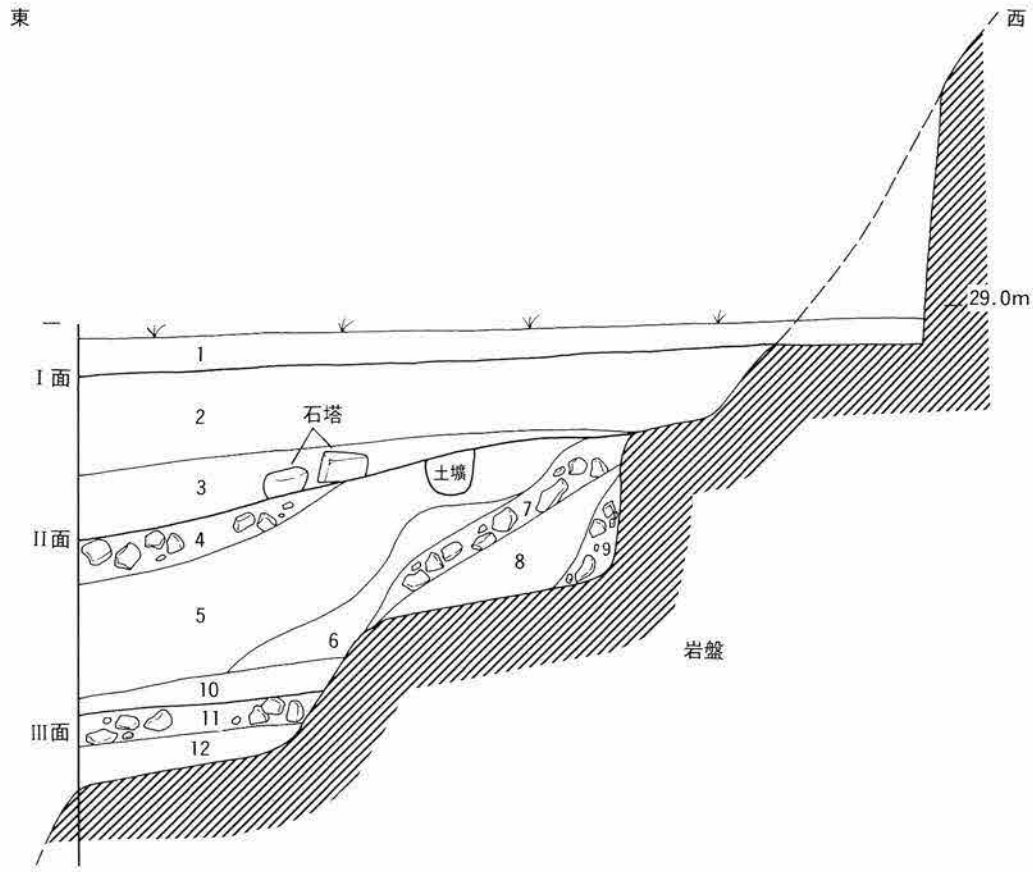
第３節　堆積土層（第４図）

遺跡地は丘陵の崖中腹部に位置している。逗子層を基盤岩とし、表層には崖錐性堆積物や表層風化土等の二次堆積物が認められる。調査区の堆積土層は、断面観察の結果、以下の状況であることが判明した。

まず中世期に岩盤上に暗褐色粘質土（第12層）を盛った後、直径10cm程の破砕シルト岩にて版築を行い（第11層）、Ⅲ面を造成している。Ⅲ面直上には炭化物が認められた（第10層）。

その後、崖際では崩壊堆積物が認められる（第７～９層）。これらの層は概ね自然堆積によるものと考えられるが、層中に炭化物を含有する割合が多い。Ⅱ面はシルト岩塊（１～10cm）を多量に含む暗褐色粘質土を盛って造成されている（第５層）が、比較的地盤が脆弱な東側の崖際ではシルト岩塊（15～20cm）による版築を行っている（第４層）。Ⅰ面は暗褐色粘質土（第２層）を盛って構築されていたと思われるが、攪乱が多い。

全体的に見ると、谷戸入口部の崖中腹の急斜面の岩盤を中世以降削平し、その後、造成を繰り返したようである。この岩盤については西側張り出し部が土塁状にカットされていた可能性も考えられる。



第４図　調査区土層模式図

土層注記

1．表土。コンクリート、盛り土を含む。

2．Ⅰ面構成土。暗褐色粘質土。シルト岩片（1～3cm）を少量含む。15世紀後半～16世紀代のかわらけを混じえる。上面は現代の盛り土により削平される。

3．暗褐色粘質土。シルト岩片（5～10cm）、炭化物を多く含み、火葬骨、石塔、かわらけを混じえる。

4．Ⅱ面構成土。明褐色粘質土。破砕シルト岩による版築層。かわらけ片を混じえる。

5．Ⅱ面構成土。暗褐色粘質土。シルト岩塊（1～10cm）を多量に含む。炭化物を部分的に密に混じえる。

6．暗褐色粘質土。シルト岩塊（1～15cm）、炭化物を少量混じえる。

7．明褐色粘質土。シルト岩塊（10～20cm）を大量に含む。崩壊堆積物か。炭化物を多く混じえる。

8．暗褐色粘質土。シルト岩塊（3～4cm）を僅かに含む。炭化物を多く混じえる。

9．明褐色粘質土。シルト岩塊（5～15cm）を大量に含む。崩壊堆積物か。炭化物を少量混じえる。

10．黒褐色粘質土。炭化物、焼土、かわらけ片を多量に混じえる。

11．Ⅲ面構成土。黒褐色粘質土。破砕シルト岩（10cm）による版築層。かわらけ片を多く混じえる。

12．暗褐色粘質土。シルト岩片（1cm）を多量に含む。

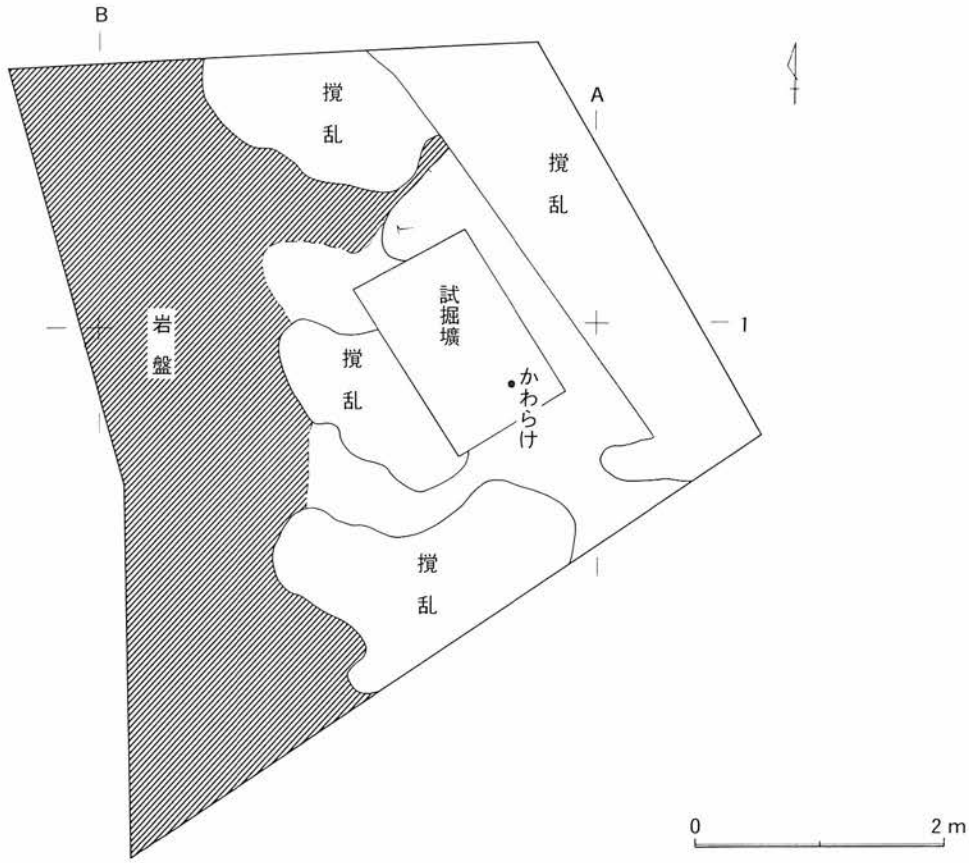
第３章　発見した遺構と遺物

前述のように本調査区の西側半分は既に削平されていたが、東側部分で中世期に帰属する計３枚の生活面が確認された。以下にその詳細を述べることとする。

第１節　Ⅰ面（第５図）

鎌倉市教育委員会によって事前に行われた試掘調査では、この面において遺構が確認されている。この結果に基づき、現地表面下に10cmほど堆積する表土を剝いだところ、暗褐色粘質土が確認された。これをⅠ面とし、調査を行うこととした。

その結果、調査区の西側14.2m²はすでに岩盤まで近年に削平されており、残存する生活面の大半も近年のごみ穴や水道管埋設などで攪乱されているため、生活面範囲内に遺構は確認されなかった。ただし事前の試掘調査では、この面上より掘り込まれた、暗褐色粘質土を主体とする落ち込みが確認されており、かわらけが出土している。



第５図　Ⅰ面全測図

Ⅰ面直上出土遺物（第６図）

Ⅰ面では前述の通り、調査地のほとんどを後代の

第６図　Ⅰ面直上出土遺物

攪乱により失われているため、出土した遺物はごくわずかであった。また、以下に図示したかわらけは、いずれもＩ面直上出土遺物としているが、試掘壙のＩ面に当たる土層中より出土したもので、Ｉ面除去作業時に混入したものと思われる。

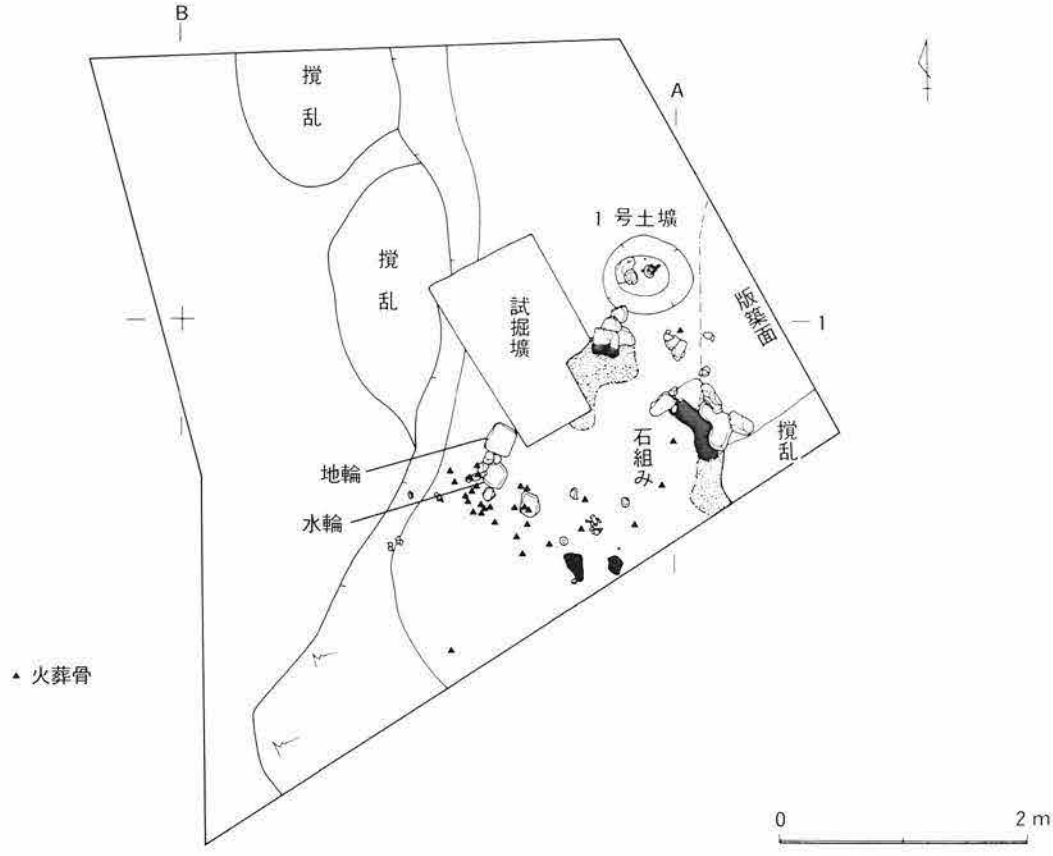
第６図―１は小型かわらけ。胎土は黒色微砂、泥岩粒を多く混じえる橙色弱粉質土。体部外面には強い稜を持たず、器壁は直立気味に立ち上がる。口径6.0cm、底径4.5cm、器高1.75cmを測る。２は中型かわらけ。胎土は黒色微砂、泥岩粒を多く混じえる橙色弱粉質土。体部外面に強い稜を持ち、内面中位から大きく外反する。口径9.5cm、底径cm5.7cm、器高2.7cmを測る。

図示できなかった遺物にはプラスチックの釘、糸切りかわらけ片、常滑の甕胴部片がある。

第２節　II面（第７図）

Ｉ面の下に厚さ40～60cmほど堆積する暗褐色粘質土を除去したところ、焼土、炭化物、火葬骨の密集する良好な生活面が確認された。これをII面とし、調査を行った。II面は崖際ラインに沿った東側に暗褐色粘質土を盛って調査区内に約10.5m²の平場を設けている。この平場は東に向かってなだらかに傾斜し、東崖際部分には破砕シルト岩による版築が施されていた。粗く砕いたシルト岩を緻密に版築した面は、調査区の東際で22cmと最も厚く、西よりほど弱くなっている。このことから、この版築面は脆弱な地盤の補強のために施されたものと考えられる。

平場からは石組み遺構１基、土壙１基が確認され、各遺構の西側には火葬骨、かわらけ、炭化物が密集して確認された。これらの遺物は調査区南壁断面にも確認されていることから、遺物集中範囲は調査区外南東方向に広がっている可能性が高い。



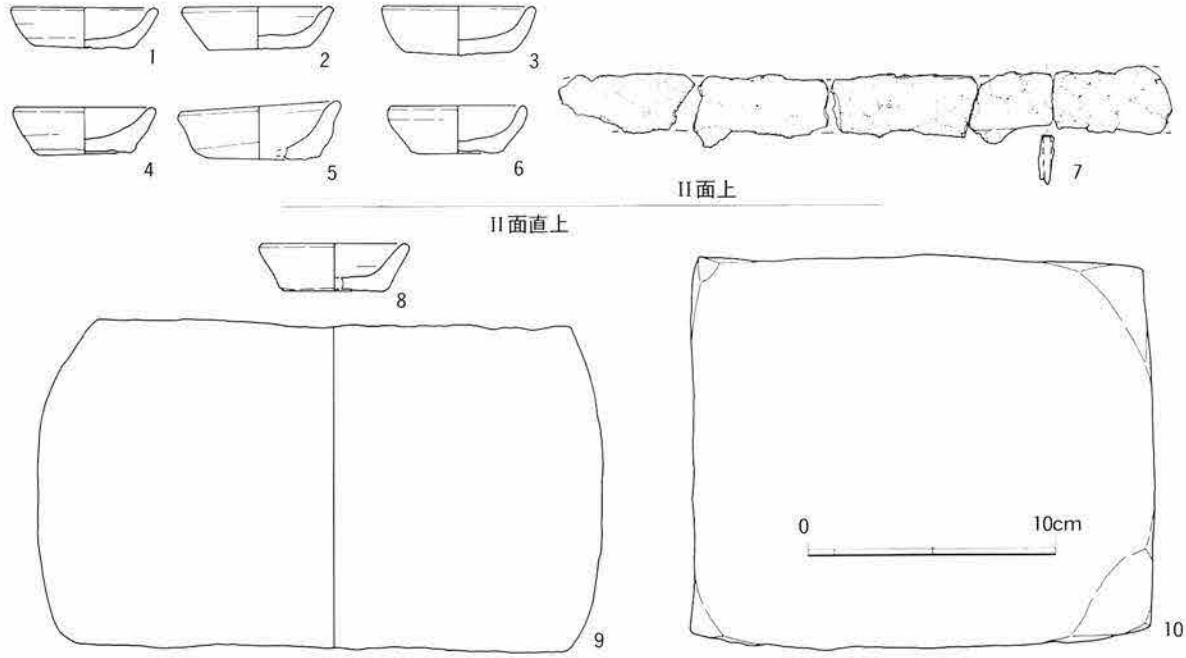
第７図　II面全測図

II面上およびII面直上出土遺物（第８図）

第８図―１～７はII面精査中に出土した遺物である。

１～６は小型かわらけ。いずれも胎土は黒色微砂を多く混じえる橙色弱粉質土。１～５は体部外面に強い稜を持たず、器壁は内彎気味に立ち上がるが、内面中位から上位にかけて大きく外反している。一方、６の口径は１～５と比べてやや小さく、器壁は薄く、側面観碗型を呈しているが、胎土は１～６と変わらないことから同時期の製品と解釈できる。法量は１が口径5.9cm、底径4.6cm、器高1.8cm。２は口径5.8cm、底径4.05cm、器高1.7cm。３は口径5.9cm、底径4.2cm、器高1.95cm。４は口径5.5cm、底径3.7cm、器高1.9cm。５は口径6.1cm、底径4.5cm、器高2.2cm。６は口径5.3cm、底径3.8cm、器高1.9cmを測る。７は刀子。遺存長24.8cmを測る。

第８図―８～10はII面直上より出土した遺物である。８は小型かわらけ。胎土は黒色微砂と泥岩粒を多く混じえる橙色弱粉質土。体部外面に強い稜を持たず、器壁は直立気味に立ち上がる。口径5.7cm、底径4.0cm、器高1.9cmを測る。９は粗粒凝灰岩製の水輪。梵字は彫られていない。上・底面ともに抉りは見られない。最大径22.9cm、上面径19.3cm、底面19.9cm、高さ12.9cmを測る。10は粗粒凝灰岩製の地輪。梵字は彫られていない。上・底面ともに抉りは見られない。上面は17.8×18.0cm、底面は18.6～18.8cm、高さは15.2～15.8cmを測る。



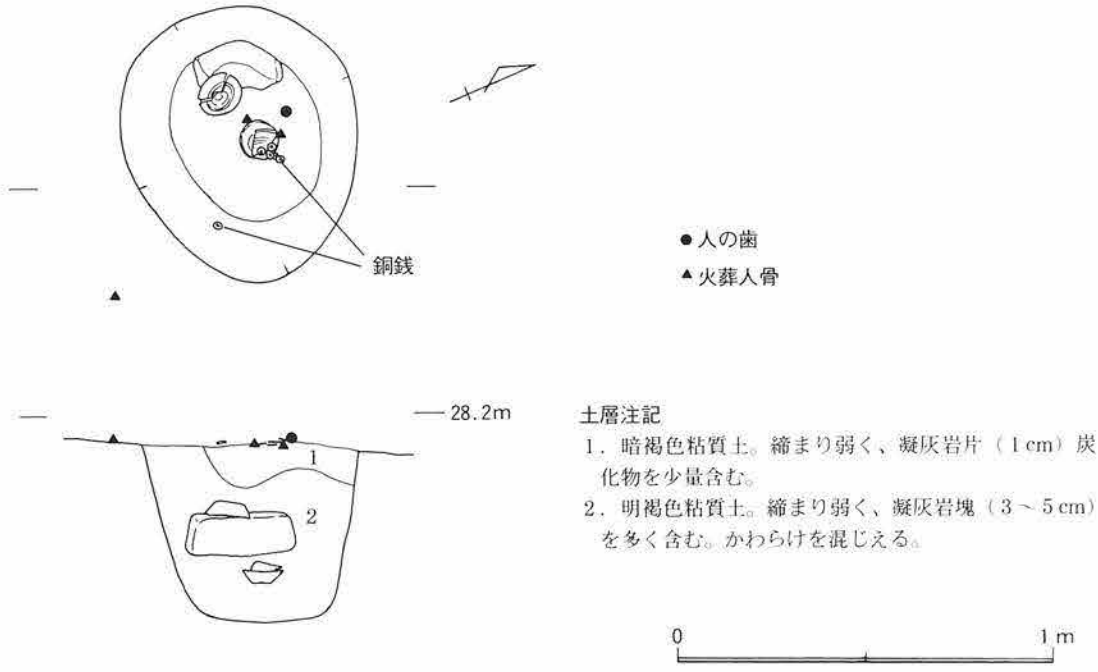
第８図　II面上およびII面直上出土遺物

石組み遺構（第７図）

調査区Ａ－１グリッド付近に発見された。一辺10～20cm程の方形の粗粒凝灰岩製の切石がコの字状に配置され、石の内側は高熱を受けて赤褐色に変色していた。石組みの内部には焼土が堆積しており、その南東外周部には炭化物が密集して確認された。また本址西側にはかわらけ、火葬骨が散在しており、それらに混じって地輪、水輪、空風輪等の石塔類、被熱したり煤けた粗粒凝灰岩製の切石が転がった状態で確認された。

1号土壙（第9図）

A－1グリッドのII面直上に発見された銅銭8枚と火葬骨、成人の大臼歯3本を取り上げたところ、その直下に土壙1基が確認された。土壙の平面形は楕円形、断面は逆台形を呈し、長径70cm、短径62cm、確認面よりの深さ48cmを測る。土壙の内面、底面共に熱を受けた痕跡は認められなかった。覆土は暗褐色粘質土を主体とし、底面から上方20cm付近よりシルト岩製の切石が出土し、切石上部に伏せた状態のかわらけ1点が、また切石下部からもかわらけ2点が出土した。土壙上面で出土した成人の大臼歯3本いずれにも磨滅が殆ど見られなかった。

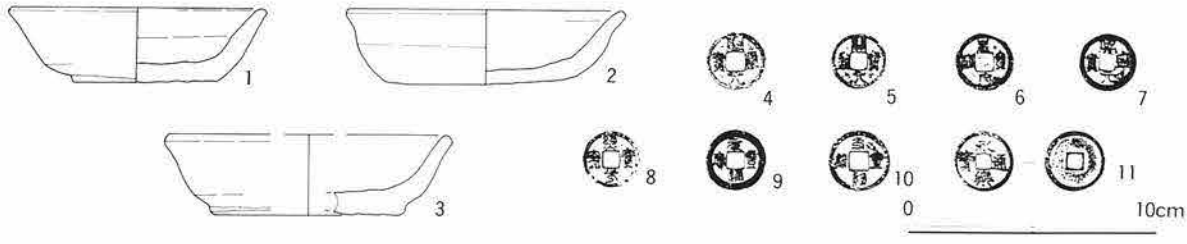


第9図　II面1号土壙

1号土壙出土遺物（第10図）

第10図―1～3のかわらけは土壙覆土中から出土した。1と3は合わせ口状になっていたもの、2は切石上部から出土した。胎土はいずれも黒色微砂と泥岩粒を多く混じえる橙色弱粉質土。器壁は体部内面中位付近より大きく外反する。法量は1が口径10.0cm、底径5.7cm、器高3.05cm。2は口径10.9cm、底径7.7cm、器高3.05cm。3は口径11.1cm、底径7.4cm、器高3.25cmを測る。

4～11は1号土壙上面で火葬骨とともに出土した銭。4～5は「開元通寶」、6は「皇宋通寶」、7～8は「熙寧元寶」、9は「元豊通寶」、10は「元符通寶」、11は「永楽通寶」。11の背面は「月」。また、7の「熙寧元寶」と10の「元符通寶」には鋳込み不足による穴があいている。



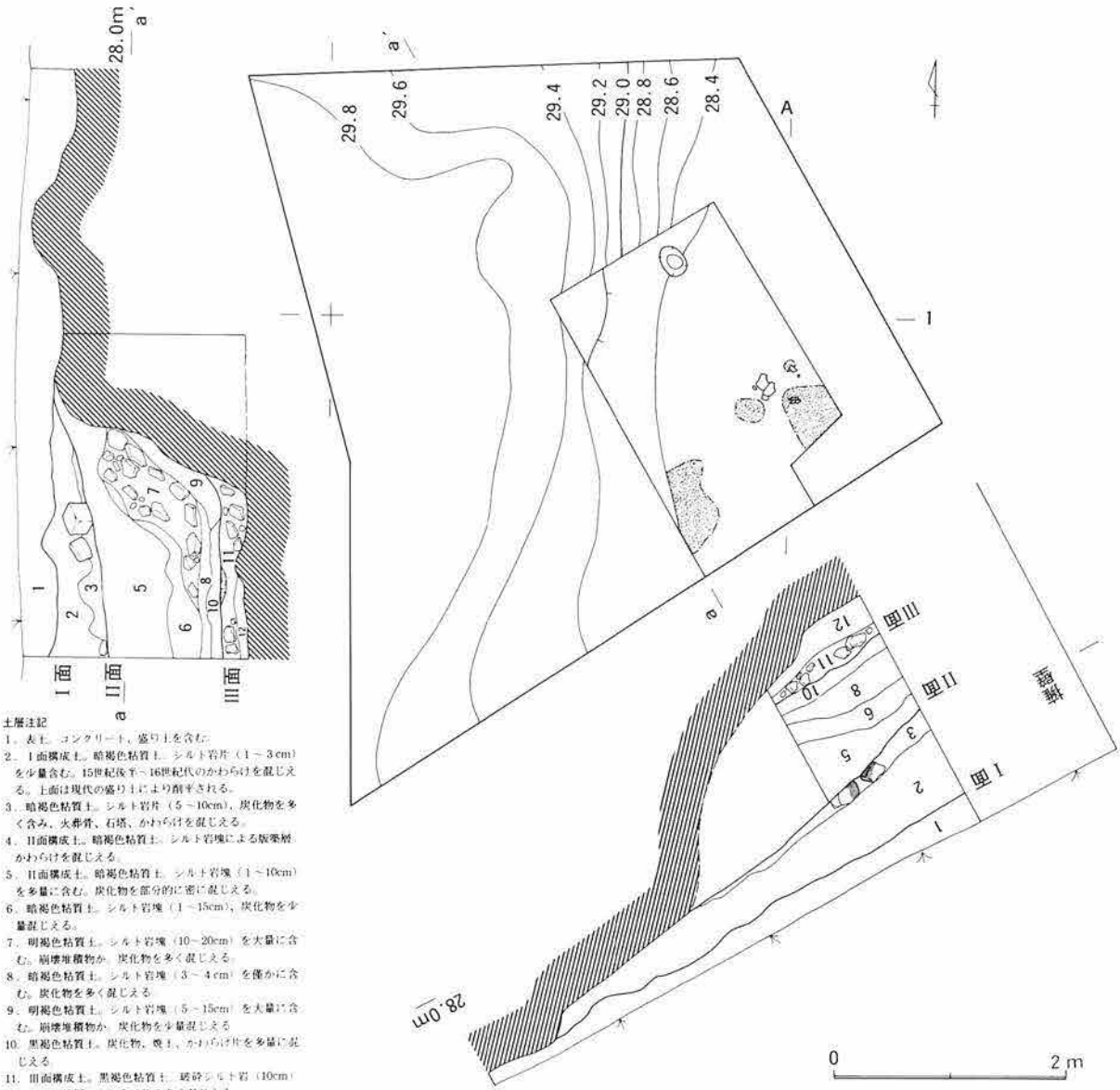
第10図　1号土壙出土遺物

第３節　Ⅲ面（第11図）

Ⅲ面は調査深度制限のため、ａ－ａ′ライン以東の調査となり、しかもその東際は崖面に接しているため、余堀を約１ｍほど残した2.8ｍ×1.5ｍの僅かな範囲内での確認にとどった。

Ⅱ面の下に100cmほど堆積する崖錐性堆積物、炭化物を多く含む暗褐色粘質土を除去したところ、シルト岩を版築した良好な面が確認された。これをⅢ面とし、調査を行った。

堆積土の観察によれば、Ⅲ面を造成するにあたって、まず崖際ラインに沿って岩盤を人為的に削平したと考えられ、その上に暗褐色粘質土（第12層）を盛った後、直径10cm程のシルト岩塊と黒褐色粘質土（第11層）で版築を行っている。この版築面は、Ⅱ面に比べると比較的緻密で堅く締まっており、調査区全体に施されている。この版築面直上では炭化物が部分的に密集しており、この炭化物の周囲には手焙り、かわらけなどの遺物が散在していた。



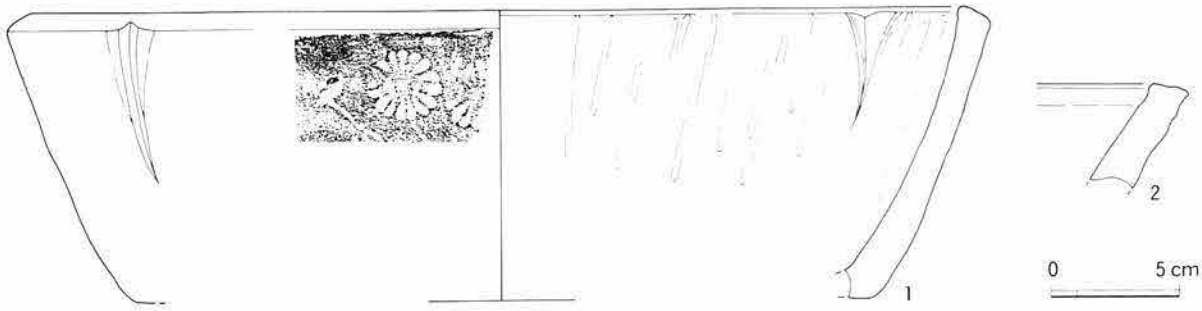
土層注記
1．表土。コンクリート、盛り土を含む。
2．Ⅰ面構成土。暗褐色粘質土。シルト岩片（1～3cm）を少量含む。15世紀後半～16世紀代のかわらけを混じえる。上面は現代の盛り土により削平される。
3．暗褐色粘質土。シルト岩片（5～10cm）、炭化物を多く含み、火葬骨、石塔、かわらけを混じえる。
4．Ⅱ面構成土。暗褐色粘質土。シルト岩塊による版築層。かわらけを混じえる。
5．Ⅱ面構成土。暗褐色粘質土。シルト岩塊（1～10cm）を多量に含む。炭化物を部分的に密に混じえる。
6．暗褐色粘質土。シルト岩塊（1～15cm）、炭化物を少量混じえる。
7．明褐色粘質土。シルト岩塊（10～20cm）を大量に含む。崩壊堆積物か。炭化物を多く混じえる。
8．暗褐色粘質土。シルト岩塊（3～4cm）を僅かに含む。炭化物を多く混じえる。
9．明褐色粘質土。シルト岩塊（5～15cm）を大量に含む。崩壊堆積物か。炭化物を少量混じえる。
10．黒褐色粘質土。炭化物、焼土、かわらけ片を多量に混じえる。
11．Ⅲ面構成土。黒褐色粘質土。破砕シルト岩（10cm）による版築層。かわらけ片を多く混じえる。
12．暗褐色粘質土。シルト岩片（1cm）を多量に含む。

第11図　Ⅲ面全測図

III面直上出土遺物（第12図）

第12図―１は瓦質輪花型火鉢。胎土は黒色微砂を多く混じえる淡紅味灰～白灰色粉質土。胎芯は灰色を呈する。内外面ともにタテ方向のミガキが行われていたと思われるが、外面は被熱を受け表面がハゼているためミガキの痕跡は全く残っていない。体部外面上位に16弁の菊花文スタンプが押印される。口径40.0cm、底径約30.0cm、遺存高11.7cmを測る。

２は常滑鉢の口縁部片。胎土は石英小～微粒と黒色微粒を混じえる茶～暗橙色土。口縁部周辺はナデ調整、体部外面上位から下方はヘラ状工具による調整が行われる。使用による磨滅は不明である。



第12図　III面直上出土遺物

表採遺物（第13図）

ここで表採とした遺物は、採集遺物の他に表土中、攪乱中から出土した遺物を含む。

第13図　表採遺物

第13図は小型かわらけ。胎土はいずれも黒色微砂と泥岩粒を多く混じえる橙色弱粉質土。体部外面に強い稜を持たず、器壁は直立気味に立ち上がり、口唇部は外反する。１は口径5.8cm、底径4.65cm、器高1.5cm、２は口径5.7cm、底径4.75cm、器高1.65cmを測る。

第4章　まとめ

掘削深度に制限があり、全掘するには至らなかったが、今回の調査では岩盤上に造成された計3枚の生活面を確認した。

Ⅰ面は表土層直下で確認されたが、攪乱が多く、かわらけ2点の他に僅かな遺物が出土したにとどまった。

Ⅱ面では石組み遺構と土壙が検出された。内側の被熱した切石がコの字状に配列された石組み遺構の内部には焼土が堆積し、その周囲には炭化物、火葬骨、かわらけ、粗粒凝灰岩製の切石、石塔が散乱する。これと類似する遺構は、鎌倉市内の永福寺跡－二階堂杉ヶ谷20番1外地点において、山際を造成した平場に確認された「荼毘遺構」18基を挙げられる（註1）。この「荼毘遺構」は長辺約1m、短辺約70cm、深さ約15cmの土壙の底面と側に泥岩を配した施設である。この土壙の内面と泥岩は被熱し、内部に大量の灰、炭化物の他に火葬した人骨の一部が遺存している。このような「荼毘遺構」と比して、今回検出された石組みは掘り込みによらずに、切石を面上に組み上げることで、「荼毘遺構」の土壙の代わりとしたものと考えられ、石組みはいわゆる火葬址である可能性が高い。なお、本遺跡の石組み遺構西側に近接して出土した五輪塔はその出土状況から、西側の岩盤上から転落したものであろうか。火葬址と五輪塔との関連が注意されよう。石組みの北側に近接して検出された1号土壙については確認面の覆土上面で銭8枚と火葬骨、成人の大臼歯3本が出土している。また土壙内部からは凝灰岩製の切石が出土し、その上部にかわらけ1点が伏せた状態で、また切石の更に下部からは合わせ口状になったかわらけが出土している。覆土上面の遺物と土壙との関係は不明とせざるを得ず、土壙の性格についても判断しがたい。

Ⅱ面上の散乱する火葬骨と共に出土したかわらけはすべて小型品であった。これらは、おおむね、器壁は内彎気味に立ち上がり、口唇部付近で外反している。また、1号土壙覆土中から出土したかわらけはすべて大型で、前述の小型かわらけと同様の器形であった。これらかわらけにみられる成形上の諸特徴は15世紀第2四半期以降に認められるものである。

Ⅲ面は、調査範囲が狭く、版築面上に炭化物が密集している状況を確認するにとどまった。

さて、本遺跡の東北118mに位置する長勝寺境内において行われた1976年の調査では、1基の火葬墓を除いてすべて土葬墓であった20基以上の土壙墓群が検出されている（註2）。火葬址の発見された本遺跡に近接した地域において、ほぼ同時代に土葬を中心とした墓域が展開するこうした状況は、長勝寺土壙墓群中の火葬墓の意味、土葬か火葬かの選択が何故おこなわれたかといった問題を提起する貴重な遺跡といえよう。

註

（1）福田誠他　1994「永福寺跡－二階堂字杉ヶ谷520番1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告　10』鎌倉市教育委員会刊。

（2）松尾宣方他　1978『長勝寺遺跡－中世鎌倉の民衆生活を探る－』かまくら春秋社。

引用・参考文献

田代郁夫　1997「鎌倉における寺院境内墓の発生－長勝寺遺跡検出の土壙墓群について－」『湘南考古学同好会々報』67　湘南考古学同好会。

赤星直忠　1979『逗子市名越遺跡－中世の切通・城郭・葬送遺跡－』第5章　名越切通と防衛遺構　逗子市教育委員会。

田代郁夫　1985『長勝寺遺跡（やぐら）発掘調査報告書－昭和59年度鎌倉市材木座地区内急傾斜地崩壊対策事業に伴う調査』長勝寺（やぐら）発掘調査団。
鎌倉市教育委員会編　1986『鎌倉市文化財総合目録　地質篇』鎌倉市教育委員会刊。
原　廣志他　1988『鎌倉市新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書－中世墓の発掘調査－』新善光寺跡内やぐら発掘調査団。

写　真　図　版

▲調査前風景

▼調査区土層堆積状況（a－a′ライン）

図版 2

▲Ⅰ面全景（西から）

▼Ⅱ面全景（西から）

▲II面遺物出土状況

▲II面 1 号土壙遺物出土状況

▲II面 1 号土壙完掘状況

図版 4

▲Ⅲ面全景（西から）

▼Ⅲ面遺物出土状況

図 8 － 4

図 8 － 2

図13－ 1

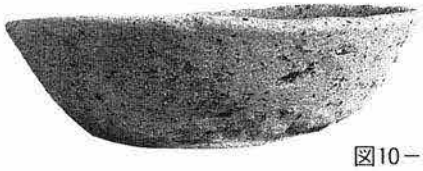


図10－ 1

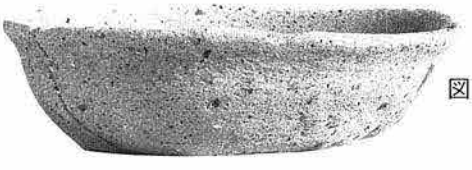


図10－ 2

a．かわらけ

図12－ 1

b．火鉢

図 8 － 7

c．刃子

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成10年度発掘調査報告
巻次	15
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	土屋浩美
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1999年3月

ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ちょうしょうじいせき 長勝寺遺跡	かながわけんかまくらしざいもくざ 神奈川県鎌倉市材木座二丁目2168番3	204	№313	35° 18′ 22″	139° 33′ 39″	1997.6.16 ～ 1997.6.30	26.25m²	個人専用住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長勝寺遺跡	火葬址	南北朝時代	石組み 土壙	かわらけ 五輪塔 火葬骨	岩盤上に造成された生活面に火葬址が確認された。

おおくらばく ふきた いせき
大倉幕府北遺跡（No.193）

西御門二丁目803番17地点

例　　言

1．本書は鎌倉市西御門二丁目803番17地点における緊急発掘調査の報告書である。
2．発掘調査は、個人専用住宅に係るカーポート造成範囲35.58m²を対象とし、平成９年７月１日～４日にかけて鎌倉市教育委員会によって実施された。
3．報告書作成にかかる資料整理・執筆・編集は担当者の指示を受け熊谷満が行った。
4．調査体制は以下の通りである。
　調査主体：鎌倉市教育委員会
　担 当 者：齋木秀雄
　調 査 員：降矢順子、熊谷満、赤堀祐子、熊谷洋一
出土遺物は鎌倉市教育委員会が保管している。

凡　　例

各図面の縮尺は次の通りである。
調査区周辺：1/2500
調査区配置図：1/200
堆積土層：1/60
堆積土層図の水糸高は海抜値を示す。

本文目次

第１章　遺跡の位置と環境 …… 69
第２章　調査の経緯と方法 …… 70
第３章　調査の概要 …… 71
第４章　まとめ …… 71

挿図目次

Fig. 1　遺跡周辺 …… 69
Fig. 2　調査区配置図 …… 70
Fig. 3　堆積土層図 …… 71

図版目次

ＰＬ．１－１　遺跡周辺（北から）…… 75
　　－２　調査風景（西から）…… 75
ＰＬ．２－１　調査区北壁堆積土層 …… 76
　　－２　調査区東壁堆積土層 …… 76

第１章　遺跡の位置と環境

本調査地は、鎌倉市街のやや北東、岐れ道の交差点から清泉小学校を抜けて、さらに北に450mほど行ったところに位置する。所在は西御門二丁目803番17。ここは南北に細長い谷となっており、現在は谷底に民家が建ち並び、鎌倉でよく見られる小規模な谷戸を形成している。谷を取り囲む山裾は、その大部分が近・現代に切り落とされたようで、切り立った壁面の土層では岩盤が確認できる。調査区の周辺には、岩盤をくり貫いて造られたやぐらが開口し、数基がその入り口を覗かせている。

調査区は谷の最も奥のほうに設定された。現況は、南に向かって降る自然傾斜を埋め立てて、段丘状の平地としている。これによって南側隣地との比高差は約２ｍにもなっている。敷地の東端部は山裾を切り落とした部分に当たり、現地表面の高さ（海抜約39.7m）で、壁面はすでに岩盤土層である。

現在の清泉小学校の辺りは、大倉幕府址と考えられている。大倉幕府は頼朝の邸宅で、千葉広常の宅

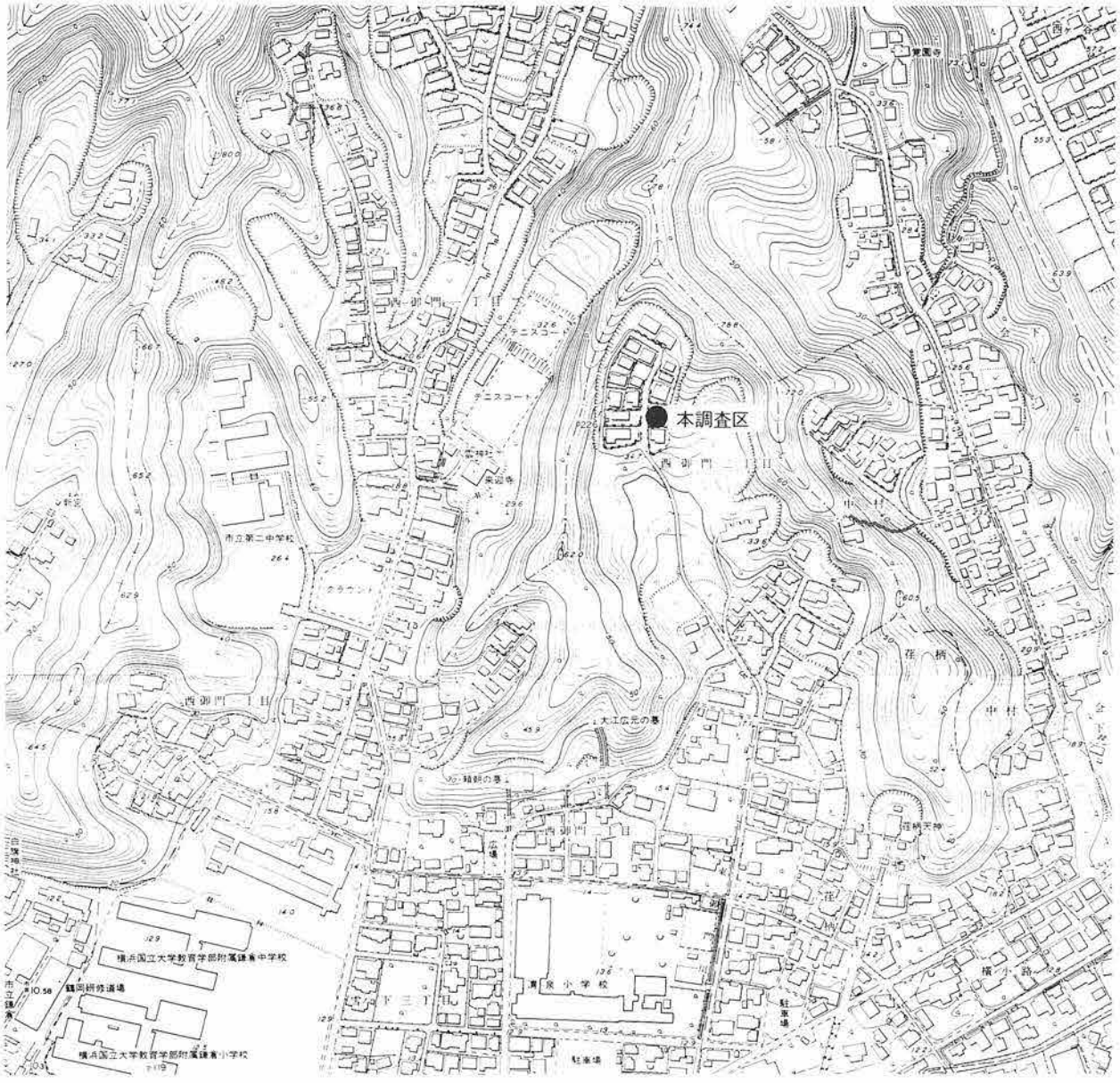


Fig. 1　遺跡周辺

からこれに移ったときには、和田義盛以下御家人らもこれに従い宿館を構えたらしい。出仕するものも三百十一人を数えたという。過去三度の火災に遭い、その度に焼失、再建を繰り返したが、三度目の火災による焼失を機に、ついに宇津宮辻子に移転することになった。西御門、東御門の地名はこの屋敷の西門・東門のことである。この周辺には道路が通じ、家人の屋敷が建ち並んでいたものと思われる。本遺跡の現在の所在は西御門であるが、実際には東御門を南北に走る道路の延長上北にある。

第2章　調査の経緯と方法

本調査は、個人専用住宅造成のカーポート切り下げ工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、鎌倉市教育委員会により、平成9年7月1日～同月4日にかけて実施された。調査対象面積は35.58m²である。具体的な経緯を以下に示す。

7月1日　調査区設定、試掘坑掘り。レベル原点移動。

7月2日　試掘坑掘り上げ。鎌倉市4級基準点の測量。

7月3日　調査区拡張。

7月4日　全景写真。撤収。

調査での基準杭は鎌倉市4級基準点を使用した。周辺にある数点の4級基準点の関係について測量を実施し、調査区に最も近いそれを本調査での基準杭とした。調査において測点の必要な場合は光波測距儀を用い、直接測距する方法を採った。見返り点は、見通し可能な中で最も近くに位置する4級基準点を使用した。

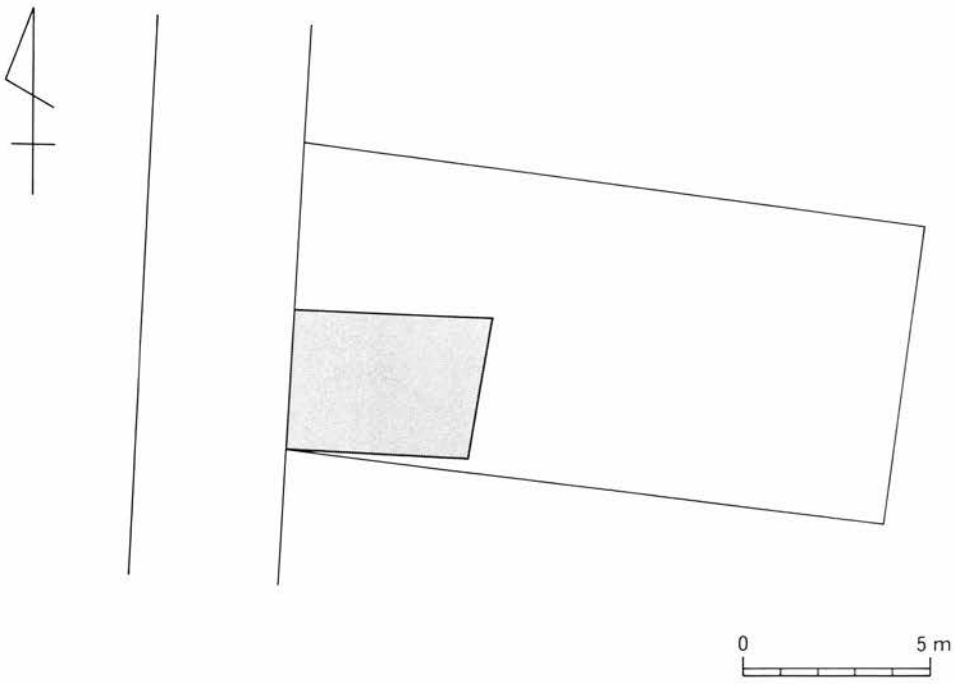
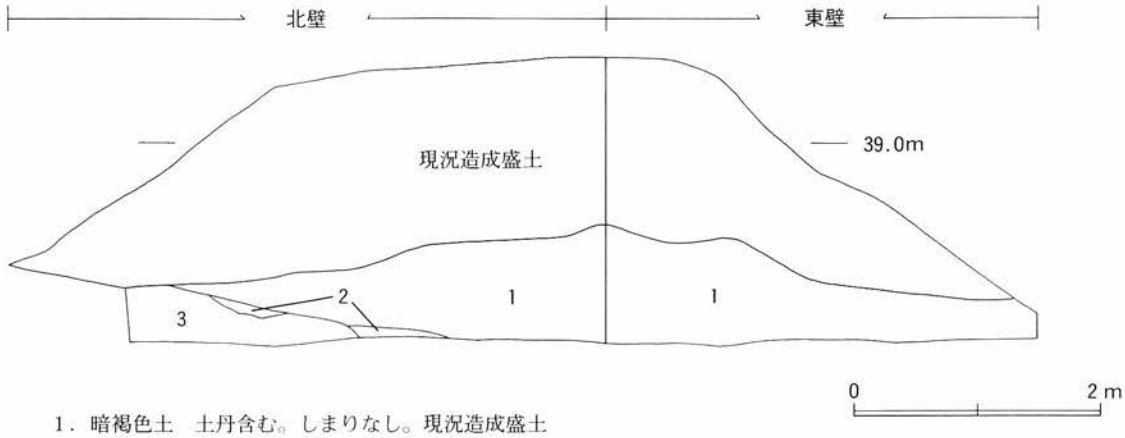


Fig. 2　調査区配置図



1．暗褐色土　土丹含む。しまりなし。現況造成盛土
2．黒褐色土　粘性を帯びる腐食土層。しまりなし。現代旧表土
3．黄褐色土　30cmの土丹塊多量に含む。しまりなし。現代造成盛土

Fig. 3　堆積土層図

第3章　調査の概要

調査では、鎌倉市教育委員会によって事前に実施された試掘底面レベルや検出遺構面他と、南接する隣地地表面との差が無い等の不自然さもあって、まず試掘坑を掘り上げることから始まった。人力による掘削の後、土層断面の観察を行ったところ、全て現代の盛土であることが分かった。そこから調査区を西と南に拡張し、試掘坑を含め東西５ｍ×南北3.7ｍ、計18.5m²について調査を実施した。北壁と東壁に沿ってサブトレンチを設定し、土層断面を観察したが、トレンチ底（海抜約37.4ｍ）まで近・現代による攪乱土層であった。工事掘削深度の限界のため、ピンポールを差し込むことにより下層の状況について確認しようと試みた結果、投げ込みによるものと思われる土丹塊がトレンチ底の下層に詰まっており、それより下層の様相は分からなかった。

以上の状況から、段丘状の高まりとなっている調査対象地は現況の宅地造成に関わる現代の盛土と判断し、それ以上の調査を打ち切った。

第4章　まとめ

今回の調査は全て現代の盛土という残念な結果に終わった。この谷の周辺にはやぐらがあるため、何らかの関連する施設の存在も考えられるが、今回の調査でそれを実証する遺構などは検出されなかった。調査地も含まれる近年の宅地造成で山裾を切り落としていることと、敷地東端で海抜約39.7ｍの高さで確認される岩盤が、そこから約11ｍ西に位置する本調査区では海抜約37.4ｍの高さでも確認されないことを合わせて考えると、やぐらを造成した当時の地形はもっと細く深い谷であったと推測できる。現在でも決して広いとはいえない谷であるが、中世の時代、ここに何らかの建物等が存在していたのか興味深いことである。今後の、周辺における発掘調査の成果に期待することとしてまとめと代える。

写 真 图 版

▲１．遺跡周辺（北から）

▲２．調査風景（西から）

▲１．調査区北壁堆積土層

▲２．調査区東壁堆積土層

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成10年度発掘調査報告
巻次	15
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	齋木秀雄、熊谷満
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1999年3月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
おおくらばくふきたいせき 大倉幕府北遺跡	かながわけんかまくらしにしみかどにちょうめ 神奈川県鎌倉市西御門二丁目803番17	204	№193			1997.7.1 ～ 1997.7.4	35.58m²	個人専用住宅に係るカーポート造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大倉幕府北遺跡					

政所跡（No.247）

まんどころあと

雪ノ下三丁目970番２外地点

例　　言

1．本報は鎌倉市雪ノ下三丁目970番２外地点における個人専用住宅建設に伴う発掘調査報告である。

2．調査は平成９年７月14日から８月６日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。

3．調査体制は以下の通りである。

担　当　者　手塚直樹

調　査　員　野本賢二、丹行正、小柳津シゲ子

調査補助員　鍛治屋勝二、田畑衣理

作　業　員　萱野輝雄、奥山利平、吉本脩三、渡辺久夫

4．本報は野本が執筆、編集し、写真は遺構を野本が、遺物を馬淵和雄が撮影した。

5．資料整理は小柳津・田畑・野本が行った。

6．図面・写真・遺物等の資料はすべて鎌倉市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 82
第２章　調査の経緯 …… 84
第３章　発見された遺構と遺物 …… 86
　第１節　１面発見の遺構と遺物 …… 86
　第２節　２面発見の遺構と遺物 …… 87
　第３節　２面下発見の遺構と遺物 …… 87
　第４節　トレンチ …… 90
第４章　まとめ …… 91

挿　図　目　次

図１　調査地点と周辺の遺跡 …… 83
図２　グリッド配置図 …… 84
図３　１面平面図 …… 85
図４　１面礎石建物 …… 86
図５　１面上出土遺物 …… 86
図６　２面平面図 …… 87
図７　２面礎石列 …… 87
図８　２面下一括廃棄遺構 …… 88
図９　２面下一括廃棄遺物 …… 88
図10　２面下出土遺物（１） …… 89
図11　２面下出土遺物（２） …… 90
図12　トレンチ平面図・土層図 …… 91
図13　トレンチ内出土遺物 …… 91
図14　近現代地鎮遺物 …… 91
図15　〔推定〕政所郭内合成図（北東部） … 92

表　目　次

遺物観察表（１） …… 93
遺物観察表（２） …… 94
遺物観察表（３） …… 95
遺物点数表 …… 95

図　版　目　次

図版１　１．Ⅰ区１面全景（北から） …… 99
　２．Ⅰ区１面礎石建物（東から） …… 99
　３．Ⅱ区１面全景（西から） …… 99
図版２　１．Ⅰ区２面全景（北から） …… 100
　２．Ⅰ区２面礎石建物（南から） …… 100
　３．Ⅰ区２面下遺物一括廃棄（東から） …… 100
図版３　出土遺物 …… 101

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

本調査地点は鎌倉幕府の政務機関である政所と推定される区画の北東に位置する。この区画の西隣には治承四年（1180）に鶴岡八幡宮（寺）が遷座し、北東には大倉幕府、「横大路（？）」を挟んだ南側には北条氏の邸宅があったとされる。

さて、この一画が政所であったという証拠を『吾妻鏡』の記事から抜粋してみると

建暦三年（1213）５月２日　「（前略）其後凶徒到横大路御所南西道也。於御所西南政所、御家人等支之、合戦及数反也。」

建長四年（1252）４月14日　「（前略）小町大路北行、政所西行。秋田城介義景奉行、故司有政所之由、被仰下之。仍両国司布衣、被参政所、各着座奥州奥座相州端座。當所執事前伊勢守行綱盃酒、有三献之儀。（後略）」

以上とは別の「金沢文庫古文書」の「随求法」奥書に、元応三年（1321）２月５日に相州鎌倉塔の辻の政所の東庇で書いたとある。

一番目の記事は御所（大倉幕府）の西南にある政所の前の橋の傍らで足利義氏と和田義盛の子、朝夷奈義秀との闘いがあり、義氏が隍（ほり）の西に逃げたとある。このことから隍が南北に伸びている事がわかり、地形に当てはめると隍は西御門川、「政所前の橋」は筋違橋（すじかえばし）と考えられる。

二番目の記事は将軍である宗尊親王が御所（若宮幕府）から、御所東の小町大路を通り、塔の辻を西に曲がって政所南の道を通り、鶴岡八幡宮社頭に到着するというものである。

以上の事から、1213年から1321年にかけての鎌倉時代ほぼ全般であるため、鎌倉幕府草創期から幕府滅亡期まで推定区画に在ったと考えられる。ただし、『吾妻鏡』　弘長元年（1261）３月13日条の記事（「（前略）政所之郭内失火、廳屋、公文所、問注屋炎上、御倉等者免炎」）に見えるが、この区画内に鎌倉時代全般に公文所、問注所が併存していたかは疑問である。

さて、この「政所跡」内では現在まで５次にわたる発掘調査が行われている（図１）。１次（図１－２）・４次（図１－５）地点は区画の南にあたり、「横大路」の側溝、土塁、掘立柱建物、池状遺構（１次）、「かわらけ溜」（４次）が発見されている。「横大路」については１・４次地点の斜向かいの「北条泰時・時頼邸跡（雪の下一丁目395番地点）」（図１－９）で側溝が確認されており、このことから道路幅が18m（約６丈）と確認された。

２次（図１－３）・３次（図１－４）地点は区画の北東角近くにあたり、小町大路と推定される泥岩地業の道路及び側溝、「かわらけ溜」（２次のみ）、掘立柱建物（２次のみ）が発見されている。

５次地点（図１－６）は２・３次地点の南西で、部分的な泥岩地業、小規模の東西溝、「遺物一括廃棄」が発見された。

６次にあたる今回の調査地点（図１－１）は５次地点の北西、区画の内郭部にあたり、政所の庁屋の遺構の発見が期待された。

参考文献

高柳光寿　『鎌倉市史　総説編』　吉川弘文館　1959年
白井永二編　『鎌倉事典』　東京堂出版　1976年
菊川英政　「北条泰時・時頼邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書５』　鎌倉市教育委員会　1989年
手塚直樹・宮田真　『政所跡』　政所跡発掘調査団　1991年

瀬田哲夫　「政所跡の調査」『第１回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』　鎌倉考古学研究所　1991年
瀬田哲夫　「政所跡　雪ノ下三丁目966番１地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書８』　鎌倉市教育委員会　1992年
瀬田哲夫　「政所跡　雪ノ下三丁目965番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書８』　鎌倉市教育委員会　1992年
手塚直樹・田畑佐和子「政所跡　雪ノ下三丁目988番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書９（第３分冊）』　鎌倉市教育委員会　1993年
原廣志・須佐直子・小林重子「北条高時邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12（第１分冊）』　鎌倉市教育委員会　1996年

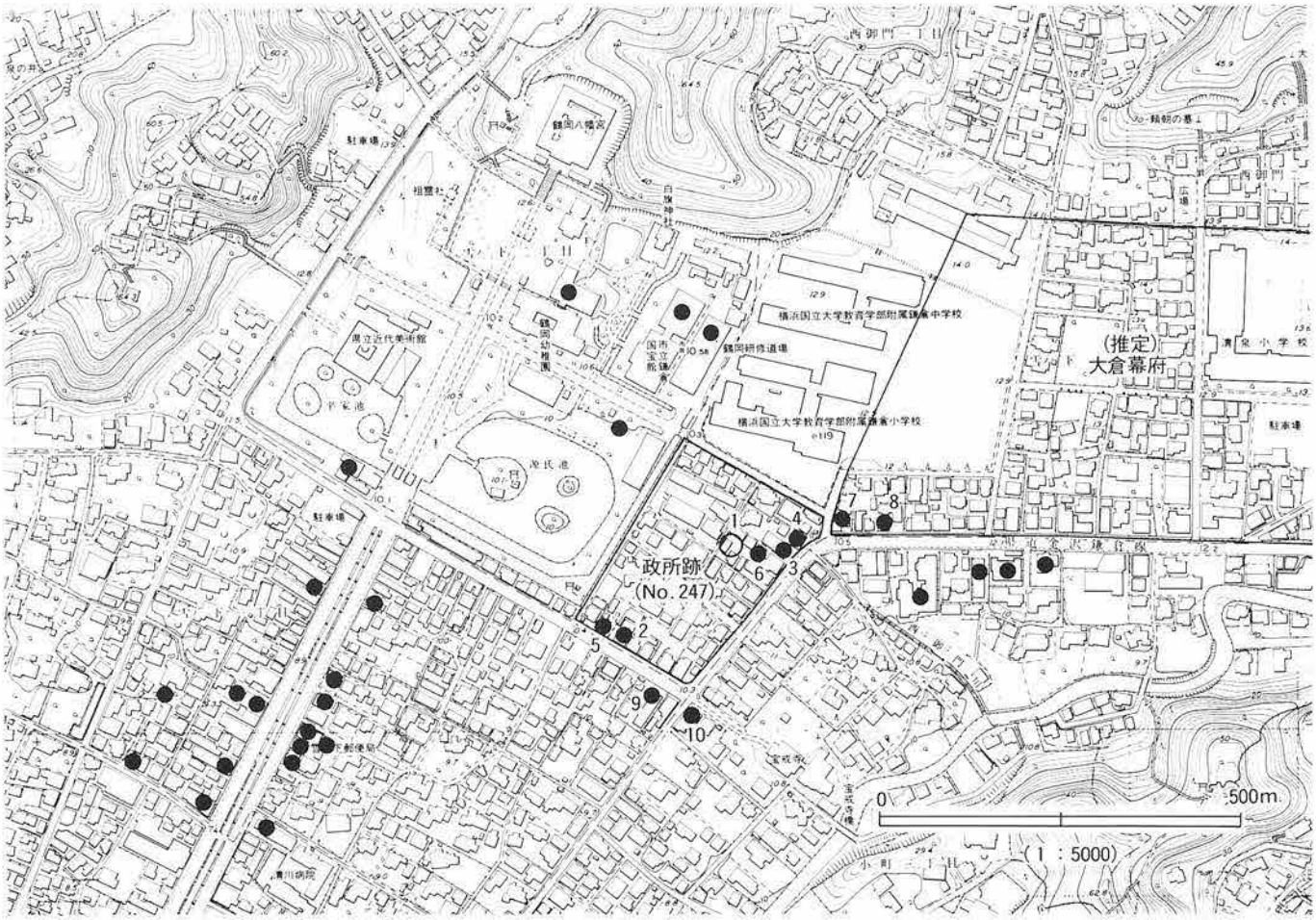


図１　調査地点と周辺の遺跡

第２章　調査の経緯

平成９年５月に調査地点において杭工法による住宅基礎の工事が行われていた。この工法による建築許可はされていなかったため、これを鎌倉市教育委員会文化財課の職員が確認し、工事の中断を事業者に指示した。工事を中断したことと、近隣の数地点での調査成果から埋蔵文化財がかなりの密度をもって存在することが充分予想されたことから、確認調査を実施しないまま、同年７月14日から８月６日にかけて発掘調査を実施した（残土を場内処理をするためＩ区（南半分）とII区（北半分）ににわけ、Ｉ区から調査を開始した）。以下、作業過程を記す。

７月14日　機材搬入、人力によるＩ区表土掘削

17日　Ｉ区泥岩地業面（１面）検出

18日　Ｉ区１面全景撮影、平面実測

19日　Ｉ区２面まで掘り下げ

20日　Ｉ区２面下炭層上面まで掘り下げ

23日　Ｉ区２面下炭層上面全景撮影

24日　Ｉ区２面下炭層上面平面実測

25日　人力によるＩ区埋め戻し

28日　人力によるII区表土掘削

30日　II区泥岩地業面（１面）検出

31日　II区１面全景撮影、平面実測

図２　グリッド配置図

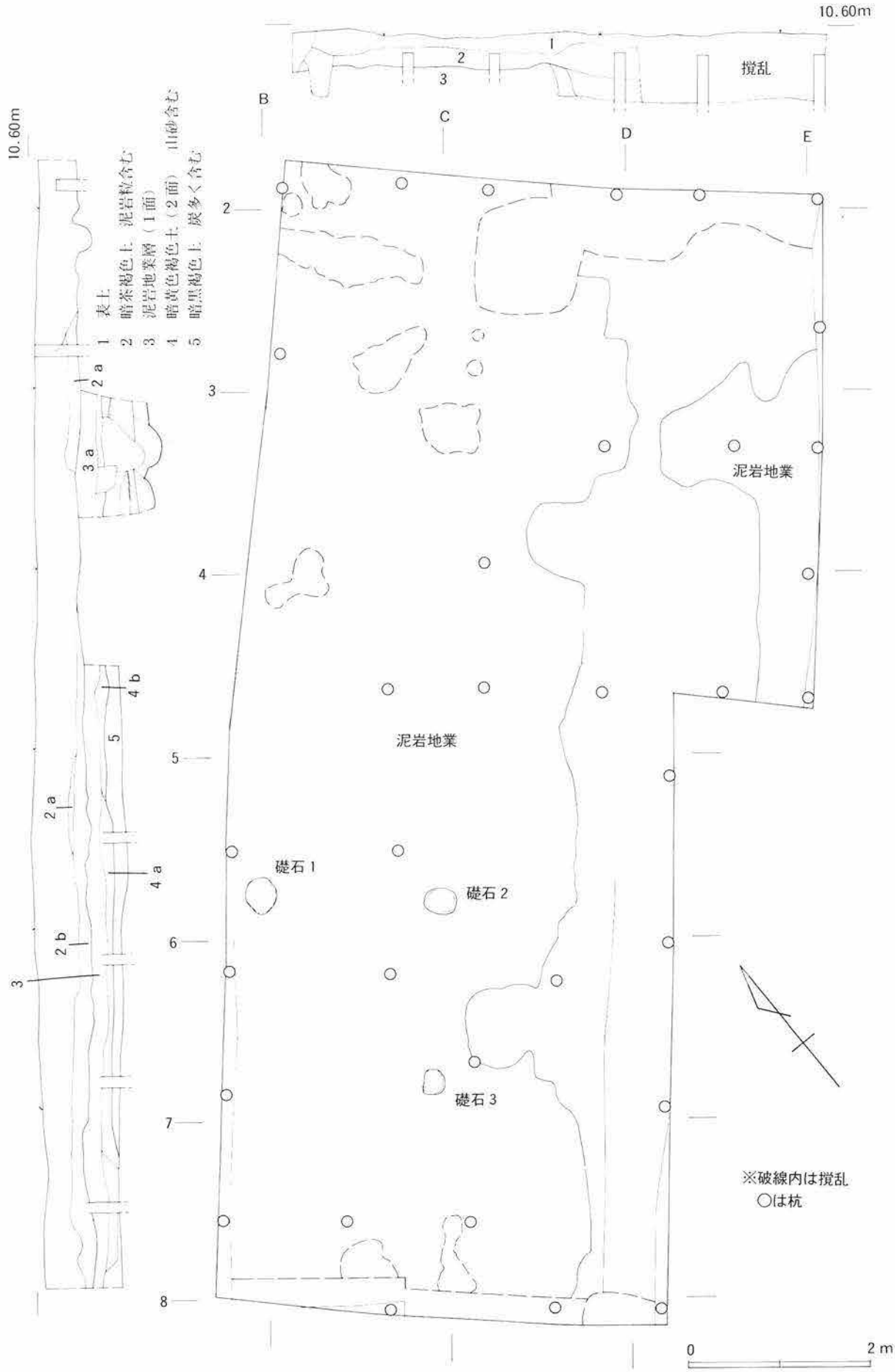

10.60m
10.60m
1 表土
2 暗茶褐色土 泥岩粒含む
3 泥岩地業層（1面）
4 暗黄色褐色土（2面） 山砂含む
5 暗黒褐色土 炭多く含む
搬乱
B
C
D
E
泥岩地業
泥岩地業
礎石1
礎石2
礎石3
※破線内は撹乱
○は杭
0
2m

図3　1面平面図

8月2日　トレンチ調査
　6日　撤収

第3章　発見された遺構と遺物

第1節　1面発見の遺構と遺物

人力による表土掘削後、地表面から40cm下（海抜8.8m）で泥岩塊（20～50cm大）による地業面が表れた。地業面は一部攪乱を受けているものの、20cmの厚さで東南（小町大路側）に向かって緩傾斜する。Dライン以西はかなり強固で密な地業面であるが、Dライン以東は疎らで地業面とは言えないかもしれない。レベル的には政所跡2・3次地点の道路面、5次地点の1面とほぼ同じである。遺構は礎石建物が1棟発見されたのみである。

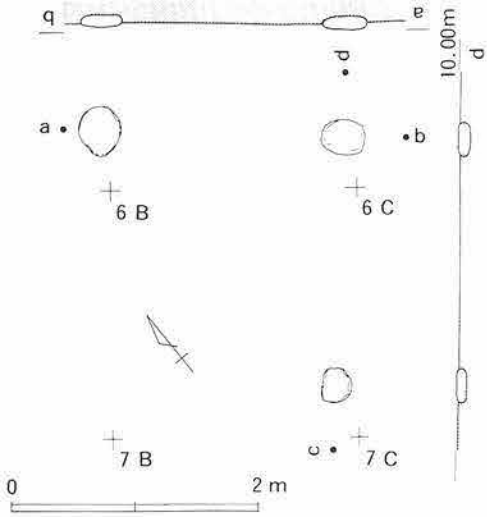


図4　1面礎石建物

礎石建物（図4）

6－Bグリッド付近に位置する。確認規模は東西1間、南北1間で、柱間は芯々距離で約200cm。南北軸方位はN－50°－E。2次地点の道路（側溝）と直行もしくは平行関係にある。礎石は30cm大の安山岩。上面は平らで柱の痕跡はない。礎石上面のレベルは海抜10mである。

1面上出土遺物（図5）

出土遺物の内訳はかわらけ417点（手づくね成形41、ロクロ成形〈静止糸切り〉3、ロクロ成形〈回転糸切り〉333、成形不明40）、青磁14点（碗10、鉢2、不明2）、白磁3点（口禿皿2、碗1）、青白磁5点（梅瓶1、不明4）、瀬戸窯製品12点（瓶1、卸皿4、入子1、不明6）、渥美窯製品（甕）1点、常滑窯製品120点（I類鉢10、II類鉢7、甕103）、魚住窯製品（鉢）1点、土器・土製品11点（瓦質火鉢8、瓦器1、白かわらけ質灯明台1、不明1）、瓦5点（平瓦4、丸瓦1）、銅銭3点、鉄製品（釘）4点、石製品7点（鍋6、砥石〈中砥〉1）の計603点である。小破片が多く、図示し得たのは図5の12点である。1～4はロクロ成形のかわらけ。5は瀬戸窯

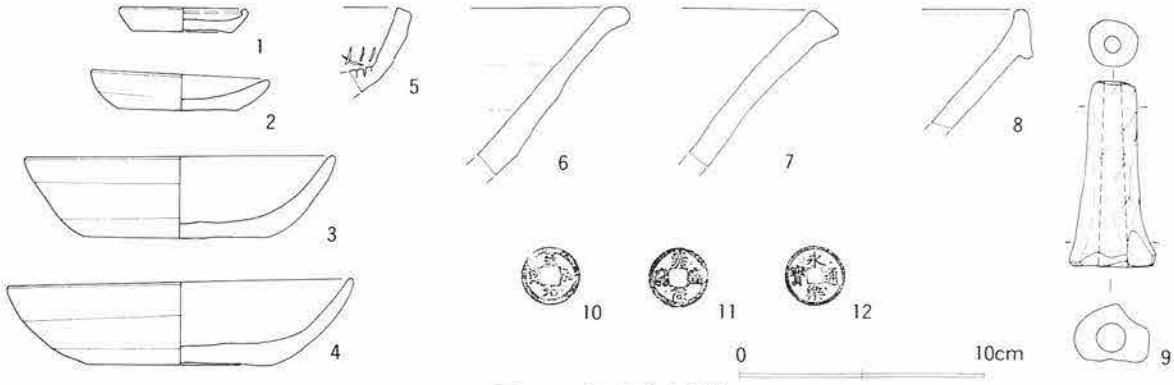


図5　1面上出土遺物

の卸し皿の口縁部片。6は常滑窯Ⅰ類鉢の口縁部片。7は常滑窯Ⅱ類鉢の口縁部片。8は魚住窯鉢の口縁部片。9は白かわらけ質灯明台の軸部分。10～12は銅銭。12の永楽通寶は上層からの混入品と思われる。

第2節　2面発見の遺構と遺物

調査はⅠ区のみである。現地表下約80cm（海抜9.8m）で、山砂を含む暗黄茶褐色土が広がる。炭が混じりしまり悪く、遺構の確認は難しかった。遺構は礎石列1列、柱穴6口を発見した。

礎石列（図7）

調査区西壁際で4個の礎石が発見された。確認規模は南北3間で、柱間は約210cmである。恐らく建物と考えられるが、この列より東に建物が続くかは不明である。礎石はすべて30cm大の安山岩で、礎石上面レベルは海抜9.8mである。なお、礎石は原位置を保ち埋め戻された。

第3節　2面下発見の遺構と遺物

2面を20cm掘り下げると、炭層が部分的広がる（海抜9.6m）。この直上に一括廃棄遺構1カ所を確認した。そして、炭層中より多くの遺物が出土した。これらの遺物は2面とほぼ同時期のものである。

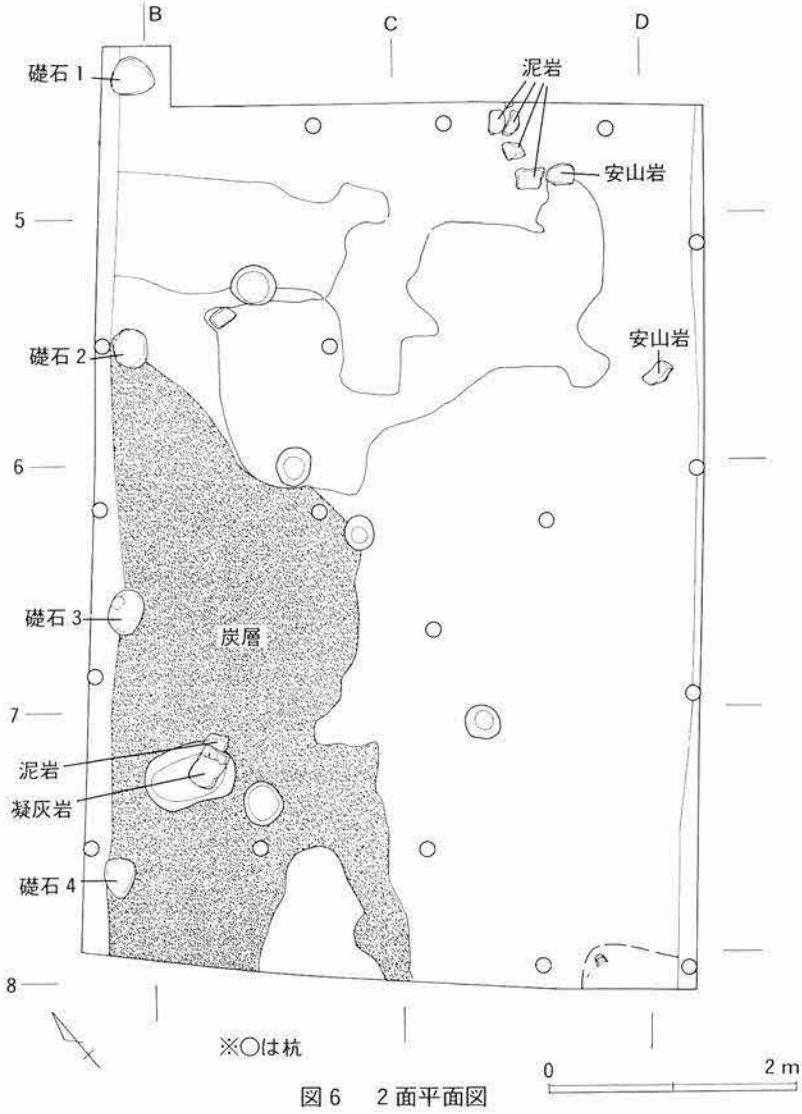


図6　2面平面図

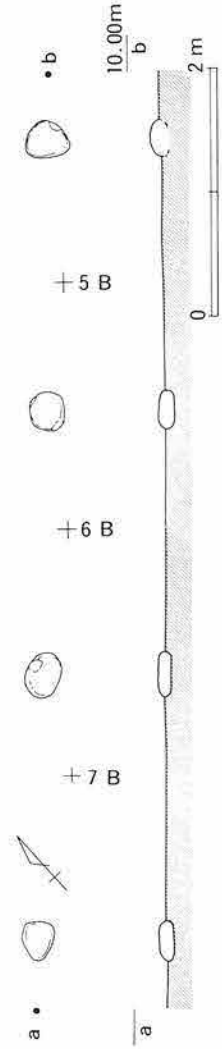


図7　2面礎石列

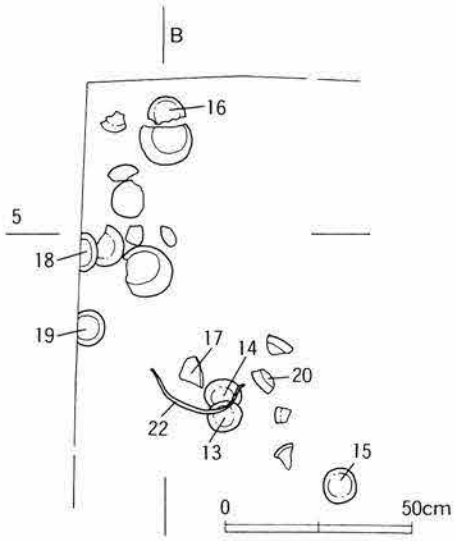


図８　２面下一括廃棄遺構

一括廃棄遺構（図８）

ごく小規模であるが、一括廃棄遺構とした。調査区西壁際、５－Ｂグリッド付近で発見した。調査区外西に広がる可能性がある。内訳はかわらけ26点（手づくね成形16、ロクロ成形外底回転糸切り10）と鉄製鍋弦１点の計27点である。図９の13～17は手づくね成形のかわらけ。18～21はロクロ成形のかわらけ。22は鉄製の鍋弦と思われる。

２面下出土遺物（図10・11）

出土遺物の内訳はかわらけ1933点（手づくね成形519、ロクロ成形〈静止糸切り〉13、ロクロ成形〈回転糸切り〉1401）、青磁18点（碗16、不明２）、白磁９点（四耳壺２、口禿皿１、皿１、不明５）、青白磁11点（水注１、合子蓋１、合子身１、小皿１、不明７）、緑釉（盤）12点、黄釉（盤）２点、褐釉（壺）１点、瀬戸窯製品７点（碗２、入子２、不明３）、渥美窯製品５点（甕４、鉢１）、常滑窯製品573点（Ｉ類鉢34、II類鉢３、甕535、壺１）、亀山窯製品（甕）１点、山茶碗10点、土器・土製品８点（土鍋１、火鉢１、瀬戸内系土師器１、白かわらけ４、不明１）、瓦（平瓦）３点、銅銭２点、鉄製品28点（釘27、火打ち金１）、石製品11点（鍋８、硯１、砥石〈中砥〉１、火打ち石１）の計2634点である。

図10－23～34・48～50は手づくね成形のかわらけ。35～44・51～53はロクロ成形回転糸切り底のかわらけ。45～47・54～56はロクロ成形静止糸切り底のかわらけ。57は産地不明の土器で、胎土は硬質。外底は回転ヘラ切りしている。58は瀬戸内系土師器と思われ、高台は貼付けている。59～62は青磁の碗。59は劃花文碗の口縁部片で内面に飛雲文を片彫りしている。60・61は蓮弁文碗で60は口縁部片、61は底部片。62は無文碗の口縁部片。63～65は白磁。63は四耳壺の口縁部片。64は口兀皿の口縁部片。65は皿の底部片で内底面に葉文を型押ししている。66は青白磁の合子の身である。67は褐釉の壺で約20％の破片が出土した。器高は約30cmになると思われる。器表外面には暗黄褐色の釉を胴部下半まで薄く掛けている。68は黄釉鉄絵盤で30％の破片が出土した。淡黄褐色の釉が内面全体と外面体部中位まで掛かる。内面には草文が配されている。69は緑釉盤。図11－70・71は瀬戸窯製品で、70は壺の口縁部片なのか器

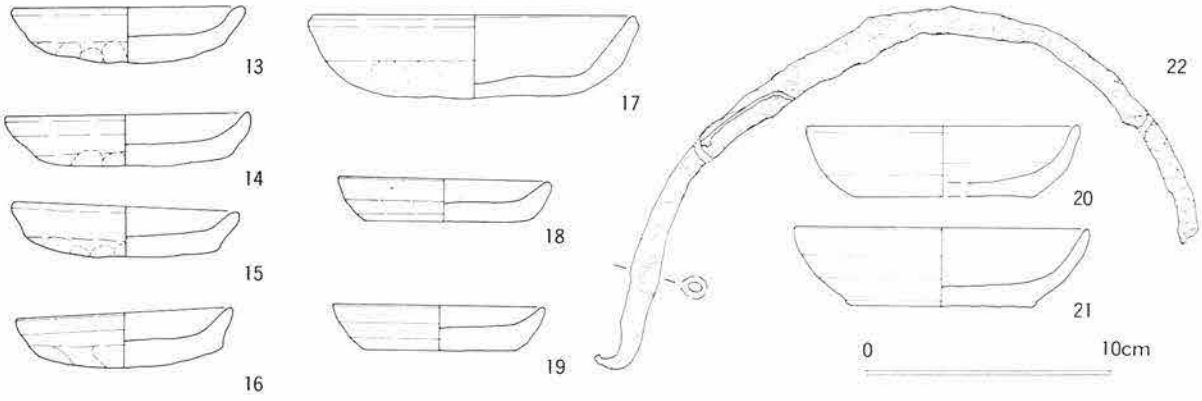


図９　２面下一括廃棄遺物

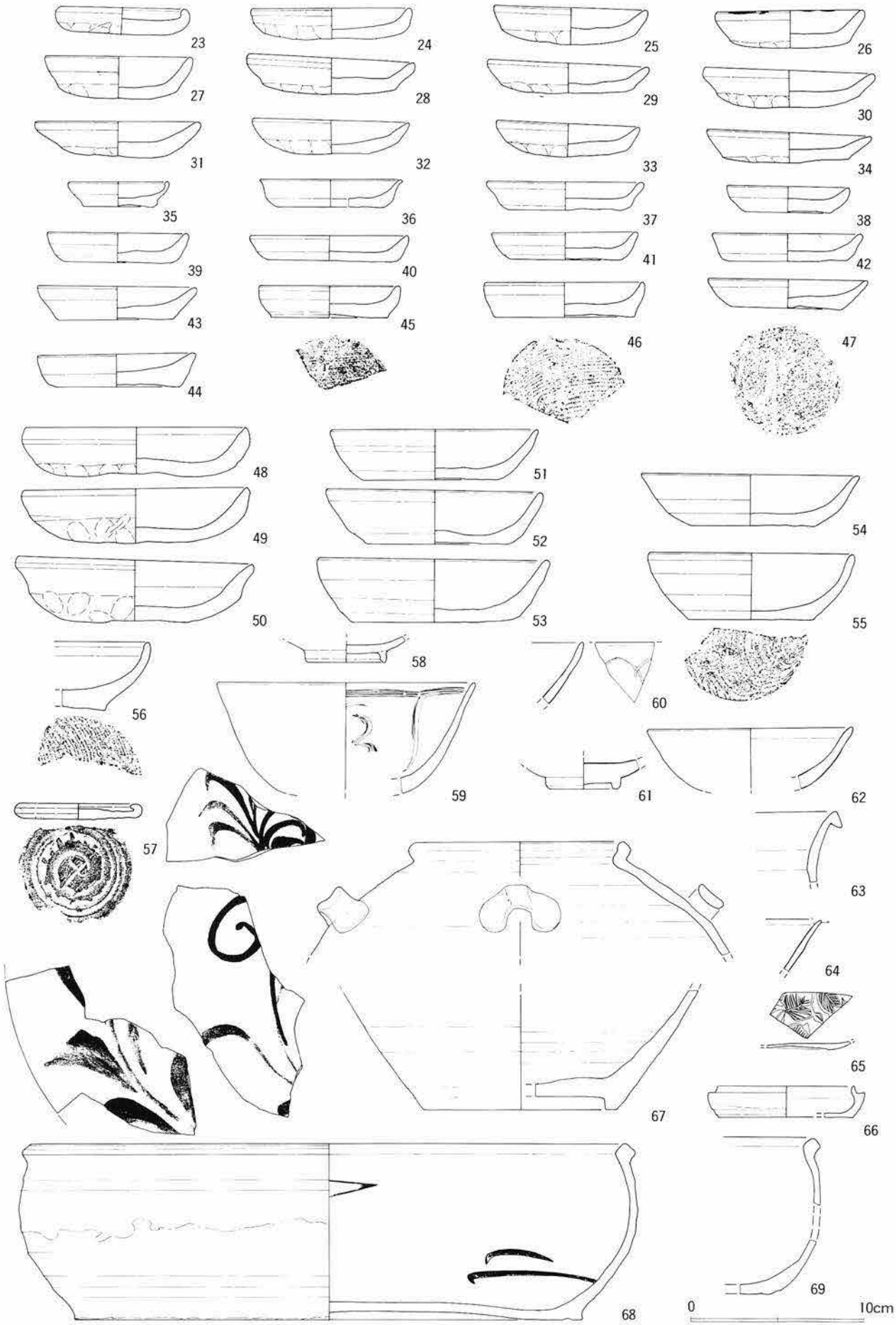


図10　2面下出土遺物（1）

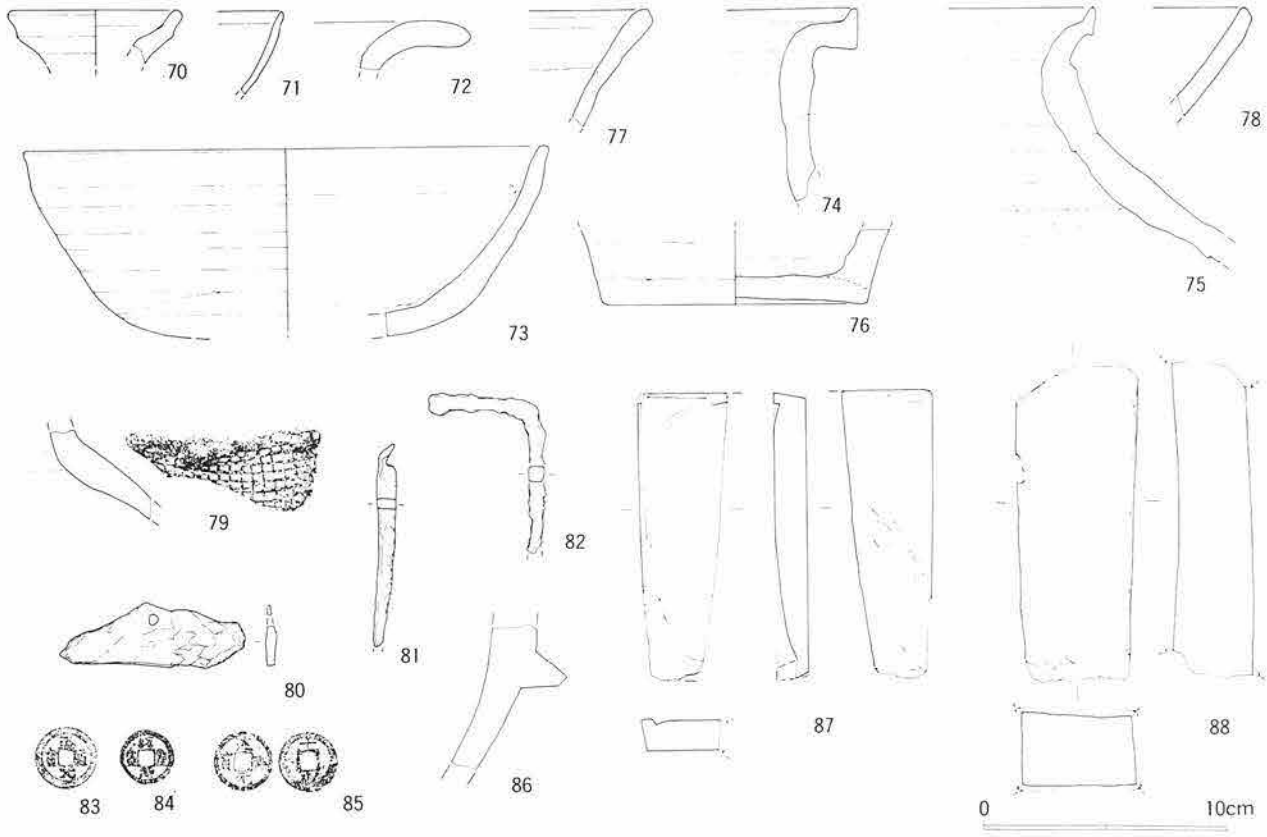


図11　2面下出土遺物（2）

種は不明。71は入子の口縁部片。72・73は渥美窯製品で72は甕の口縁部片。73は無高台の鉢で外底へラケズリしている。74～78は常滑窯製品で、74・75は甕の口縁部片。76は壺の底部片。77はⅠ類鉢の口縁部片。78はⅡ類鉢の口縁部片。79は亀山窯甕の肩部片。80～82は鉄製品で、80は火打ち金。81・81は釘。83～85は銅銭。85の淳熙元寶の背面には淳熙14年（1187）を表す「十四」が配される。86は滑石製鍋。87は硯で中心を切断し、裏面に擦痕がある。88は砥石（中砥）で4面を使用している。

第4節　トレンチ（図12）

Ⅱ区調査終了後、下層の堆積状況確認のため、西壁際に1.5m×2mのトレンチを設定し、中世基盤層上面まで掘り下げた。なお、下層の遺構はそのまま保存されることから、極力掘る量を少なくするため段掘りした。Ⅰ区2面炭層（第6層）の下は、泥岩粒と炭、遺物破片を含む暗褐色粘質土（第7・8層）が堆積し、この下が中世基盤層（黒褐色粘質土・第9層）となる。中世基盤層上面は海抜9.3m（地表面下1.2m）。ちなみに、2次地点（調査区西端）の中世基盤層上面レベルは海抜9・1mである。遺構は柱穴5口を発見した。いずれも第7層上面から掘り込んでいる。P2～4の切り合いは不明。

トレンチ内出土遺物（図13）

89～91は第6・7層出土。89は手づくね成形のかわらけで、内底中央に放射状の圧痕がある。90はロクロ成形のかわらけで口唇部にタールが付着する。91は管状土錘。92～95はP2～4の出土。92・93はかわらけで92はロクロ成形、93は手づくね成形。94・95は常滑窯甕の口縁部片。96～98はP1出土。96・

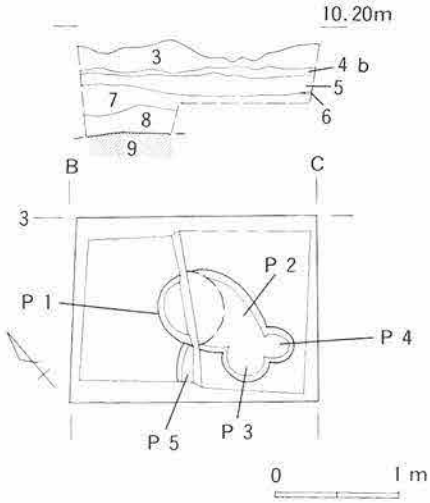


図12　トレンチ平面図・土層図

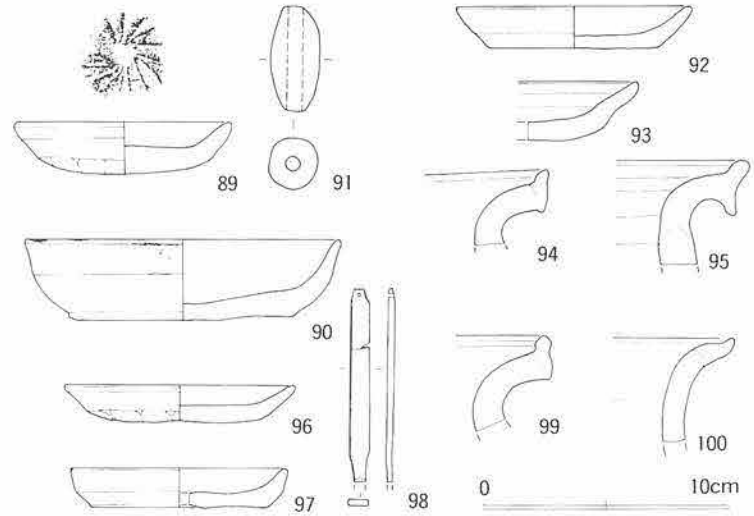


図13　トレンチ内出土遺物

97はかわらけで96は手づくね成形、97はロクロ成形。98は骨製品で用途不明。片面は骨の髄部分が表れていて、端部を穿孔している。99・100は基盤層上の出土で、常滑窯甕の口縁部片。

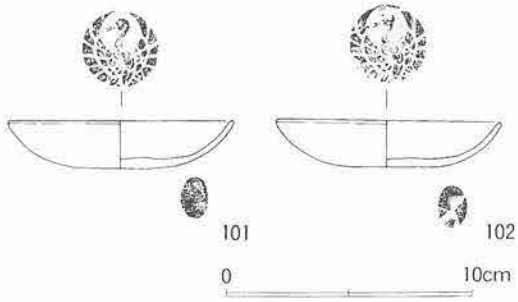


図14　近現代地鎮遺物

近現代地鎮遺物（図14）

表土掘削時、6－Bグリッド（図3）から白かわらけが合わせ口の状態で発見された。合わせ口内には何も納められていなかった。白かわらけ（図14－101・102）は内型成形で、内底中央に鶴丸文が型押しされ、外面下位に「鶴岡八幡宮」と押印している。墨書の痕跡は無かった。調査地点近隣の政所跡2次調査地点でも同様の地鎮遺物が出土し、中には寛永通寶が7枚納められていた。

第4章　まとめ

今回の調査は「政所跡」と推定された区画内の発掘調査では最も内郭に近く、狭い範囲ながらも礎石建物（2時期）の発見という大きな成果を得た。この項では、まとめとして遺構の年代等について古い順に述べることとする。

Ⅰ期

トレンチ内第7層上面から最下面（中世基盤層上面）の時期で、出土遺物が少ないものの13世紀前葉としたい。

Ⅱ期

第2面の時期で、遺構確認面は脆弱なものの出土遺物から13世紀中葉と考えたい。

Ⅲ期

第1面の時期で遺物の年代にばらつきがあるものの13世紀後葉と考えたい。泥岩地業は東に緩傾斜し、丁度Dラインあたりで切れる。この上に礎石が並んでいることから基壇状建物と捉えて良いのかもしれ

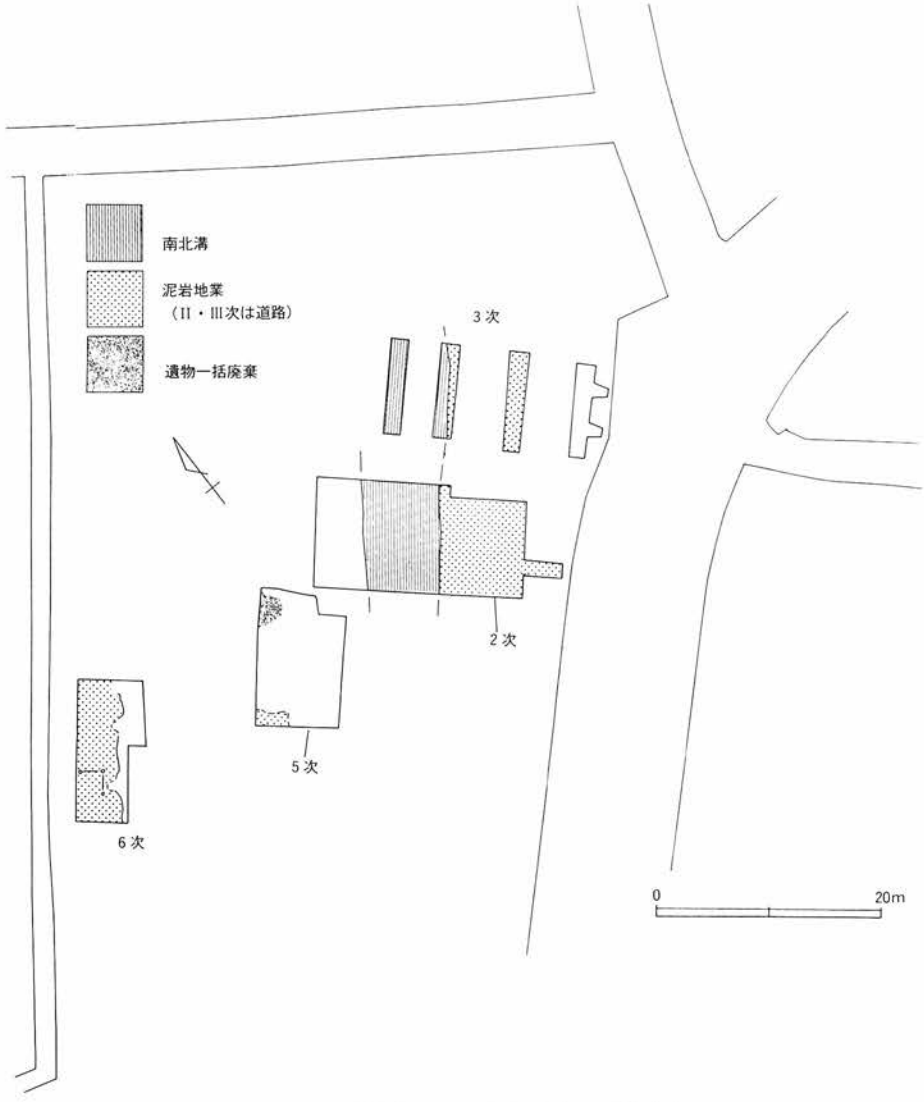


図15　〔推定〕政所郭内合成図（北東部）

ない。

図15は政所区画内（北東部分）の調査結果を踏まえ、『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書８』の「政所跡概念図」(註)を加除筆したものである。２・３次地点で発見された道路は、現在の小町大路の軸線から西に８°ほど振れており、今回の調査地点である６次地点で発見された礎石建物と平行もしくは直交関係にあることがわかる。

礎石建物は政所庁屋の一部と考えられよう。が、『吾妻鏡』の弘長元年（1261）３月13日条の記事から、同一区画内に政所、公文所、問注所が存在していたように解釈できる。このことから、短絡的に政所関連の建物遺構とは断定できない。

註

瀬田哲夫「政所跡　雪ノ下三丁目966番１地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急発掘調査報告書８』鎌倉市教育委員会　1992年

遺物観察表（1）

図版番号	番号	種類	計測値【単位はｃｍ・（）は復元】	観察事項
図5	1	かわらけ	口径5.6　底径4.0　器高1.0	ロクロ成形回転糸切り　胎土；橙色
	2	かわらけ	口径7.2　底径4.9　器高1.4	ロクロ成形回転糸切り　胎土；橙色　外底スノコ痕
	3	かわらけ	口径12.5　底径7.6　器高3.3	ロクロ成形回転糸切り　胎土；淡橙色
	4	かわらけ	口径13.9　底径7.5　器高3.4	ロクロ成形回転糸切り　胎土；橙色
	5	瀬戸　おろし皿		胎土；灰褐色
	6	常滑窯　鉢Ⅰ類		胎土；暗灰褐色
	7	常滑窯　鉢Ⅱ類		胎土；茶灰色
	8	魚住窯　鉢		胎土；灰白色
	9	白かわらけ質灯明台	残存長7.5　孔径0.7～1.2	胎土；白色
	10	銅銭　至和元寶		初鋳；北宋1054年　楷書
	11	銅銭　熈寧元寶		初鋳；北宋1068年　篆書
	12	銅銭　永楽通寶		初鋳；北宋1408年　楷書
図9	13	かわらけ	口径9.2　器高2.3	手づくね成形　胎土；淡橙色
	14	かわらけ	口径9.7　器高2.1	手づくね成形　胎土；淡橙色
	15	かわらけ	口径9.0　器高2.2	手づくね成形　胎土；淡茶褐色
	16	かわらけ	口径（8.7）　器高2.3	手づくね成形　胎土；橙色
	17	かわらけ	口径（13.0）　器高3.4	手づくね成形　胎土；淡茶褐色
	18	かわらけ	口径8.4　底径6.7　器高1.75	ロクロ成形回転糸切り　胎土；橙色　外底スノコ痕　火受けている
	19	かわらけ	口径8.5　底径6.1　器高1.85	ロクロ成形回転糸切り　胎土；橙色　外底スノコ痕
	20	かわらけ	口径（11.0）底径（7.3）器高2.9	ロクロ成形回転糸切り　胎土；橙色
	21	かわらけ	口径（12.0）　底径7.4　器高3.2	ロクロ成形回転糸切り　胎土；橙色
	22	鉄製品　鍋弦	現存径1.0	
図10	23	かわらけ	口径7.2　器高1.5	手づくね成形　口縁内折れ　胎土；淡橙色
	24	かわらけ	口径9.0　器高1.8	手づくね成形　胎土；淡肌色
	25	かわらけ	口径8.6　器高2.1	手づくね成形　胎土；橙色
	26	かわらけ	口径8.3　器高2.15	手づくね成形　胎土；淡肌色
	27	かわらけ	口径8.2　器高2.4	手づくね成形　胎土；橙色　一部火受けている
	28	かわらけ	口径9.4　器高2.05	手づくね成形　胎土；橙色
	29	かわらけ	口径9.1　器高1.7	手づくね成形　胎土；淡橙色
	30	かわらけ	口径9.6　器高2.15	手づくね成形　胎土；淡橙色
	31	かわらけ	口径9.2　器高2.05	手づくね成形　胎土；淡茶褐色
	32	かわらけ	口径8.8　器高1.9	手づくね成形　胎土；赤橙色
	33	かわらけ	口径8.0　器高1.9	手づくね成形　胎土；灰褐色　全体火受けている
	34	かわらけ	口径9.2　器高1.75	手づくね成形　胎土；淡肌色
	35	かわらけ	口径5.6　底径4.0　器高1.4	ロクロ成形回転糸切り　胎土；橙色　外底スノコ
	36	かわらけ	口径（8.0）底径（6.0）器高1.6	ロクロ成形回転糸切り　胎土；灰褐色　全体火受
	37	かわらけ	口径8.8　底径6.4　器高1.6	ロクロ成形回転糸切り　胎土；淡橙色　外底スノ
	38	かわらけ	口径6.8　底径5.0　器高1.5	ロクロ成形回転糸切り　胎土；淡褐色
	39	かわらけ	口径7.9　底径6.1　器高1.7	ロクロ成形回転糸切り　胎土；橙色　外底スノコ痕
	40	かわらけ	口径9.0　底径7.1　器高1.45	ロクロ成形回転糸切り　胎土；肌色　外底スノコ痕
	41	かわらけ	口径8.2　底径6.3　器高1.5	ロクロ成形回転糸切り　胎土；淡茶褐色　外底スノコ痕
	42	かわらけ	口径8.4　底径7.1　器高1.6	ロクロ成形回転糸切り　胎土；淡肌色　外底スノ
	43	かわらけ	口径6.8　底径5.0　器高1.5	ロクロ成形回転糸切り　胎土；淡肌色　外底スノコ痕
	44	かわらけ	口径8.0　底径6.6　器高1.8	ロクロ成形回転糸切り　胎土；淡茶褐色
	45	かわらけ	口径9.0　底径8.0　器高2.0	ロクロ成形回転糸切り　胎土；淡橙色
	46	かわらけ	口径9.0　底径6.3　器高1.65	ロクロ成形回転糸切り　胎土；赤橙色～淡褐色
	47	かわらけ	口径8.8　底径7.5　器高1.85	ロクロ成形静止糸切り　胎土；淡褐色
	48	かわらけ	口径12.6　器高2.8	手づくね成形　胎土；淡橙色
	49	かわらけ	口径12.7　器高3.1	手づくね成形　胎土；淡橙色～淡茶褐色
	50	かわらけ	口径13.4　器高3.5	手づくね成形　胎土；淡褐色

遺物観察表（2）

図10	51	かわらけ	口径11.7　底径7.7　器高2.9	ロクロ成形回転糸切り　胎土；灰褐色～赤橙色
	52	かわらけ	口径12.2　底径8.2　器高3.1	ロクロ成形静止糸切り　胎土；橙色　外底スノコ痕
	53	かわらけ	口径13.0　底径9.2　器高3.65	ロクロ成形静止糸切り　胎土；淡肌色　外底スノコ痕
	54	かわらけ	口径12.3　底径7.1　器高2.95	ロクロ成形静止糸切り　胎土；淡茶色
	55	かわらけ	口径11.6　底径7.2　器高3.8	ロクロ成形静止糸切り　胎土；淡橙色、硬質
	56	かわらけ	器高3.9	ロクロ成形静止糸切り　胎土；淡橙色
	57	土器　皿	口径6.3　底径7.2　器高0.9	外底回転ヘラ切り　胎土；灰褐色　一部火受けている
	58	瀬戸内系土師器碗	高台径4.4	胎土；白色　高台貼付
	59	青磁　劃花文碗	口径（14.5）	胎土；灰色　釉；暗緑色　内面飛雲文片彫り
	60	青磁　蓮弁文碗		胎土；灰白色　釉；水青色　貫入
	61	青磁　碗	高台径4.3	胎土；灰色　釉；草緑色　貫入
	62	青磁　無文碗	口径（11.6）	胎土；白色　釉；草緑色
	63	白磁　四耳壺		胎土；灰白色　釉；草緑色
	64	白磁　口兀皿		胎土；白色　釉；白色（青み）
	65	白磁　皿		胎土；白色　釉；白色　内面葉文型押し
	66	青白磁 合子（身）	受け径（7.8）　底径（7.8）最大径（9.0）　器高1.8	胎土；白色　釉；水青色
	67	褐釉　壺	口径（11.8）　底径（11.0）	胎土；灰褐色　釉；暗黄褐色
	68	黄釉　鉄絵盤	口径（32.6）　底径（29.0）　器高10.1	胎土；灰褐色 釉；淡黄褐色 内面に草花文
	69	緑釉　盤	器高（9.0）	胎土；灰褐色　釉；黄緑色
図11	70	瀬戸窯　器種不明	口径（6.5）	胎土；灰褐色　釉；灰緑色
	71	瀬戸窯　入子		胎土；淡黄褐色
	72	渥美窯　甕		胎土灰褐色　釉暗褐色
	73	渥美窯　鉢		胎土；灰色　無高台　外底ヘラケズリ　内面磨滅
	74	常滑窯　甕		胎土；灰褐色　器表；赤茶褐色
	75	常滑窯　甕		胎土；灰褐色　器表；赤茶褐色
	76	常滑窯　壺	底径10.8	胎土；灰褐色　器表；赤茶褐色
	77	常滑窯　鉢Ⅰ類		胎土；灰褐色
	78	常滑窯　鉢Ⅱ類		胎土；灰褐色　器表；暗茶褐色
	79	亀山窯　甕		胎土；赤褐色　器表；灰黒色（火受けている）
	80	鉄製品　火打ち金	残存長７.５　厚０.４	
	81	鉄製品　釘	残存長８.２　厚０.７	
	82	鉄製品　釘	厚０.６	
	83	銅銭　至道元寶		初鋳；北宋995年　楷書
	84	銅銭　紹聖元寶		初鋳；北宋1094年　篆書
	85	銅銭　淳熙元寶		初鋳；南宋1174年　楷書　背文『十四』→１１８７年
	86	滑石製　鍋		
	87	石製品　硯	長11.6　残存最大幅3.7　縁厚・陸厚1.3　海厚0.5	裏面に擦痕
	88	石製品　砥石	残存長１２.８　幅４.５　厚２.９	中砥　上野産　４面使用
図13	89	かわらけ	口径8.6　器高2.1	手づくね成形　胎土；淡橙色　内底に放射状圧痕
	90	かわらけ	口径12.6　底径9.1　器高3.25	ロクロ成形回転糸切り底　胎土；淡橙色　外底スノコ痕　口縁タール付着
	91	管状土錘	長4.2　最大径2.1　孔径0.6	胎土；淡褐色　指頭痕顕著
	92	かわらけ	口径（9.4）底径（6.8）器高1.7	ロクロ成形回転糸切り　胎土；淡茶褐色　外底スノコ痕
	93	かわらけ	器高2.4	手づくね成形　胎土；淡茶褐色
	94	常滑窯　甕		胎土；灰色　器表；暗茶色
	95	常滑窯　甕		胎土；灰色　器表；暗茶色
	96	かわらけ	口径（9.2）　器高1.5	手づくね成形　胎土；淡橙色
	97	かわらけ	口径（8.7）　底径（7.1）　器高1.6	ロクロ成形回転糸切り　胎土；橙色　外底スノコ痕

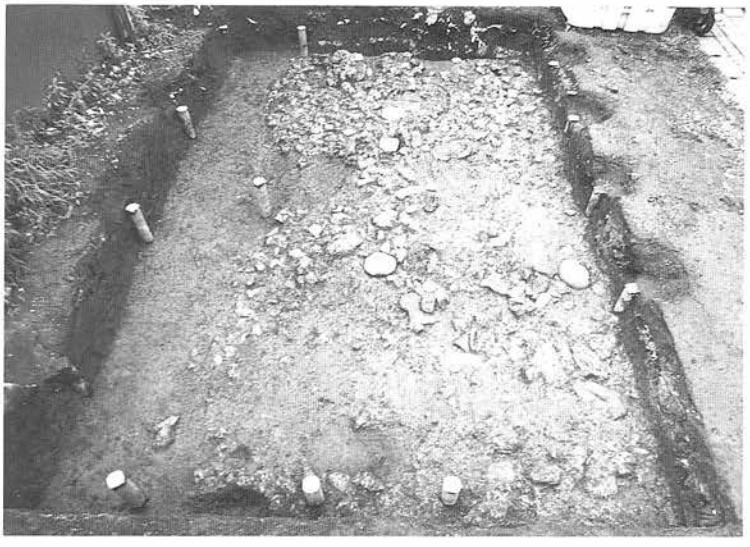
遺物観察表（3）

図13	98	骨製品　用途不明	残存長8.1　幅0.9　厚0.3 孔径0.15	
	99	常滑窯　甕		胎土；灰褐色
	100	常滑窯　甕		胎土；灰褐色　器表；茶褐色
図14	101	白かわらけ	口径9.0　底径3.6　器高1.9	内型成形　胎土；淡乳白色　内面鶴丸文、外底近くに「鶴岡八幡宮」の押印
	102	白かわらけ	口径9.0　底径3.6　器高1.9	内型成形　胎土；淡乳白色　内面鶴丸文、外底近くに「鶴岡八幡宮」の押印

遺物点数表

かわらけ	舶載陶磁器	国産陶磁器	土器・土製品	瓦	銅銭	金属製品	石製品	骨製品	計
2864	79	1006	17	2	6	42	19	1	4036
70.97%	1.96%	24.92%	0.42%	0.05%	0.15%	1.04%	0.47%	0.02%	100%

写 真 図 版



◀1．Ⅰ区1面全景（北から）

2．Ⅰ区1面礎石建物（東から）▶

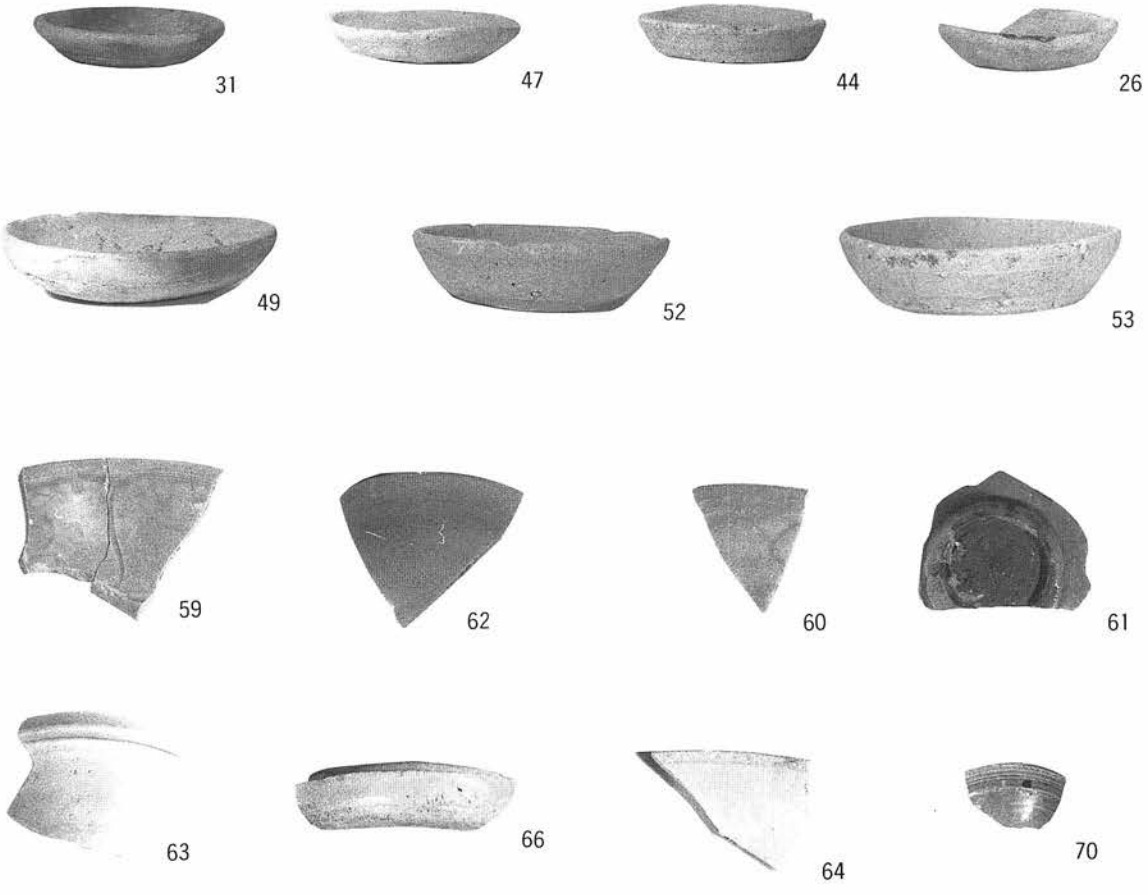
◀3．Ⅱ区1面全景（西から）

図版 2

◀1．Ⅰ区2面全景（北から）

◀2．Ⅰ区2面礎石建物（南から）

▼3．Ⅰ区2面下遺物一括廃棄（東から）



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成10年度発掘調査報告
巻次	15
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	野本賢二
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1999年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
まんどころあと 政所跡	かながわけんかまくらしゆきのした 神奈川県鎌倉市雪ノ下三丁目970番２外	204	No.247	° ′ ″	° ′ ″	1997.7.14 ～ 1997.8.6	80.06	個人専用住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
政所跡	都市	中世	礎石建物　２棟	中世：かわらけ 国産・舶載陶磁器	

台山遺跡（No.29）

だいやま　い　せき

台字西ノ台1733番３外

例　　言

1．本書は鎌倉市台字西ノ台1733番３外に所在する台山遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は個人専用住宅の造成に伴う事前の記録保存調査として実施したものである。

3．発掘調査は鎌倉市教育委員会が平成９年７月14日～８月11日にかけて実施した。調査面積は94m²である。

4．本書の編集は若松美智子が担当した。実測・トレースは岩崎紀子、笠原さやか、河野玉枝、長谷川和美、深尾義子、遺構写真は若松美智子、遺物写真は木村美代治、澤野麻美が撮影した。
執筆担当は以下のとおりである。
第１章・第２章・第３章遺構若松美智子　第３章遺物・第４章田村良照
調査体制は以下のとおりである。
調 査 主 体　　鎌倉市教育委員会
主任調査員　　田村良照
調　査　員　　若松美智子、梅木信之、遠藤雅一
調査補助員　　渡辺王夫、高橋健一郎、牛迫こまち、本田礼、高野和弘、阿南佐知子
作　業　員　　管野五郎、田口豊、藤枝正義、渡辺鉄夫（鎌倉市シルバー人材センター）

5．発掘調査及び出土品整理にあたっては、次の諸氏・諸機関から御協力・御指導を賜った。
佐藤仁彦（逗子市教育委員会）・澤田大多郎（日本大学講師）

6．本書にかかわる出土品及び記録図面・写真等は一括して鎌倉市教育委員会にて保管する。

凡　　例

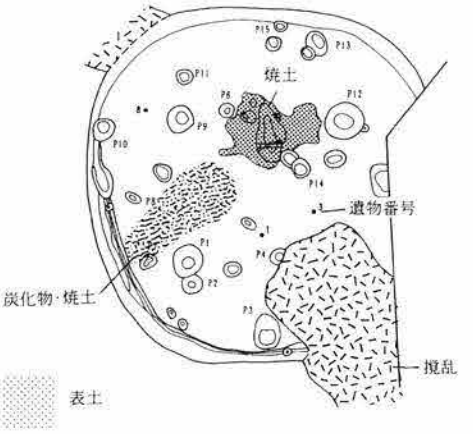
（１）遺構実測図の高さは海抜高度を示す。

（２）方位は国土座標に基づく。

（３）遺構・遺物挿図の縮尺は図に示すとおりである。

（４）遺構番号は遺構種別毎の通し番号である。

（５）遺構遺物挿図のスクリーントーンによる指示は次のとおりである。



目　　次

第１章　遺跡の諸環境 …… 106
　第１節　調査地点の地理的環境 …… 106
　第２節　過去の調査事例 …… 107
第２章　調査の概要 …… 109
　第１節　調査の方法 …… 109
　第２節　基本層序 …… 111
第３章　検出された遺構・遺物 …… 112
　第１節　竪穴住居址 …… 112
　第２節　土坑 …… 118
第４章　まとめ …… 120

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図(1/5000) …… 106
第２図　調査区位置図(1/750) …… 109
第３図　遺構全体図(1/300) …… 110
第４図　基本土層図 …… 111
第５図　６号住居址(1/40) …… 112
第６図　６号住居址竈(1/20) …… 113
第７図　６号住居址出土遺物(1/3) …… 114
第８図　７号・８号住居址(1/40) …… 115
第９図　７号住居址出土遺物(1/3) …… 116
第10図　８号住居址出土遺物(1/3) …… 117
第11図　９号住居址(1/40) …… 117
第12図　土坑群(1/40) …… 119
第13図　時期別遺構図(1/300) …… 120

表　目　次

第１表　６号住居址出土遺物観察表 …… 114
第２表　７号住居址出土遺物観察表 …… 116
第３表　８号住居址出土遺物観察表 …… 117

図　版　目　次

図版１　調査地遠景、調査地より大船方向を望む …… 125
図版２　西側全景、北側全景 …… 126
図版３　６号住居址 …… 127

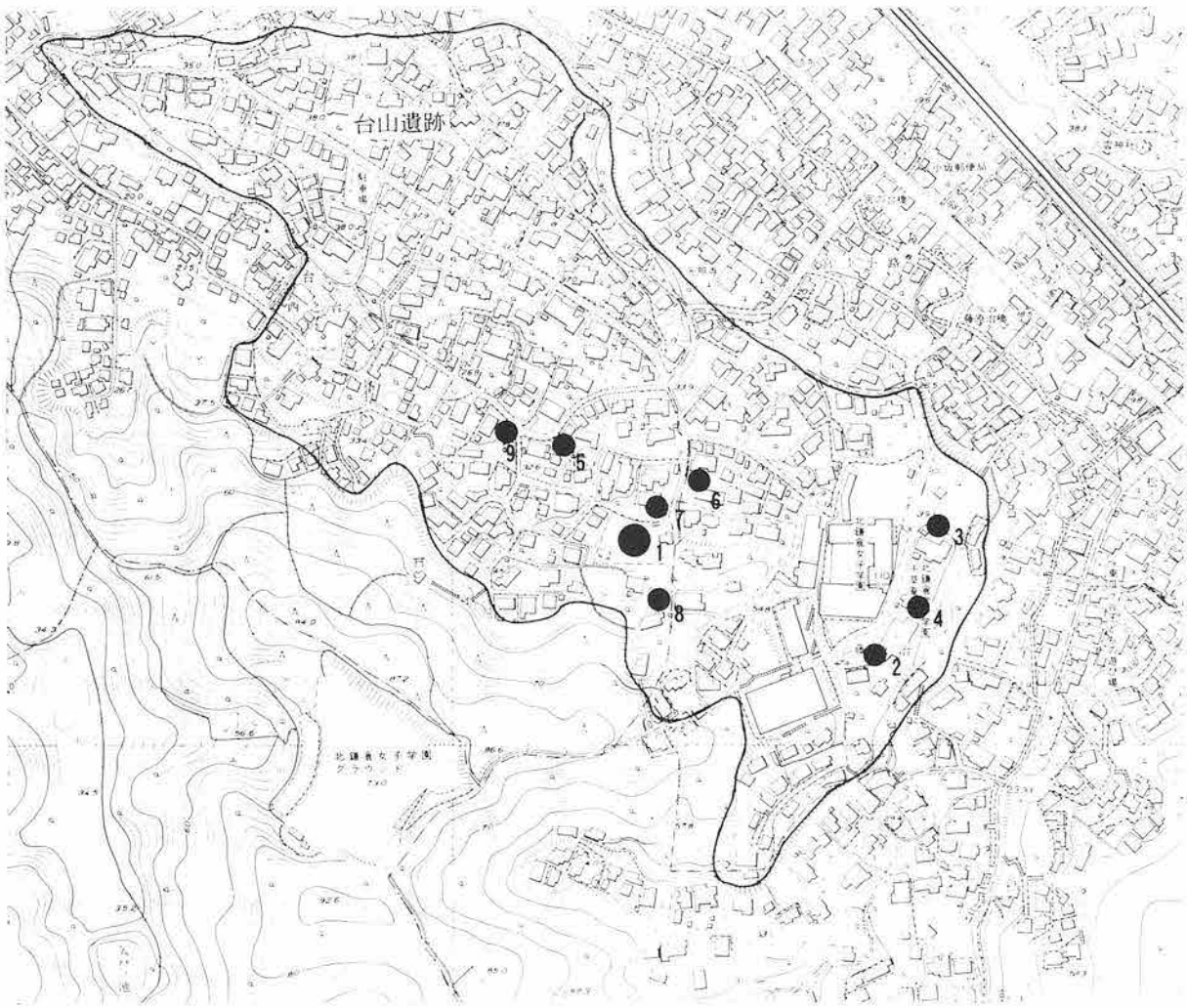
第１章　遺跡の諸環境

第１節　調査地点の地理的環境

本遺跡はＪＲ横須賀線北鎌倉駅の西方約500mの鎌倉市台字西ノ台に所在する。

地形的に見ると、鎌倉市域は多摩丘陵南西部にあたるため丘陵地形がすこぶる発達している。その中にあって、北西部の大船周辺と南東部の鶴ヶ岡八幡宮の鎮座する市中心部は、それぞれ柏尾川・滑川によって沖積地が形成されている。

本遺跡は柏尾川水系に属し、その支流の小袋川によって形成された小袋谷戸に面した通称台峯の北東緩斜面に位置する。遺跡の分布は広く、北鎌倉女子学園付近から北東に約700m、幅約300mの範囲が台山遺跡としてマークされている。その中の一地点が今回の調査対象となったのである（第１図参照）。



1．調査地点
2．台山藤源治遺跡（第１次調査）
3．台山藤源治遺跡（第２次調査）
4．台山藤源治遺跡（第３次調査）
5．台字西ノ台 1624 番３外地点
6．山ノ内字藤源治 874 番２地点
7．台字西ノ台 1730 番・1732 番１地点
8．台 1737 番地
9．台字西ノ台 1627 番地

第１図　遺跡位置図（1/5000）

第２節　過去の調査事例

本遺跡ではこれまでに８地点の発掘調査が実施され、縄文時代から中世にいたる複合遺跡であることが明らかになった。ここでは各地点（第１図２～９地点）の概要を紹介してみたい。

台山藤源治遺跡〔第１次調査〕　北鎌倉女子学園校舎建設に伴って昭和58年に調査され、昭和60年に報告書が刊行されている（手塚　1985）。この調査では縄文・弥生・古墳・平安・中世の遺構と遺物が検出され、特に鎌倉では中世以外の資料報告はめずらしかったことから大変注目された。具体的には、縄文時代は早期と中期の遺物が出土したのみで遺構は検出されなかった。しかし弥生時代から平安時代にかけては集落址が調査され、竪穴住居址の数は弥生時代が中期２軒・後期11軒、古墳時代は前期４軒・中期１軒・後期４軒、平安時代は５軒、合計27軒の住居址が発見され、それに伴う遺物も出土した。中世の遺構は道路状遺構だけである。

台山藤源治遺跡〔第２次調査〕　北鎌倉女子学園施設建設に伴って平成２年に調査され、平成８年に報告書が刊行されている（大河内　1996）。この調査では縄文時代の陥し穴２基と平安時代の竪穴住居址１軒、時期不明の竪穴住居址１軒といった遺構と同時期の遺物が検出された。

台山藤源治遺跡〔第３次調査〕　北鎌倉女子学園校舎新築に伴って平成４年に調査され、平成５年に報告書が刊行されている（宗臺　1993）。検出された遺構は弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居址１軒、古墳時代前期の竪穴住居址１軒・同中期２軒・同後期２軒、さらに平安時代の竪穴住居址１軒という内容である。

台字西ノ台1624番地３　個人住宅建設に伴って平成２年に調査され、平成４年に報告書が刊行されている（大上　1992）。この調査では、中世の可能性がある溝状遺構１条、時期不明のピット２本などが発見された。

山ノ内字藤源治874番地２　個人住宅建設に伴って昭和59年に調査され、昭和60年に報告書が刊行されている（斉木　1983）。検出された遺構は弥生時代後期の竪穴住居址１軒および時期不明の竪穴住居址５軒である。

台字西ノ台1737番地　学術調査として実施され、昭和49年に報告書が刊行されている（丑野　1974）。検出された遺構は弥生時代後期の竪穴住居址１軒、古墳時代後期１軒、時期不明１軒である。この調査はその後の調査の先鞭をつけた点で評価される。

台字西ノ台1627番地　個人住宅建設に伴って平成７年に調査され、平成９年に報告書が刊行されている（野本　1997）。この調査で検出された遺構は、中世以降と考えられる溝２条だけである。

台字西ノ台1730番地　個人住宅建設に伴って昭和62年に調査され、昭和63年に報告書が刊行されている（玉林　1988）。検出された遺構は弥生時代後期の竪穴住居址１軒、時期不明の竪穴住居址1軒である。

このように台山遺跡では、昭和45年に実施された学術調査を契機として、広い遺跡範囲の中をいわば蚕食状にではあるが都合８回の調査が行われた。その結果、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが判明し、とりわけ弥生時代から平安時代には台地上に集落が形成され、とくに遺跡東地区の北鎌倉女子学園付近にはかなり濃密に分布することが明らかにされている。

引用文献

丑野　毅　1974「神奈川県鎌倉市台遺跡調査報告書」『人文科学科紀要』第59輯　東京大学教養学部人文科学科
手塚直樹　1985『台山藤源治遺跡』台山藤源治遺跡発掘調査団
斉木秀雄・宗臺秀明　1985「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』１　鎌倉市教育委員会

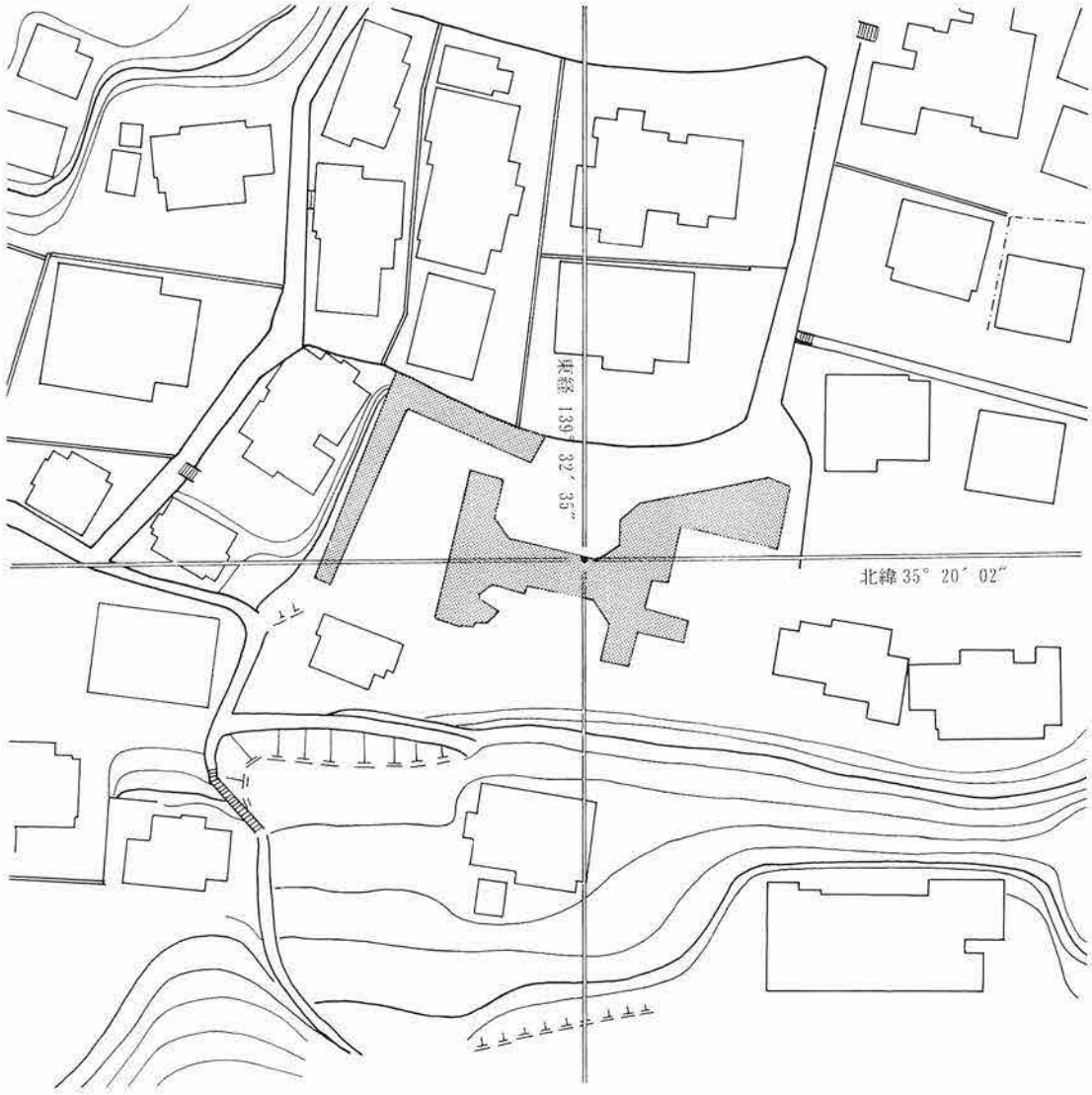
玉林美男・親国哲也　1988 「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』4　鎌倉市教育委員会
宗臺秀明　1993 『台山藤源治－第３次調査－』台山遺跡発掘調査団
大河内勉　1996 『台山藤源治遺跡－２次調査－』台山遺跡発掘調査団
野本賢二　1997 「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13　鎌倉市教育委員会

第２章　調査の概要

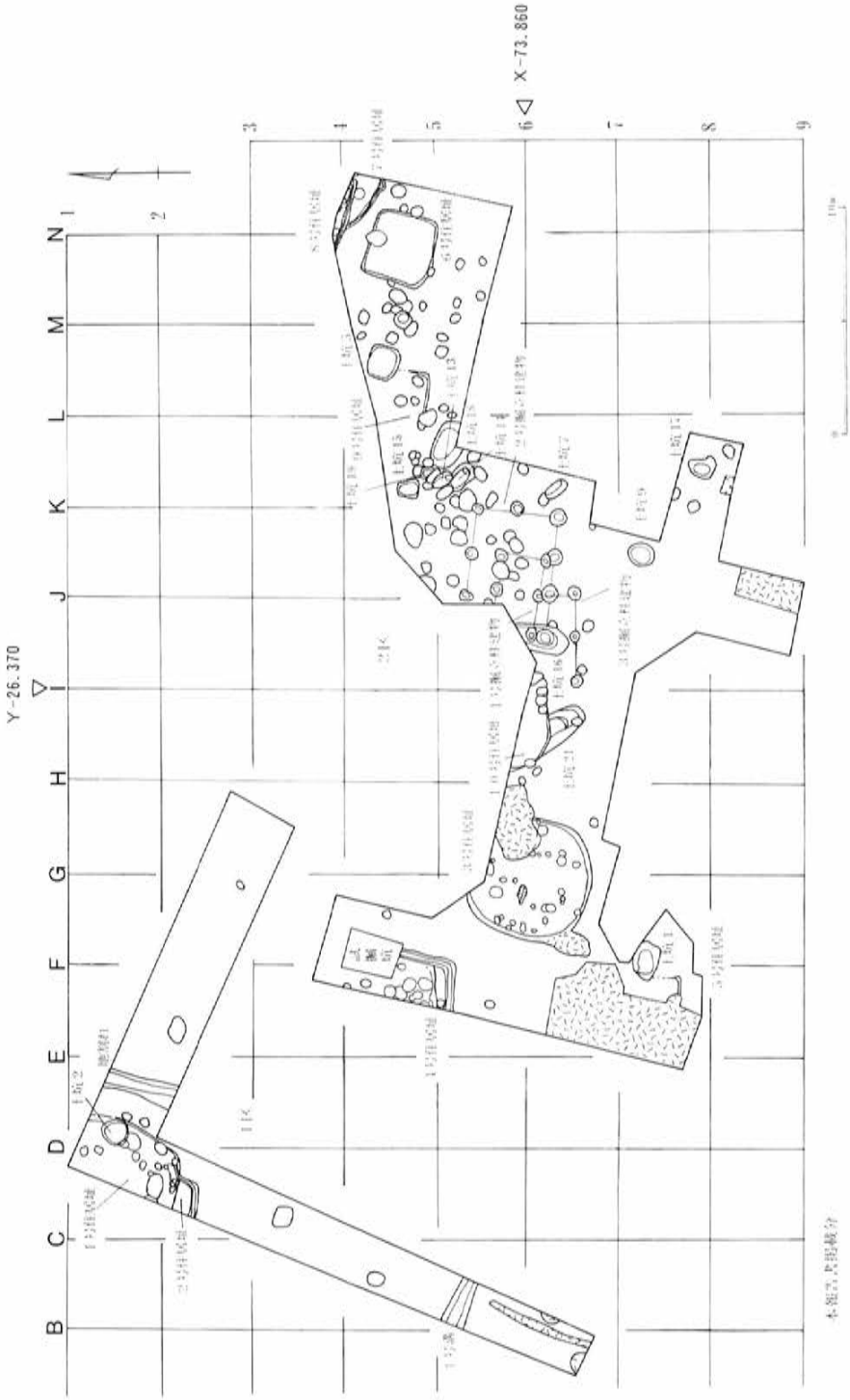
第１節　調査の方法

調査区は国家座標に準じて４ｍピッチに杭を配し、これを基にグリッドを南北方向に北から１～９、東西方向に西からＡ～Ｏのラインを設定し、グリッド呼称は北東を起点とすることとした。なお先行して行った調査区を便宜上１区とし、他を２区とした。

調査にあたっては地山直上まで中世以降の整地層が認められたため、重機と手掘りを併用し、その後の検出・掘下げを手掘りで行った。竪穴住居址については壁に直交する十字のセクションベルトを設け、できる限り層ごとに掘下げを行った。竪穴住居址の竈は遺存状態が悪かったため、焼土ブロックを確認した段階で範囲を図化し、その後、断ち割り調査を行って断面図を作成した。また、遺物の取り上げについては遺構出土遺物のうち竪穴住居址床面に近いもの、特徴的なものに関しては、出土位置、レベルを記録した後に取り上げを行った。



第２図　調査区位置図（1/750）



第３図　遺構全体図（1/300）

第２節　基本層序

本調査地点の基本層序は、地表面から表土、Ⅰ層、Ⅰ'層、Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅳ層に区分される。

表土　現況前の民家に伴う整地層

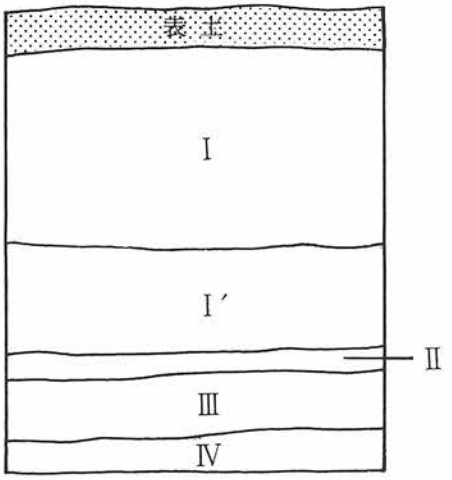
Ⅰ層　暗褐色土　しまりあり、粘性よわい。土丹粒（φ0.2cm）、炭（φ0.2cm）、かわらけ片含む。層厚は80cmである。（中世以降の整地層）

Ⅰ'層　暗褐色土　しまりあり、やや砂質。Ⅰ層より土丹粒（φ0.3～0.5cm）、炭（φ0.4cm）、かわらけ片多く含む。層厚は１ｍである。（中世以降の整地層）

Ⅱ層　暗褐色土　しまりあり、粘性あり。ローム粒多量（φ0.1～0.3cm）に含む。橙色スコリア（φ0.1cm）含む。Ⅰ'層による削平のため層厚は６cmである。（遺構覆土に最も多く見られる。）

Ⅲ層　暗褐色土　しまりあり、粘性あり。ローム粒（φ0.1～0.2cm）・橙色スコリア（φ0.1cm）少量含む。層厚は15cmである。

Ⅳ層　褐色土　ローム漸移層。



第４図　基本土層図

第３章　検出された遺構・遺物

第１節　竪穴住居址

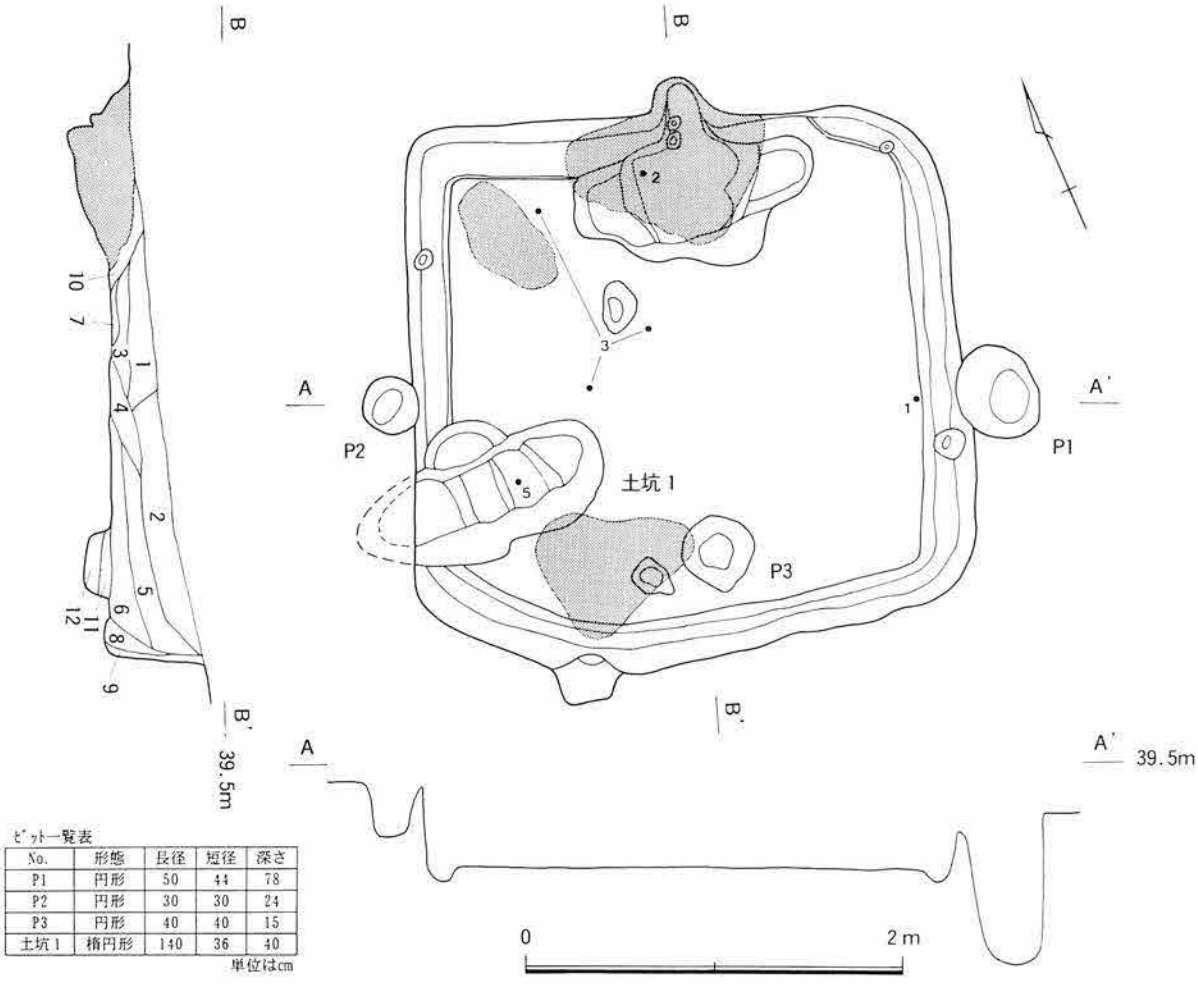
６号住居址（第５・６・７図、第１表、図版３）

位置　２区４Ｍグリッド。

平面形・規模　平面形は正方形を呈する。規模は一辺が2.9m、面積は8.4m²である。主軸方位はＥ－18°－Ｗを示す。

覆土　19層に区分される。

床面・壁・周溝　床面はローム層を掘り込んだ直床で、高さは標高38.9mである。床面は硬くしまって



ピット一覧表

No.	形態	長径	短径	深さ
P1	円形	50	44	78
P2	円形	30	30	24
P3	円形	40	40	15
土坑１	楕円形	140	36	40

単位はcm

土層注記

1．暗褐色土　しまりあり、粘性あり。焼土（φ0.5cm）・炭粒・ローム粒・橙色スコリア（φ0.1～0.2cm）多量に含む。
2．黒褐色土　しまりあり、粘性ややあり。８層と近似する。焼土・炭粒少量含む。橙色スコリア・ローム粒（φ0.1～0.2cm）多量に含む。
3．黒褐色土　しまりあり、粘性あり。４層よりハードロームブロック（φ２～３cm）・焼土多量に含む。
4．黒褐色土　しまりあり、粘性ややあり。５層に近似する。ハードロームブロック（φ１cm）含む。
5．黒褐色土　しまりあり、粘性ややあり。２層より橙色スコリア・ローム粒（φ0.1～0.2cm）やや多く含む。炭粒・焼土少量含む。
6．黒褐色土　しまりあり、粘性あり。９層より橙色スコリア・ローム粒（φ0.1～0.2cm）少量含む。炭粒・焼土（φ0.2～0.3cm）多量に含む。
7．黒褐色土　しまりやや弱く、粘性あり。灰・炭粒・焼土（φ0.5cm）含む。
8．黒褐色土　しまりあり、粘性ややあり。橙色スコリア・炭粒・ローム粒（φ１～２cm）少量含む。
9．褐色土　しまりなし、粘性弱い。橙色スコリア（φ0.1～0.2cm）少量含む。ソフトローム含む。

第５図　６号住居址（1/40）

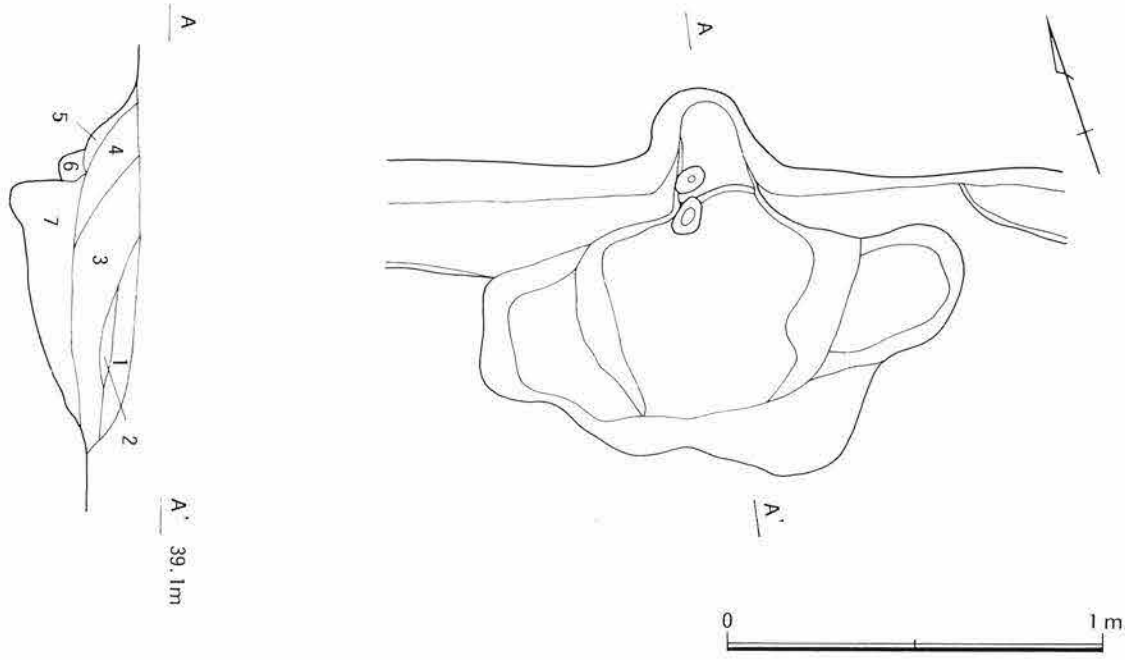
いる。壁高は残存で南側は0.5m、北側は第Ⅰ'層による削平がはげしいため、0.2mを測る。周溝は竈の部分を除き全周し、規模は幅0.16m、深さ0.1mである。

柱穴・土坑　住居址内で柱穴は確認されなかったが、ピット1・2は本址に伴うものと考えられる。覆土は第1層に近似する。梯子穴にはピット3が該当すると考えられる。南西隅には貯蔵用の施設と考えられる土坑が存在する。この土坑は階段状に斜めに掘り込み、壁を穿った横穴状を呈する。

竈　北側中央に位置する。全く原形をとどめていなかったが、1×0.9mの範囲で焼土塊が認められた。掘り込みの規模は1.3×1.0mを測る。壁の掘り込みは約30cmと張り出しが弱く、煙道部がわずかに外に出るだけである。また焼土塊中から支脚と考えられる、17.0cm×5cmの土丹の切石を検出した。この竈の反対側にあたる南側西寄りの壁のくぼみには焼土、灰および粘土が多く見られ、竈の作り替えの可能性が高い。これとは別に、床面上から2ヵ所で焼土が確認された。

遺物の出土状況　本址ではほとんどの遺物が下層にあたる第3・6層から出土した。2の甕は竈覆土第1層から出土した。3の坏は割れた状態で床に散乱していた。

出土遺物　本址では土器が245点ほど出土し、そのうち図示し得たのは5点である。1は下層出土の湖西古窯跡産とみられる須恵器蓋である。端部は外反気味で、折り曲げによって端部を形成している。こうした特徴は湖西編年の第Ⅲ期第3小期（735年前後）に該当するものであろう。2は相模型甕の胴部下半の破片である。3・4は相模型坏である。3は口径の割に器高が低く、底部に丸味をのこしている。4も3と同じく口径の割りに器高が低いことから、3・4ともに草山編年（1990　長谷川）での第Ⅳ期

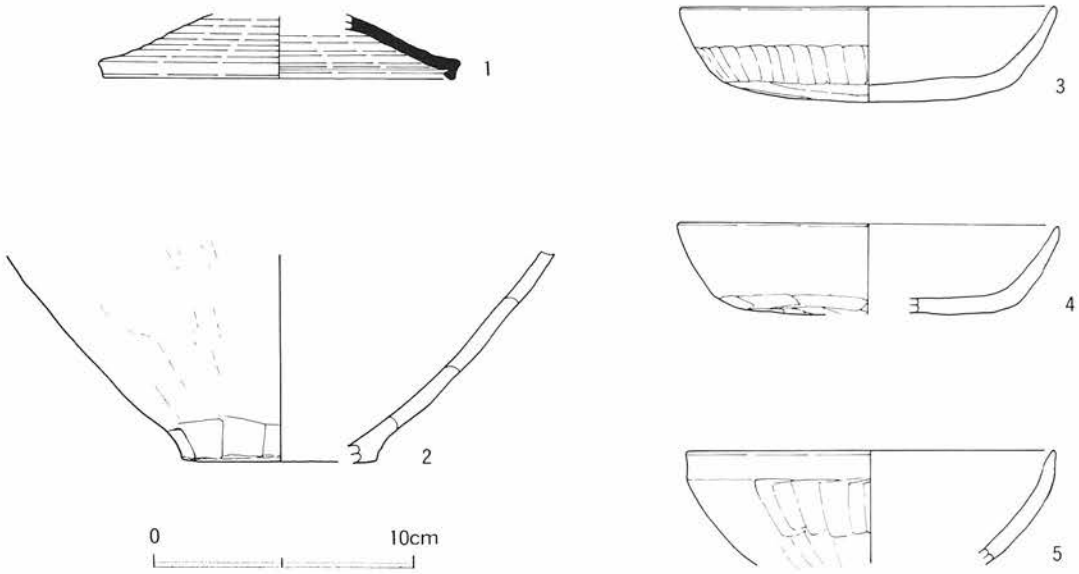


土層注記
1．褐色土　しまりあり、粘性あり。焼土粒・炭粒（φ0.2～0.3cm）少量含む。
2．褐色土　しまりあり、粘性あり。粘土多量に含む。炭粒（φ0.3～0.4cm）含む。
3．暗褐色土　しまりあり、粘性ややあり。粘土多量に含む。ローム粒含む。
4．暗褐色土　しまりあり、粘性ややあり。焼土多量に含む。粘土粒（φ0.2～0.3cm）やや多く含む。炭粒（φ0.2～0.3cm）含む。
5．褐色土　しまりあり、粘性弱い。焼土粒・炭粒含む。ソフトローム含む。
6．褐色土　しまりあり、粘性なし。橙色スコリア（φ0.1～0.2cm）・焼土粒（φ0.1～0.2cm）・炭粒（φ0.2～0.3cm）含む。ソフトローム土含む。
7．褐色土　しまりなし、粘性なし。焼土粒多量に含む。粘土粒含む。ソフトローム土含む。

第6図　6号住居址竈（1/20）

（730年～750年）に該当しよう。5も3・4と同時期と考えられる。

帰属時期　1の須恵器蓋と土師器の年代観はほぼ一致し、ともに8世紀第2四半期ごろという結果が出た。したがって本址は8世紀第2四半期ごろと比定されよう。



第7図　6号住居址出土遺物（1/3）

第1表　6号住居址出土遺物観察表

図版No.	器　種	観　察　内　容
7－1	蓋 須恵器	法量　口径7.0　残存高2.5　残存率1/8　調整・文様　ロクロ成形　胎土　密　焼成　良好　色調　にぶい黄色　出土位置　下層
－2	甕 土師器	法量　底径(8.2)　残存高8.1　残存率　胴下部～底部破片　調整・文様　内外面－ヘラナデ　胎土　やや砂質（雲母多量）　焼成　良好　色調　にぶい褐色　出土位置　下層　備考　外面スス付着
－3	坏 土師器	法量　口径15.0　底径10.4　器高3.7　残存率　ほぼ完形　調整・文様　外面－体部・底部ヘラケズリ，口縁部ヨコナデ　内面－ナデ　胎土　密（シルト質）　焼成　良好　色調　橙色　出土位置　床直
－4	坏 土師器	法量　口径(15.2)　底径(12.1)　残存高3.6　残存率1/4　調整・文様　外面－底部ヘラケズリ，口縁部ヨコナデ　内面－ナデ　胎土　密　焼成　良好　色調　橙色　出土位置　上層
－5	坏 土師器	法量　口径(14.7)　残存高4.5　残存率1/5　調整・文様　外面－底部ヘラケズリ，口縁部ヨコナデ　内面－ナデ　胎土　密（ややシルト質）　焼成　良好　色調　橙色　出土位置　下層

7号住居址（第8・9図、第2表）

位置　2区4Nグリッド。8号住居址に切られる。

平面形・規模　平面形・規模共に不明である。

覆土　7層に区分される。

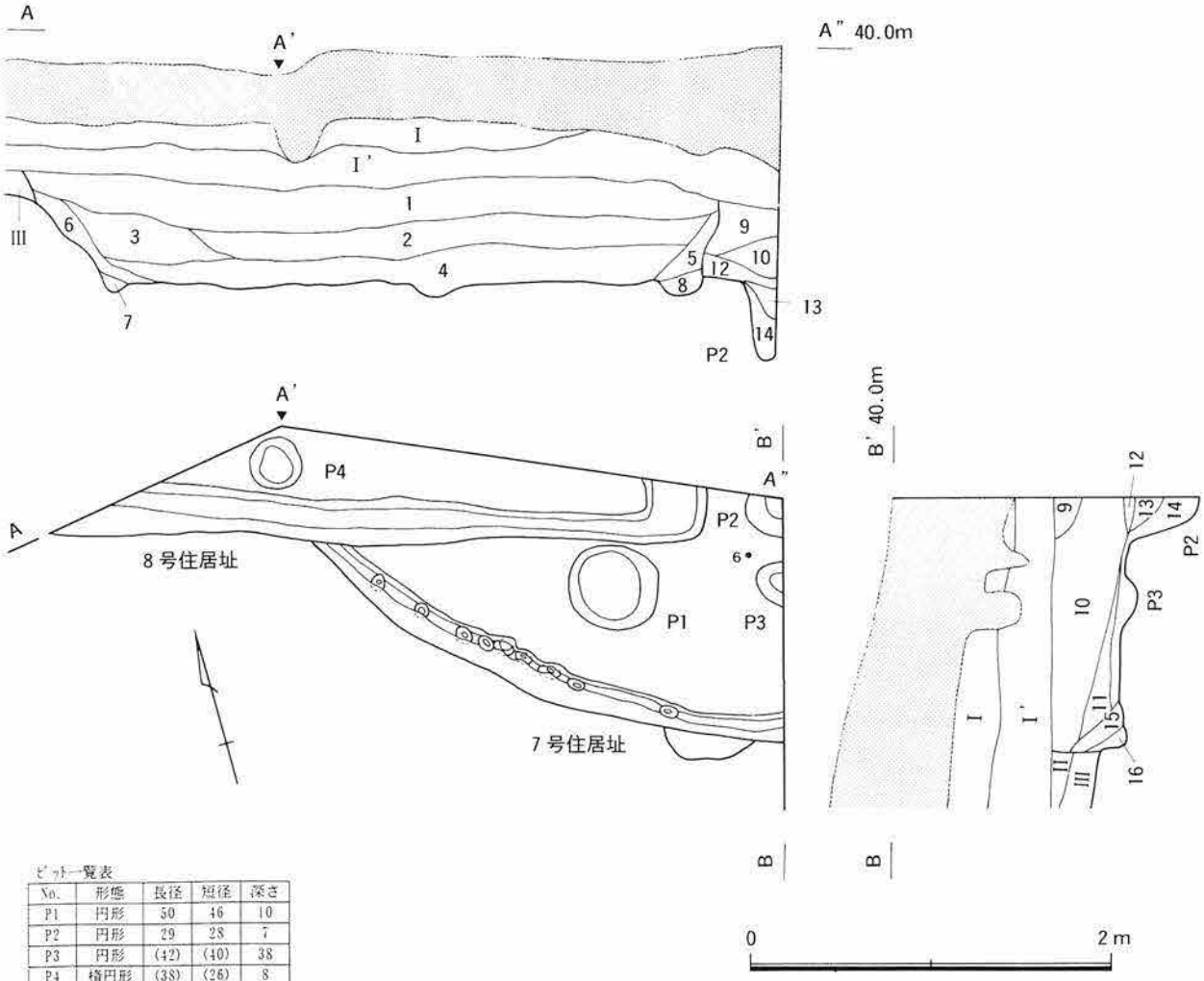
床面・壁・周溝　床面はローム層を掘り込んだ直床で、高さは標高38.7mである。壁高は残存で0.4mを測る。周溝は幅12cmと狭く断面はU字形を呈する。また周溝内で直径約6cmの穴を9ヵ所検出した。

柱穴・土坑　ピットは3本検出されたが、主柱穴は認められなかった。

炉　検出されなかった。

出土遺物　本址では土器が30点ほど出土したが、いずれも破片資料ばかりで図上復元し得たものはなく、拓影図8点しか掲載できなかった。そのうち1・6～8は床面直上出土であることから本址の時期を示すものと考えられる。これらの土器はいずれも弥生後期の東京湾岸系（久ヶ原式）土器である。

甕（1・2）は口縁部に交互押捺の施されたヘラナデ調整甕に限られる。壺（3～8）は複合部の幅



ピット一覧表

No.	形態	長径	短径	深さ
P1	円形	50	46	10
P2	円形	29	28	7
P3	円形	(42)	(40)	38
P4	楕円形	(38)	(26)	8

（　）は推定　単位はcm

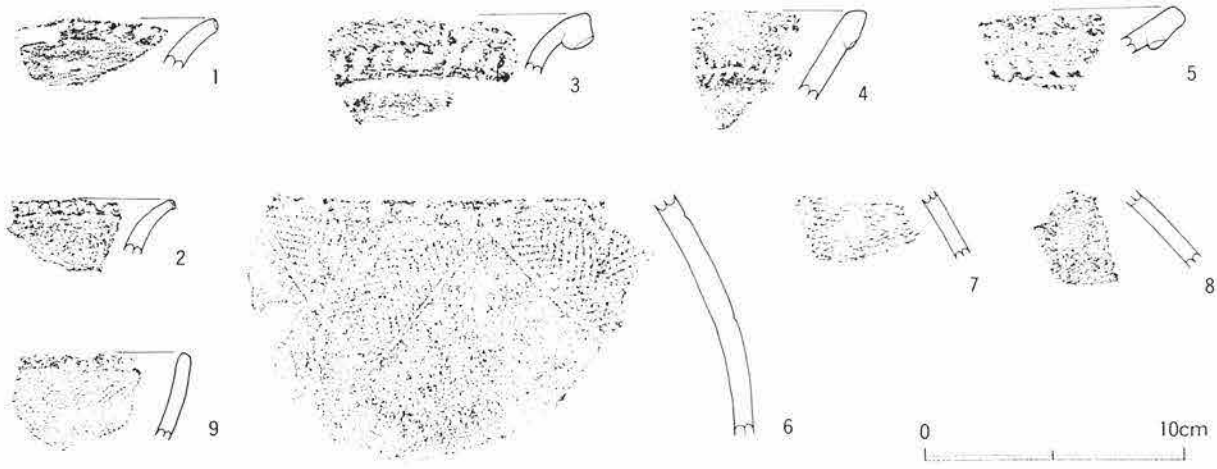
土層注記

1. 暗褐色土　しまりあり、粘性弱い。やや砂質。橙色スコリア少量含む。ローム粒（φ0.1～0.3cm）多量に含む。
2. 暗褐色土　しまりあり、粘性弱い。橙色スコリア少量含む。ローム粒（φ0.1～0.2cm）多量に含む。
3. 暗褐色土　しまりやや弱い、粘性あり。橙色スコリア・ローム粒少量含む。
4. 暗褐色土　しまりあり、粘性ややあり。炭粒・橙色スコリア・ローム粒（φ0.1～0.2cm）やや多く含む。
5. 暗褐色土　しまりあり、粘性ややあり。焼土粒（φ0.3～0.4cm）・炭粒少量含む。ローム粒（φ0.1～0.3cm）多量に含む。
6. 暗褐色土　しまりややあり、粘性ややあり。ハードロームブロック（φ1～2cm）・橙色スコリア・ローム粒（φ0.1～0.2cm）含む。
7. 暗褐色土　しまり弱く、粘性ややあり。橙色スコリア・ローム粒少量含む。ハードロームブロック・ソフトローム土含む。
8. 暗褐色土　しまりあり、粘性ややあり。5層より焼土粒多量に含む。灰白色スコリア（φ0.3～0.4cm）少量含む。ソフトローム土含む。
9. 暗褐色土　しまりやや弱く、粘性あり。焼土粒（φ0.2～0.8cm）多量に含む。ローム粒（φ0.1～0.5cm）含む。
10. 暗褐色土　しまりあり、粘性あり。ローム粒多量に含む。橙色スコリア・焼土粒（φ0.3～0.4cm）含む。
11. 暗褐色土　しまりあり、粘性ややあり。橙色スコリア（φ0.1～0.2cm）多量に含む。ローム粒（φ0.2～0.3cm）少量含む。
12. 暗褐色土　しまりやや弱い、粘性ややあり。ローム粒（φ0.2～0.3cm）多量に含む。炭粒（φ0.1～0.2cm）・焼土粒（φ0.1～0.2cm）含む。
13. 暗褐色土　しまりやや弱い、粘性普通。ハードロームブロック（φ1～2cm）少量含む。ソフトローム土含む。
14. 暗褐色土　しまりあり、粘性あり。ローム粒少量含む。橙色スコリア（φ0.2～0.3cm）・炭粒（φ0.2cm）含む。
15. 暗褐色土　しまりあり、粘性あり。ローム粒・橙色スコリア（φ0.1～0.2cm）少量含む。
16. 褐色土　しまりややあり、粘性弱い。橙色スコリア・ローム粒（φ0.1～0.2cm）少量含む。暗褐色土含む。

第8図　7号・8号住居址（1/40）

が全体に狭いことから弥生時代後期でも比較的古式のタイプに属すると考えられる。文様構成は古式の要素として振幅の大きい連続山形文の見られる一方で、後出的要素といえる結節縄文帯も存在する。

帰属時期　本址の時期は、出土した土器から弥生時代後期中葉ごろと考えられる。



第９図　７号住居址出土遺物（1/3）

第２表　７号住居址出土遺物観察表

図版No.	器　種	観　察　内　容
9－1	甕	残存率　口縁部破片　調整・文様　内外面－ヘラナデ，口唇部は棒状工具でキザミメ　胎土　密　焼成　良好　色調　橙色　出土位置　床直
－2	甕	残存率　口縁部破片　調整・文様　外面－口縁部に１段の輪積痕→ナデ，口唇部は交互押捺　内面－ヘラナデ　胎土　やや密　焼成　良好　色調　暗赤褐色　出土位置　床直
－3	壺	残存率　口縁部破片　調整・文様　外面－複合部に単節縄文（RL）→下端にキザミメ，無文部はヘラナデ→ミガキ→赤彩　内面－ヘラナデ→ミガキ→赤彩　胎土　やや密　焼成　良好　色調　橙色　出土位置　下層
－4	壺	残存率　口縁部破片　調整・文様　外面－複合部に羽状縄文（LR・RL）→下端にハケ状工具でキザミメ，頸部はヘラナデ（？）　内面－ヘラナデ　胎土　やや密　焼成　良好　色調　にぶい黄橙色　出土位置　下層
－5	壺	残存率　口縁部破片　調整・文様　外面－複合部下端にハケ状工具でキザミメ，口唇部に単節縄文（RL）　内面－ヘラナデ→赤彩　胎土　密　焼成　良好　色調　橙色　出土位置　下層
－6	壺	残存率　胴部破片　調整・文様　外面－胴部上半に羽状縄文充塡の連続山形文，無文部はミガキ（？）→赤彩　内面－ヘラナデ　胎土　やや砂質（雲母多し）　焼成　良好　色調　橙～赤色　出土位置　床直
－7	壺	残存率　胴部破片　調整・文様　外面－肩部にＳ字状結節文帯　内面－ヘラナデ　胎土　密　焼成　良好　色調　橙色　出土位置　床直
－8	壺	残存率　胴部破片　調整・文様　外面－肩部に１条のＳ字状結節縄文を挟んだ羽状縄文（Ｒ・Ｌ）　内面－ヘラナデ　胎土　やや砂質（砂粒やや多し）　焼成　良好　色調　明黄色　出土位置　下層
－9	高坏（鉢）	残存率　口縁部破片　調整・文様　外面－口唇部に単節縄文（RL），口縁部に羽状縄文（LR・RL）　内面－ヘラナデ（？）　胎土　密　焼成　良好　色調　にぶい黄色　出土位置　下層

８号住居址（第10図、第３表）

位置　２区４Ｎグリッド。７号住居址を切る。

平面形・規模　平面形は方形を呈すると推定される。規模・主軸方位は不明である。

覆土　９層に区分される。

床面・壁・周溝　床面はローム層を掘り込んだ直床で、高さは標高38.6mである。壁高は残存で0.6mを測る。検出した範囲には壁に沿って周溝が認められ、規模は幅24cm、深さ10cmを測る。

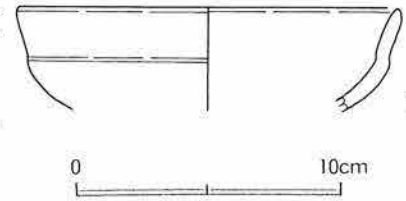
柱穴・土坑　ピットは1本検出されたが、主柱穴は認められなかった。

炉　検出されなかった。

出土遺物　本址では43点の遺物が出土したが、いずれも小片でそのうち図示できたのは土師器坏１点だ

けである。1の坏はいわゆる模倣坏であるが、稜直下に横ヘラケズリが施されることから相模型坏の成立直前形態と考えられる。

時期　本址の時期は、出土した土器から8世紀前葉に比定されよう。



第10図　8号住居址出土遺物（1/3）

第3表　8号住居址出土遺物観察表

図版No.	器　種	観　察　内　容
10－1	坏 土師器	法量　口径(14.8)　残存高4.0　残存率　口縁破片1/14　調整・文様　外面－口縁部はナデ　底部はヘラケズリ 内面－ナデ　胎土　極めて密　焼成　良好　色調　にぶい黄橙色　出土位置　床直

9号住居址（第11図）

位置　2区4Lグリッド。

平面形・規模　平面形は方形を呈すると推定される。規模・主軸方位は不明である。

覆土　2層に区分される。

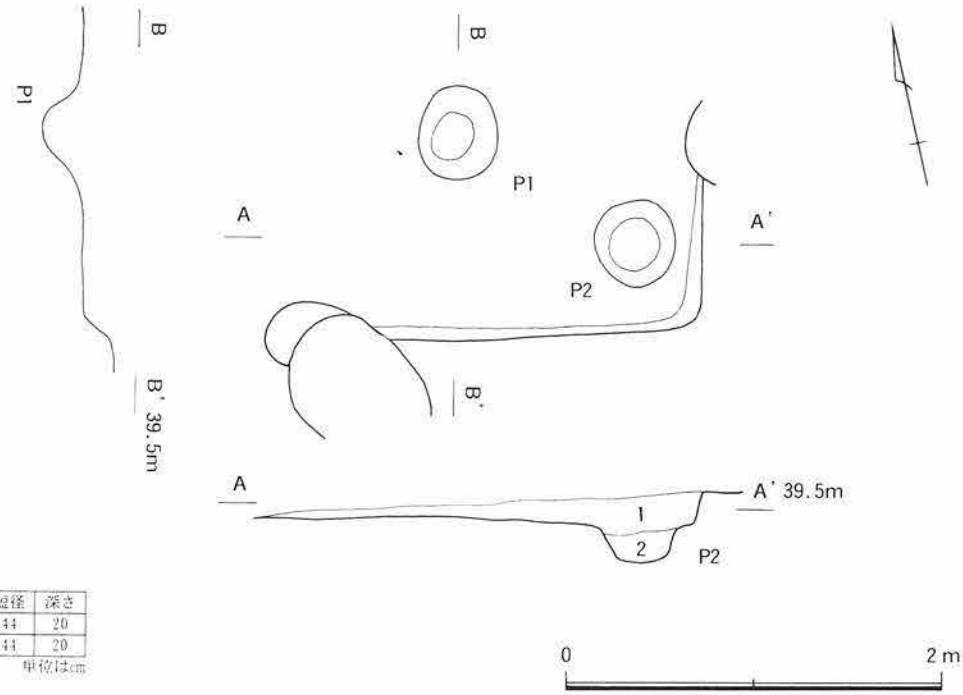
床面・壁・周溝　床面はローム層を掘り込んだ直床で、高さは標高39.4mである。壁高は東側で0.2mを測るが、北・西側は第Ⅰ'層による削平のため床面のみ確認した。周溝は認められなかった。

柱穴・土坑　ピットは2本検出されたが、主柱穴は認められなかった。

炉　検出されなかった。

出土遺物　図示し得なかったが、土器小片が22点出土した。

帰属時期　不明である。



ピット一覧表

No.	形態	長径	短径	深さ
P1	円形	44	44	20
P2	円形	44	44	20

単位はcm

土層注記

1．暗褐色土　しまりあり、粘性ややあり。橙色スコリア（φ0.1～0.2cm）少量含む。ローム粒（φ0.2～0.3cm）含む。

2．暗褐色土　しまり弱い、粘性ややあり。橙色スコリア（φ0.1～0.2cm）・ローム粒（φ0.2～0.3cm）・ハードロームブロック（φ5～6cm）少量含む。

第11図　9号住居址（1/40）

第２節　土坑

７号土坑（第12図）

位置　２区６Ｋグリッド。

概要　平面形は楕円形を呈する。規模は長軸1.1m、短軸0.54mである。深さはＩ'層に削平されていたため、0.2mを測る。

出土遺物　遺物は出土しなかった。

帰属時期　不明である。

13号土坑（第12図）

位置　２区５Ｋグリッド。

概要　平面形は楕円形を呈する。規模は長軸0.96m、短軸0.5m、深さは0.1mである。

出土遺物　遺物は出土しなかった。

帰属時期　不明である。

14号土坑（第12図）

位置　２区５Ｋグリッド。

概要　平面形は不整形な楕円形を呈する。規模は長軸が推定で1.4m、短軸が0.8m、深さは0.7mを測る。土坑中央に直径16cmの穴が存在する。

出土遺物　遺物は出土しなかった。

帰属時期　不明である。

18号土坑（第12図）

位置　２区５Ｋグリッド。19号土坑を切っている。

概要　平面形は楕円形を呈する。規模は長軸２m、短軸1.3mで、深さは0.3mを測る。

出土遺物　遺物は出土しなかった。

帰属時期　不明である。

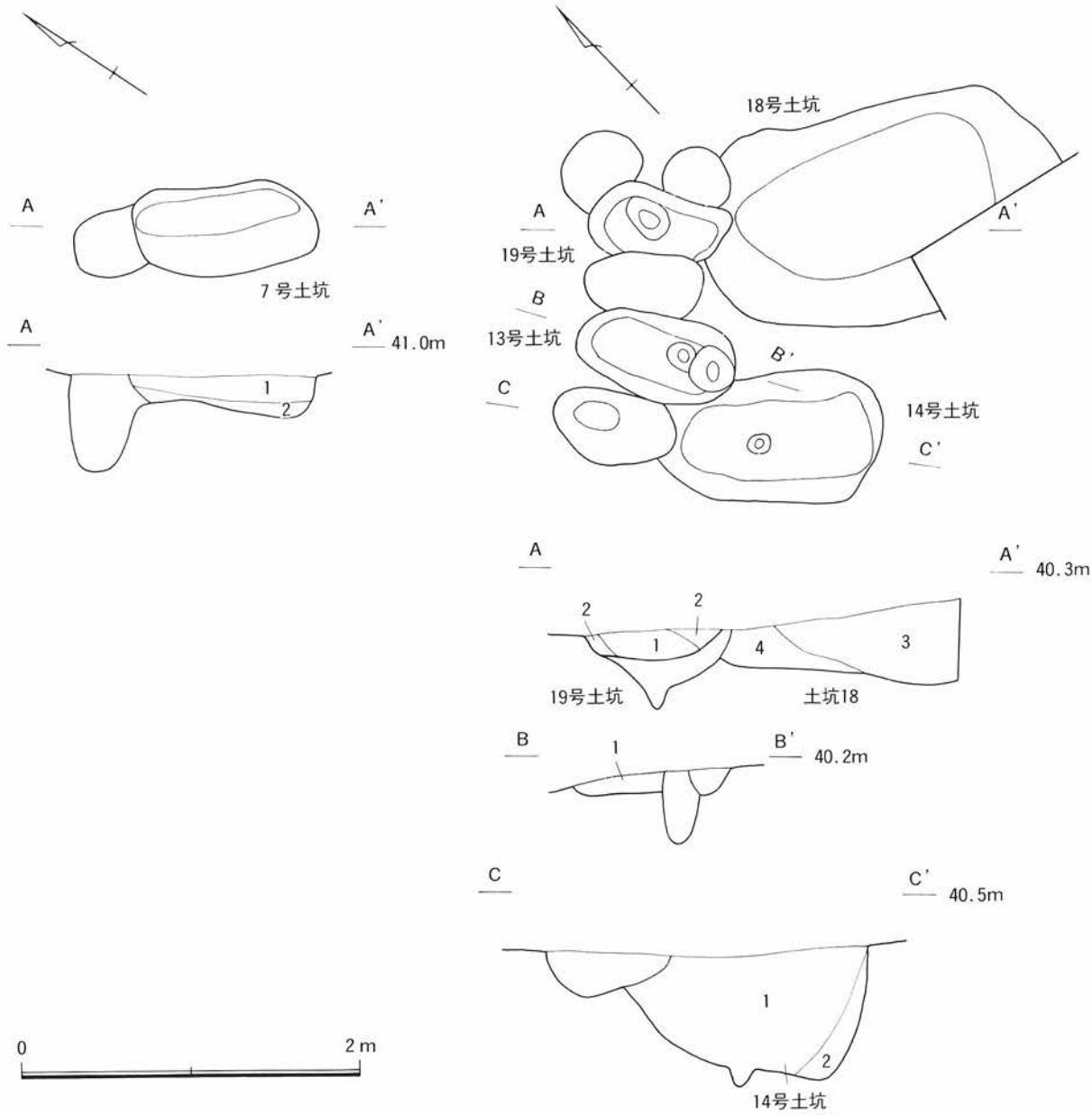
19号土坑（第12図）

位置　２区５Ｋグリッド。19号土坑に切られている。

概要　平面形は楕円形を呈する。規模は長軸0.8m、短軸は推定で0.2m、深さは0.2mである。

出土遺物　遺物は出土しなかった。

帰属時期　不明である。



7号土坑
土層注記
1．暗褐色土　しまりあり、粘性あり。橙色スコリア（φ0.1～0.2cm）・ローム粒（φ0.2～0.3cm）含む。
2．褐色土　しまりあり、粘性あり。橙色スコリア（φ0.1～0.2cm）・ソフトローム含む。

13号土坑
土層注記
1．黒褐色土　しまりあり、粘性あり。ハードロームブロック（φ2～3cm）・橙色スコリア（φ0.1～0.2cm）・ソフトローム含む。

14号土坑
土層注記
1．暗褐色土　しまりあり、粘性あり。橙色スコリア（φ0.1～0.2cm）少量含む。
2．暗褐色土　しまりあり、粘性あり。

18・19号土坑
土層注記
1．黒褐色土　しまりあり、粘性ややあり。橙色スコリア・ローム粒（φ0.1～0.2cm）多量に含む。
2．黒褐色土　しまり弱い、粘性弱い。1層に近似するがソフトローム含む。
3．暗褐色土　しまりあり、粘性ややあり。橙色スコリア（φ0.1～0.2cm）少量含む。
4．褐色土　しまりあり、粘性ややあり。橙色スコリア・ローム粒（φ0.2～0.3cm）多量に含む。

第12図　土坑群（1/40）

第4章　まとめ

今回の調査は宅地造成に伴いその住宅専有道路部分（註1）と、個人住宅の改築に伴う範囲を合わせて調査したものであり、その成果を示したのが第13図である。この図でほぼKグリッドラインより西側が専有道路に関わる範囲であり、それよりも東側は個人住宅に伴う範囲にあたる。

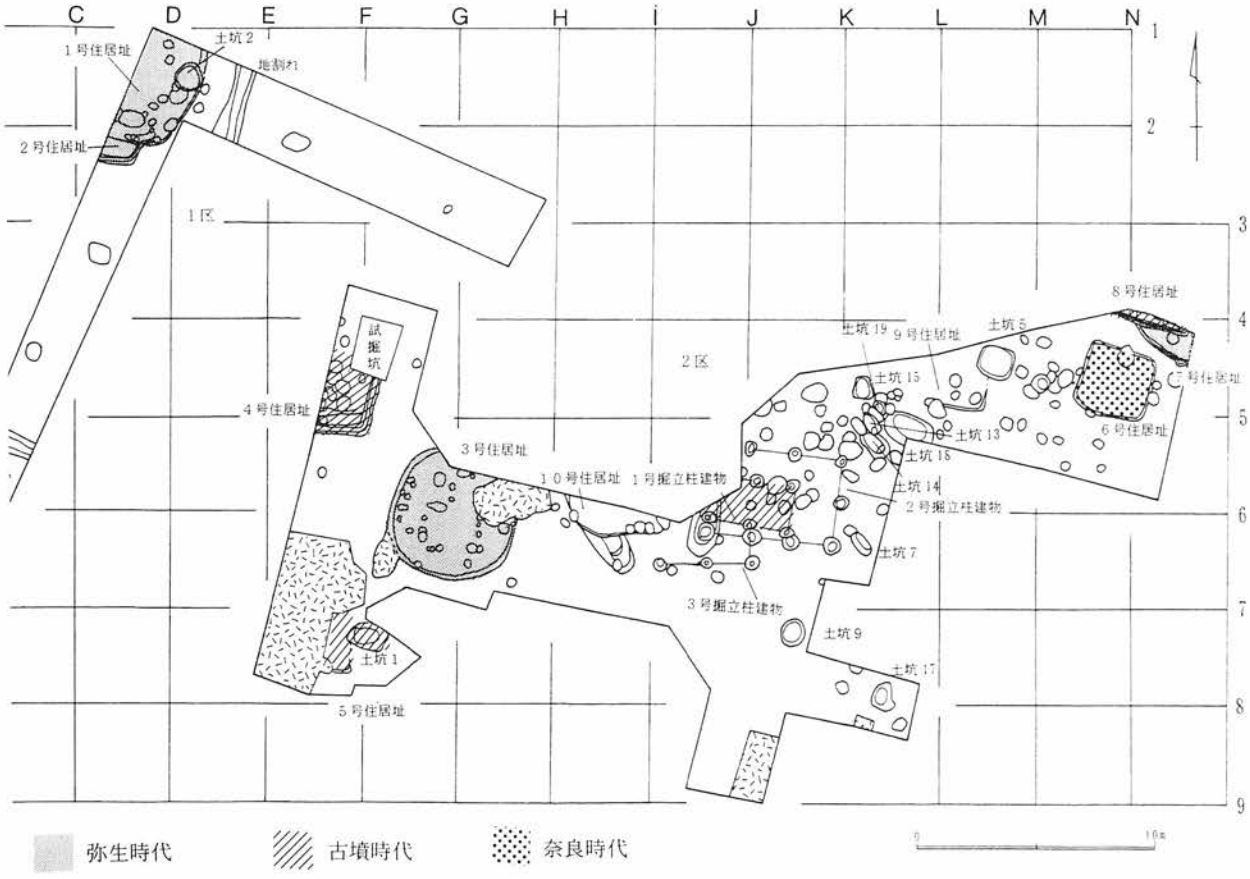
本書では国庫補助事業として実施された個人住宅改築部分の調査成果を第1～4章に収めたが、本来両地区は同一遺跡であり、しかも一連の発掘調査がなされたことを鑑みて、ここでは遺跡全体の調査成果をまとめてみたいと思う。

なお、本遺跡は台山遺跡の中の一部であることはすでに第1章で述べた。したがって正式には台山遺跡第9地点という名称が適当である。こうした本遺跡の位置づけも勘案して、以下では台山遺跡でこれまでに明らかにされている成果を視野に入れて総括してみたい。

今回の調査で発見された遺構は、竪穴住居址10軒・掘立柱建物址3棟・溝1条・土坑6基・ピット23本などであり、それらを時代別に整理すると以下のようである。

縄文時代

縄文時代の遺構はまったく検出されなかった。しかし3号住居址床面上より曽利Ⅲ式に比定される土器片1点と、同住居址覆土中より勝坂Ⅲ式土器片1点がそれぞれ出土した。これまで台山遺跡では、台山藤源治遺跡第1次調査において陥し穴1基、同第3次調査で陥し穴2基、合計3基の陥し穴が検出されているだけで、その他に遺構の調査例はない。遺物では早期・前期の土器片、石器が出土している。



第13図　時期別遺構図（1/300）

こうした資料から周辺に集落址の存在が推測されており、将来、発見される可能性は高い。

なお3号住居址床面上より出土した曽利Ⅲ式の土器片は、住居址廃絶直後に流入したと見るよりも、弥生人がきれいな文様の施文された縄文土器を拾い住居址内に運び込んだ、というような想像をさせる出土状況であった。もしもそうであるとすれば、大変興味深い事例である。

弥生時代

後期の竪穴住居址4軒（1・2・3・7号住居址）が検出された。また最も遺存状態のよい3号住居址からはまとまった量の土器が出土した。

まず、それらの中で重複するのは1・2号住居址の2軒で、両者とも遺物の出土量がきわめて少ないことから2号住→1号住という新旧関係をつかめたに過ぎない。

分布については希薄な状況を示し、大規模集落址とか長期にわたって存続したような集落址とは思われない。主軸方位は一様に西北西を向くと見られるので、一定期間営まれた散村・疎村といったようなあり方である。その時期は、比較的資料に恵まれた3号住居址より、弥生後期中葉ごろと推測される。

さて台山遺跡では、これまでにも台山藤源治遺跡第1次調査などにおいて弥生時代集落の分布が明らかにされている。これらの成果から、この台地上には弥生中期の宮ノ台式期から集落が形成されはじめ後期にいたって集落規模が飛躍的に拡大したことが知られる。本地点の住居址もこうした集落址の一部と考えられるのである。

出土した土器はほぼ東京湾岸系（久ケ原式）土器によって占められる。台山遺跡でこれまでに出土した土器も同様のあり方を示し、他系統の土器はきわめて少ない。この点については、地域性と時期的な要素が強く表れているものと考えられる。すなわち鎌倉市域は本来、東京湾岸系土器様式圏に属するため後期前葉から中葉ごろまでは在地の土器だけを出土する傾向が見られるが、後期後葉になると東海系土器が組成の中に入ってくることが明らかにされている（註2）。台山遺跡に東海系土器がほとんど認められないのはこうした背景があるからであろう。

台山遺跡は市域でも手広八反目遺跡（註3）や大倉幕府周辺遺跡群（註4）などと共に有数の弥生時代遺跡であり、今回の調査では一層資料の充実がなされる結果となった。

古墳時代

遺構は竪穴住居址3軒、掘立柱建物址1棟、土坑1基である。それらを時期ごとに見ると、まず前期に帰属するの5号住居址、中期は1号土坑、後期が4・8号住居址と2号掘立柱建物址という内容である。このうち8号住居址は、厳密には後期末～奈良時代初頭と考えた方がよいかもしれない。

台山遺跡では、これまでに古墳時代後期から奈良時代の竪穴住居址は多数検出されているが、掘立柱建物址の調査例は本地点での1～3号掘立柱建物址が初例である。しかもそれらは同じ場所に棟方向を同一にしていることから建て替えの可能性が高く、時期もほぼ特定するとができたことから、該期集落のあり方を考える上で重要な資料となろう。

遺物では1号土坑出土の完形品2点が注目される。この2点の土器は中期でも古式の様相を備えており、資料的価値は高いといえよう。

奈良時代

この時期の遺構は6号竪穴住居址1軒だけである。しかし前述のように8号住居址も本期に帰属する

可能性がある。6号住居址では大変興味深い付帯施設が検出された。それは壁面に掘り込まれた横穴である。性格は特定し得なかったが、ムロ（室）に似ており、位置的に見ても貯蔵施設の公算が高い。

台山遺跡ではこれまでに明確に奈良時代に位置づけられる住居址は少なく、一時的に集落が衰微したのではないかとされていたが、今回の調査で該期にも集落が存在したことが明白となった。

地割れ

1区E－1グリッドにおいて地割れが検出された。地割れの方向は丘陵斜面に直行しており、走行方位はN－7°－Wである。形成時期については中世の地業を受けているため不明である。

今回の調査は個人住宅の改築に伴って実施されたものであり、また先行して実施された宅地造成に伴う調査も専有道路部分に限られたことから、全掘できた遺構は少なかった。しかし、台山遺跡の過去の調査成果から予想された通り弥生時代から奈良時代の住居址が検出され、台地上に広く分布する集落址の様相を一層明白にし得たことは大きな成果であったといえよう。

註

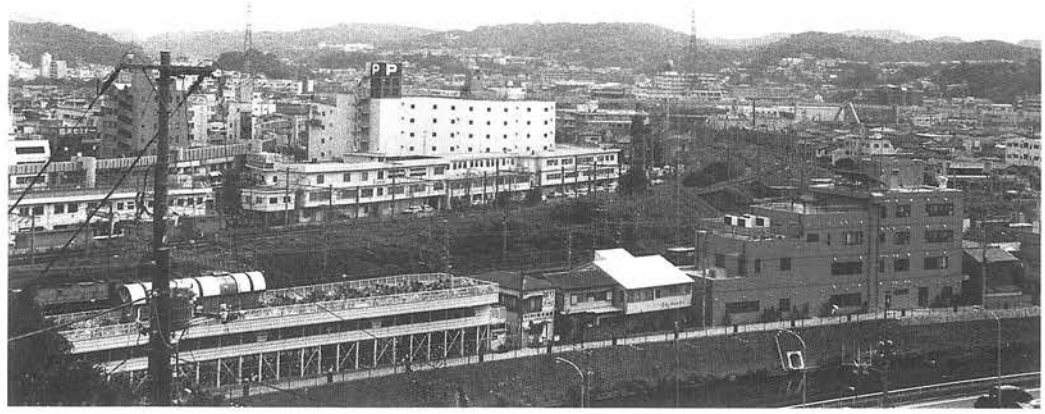
1）若松美智子　1998『台山遺跡発掘調査報告書－西ノ台1733－1外地点』台山遺跡埋蔵文化財発掘調査団・東国歴史考古学研究所

2）斉木秀雄・宗臺秀明　1985『白山遺跡』白山遺跡発掘調査団

3）永井正憲　1984『手広八反目遺跡発掘調査報告書』手広八反目遺跡発掘調査団

4）馬淵和雄　1998『大倉幕府周辺遺跡群（No.49）』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14　鎌倉市教育委員会

写 真 図 版

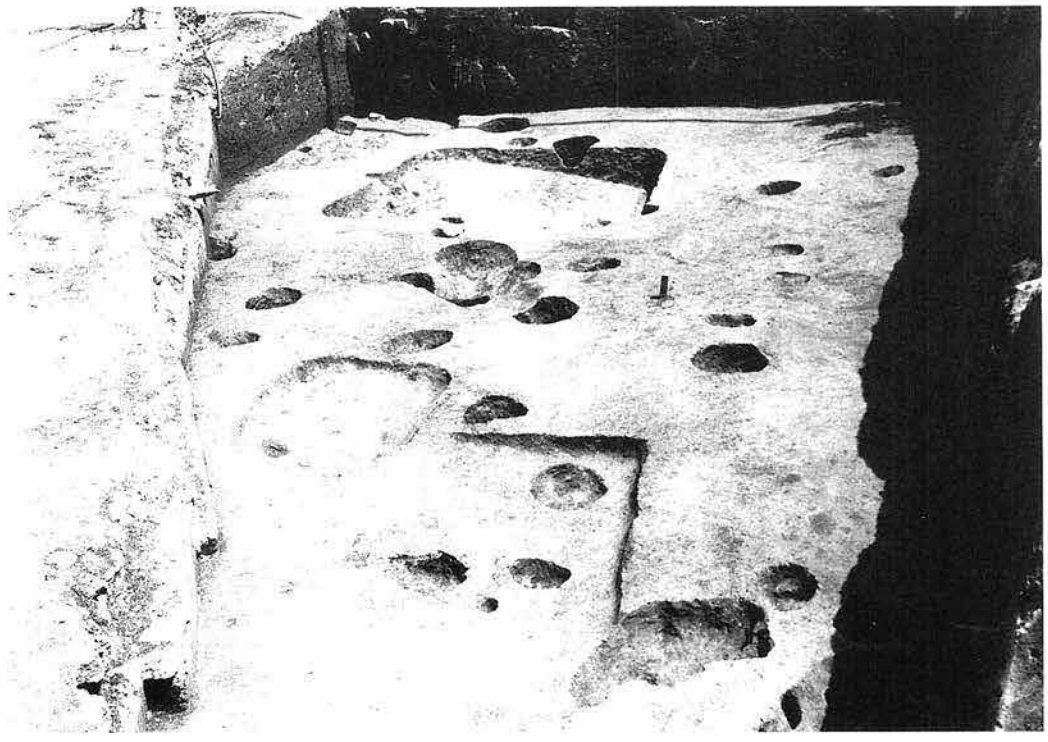


調査地遠景

調査地より大船方向を望む

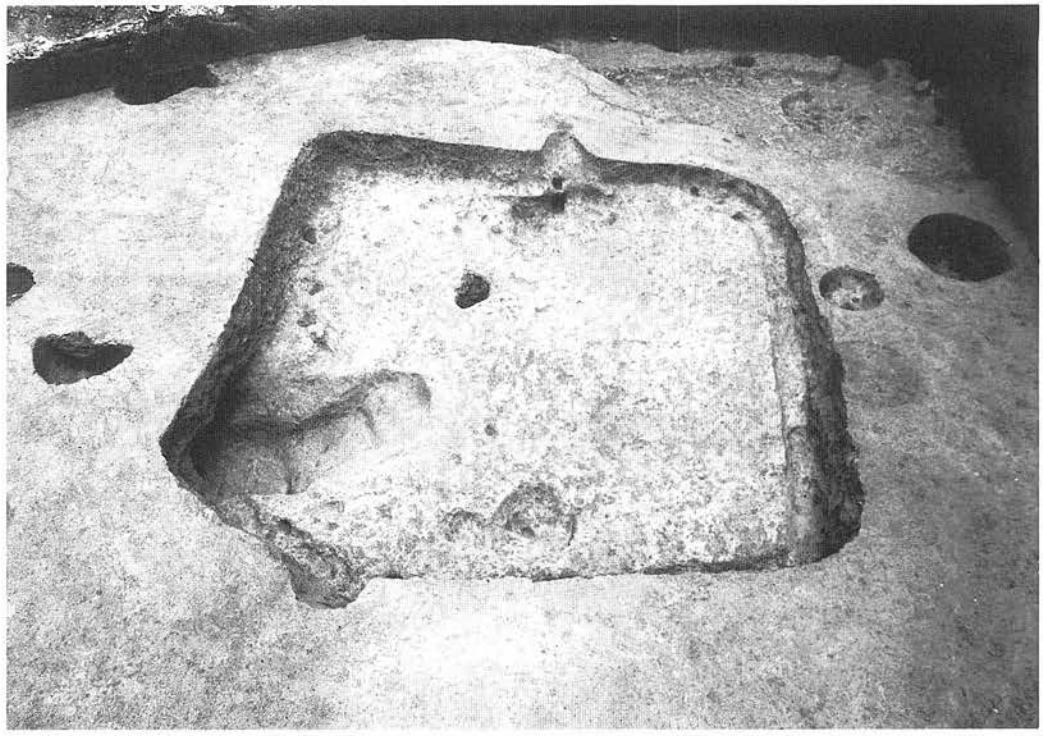
図版 2

西側全景



北側全景

6 号住居址土器出土状況



6 号住居址

報告書抄録

ふりがな	かまくらし きんきゅう ちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成10年度発掘調査報告
巻次	15
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	若松美智子
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248-8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	1999年3月

ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
だいやまいせき 台山遺跡	かまくらしだいあざ にしのだい 鎌倉市台字西ノ台 1733番3外	204	№29	35° 20 02″	139° 32′ 35″	19970714 ～ 19970811	94m²	個人専用住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
台山遺跡	集落跡	弥生時代 ～ 奈良時代	弥生時代 竪穴住居址　1軒 古墳時代 竪穴住居址　1軒 奈良時代 竪穴住居址　1軒 時期不明 竪穴住居址　1軒	弥生時代：弥生土器 古墳時代：土師器 奈良時代：須恵器 土師器	

玉縄城跡（No.63）

たまなわじょうあと

城廻字清水小路673番10地点

例　　言

1．本報は鎌倉市城廻字清水小路673番10に所在する玉縄城跡の発掘調査報告である。

2．調査は個人専用住宅に係る地下車庫造成に先立って実施された。調査面積は22m²である。

3．調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が平成９年８月18日から28日まで行った。

4．本報の編集・執筆・図版作成・写真撮影を大河内勉、トレースを吉田桂子が担当した。

5．調査体制は以下の通り。

主任調査員　大河内勉
調　査　員　汐見一夫
調査補助員　渡辺美佐子・松原康子・吉田桂子
作　業　員　渡辺鉄雄・菅野五郎・出川清次
（鎌倉市シルバー人材センター）

6．調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

第１章　玉縄城と調査地点 …… 132
第２章　調査について …… 134
第３章　検出遺構と堆積土層 …… 135
第４章　まとめ …… 136

挿　図　目　次

図１　玉縄城と調査地点 …… 133
図２　調査区と４級基準点との位置関係 …… 134
図３　遺構実測図 …… 135

図　版　目　次

図版１　１．調査地点周辺　２．調査地点遠景 …… 139
図版２　１．調査地点近景　２．調査地点現況 …… 140
図版３　１．調査区（西から）　２．調査区（北から） …… 141
図版４　１．岩盤削平面１　２．溝１～４ …… 142
図版５　１．西壁セクション　２．南壁セクション …… 143

第１章　玉縄城と調査地点

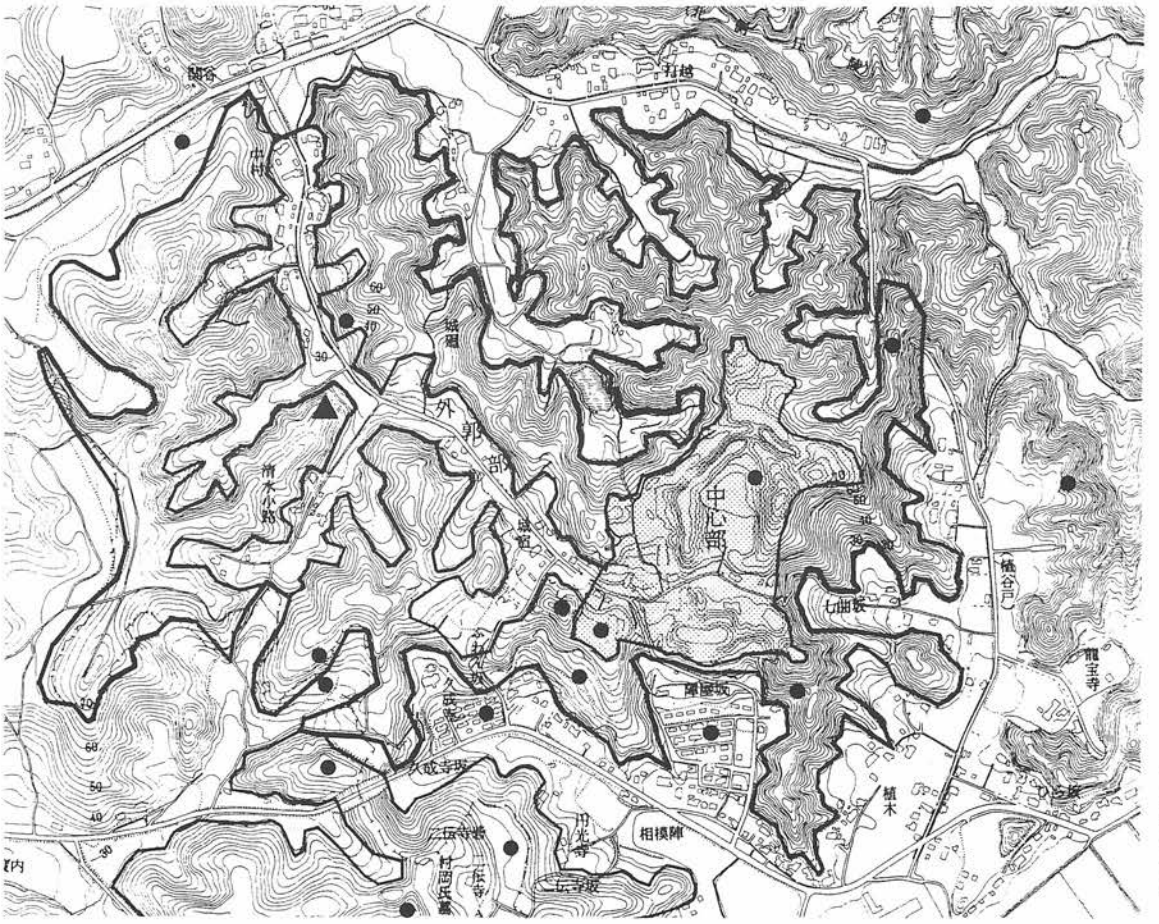
玉縄城は戦国大名後北条氏の有力支城の一つで、該期には東相模地域の領国経営を担っていた。北条早雲により永正９年（1512）に築城、豊臣秀吉の小田原討伐に伴い天正18年（1590）に開城している。近世には廃城後、城の南に松平氏の陣屋が置かれる。

玉縄城の城主は代々「玉縄北条氏」として世襲されており、氏時・為昌・綱成・氏繁・氏舜・氏勝の６代続いたと見られている。氏時は早雲の子で、大永６年（1526）には鎌倉に侵入した安房の里見実堯と戸部川（柏尾川）辺りで戦を交えている。為昌は享禄４年（1531）から天文11年（1542）まで城主であったとされる。鶴岡八幡宮の再興に関わっていたことが知られる。綱成は城主となった時期ははっきりしないが、元亀３年（1572）まで在任していたとされ、最も長く城主を勤めている。武勇の誉れが高い。氏繁は玉縄ばかりでなく、広く関東に足跡を残している。氏舜は天正５年（1577）から同８年（1580）頃に城主であったと見られる。氏勝は最後の城主で、天正18年（1590）豊臣秀吉の軍勢を前に開城している。また、玉縄に拠った後北条氏の家臣は「玉縄衆」と呼ばれ、「小田原衆所領役帳」に玉縄城主とその家臣が名が挙げられている。主要な家臣としては間宮豊前守と行方与次郎がいる。

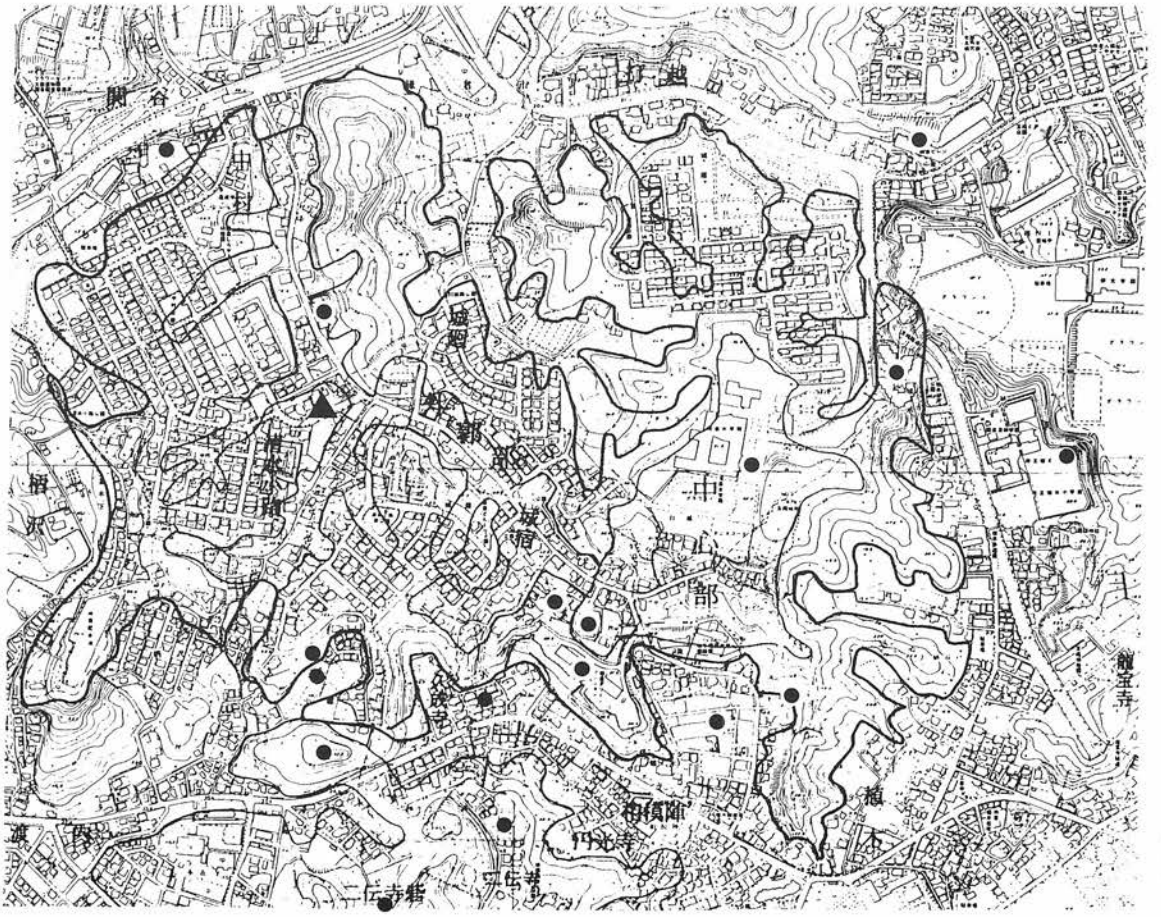
玉縄城は鎌倉市域の北西端に位置し、稜線や谷戸が入り組んだ海抜50～80mほどの低丘陵に築かれている。現在では学校建設・宅地開発・マンション建設などによって、あまり旧状を留めてはいない。城域は図１に示した太線範囲が該当すると思われるが、さらにその周辺地域も城と密接な係りを有していたと考えられ、広大な範囲に及んでいる。城域自体は東寄りに位置する中心部と西側に展開する外郭部に分けられ、さらに周辺地域には城下や砦が点在していた。城の中心部には本丸をはじめとする多くの曲輪や土塁・堀が築かれているの対し、外郭部は大小の谷戸で形成されている。また、城下域には農地が存在し、それとともに家臣の居宅や寺院が点在して、職人・商人が集住して常設ないし定期的な市が設けられ、ある程度の町が形成されていたと思われる。砦には二伝寺砦・高谷砦・おんべ山砦・長尾砦・天神山がある。

玉縄城周辺では今次調査地点を含めて現在までに、18個所で発掘調査が実施されている。図１では●が調査地点、▲が今次調査地点を示す。個々の調査について取り上げることはできないが、玉縄城期の遺構では曲輪・平坦面・切岸・土塁・堀切・縦堀・道路・通路状遺構・建物址・柱穴列・井戸・溝・土壙・ピットなどが、遺物では中国製陶磁器（青磁・白磁・染付）・国産陶磁器（瀬戸・美濃・常滑）・かわらけ・鉄製品（釘・銭貨）・石製品（石臼・砥石・つぶて石）・漆器・木製品などが検出され、廃城後の城割りも確認されている。ただし一部の地点を除くと、遺構・遺物の密度はかなり低く（特に遺物）、玉縄城関連の遺構・遺物が全く発見されないケースも少なくない。

今次調査地点は城内の外郭部に該当し、外郭部を北西－南東に貫通する谷戸に面する。現在では周辺は大規模に宅地造成されているため、調査地点の旧状を正確に知ることは難しいが、北側に伸びる尾根の先端付近に位置するものと思われる。字名は城廻字清水小路となり、北条家朱印状にみえる「玉縄清水曲輪」に係る地域と考えられよう。



（一九五〇年代）



（一九八〇年代）

図１　玉縄城と調査地点（1／10,000）

第2章　調査について

平成９年７月２・３日に実施された試掘調査の成果を受けて、同年８月18日から28日まで本調査を行なった。調査地点は道路面より一段高い、雛壇状に造成された宅地である。調査は道路に面した階段と車庫部分を対象にしたが、擁壁の裏側と埋設物部分を掘り残したため、調査範囲は狭くなっている。

調査はすべて手掘りで行なった。平面図は平板で実測し、グリッドは設定しなかった。また、調査区と４級基準点の位置関係並びに国土座標上の位置は図２に示した。

現地調査の経過は次の通り。

平成９年８月18日	（月）	曇	調査区設定。掘り下げ。写真撮影。
8月19日	（火）	曇のち晴	掘り下げ（岩盤面検出）。
8月20日	（水）	晴	掘り下げ（岩盤面検出）。
8月21日	（木）	晴	掘り下げ（岩盤面検出）。
8月22日	（金）	晴	掘り下げ（岩盤面検出）。岩盤面精査。溝掘り。
8月25日	（月）	曇	掘り下げ（岩盤面検出）。岩盤面精査。溝掘り。写真撮影。
8月26日	（火）	曇一時晴	実測（平面図・セクション図・エレベーション図）。
8月27日	（水）	晴	測量（４級基準点）。
8月28日	（木）	晴	器材撤収。

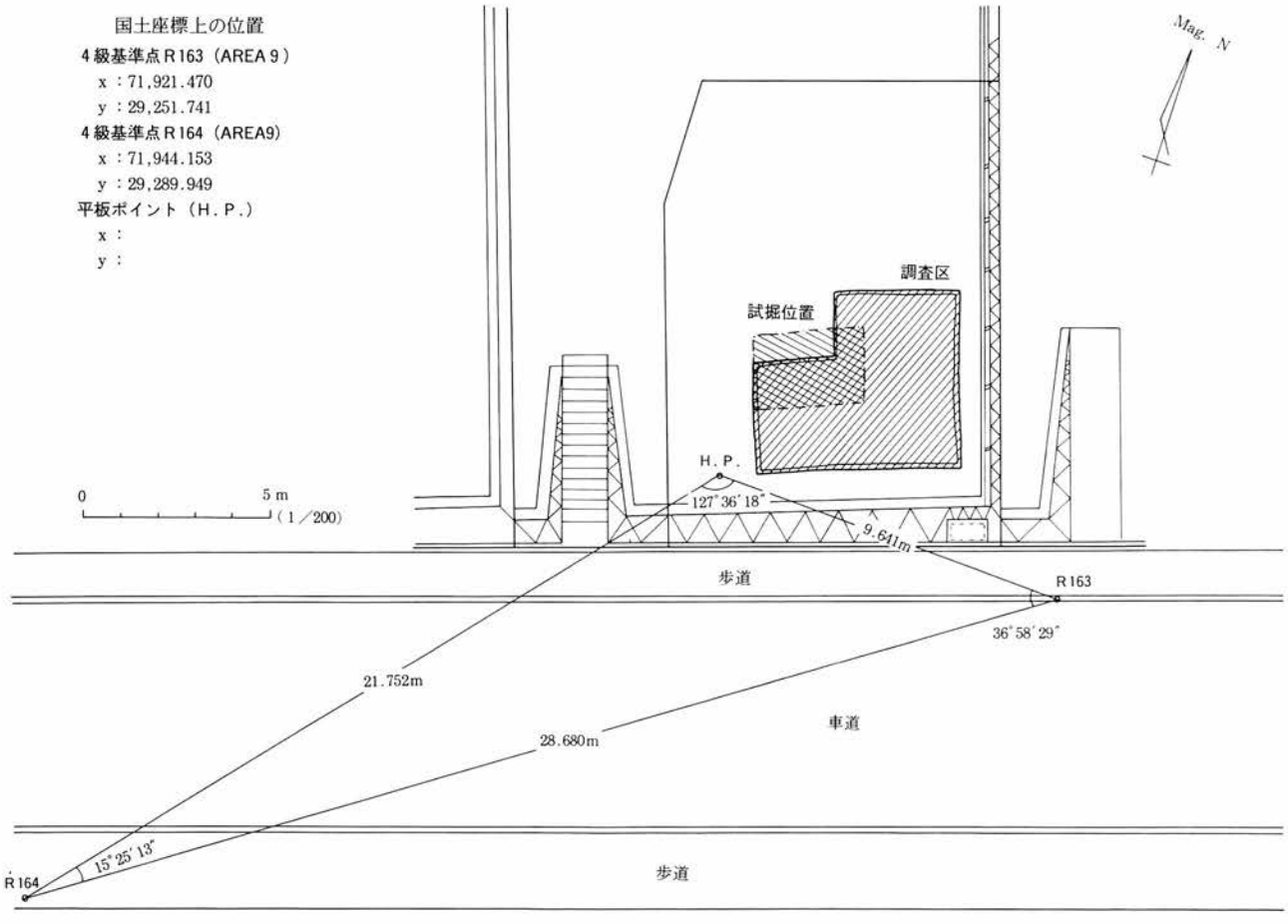


図２　調査区と４級基準点との位置関係

第３章　検出遺構と堆積土層

調査区内は東端の撹乱部分を除き、すべて岩盤を検出した。検出されたのは、岩盤削平面が２面・溝が６条である。北側に岩盤削平面１、その南側に一段低く岩盤削平面２が存在し、その間に溝１が東西に延び、岩盤削平面１には南北に延びる溝４・５が、岩盤削平面２には東西に延びる溝２～４が存在する。

岩盤削平面１は海抜38.3m前後、岩盤削平面２は同37.6～38.0m前後を測り、間の段差は約70cmの比高差がある。岩盤削平面２は平坦ではなく、緩やかに傾斜している。

溝は基本的にすべて直線的に延びている。溝１は幅約20～30cm、深さ10cm前後で、西側の試掘調査区でも検出されている。溝２は途切れているが、幅５～15cm、深さ約５cm。溝３も途中途切れているが、幅10～20cm、深さ10cm前後。溝４は幅20cm前後、深さ20cm前後。溝５は深さ10cm前後。溝６は幅35cm前後、深さ約20cm。

堆積土層は上層の現代堆積層以下に、土丹ブロック・粒子を多量に含む黄褐色土が厚く認められた。

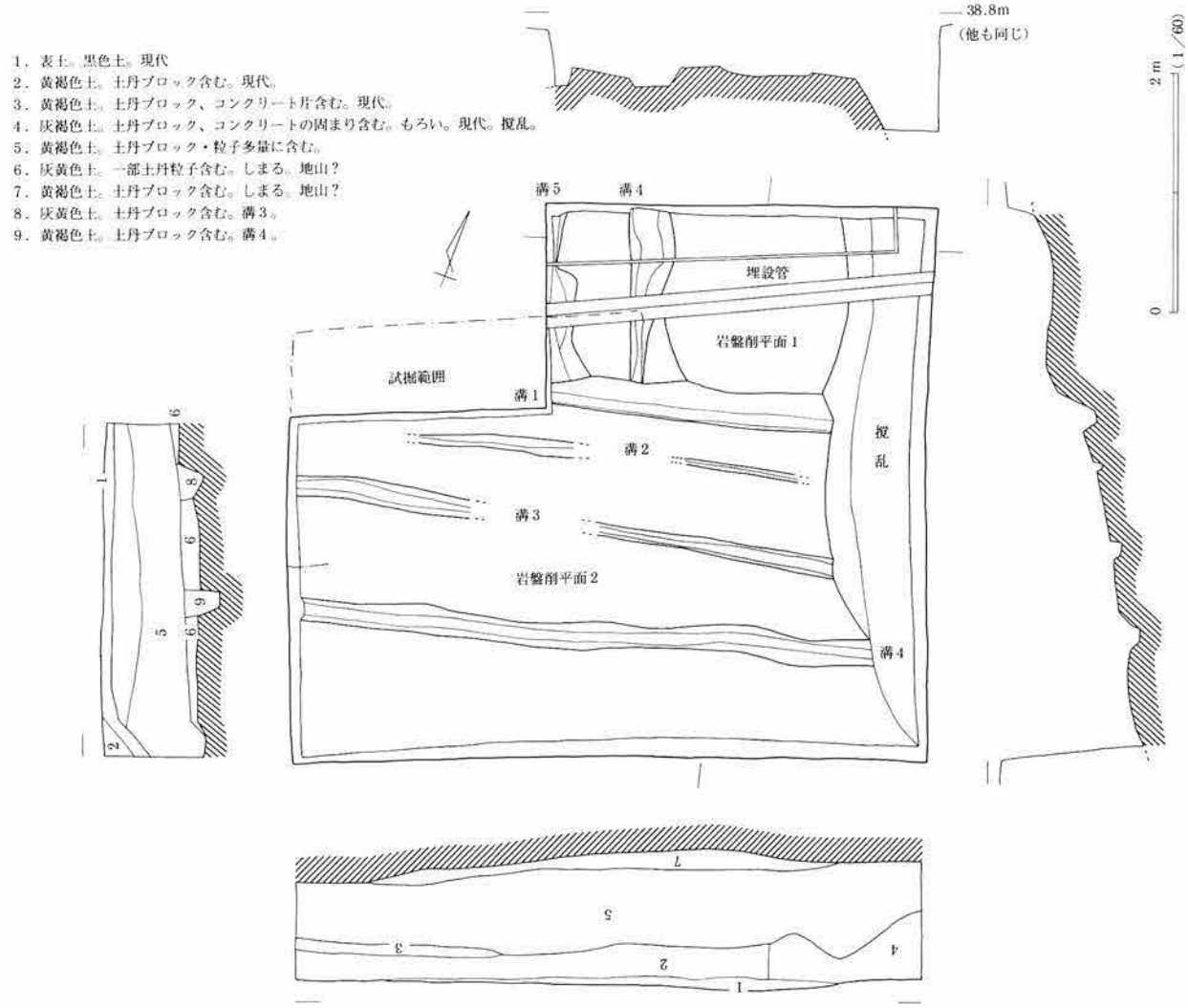
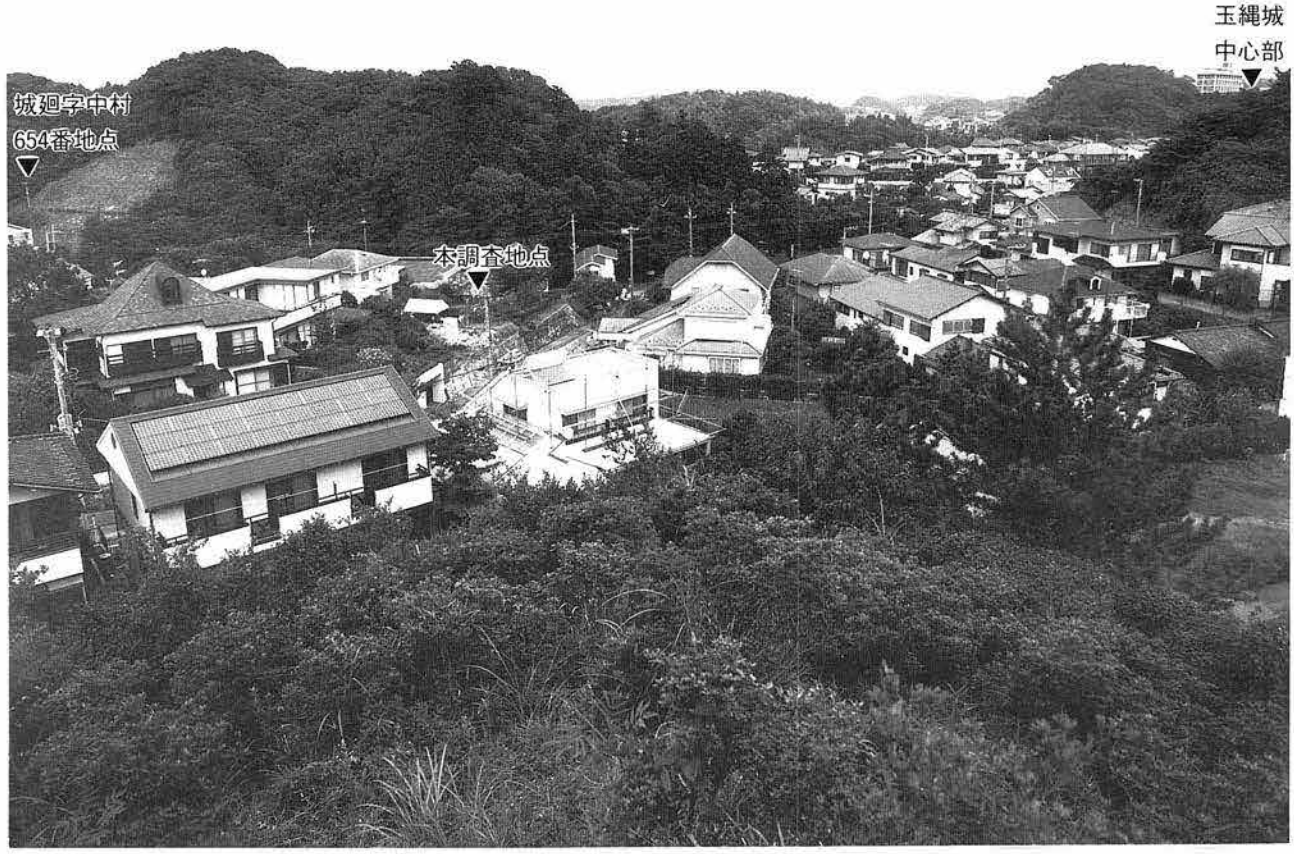


図３　遺構実測図

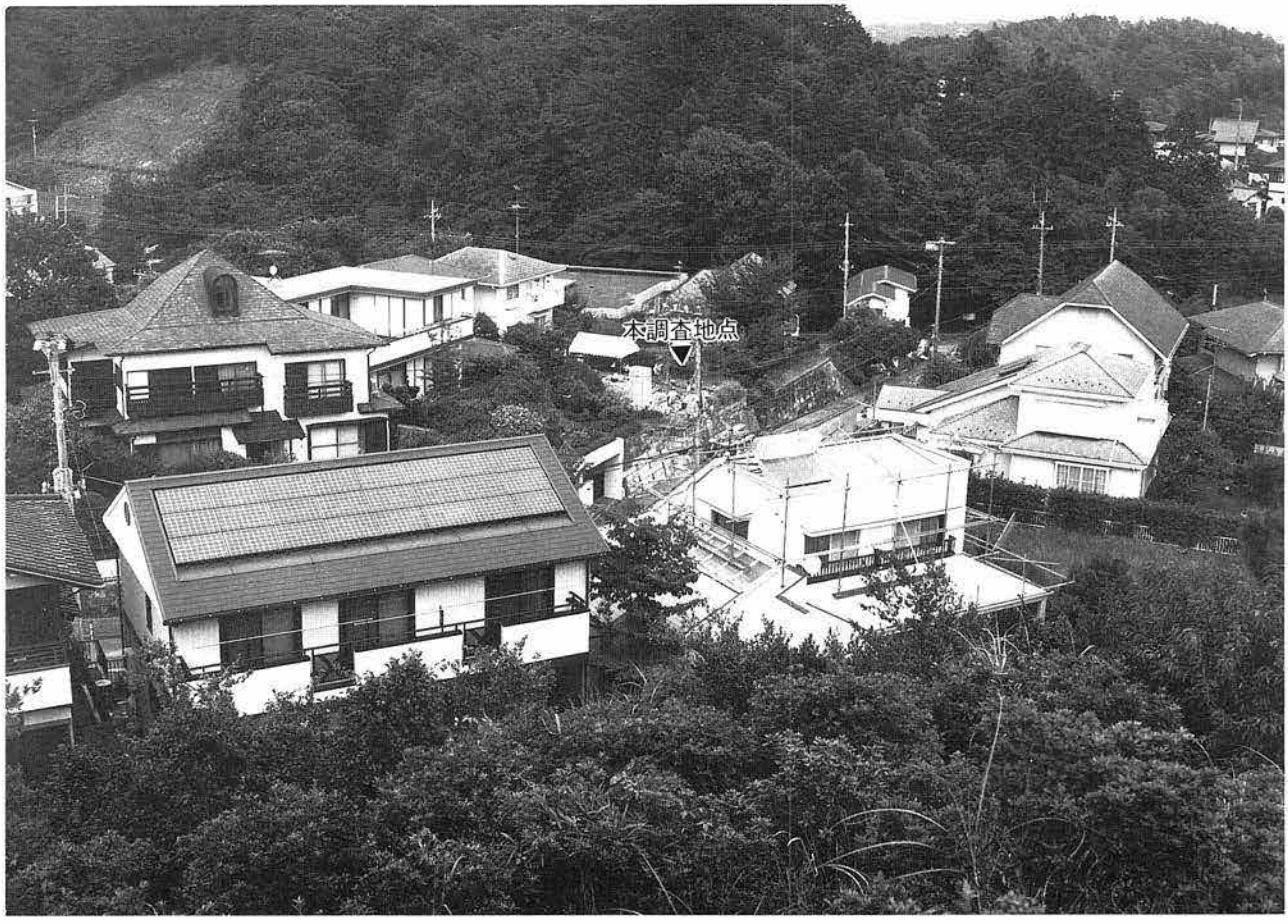
第4章　まとめ

調査地点は尾根の先端付近に位置していたと思われるが、もともとは南に緩く下る傾斜地であったと考えられる。その地形に沿う形で岩盤を削平して2面の平坦面を造成し、溝を設けたのであろう。さらに廃絶後、土丹を多量に含む黄褐色土が堆積する。本調査で知り得たのはこのようなことであるが、残念ながら遺物が出土しなかったため、その年代を確定することはできない。ただし、検出された溝は玉縄城の他地点で発見されている屋敷地の周囲を巡る溝に類似していることなどからみて、玉縄城に関係する遺構の可能性が高いといえよう。そうであれば、廃絶後の堆積層は城割りに係るものであったことも考えられる。

写 真 图 版



1．調査地点周辺



2．調査地点遠景

図版 2

1．調査地点近景

2．調査地点現況

1．調査区（西から）

2．調査区（北から）

図版 4

1．岩盤削平面 1

2．溝 1 ～ 4

1．西壁セクション

2．南壁セクション

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成10年度発掘調査報告
巻次	15
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	大河内勉
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1999年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
たまなわじょうあと 玉縄城跡	かながわけん かまくらししろめぐりあざしみずこうじ 神奈川県鎌倉市城廻字清水小路673番10	14204	№63			19970818 ～ 19970828	22	個人専用住宅に係る地下車庫造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
玉縄城跡	城館		岩盤削平面　2面 溝　6条		

長谷小路周辺遺跡（No.236）

長谷一丁目33番３外地点

例　　言

1．本報は、神奈川県鎌倉市長谷一丁目33番３地点における埋蔵文化財発掘調査の内、国庫補助事業にかかる個人専用住宅部分の報告である。

2　発掘調査は、平成９年９月８日から10月１日まで実施した。

3　本報の編集・執筆は伊丹まどかが行った。

4　本報に掲載した遺構・遺物写真は、伊丹・粂健一が撮影した。

5　本報の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。

遺構全測図　・個別遺構実測図　１／60

遺物実測図　１／３

なお各図面にはスケールを表示してある。

6　かわらけは、実測出来なかった破片を大・小に選別し、それぞれの総重量を測り、本調査地で検出した大・小の完形品のかわらけ10点分の平均値（大165g・小48g）で割って個体数とした。

7　出土遺物・図面・写真等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

8　調査体制は以下の通りである。

担当者　　小林康幸

調査員　　伊丹まどか

調査補助員　粂健一・八杉陽子・田村葉子

調査参加者　石渡辰男・蓑田孝善・奥山利平

　　杉浦永章・大島仁

9　本報作成に際して、大河内勉氏・菊川英政氏より御教授・御指導頂いた。

本　文　目　次

第１章　遺跡概要 …… 148
　Ⅰ　遺跡の位置と歴史的環境 …… 148
　Ⅱ　調査の経過 …… 150
　Ⅲ　堆積土層 …… 151
第２章　発見された遺構と遺物 …… 153
　Ⅰ　１面の遺構と遺物 …… 153
第３章　まとめ …… 162
　法量表 …… 165

挿　図　目　次

Fig１　調査地点の位置 …… 148
Fig２　調査地点及び周辺の遺跡 …… 149
Fig３　堆積土層 …… 150
Fig４　グリッド設定図 …… 151
Fig５　調査区壁堆積土層図 …… 152
Fig６　１面全測図 …… 154
Fig７　遺構１・３・６・９ …… 155
Fig８　遺構12 …… 156
Fig９　遺構12 …… 157
Fig10　遺構８・17 …… 158
Fig11　遺構14 …… 160
Fig12　１面出土遺物 …… 161

図　版　目　次

ＰＬ１ …… 171
ＰＬ２ …… 172

第１章　遺跡概要

Ⅰ　遺跡の位置と歴史的環境

本調査地は、神奈川県鎌倉市長谷一丁目33番３地に所在する。鎌倉市街地の西端に位置し、若宮大路下馬交差点から藤沢に通ずる県道鎌倉藤沢線が大仏遂道に向かう途中の長谷観音前交差点の北東角にあり、現在は暗渠となっているが、大仏の東の谷（大谷戸）・西の谷（小谷戸）の支流が大仏山門前で合流して本流となり、南下して調査地のやや西、長谷観音前交差点で東に曲がり由比ケ浜にそそぐ稲瀬川の東岸に形成された自然堤防状の砂丘に位置している。現地表の標高は約6、5m。

調査地点の南西角にある長谷観音前交差点は、西に向かうと浄土宗海光山慈照院長谷寺の参道であり、東に向かうと鎌倉の中心部に通ずる長谷小路（大町大路）、北に向かうと所謂鎌倉七口の内「大仏坂切り通し」、南に向かうと「極楽寺坂切り通し」からの道が合流する要所であった。大仏坂を下り切った地点には、大仏のある高徳院清浄泉寺がある。鎌倉時代後期には忍性が癩病患者のためにたてた施療所（桑ガ谷療病所）、北条朝直を祖とする大仏氏の居館が近辺にあったとされるが、何れも所在は明らかになっていない。調査地点の前面を走る県道鎌倉藤沢線（長谷小路）の南は海岸砂丘であり所謂「前浜」と呼ばれ、その支配権は和賀江島を含め忍性以来極楽寺長老に与えられたとされる。方形竪穴建築址を中心とした遺構を検出し、骨角製品の未製品・鍛冶・鋳造関係の遺物等を多く出土し、職能集団・工房の存在が考えられる一帯である。また、調査地東の北側の山沿いに「甘縄神社」があり、鎌倉市史総説編を初め、神社周辺の地が中世の甘縄であったとされ、社寺の他に安達一族の屋敷をはじめ、多くの御家人や被官がその居宅を構えた場所とされている。史料においては、『吾妻鏡』治承四（1180）年の北

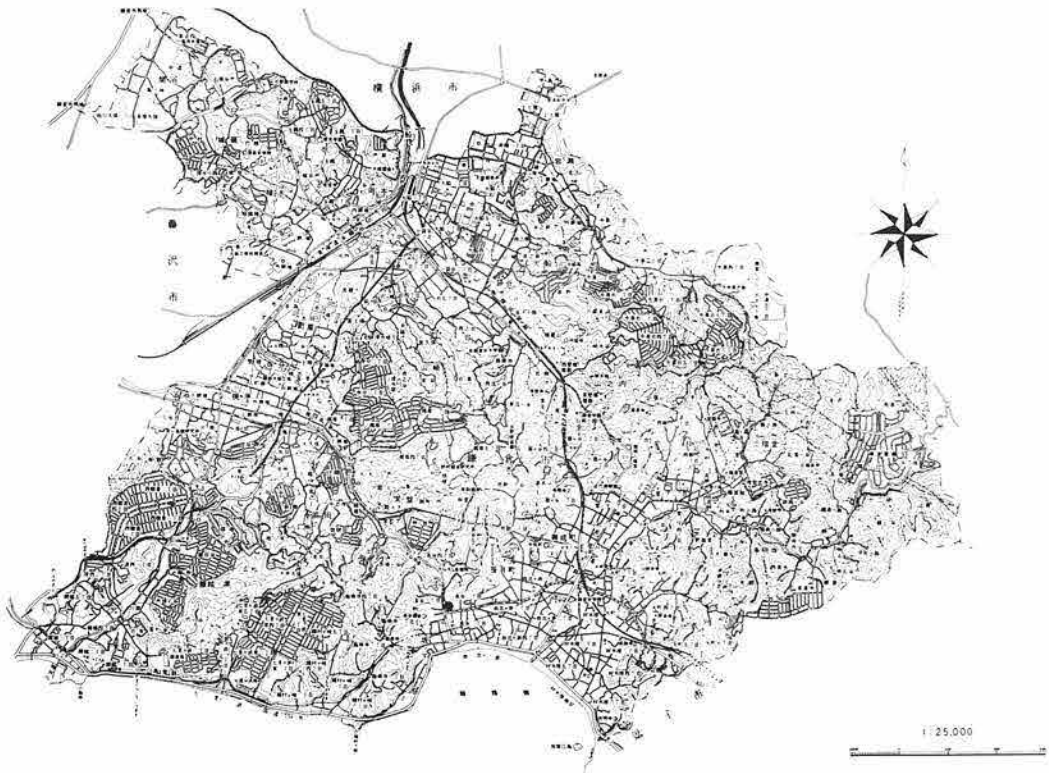


Fig 1　調査地点の位置

Fig 2　調査地点及び周辺の遺跡

条政子が鎌倉に入る下りで、日次がよくないのとの理由で稲瀬川辺の民宿に止宿しており、調査地近辺が当時は鎌倉の内ではなかったであろうとされている。また、同じく『吾妻鏡』暦仁元（1238）年には、念仏僧浄光の勧進により大仏堂事始があり、建長四（1252）年には現在の金銅仏の鋳造が始まっている。『万葉集』巻十四「相模国歌」の鎌倉を詠んだ歌の中で「美奈瀬川」という稲瀬川の支流のひとつであるとされている名前がでてくる。

周辺の調査では、現在までに大仏の切り通しから長谷観音交差点に至る県道鎌倉藤沢線沿いで数カ所の調査が実施されているが、史料を裏付けするような調査成果は得られていない。しかし、13世紀から近世にかけての周辺の様相は断片的にではあるが明らかになってきている。地点10では、13世紀中葉～13世紀末に想定される道路・土壙・溝を検出し、地点５では14世紀代と想定される井戸・土壙・溝などの遺構・遺物を検出している。地点７・８においては、13世紀後半から14世紀初頭にかけての土丹による石垣と、３時期にわたる大型の土丹を厚く積み上げ、雛壇上に造成した地業層が検出され、地点６では、13世紀末～14世紀前半の遺構・遺物を検出し、寺院址の一部であっただろうと推定している。又、本調査地と長谷観音交差点を挟んだ角に位置する地点２では幕末から明治にかけての建物跡、江戸前期から幕末までの水田跡、中世の河川跡を検出。少し離れた地点３では14世紀代の遺構と共に中世以前に属すると推察される遺構・遺物を検出している。地点４では、長谷寺の旧阿弥陀堂裏の防災工事の際に発見された「やぐら様の遺構」と観音堂新築工事の際の発掘調査から、銅製懸仏・納骨壷などの出土があった。これらの調査成果から、調査地周辺の13世紀以前の様相は具体的には明らかにされていないが、13世紀中葉の大仏の造立が始まったころから調査地周辺の町並みが整えられていった様子が伺える。

II　調査の経過

調査前現地表海抜高は、調査区の前面の歩道上で6、4m、調査区北端で7、1mと、70cmの高低差を持つ斜面であった。この高低差は近隣の敷地でも認められ、住民の話によると、大正12（1923）年の震災後の後片づけの際に倒壊した家屋を取り除き、不要のゴミを埋めた後、地盤を固めるために盛り土をして道路面より嵩上げしたとの事であった。

調査に先立ち、試掘を行った結果、震災時に掘られたゴミ穴、他によって調査区の南側は大きく遺構が壊されている事が解ったため、北側35m²のみを調査の対象とした。この内、国庫補助事業にかかる発掘調査には１面を当てた。

調査は重機を使用し、表土の掘削を開始した。北側で約70cm，南側で約20cm下で中世の遺物包含層を検出し、遺構を確認した。調査深度は建築深度に従った。発掘調査に使用したグリッドは、調査地内に任意の２点を設けそれを基準に４ｍ×４ｍの方眼を設定した。各杭の名称は、東西方向を東から西に向かって１から順に数字を、南北方向を北から南に向かってＡから順にアルファベットを配した。

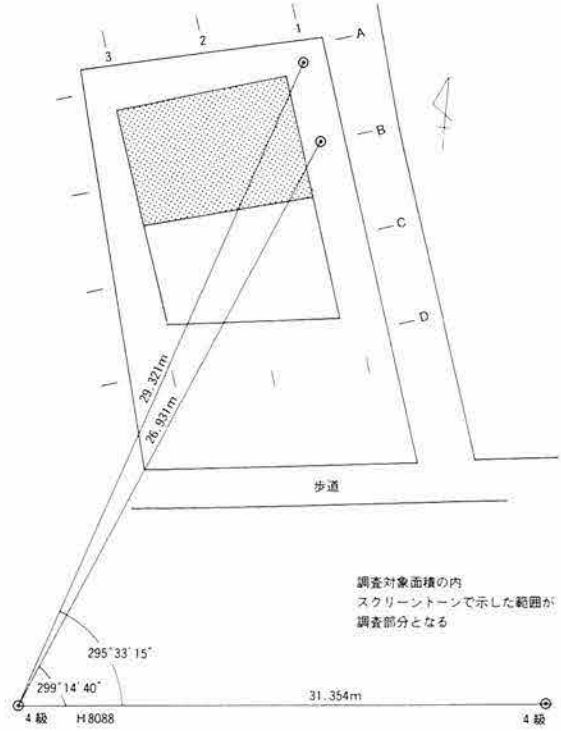


Fig 3　堆積土層

また、本調査地点の位置を地図上に合成をするために鎌倉市４級基準点H8088を使用して、グリッドの基準Ａ，Ｂの２点を測量した。

本遺跡地の磁北方向は、グリッドの南北軸から16°14′30″東に傾く。

Ⅲ　堆積土層

本地点では、表土を含め５層の堆積を確認した。上層より説明する。

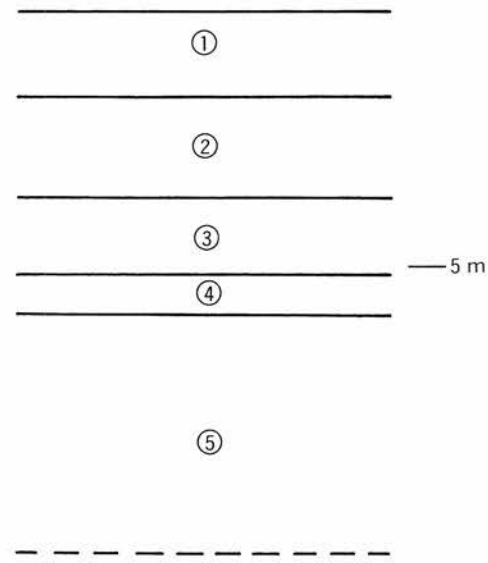


Fig 4　グリッド設定図

１層　発見された最上層は表土である。中世遺物が多く混入するが、瓶・缶などのゴミが多く混じり、上層を土丹で固めている。（Fig５　調査区堆積土層図の第１層に準ずる）

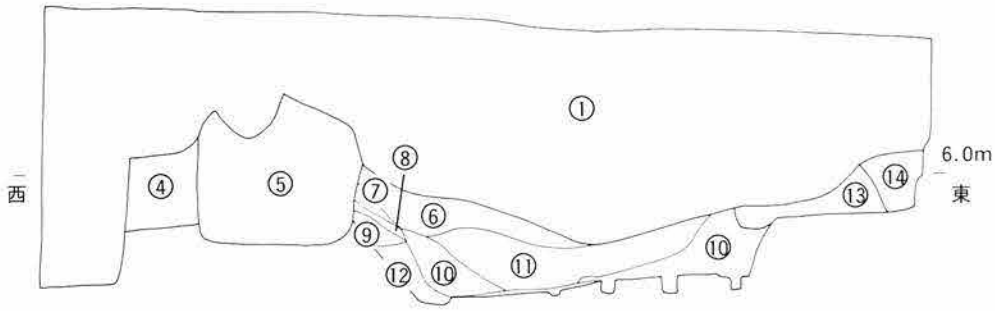
２層　暗褐色砂。粘質土を僅かに含む。中世遺物包含層である。第１層の表土により大きく削平を受けており、明確に検出できたのは、調査区の西側部分のみであった。本調査では、第２層で検出した遺構を一面とし、遺構の切り合いの関係から、１ａ面・１ｂ面に分けている。（Fig５　調査区堆積土層図の第２層に準ずる）

３層　暗褐色砂質土。粘質土、炭化物を含む。中世遺物包含層である。調査区の東側では部分的にしか遺存しておらず、良好に検出できたのは西側部分のみであった。第３層で検出した遺構を二面とした。（Fig５　調査区堆積土層図の第３層に準ずる）

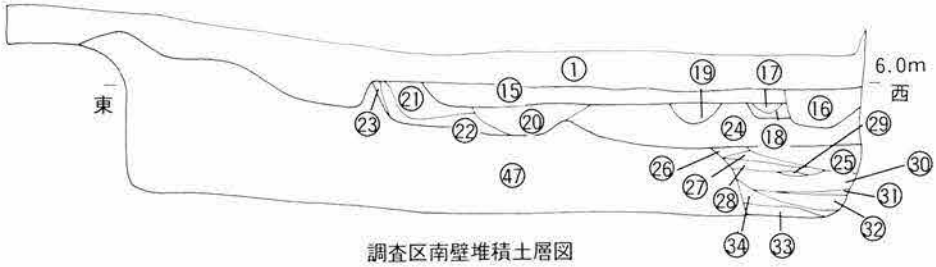
４層　褐色砂質土。古代基盤層である。調査区の西側部分でのみ僅かに検出され、東側部分では検出されなかった。古代に属する遺物は数点出土するものの、遺構が構築されていた痕跡は発見できなかった。これは、中世の遺物包含層によって削平を受けたためと考えられる。（Fig５　調査区堆積土層図の第43層に準ずる）

５層　灰褐色砂。海成砂に近い自然堆積層であり、地山層となる。調査区壁の堆積状況を観察すると、第５層が東から西に向かって緩やかに傾斜している状況が解った。（Fig５　調査区堆積土層図の第47層に準ずる）

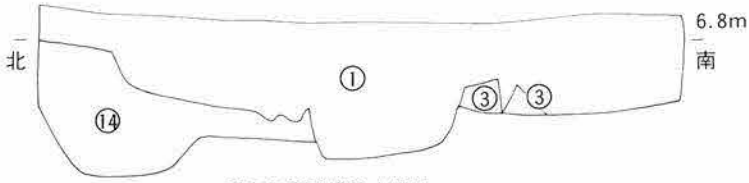
第５層より下層の状況は調査に先立って行った試掘の結果から海抜高3、6mまでは第５層の灰褐色砂層が堆積している様子を観察していたため、本調査で、新たに下層の観察は行っていない。



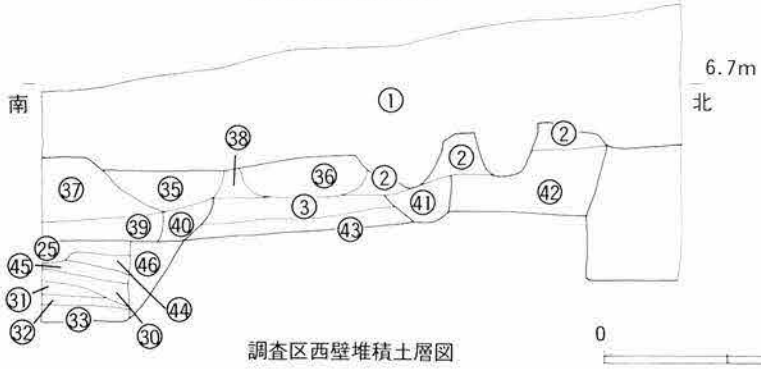
調査区北壁堆積土層図



調査区南壁堆積土層図



調査区東壁堆積土層図



調査区西壁堆積土層図

0　2 m

1　表土　（1 a 面遺構覆土）
2　暗褐色砂　（1 b 面遺構覆土）
3　暗褐色砂質土
4　暗褐色砂質土
5　暗褐色弱粘質土　（遺構12覆土）
6　暗褐色砂質土
7　暗褐色弱粘質土
8　灰褐色砂質土
9　暗褐色弱粘質土　（遺構14覆土）
10　灰褐色砂質土
11　暗褐色砂質土
12　暗褐色弱粘質土
13　黄褐色砂　（遺構17覆土）
14　暗褐色砂質土
15　暗褐色弱粘質土
16　明茶褐色弱粘質土　（遺構 9 覆土）
17　明茶褐色砂
18　黒褐色砂質土
19　暗茶褐色粘質土
20　茶褐色砂質土　（遺構10覆土）
21　暗茶褐色砂質土
22　茶褐色砂質土
23　明茶褐色砂
24　暗茶褐色弱粘質土
25　暗茶褐色弱粘質土
26　茶褐色弱粘質土
27　灰褐色砂
28　暗褐色弱粘質土
29　灰褐色砂
30　暗褐色弱粘質土　（遺構15覆土）
31　灰褐色砂
32　暗褐色弱粘質土
33　灰褐色砂
34　暗褐色弱粘質土
35　暗茶褐色弱粘質土　（遺構 3 覆土）
36　暗茶褐色弱粘質土　（遺構 1 覆土）
37　黒褐色弱粘質土　（遺構 9 覆土）
38　茶褐色砂質土　（遺構 6 覆土）
39　黒褐色弱粘質土
40　褐色弱粘質土　（遺構 8 覆土）
41　黒褐色弱粘質土
42　明褐色砂
43　褐色砂質土
44　明灰褐色砂
45　茶褐色砂質土　（遺構15覆土）
46　明灰褐色砂
47　灰褐色砂

Fig 5　調査区壁堆積土層図

第２章　発見された遺構と遺物

調査は、表土を除いた後、堆積土層の第２層で遺構を検出した。中世の遺物包含層である第２層、第３層は調査区の東側では部分的にしか検出できず、平面的に確認出来たのは調査区の西側部分のみであった。これは、調査区の東側部分が近世以降の撹乱によって大きく削平を受けていたためである。第２層で発見した遺構は、大きく一面として捉え遺構の切り合いから、１ａ面・１ｂ面と分けた。又、堆積土層の第３層で検出した第二面の遺構は、本書の成果と合わせて委託調査分の調査報告書にすでに示している。

本調査で発見した遺構は、方形竪穴建築址２軒・土壙11基・ピット１穴である。遺物は、かわらけ・常滑窯製品・瀬戸窯製品等の中世遺物とともに、土師器・須恵器等の古代遺物を検出している。また、出土した遺物の殆どはかわらけであったが、時間の制約等から完形品に近い製品のみを実測、図示してある。遺構番号は調査時の作業の都合上、遺構のプランに対して付してあり、必ずしも番号の新旧が時代の新旧を表すものではない。

以下、発見した遺構・遺物の説明を加えていく。

Ⅰ　１面（Fig. 6）

１面は表土を取り除いた後、堆積土層の第２層で遺構を確認した。遺構の切り合いから、１ａ面、１ｂ面に分けている。各面の遺構から出土した遺物に大きな時期差は認められず、短期間に遺構が構築され、造り変えられたたものと思われる。重複する個々の遺構の間では、相対的に１ａ面の遺構が新しく１ｂ面の遺構が古い。大正12（1923）年の震災後の後片ずけのために掘られたゴミ穴が調査地を大きく撹乱し、中世の状況を正確に把握する事は難しい状況であったたが、１ａ面では土壙・ピットを検出し、多量のかわらけが廃棄された土壙を検出している。１ｂ面では方形竪穴建築址・土壙・ピットを検出した。出土した遺物は１ａ面・１ｂ面ともに殆どがかわらけであったが、若干の舶載磁器・常滑窯製品・手焙り・土師器・須恵器等が出土している。

１ａ面（Fig. 6）

重機による表土掘削後、遺構を確認した。地形的には東から西に向かって緩やかに傾斜していたと思われる。遺構が良好に検出できたのは調査区の西部分のみである。

遺構１（Fig. 7）

調査区西部で検出。長軸は上端で98cm、短軸は調査区外に伸びており不明、深さ21cmの浅めの土壙である。覆土は暗茶褐色弱粘質土で炭化物を多く含む。

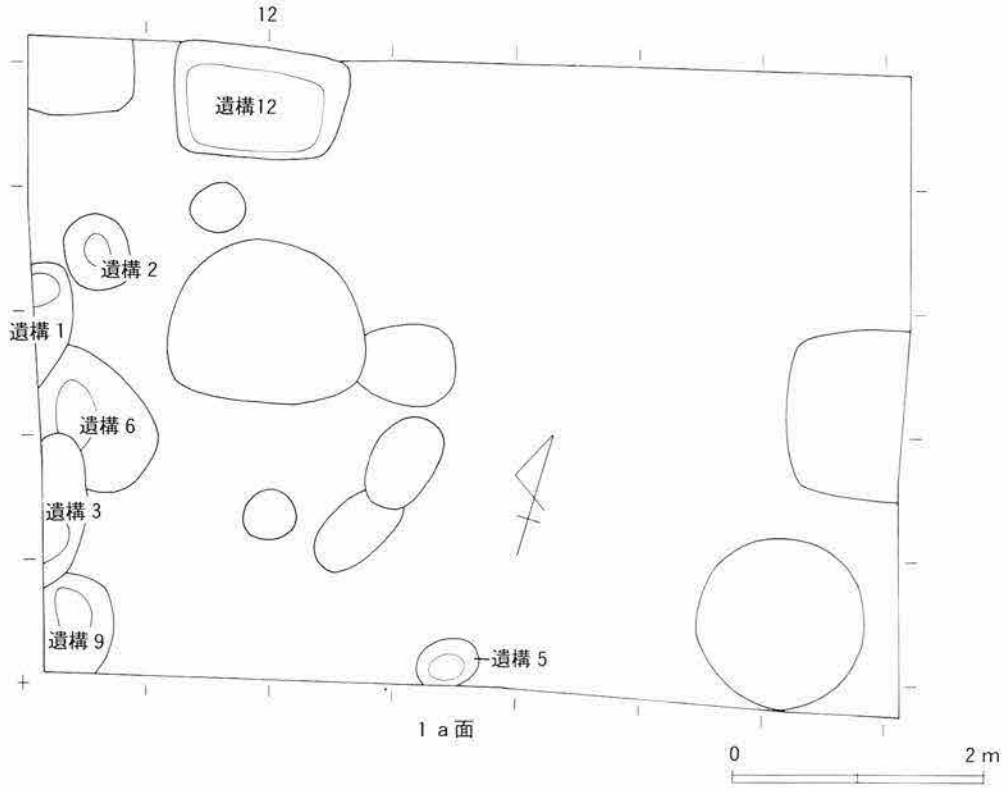
出土遺物

１はかわらけである。この他に図示出来出来なかったが、かわらけが破片個体数にして大３個・小１個出土している。

遺構３（Fig. 7）

調査区西部で検出。長軸は上端で118cm、短軸は調査区外に伸びており不明、深さ19cmの浅い土壙。覆土は暗茶褐色弱粘質土。

出土遺物


12
遺構12
遺構 2
遺構 1
遺構 6
遺構 3
遺構 9
遺構 5
1 a 面
0
2 m

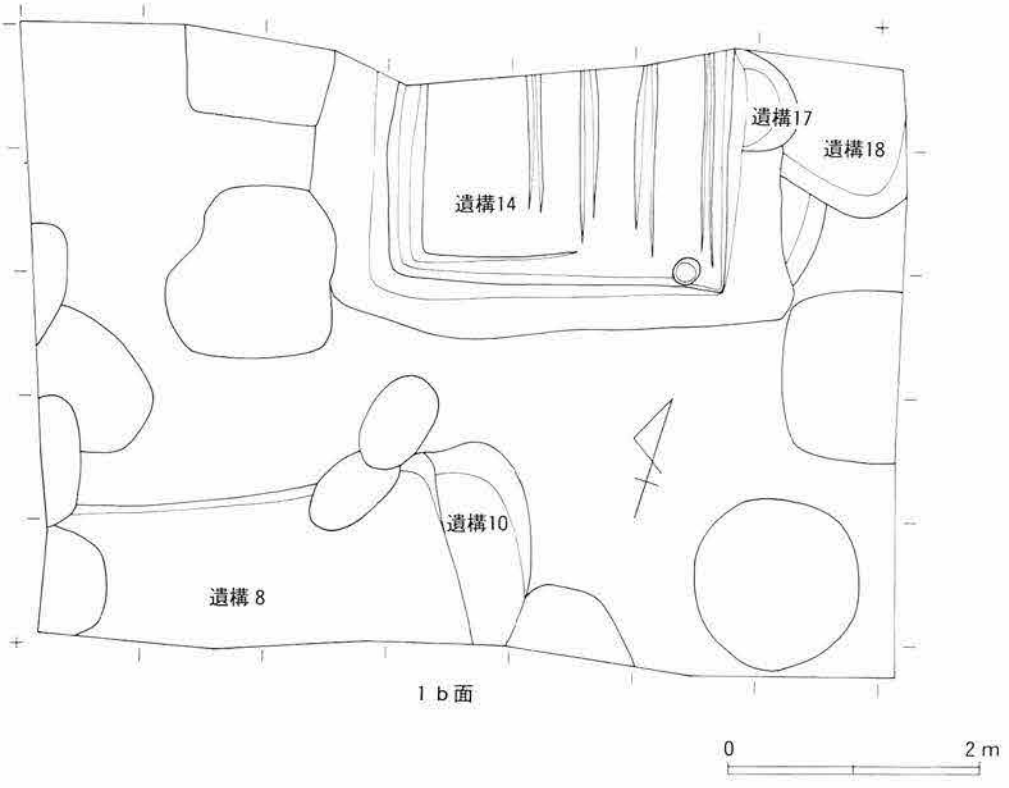

遺構17
遺構18
遺構14
遺構10
遺構 8
1 b 面
0
2 m

Fig 6　1 面全測図

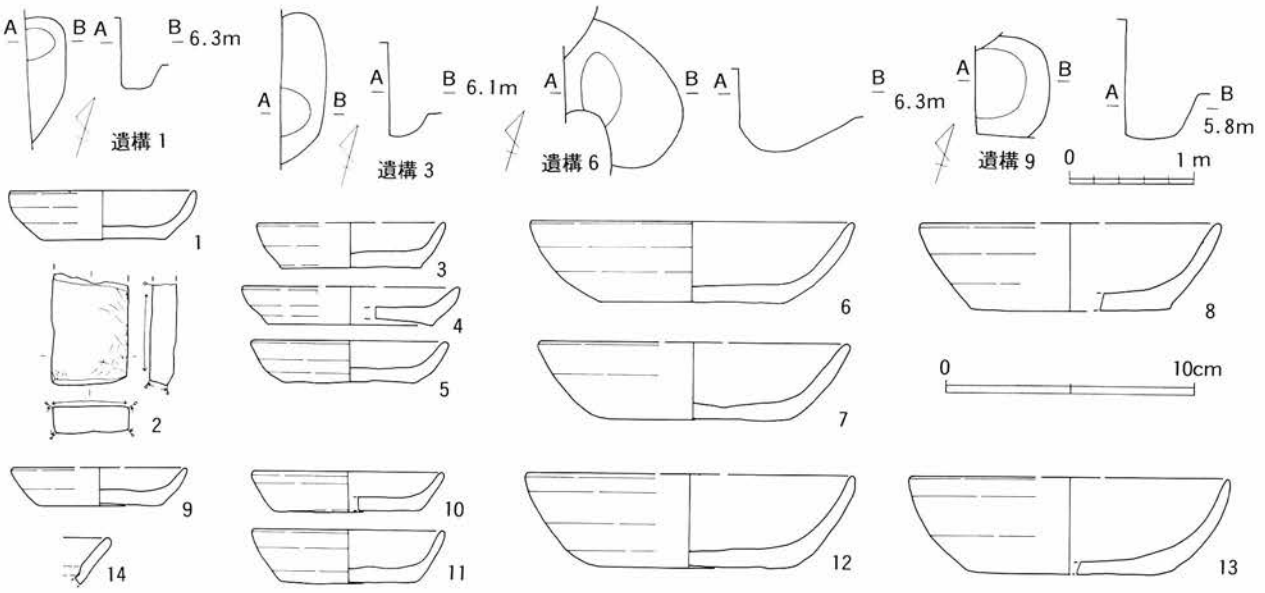


Fig 7　遺構１・３・６・９

２は砥石。鳴滝産仕上げ砥。図示出来なかった遺物は、かわらけが破片個体数にして大７個、小３個。鉄製品。

遺構６（Fig.　７）

調査区西部で検出。遺構１と３に南北を切られている。やや深めの土壙である。覆土は暗茶褐色弱粘質土。

出土遺物

３～８はかわらけである。図示出来なかった遺物は、かわらけが破片個体数にして大８個、小10個。鉄製品。壁土。

遺構９（Fig.　７）

調査区西部で検出。上端を遺構３と調査区に切られ土壙の形状は不明確である。覆土は暗茶褐色弱粘質土。

出土遺物

９～13はかわらけであるは。14は同安窯系青磁皿。図示出来なかった遺物は、かわらけが破片個体数にして大16個小４個。常滑窯甕。鉄製品。土師器甕・坏。

遺構12（Fig.　８・９）

調査区北西部で検出した。長軸で137cm、短軸で92cm、深さ68cmの深い掘り込みを持つ方形土壙である。覆土は暗茶褐色弱粘質土。出土遺物は、かわらけ以外の遺物は何れも小破片である。かわらけは半分以上遺存している製品も多く出土したが、１cm四方程に砕かれた状態の小破片が多く出土し、それらは廃棄後に破損したとは考えにくく、廃棄時、あるいは廃棄以前に破損したと推察される。壁土は、８cm四方で厚さ３cm程の大きさの物から小破片を含み、100点近く出土している。胎土に籾殻、藁状の物質を若干含む。出土遺物の中には鞴の羽口片、スラグも数点含み、鋳型の可能性もある。また、図示していないが、粘土を手慰みに丸めたような製品（？）もあった。遺構12は短期間に遺物を廃棄した投棄穴のような遺構であると思われる。

出土遺物

１～122はかわらけである。49は見込みに墨で円が描かれる。50は灯明皿。見込み中央に穿孔があり

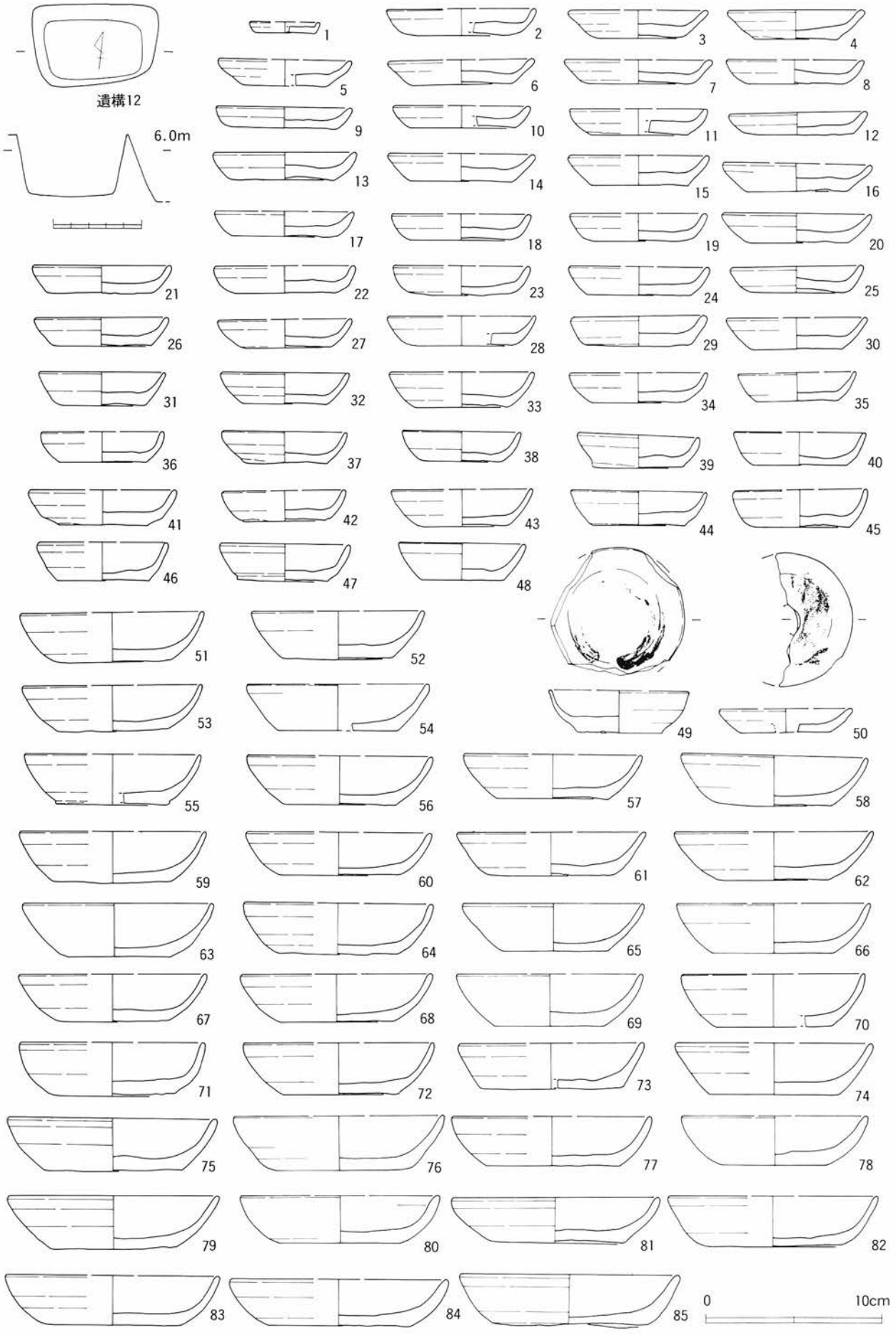


Fig 8　遺構12

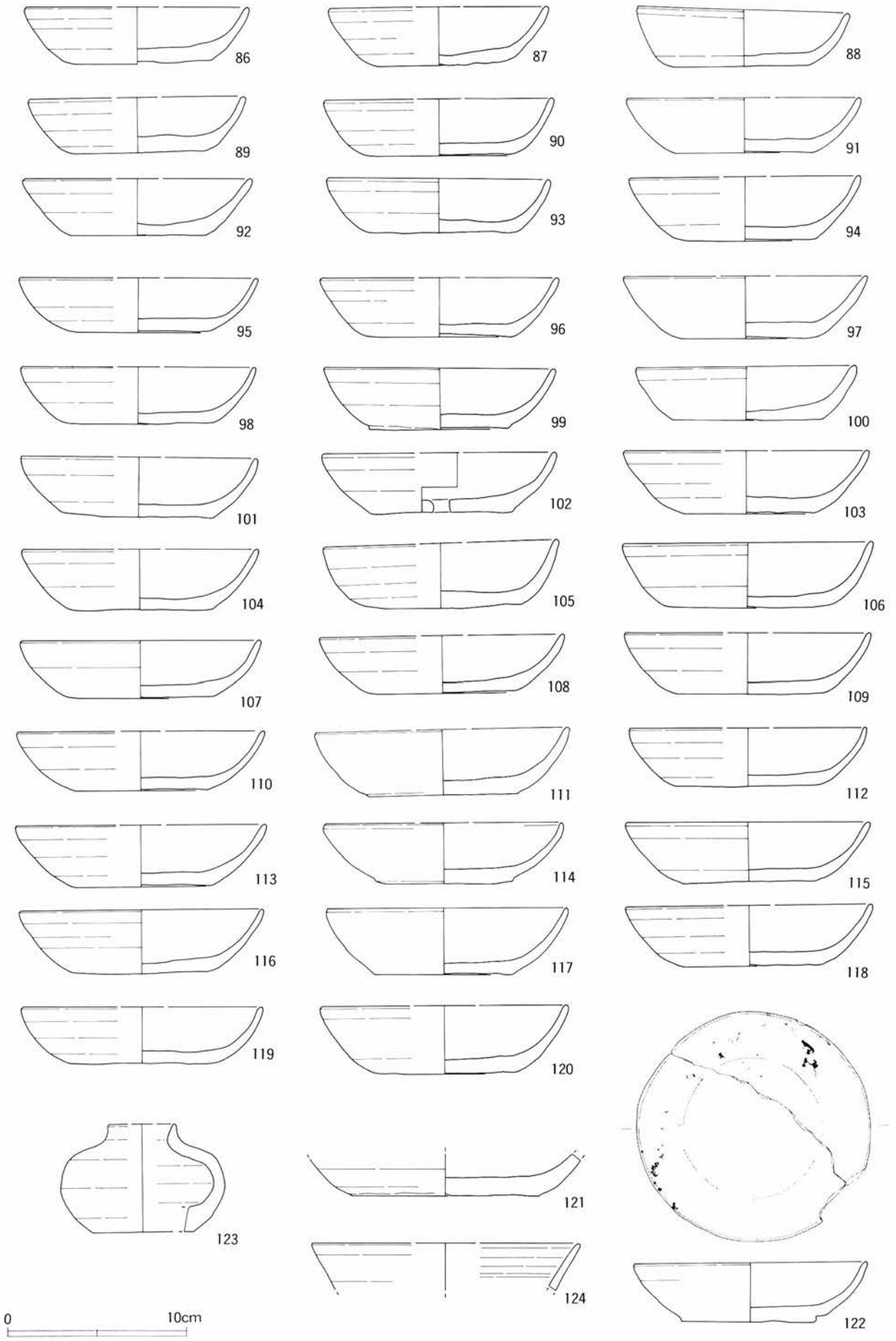

86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
0
10cm

Fig 9　遺構12

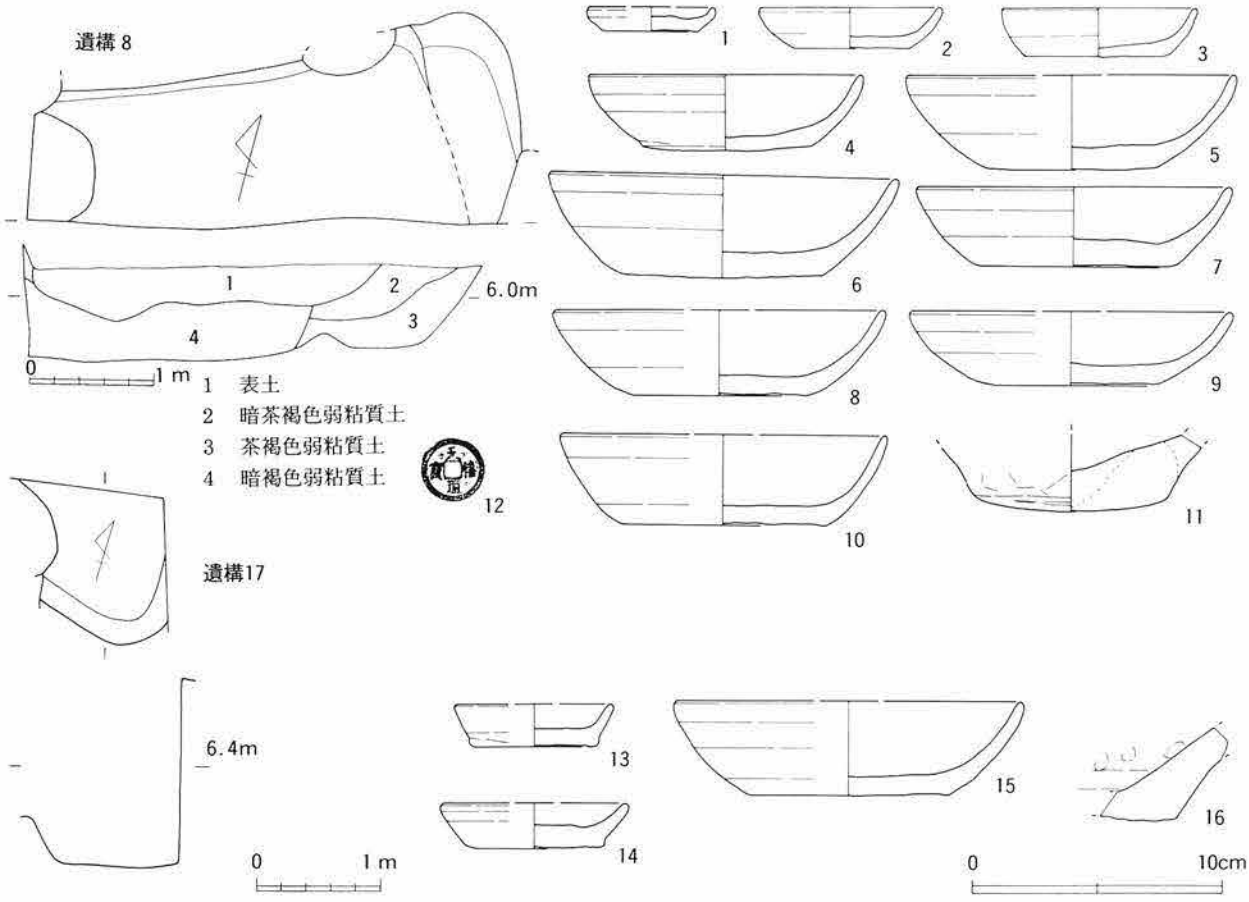


Fig10 遺構 8・17

内底に油煤付着。122は内面に墨が付いていた。124はかわらけ質の小壷。胴部最大径は9、2cm。123は須恵器坏。図示出来なかった遺物は、かわらけが破片個体数で大442個、小116個。ミニかわらけ2個。青磁蓮弁文碗。白磁口兀皿。青白磁梅瓶。瀬戸窯入れ子。常滑窯甕。山茶碗窯捏ね鉢。土製品。硯石。鉄製品。銭（判読不能）。土師器甕。壁土。

1b面（Fig. 6）

検出した遺構は方形竪穴建築址2軒・土壙3基である。調査区北側で検出した方形竪穴建築址は、上層を大型の土丹がゴミ等と共に放り込まれ、埋められていた。調査区南側で検出した方形竪穴建築址も上層を大きく削平されていた。

遺構8（Fig. 10）

調査区南西隅で検出した。上層を現代埋土により削平を受け、遺構の南、西側は調査区外に伸びており、正確な形状は不明。方形竪穴建築址である。覆土は暗茶褐色弱粘質土。

出土遺物

1～10はかわらけ。11は土師器甕。12は銭、天禧通宝（北宋、1017年、楷書）。図示出来なかった遺物は、かわらけが破片個体数で大3個・小4個・常滑窯甕、山茶碗窯捏ね鉢、砥石、鉄製品、土師器坏、土師器甕である。土師器坏には、内面赤彩の坏と黒彩の坏があった。

遺構10（Fig. 6）

土壙である。遺構8に切られる。覆土は灰褐色弱粘質土。出土遺物は無い。

遺構14（Fig. 11）

方形竪穴建築址である。遺構12に西壁を切られ、北壁は調査区外に伸びている。長軸で382cm、深さ110cmを測る。覆土は茶褐色弱粘質土。上層は大小の土丹が現代遺物と共に投棄されていた。遺構14を掘り込んだ覆土が海成砂に近い砂のため遺構の遺存状況は悪いが、床面四周に鎌倉石切石、あるいは角材を敷き、その下に根太を敷いていた様子がつかめた。南壁面の下部の鎌倉石切石あるいは角材痕と壁面の間には灰色粘土を詰めた痕跡があり、木質痕を検出した。この粘土は壁板と鎌倉石切石あるいは角材との間に詰め、壁板の押さえの役目をしていたようである。

出土遺物

1～18はかわらけ。19は青磁蓮弁文鉢。20・21は青磁蓮弁文碗。。22は骨角製品。外面を細かく削っている、未完製品と思われる。23は輪花型手焙り。内外表面は研磨され黒色処理されている。胎土は灰褐色を呈し、小石粒・白色粒子を多く含む粗い胎土。24は女瓦。胎土は灰白色を呈し、砂粒を多く混入。凸面、ハナレ砂付着。凹面、模骨痕・布目痕を明瞭に残す。側縁ヘラ削りの後、凸面側をナデにより角を丸くおさめている。25は銭（熙寧元宝・北宋・1068年・楷書）。26は釘。27は土師器坏。28は土師器甕。図示出来なかった遺物は、かわらけが破片個体数で大36個・小11個・常滑窯甕・壁土・滑石鍋・褐釉の壷（産地不明）・土師器坏、甕・須恵器坏。土師器坏の破片の内、内面赤彩、黒彩の坏もあった。

遺構17（Fig.10）

土壙である。遺構14を切っている。覆土は灰褐色砂質土・炭化物・粘質土を含む。

出土遺物

13～15はかわらけ。16は常滑窯捏ね鉢の底部。内面、摩滅が著しい。図示出来なかった遺物は、かわらけが破片個体数で大５個。・常滑窯甕・亀山窯甕・土鍋片・土師器甕である。

遺構18（Fig.６）

土壙である。遺構14・17に切られる。覆土は暗黒褐色砂。

小片のため図示出来なかったが手づくねかわらけと土師器壷が出土している。

一面出土遺物（Fig.12）

1～13はかわらけ。５は口唇部に油煤付着、灯明皿。14は渥美壷。胎土は灰色を呈し精良。砂粒を含み、焼きしまり粘性強い。頸部から口縁部にかけてやや外反しながら立ち上がり、口縁部を下方に折り曲げている。口縁部から肩部にかけて内外面共に釉がかかる。15は常滑捏ね鉢。胎土は白色粒を混入し粘性強い。胴部外面に強いハケの調整痕が残る。口縁端部を抓み上げ、ナデ調整をしている。16は土師器坏。口辺の外反弱く、体部ヘラ削り。有段口縁杯。17は須恵器。壷あるいは甕の口縁部片と思われる。18は須恵器坏蓋。歪みが著しい。外面ヘラによる調整。19は土師器甕。内外面ともに粗いハケによる調整。器肉厚い。20は須恵器。壷か甕の口縁部片。口辺上部に沈線が巡る。21は釘。22～24は銭。22は紹聖元寶（北宋・1094年・篆書）。23は寛永通宝。24は聖宋元寶（北宋・1101年・篆書）。図示出来なかった遺物は、かわらけが破片個体数で大27個・小９個・常滑窯甕、壷・渥美窯甕・手焙り・鉄製品。

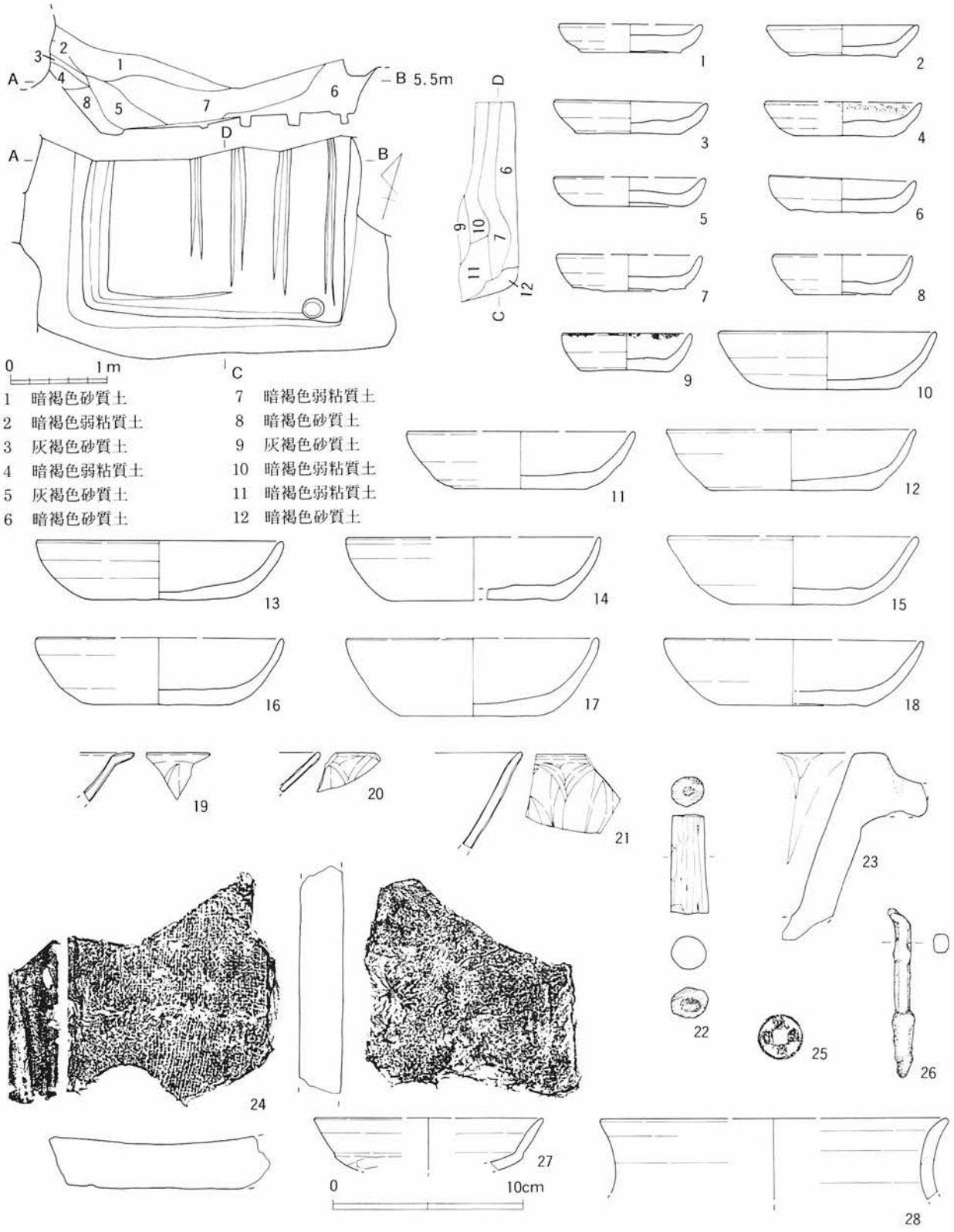

A
B
C
D
B 5.5m
0
1m
1 暗褐色砂質土
2 暗褐色弱粘質土
3 灰褐色砂質土
4 暗褐色弱粘質土
5 灰褐色砂質土
6 暗褐色砂質土
7 暗褐色弱粘質土
8 暗褐色砂質土
9 灰褐色砂質土
10 暗褐色弱粘質土
11 暗褐色弱粘質土
12 暗褐色砂質土
0
10cm

Fig11　遺構14

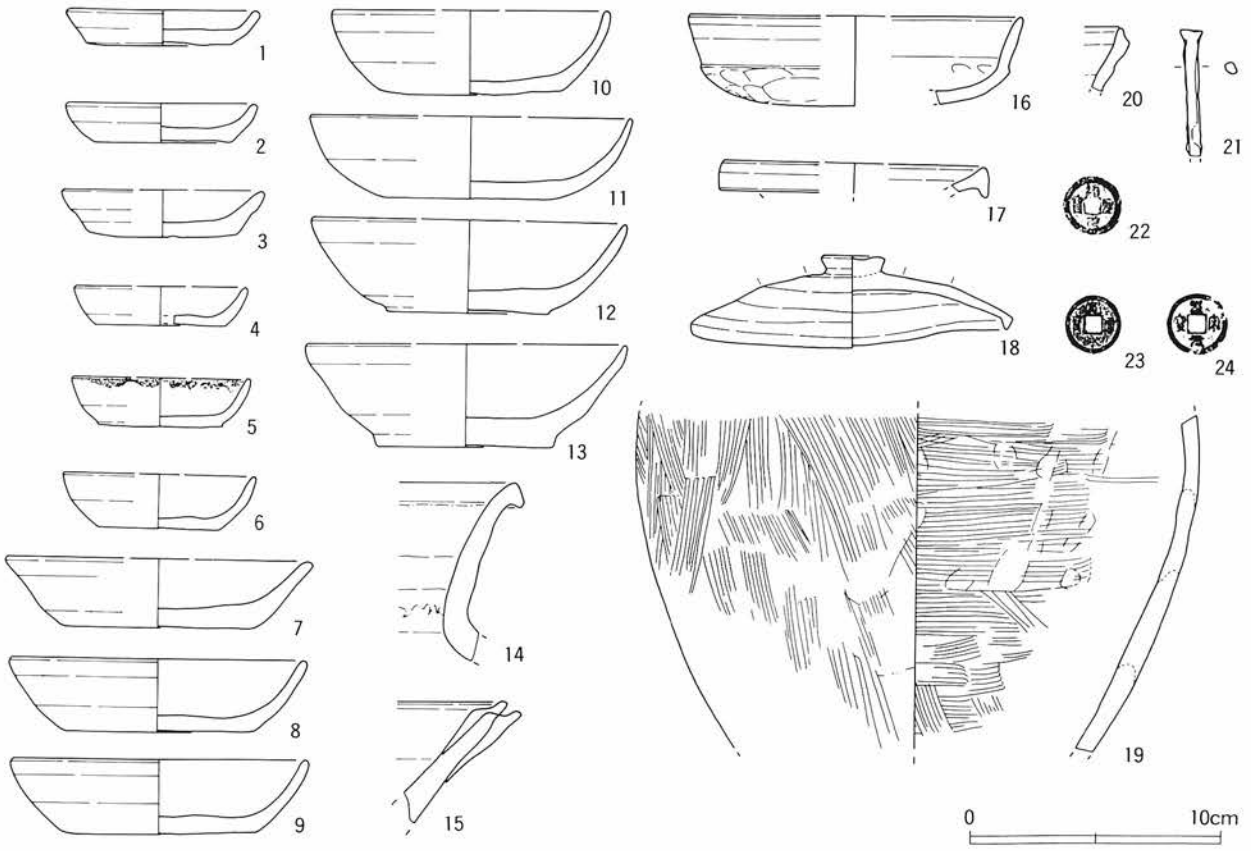


Fig12　1面出土遺物

第3章　ま　と　め

今回の調査では、大正12（1923）年の震災時の後片ずけのために掘られたゴミ穴、他で上層が壊されていた事や、限られた範囲内の調査であり、調査地の様相・性格を明らかにする事はできなかった。しかし、近年の発掘調査の成果から、長谷観音交差点に至る道沿いで13世紀中葉頃から近世に至る遺構・遺物の報告が蓄積されており、本報告も、調査地周辺の様相を明らかにする資料として提示したい。

以下、検出された遺構・遺物について簡単な、まとめをおこないたい。

検出した遺構

検出した遺構は方形竪穴建築址２軒・土壙11基・ピット１穴である。

検出した方形竪穴建築址の２軒の内、遺構８は遺存状態が悪く構造・規模が不明であるが、平面が方形の竪穴である、掘り方の壁がほぼ垂直に立ち上がる、平坦な床面が考えられる等から方形竪穴建築址として示した。遺構14は、垂直に立ち上がる掘り方を持ち床面四周に鎌倉石切石、あるいは角材を巡らし、その下には根太を配していた痕跡が残る。鎌倉石切石あるいは角材と壁面の間には僅かではあるが木質痕が残り、壁板が組まれていたと推察できる。この構造は、鎌倉市街地遺跡において方形竪穴建築址の分類・編年を試みている汐見・斉木によれば[註1]、Ａ類に分類され、14世紀中頃に出現する方形竪穴建築址の構造である。狭い調査面積内で判断する事は難しいが、２軒の方形竪穴建築址は、長軸を、調査地前を走る県道鎌倉藤沢線とほぼ平行にしているが、調査地の西に流れる稲瀬川辺に向かって構築されていたとも思われる。

検出した土壙の内、遺構12は、ほぼ垂直な掘り方を持つ方形の土壙である。覆土内からは多量のかわらけを検出しているが、遺構内の覆土が同一である事や、出土したかわらけに大きな時期差を感じられない事から、短期間に投棄されたと思われる。又、出土したかわらけは、実測個体数も122点と多く有ったが、その他に、破片数にして13、565ヶのかわらけが出土し、その大半は１cm四方ほどの大きさに細かく砕けており接合が不可能であった点から見て、大半は土壙内で破損したものではなく、廃棄以前に破損した、あるいは故意に壊したかわらけを投棄したのではないかと考えている。

遺構12は、多量のかわらけと共に、かわらけ以外の遺物が少量であり、破片であるが共伴しており、「かわらけの一括廃棄遺構」とはいえない。しかし、推定ではあるが実測個体数と破片個体数を合わせて、総数681個という多量のかわらけを短期間に廃棄するという行為に、単純な廃棄ではなく、特殊性を感じる。とはいっても、覆土内に墨書のかかれたかわらけが２点出土してはいるが、他の祭祀儀礼的な遺物や折敷や箸等の供膳用具を伴わない（当調査地の様な砂層では木質が遺存しなかったとも考えられるが）事から、「饗宴」や「儀式」といったハレの要素を見いだす事はできず、１cm四方に砕かれたかわらけが多量に出土している事から考えて、「埋納」・「埋設」のための遺構とも思えない。遺構12の性格・目的を意味ずける材料は出土個体数のみであるが、供膳具として漆器の椀・皿等を使用せず、かわらけのみを使用したとして想定して、一人当たり大・小合わせて５個のかわらけを使用した場合、総数681個のかわらけは約136名分のセットとなる。しかし神事や宴会ではかわらけは一回限りの使用で捨てられるとされ、又、酒盃と膳を重ねて使用し、各献毎に使い捨てたとした場合、セット数はかなり少なくなると思われるが、推定総数681個というかわらけの出土数から考えると、遺構12からの出土遺物は日常のゴミではなく「饗宴」や「儀式」といった大人数で短期間に使用した際に出たゴミの一括廃

棄と思われ、「廃棄遺構」として興味深い。

出土した遺物と年代

本調査で出土した遺物はテンバコ数にして計24箱である。出土した遺物は、かわらけ・舶載磁器（青磁・白磁・青白磁）・国産陶磁器（瀬戸窯・常滑窯・山茶碗窯・亀山窯・渥美窯）・石製品（砥石・硯・滑石鍋）鉄製品・釘・土製品・スラグ・壁土・土鍋。中世以前の遺物は土師器（坏・甕・壺　）・須恵器（蓋・坏）等である。

遺構確認面から出土した遺物の破片数を計測したところ総破片数17,859ヶの内、かわらけが17,673ヶを数え、99%が、かわらけであった。これは、調査面積の狭少さに加えて、遺構12のような特種な「廃棄遺構」があったためである。かわらけ以外の遺物は、出土数量が少なく大半は破片であり、年代を比定しうる資料としては不足であったため、かわらけから本調査地の出土遺物の特徴を見てみたい。

１ａ面で検出した、「廃棄遺構」の遺構12から出土したかわらけは、口径が13～14cmの大型、10～12cmの中型、６、５～８cmの小型の組み合わせであり、法量的には、ほぼ３タイプの口径変化が見られる。大型、中型、小型共に、器形は、２種類のタイプが見られた。ひとつは、胎土が粗く、体部・底部ともに器肉はやや厚めで、器壁が直線的に外反する。ひとつは、胎土は精緻であり、体部・底部ともに器肉は薄く、器壁が口縁部に向かって緩やかな曲線を描いて立ち上がり、口縁部がやや内湾するタイプである。大・中・小の３タイプの口径変化が現れるのはおおよそ14世紀第２四半期以降[注②]である。又、器形的に器壁が薄く、口縁部に向かってやや内湾するタイプは14世紀前半から中頃にその出現を見ることができる事から１ａ面はおおよそ14世紀第２四半期から第３四半期の年代観が与えられる。遺構12からは、口縁部が遺存していなかったため口径を計測する事は出来なかったが、底径10、６cmを測る特大品（Fig.９・121）も出土している。

１ｂ面で検出した方形竪穴建築址の遺構14は、かわらけの他に、青磁蓮弁文碗・常滑窯甕・褐釉の壺・滑石鍋・手焙り・瓦・骨角製品・鉄製品・釘・壁土・土師器坏、甕・須恵器坏が出土しているが、上層を撹乱されており、全体的に遺物の出土量が少なかった。かわらけは、遺構12と同様に大型・中型・小型の３タイプに別れ、器形的にも遺構12で出土したかわらけと同タイプのかわらけが出土しており、かわらけの年代観からは１ａ面と１ｂ面には殆ど時期差が無く短期間に遺構の構築・廃棄がなされたと思われる。

遺跡の変遷

本調査地の地形は、調査区壁の堆積土層の観察から、東から西に緩やかに傾斜し、調査地西を流れる稲瀬川に対して自然堤防上の高まりを持つ砂丘の上に中世の遺構が構築された事を確認した。遺構の検出は無かったが、出土した中世以前の遺物からは、概７世紀から９世紀の年代が与えられる時期の遺物が出土しており、本調査地と長谷観音交差点を挟んで、西に約80m離れた、「長谷観音堂周辺遺跡（No,296)」（長谷３丁目41番イ地点）で、奈良、平安期に属する可能性のある遺構・遺物の発見とともに、弥生時代中期後半の遺物が遺構覆土から出土し、該期に集落が立地していた事を想定している事から考えて、７世紀頃には、調査地周辺でも生活が営まれ始めていただろうと推察される。

発見された中世の遺構も上層を大きく現代の撹乱により壊されており、良好に遺構を発見できたとは言えないが、遺構14の方形竪穴建築址の検出や、遺構12のかわらけの出土量から考えて、14世紀半ばには活発に調査地周辺で生活が営まれていたと推察される。

〈註〉

1　汐見一夫「方形竪穴建築址考－鎌倉市内における分布と分類」『中世都市研究』第１号　1991年中世都市研究会
斉木秀雄「方形竪穴建築址の編年試案」『由比ケ浜４－６－９地点発掘調査報告書』　1994年由比ケ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団

2　鎌倉市街地遺跡から出土したかわらけの編年試案が今までにいくつか示されているが、統一した見解が確立されてはいないので、いくつかの試案・論考を参照して示した。

〈参考文献〉

斉木秀雄　・「方形竪穴建築址について－鎌倉市内の分布と構造－」『諏訪東遺跡』1985年諏訪東遺跡調査会
大河内勉　・『笹目遺跡発掘調査報告書』1991年
宗臺秀明　・「中世、14世紀のかわらけの変遷」『考古学論叢　神奈川』1992年
神奈川県考古学会
・「長谷観音堂周辺遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11』
平成７年　第２分冊　鎌倉市教育委員会
瀬田哲夫　・「長谷観音堂周辺遺跡（No. 296）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10』
平成６年　第２分冊　鎌倉市教育委員会
河野真知郎　・「鎌倉における中世土器様相」『神奈川考古』21号　1986年
河野・他　・『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』
佐藤仁彦　・「若宮大路周辺遺跡群（秋月医院跡地）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10』
平成６年　第３分冊
馬淵和雄　・「かわらけ」『向荏柄遺跡発掘調査報告書』1985年
清水菜穂　・「かわらけ」考（３）『中世都市研究』第３号　1994年　中世都市研究同人会

遺構1　出土遺物（Fig. 7）

1	かわらけ	口径(7.4)　底径 5.0　器高 3.0			

遺構3　出土遺物（Fig. 7）

2	砥　　石	長(4.5)　巾 3.1　厚(1.1)			

遺構6　出土遺物（Fig. 7）

3	かわらけ	口径(7.4)　底径(5.6)　器高 1.9	6	かわらけ	口径 13.0　底径 7.7　器高 3.3
4	かわらけ	口径(8.6)　底径(6.6)　器高 1.6	7	かわらけ	口径(12.3)　底径(7.8)　器高 3.1
5	かわらけ	口径 7.6　底径 5.2　器高 1.7	8	かわらけ	口径(11.9)　底径(8.0)　器高 3.5

遺構9　出土遺物（Fig. 7）

9	かわらけ	口径(6.9)　底径(5.0)　器高 1.5	12	かわらけ	口径(13.2)　底径(8.2)　器高 3.8
10	かわらけ	口径 7.6　底径 5.9　器高 1.5	13	かわらけ	口径(12.7)　底径(8.4)　器高 3.9
11	かわらけ	口径 7.7　底径 5.5　器高 2.2	14	青　磁 皿	

遺構12　出土遺物（Fig. 8・9）

1	かわらけ (内折れ)	口径(3.8)　底径(3.5)　器高 0.6	19	かわらけ	口径(7.5)　底径(6.2)　器高 1.6
2	かわらけ (白かわらけ)	口径(8.2)　底径(5.3)　器高 1.5	20	かわらけ	口径 8.2　底径 5.7　器高 1.7
3	かわらけ	口径(7.6)　底径(5.0)　器高 1.6	21	かわらけ	口径 7.7　底径 5.4　器高 1.6
4	かわらけ	口径(7.4)　底径(4.6)　器高 1.7	22	かわらけ	口径(7.8)　底径(6.0)　器高 1.6
5	かわらけ	口径(7.3)　底径(5.0)　器高 1.5	23	かわらけ	口径(7.5)　底径 6.2　器高 1.7
6	かわらけ	口径(7.9)　底径(5.6)　器高 1.4	24	かわらけ	口径(7.7)　底径(6.0)　器高 1.6
7	かわらけ	口径(8.1)　底径(6.2)　器高 1.4	25	かわらけ	口径 7.3　底径 5.3　器高 1.5
8	かわらけ	口径 7.6　底径 5.2　器高 1.4	26	かわらけ	口径 7.4　底径 5.4　器高 1.6
9	かわらけ	口径 7.3　底径 5.0　器高 1.3	27	かわらけ	口径(7.4)　底径 5.2　器高 1.6
10	かわらけ	口径(7.5)　底径(6.1)　器高 1.3	28	かわらけ	口径(8.3)　底径(5.5)　器高 1.7
11	かわらけ	口径(7.6)　底径(5.2)　器高 1.5	29	かわらけ	口径 7.4　底径 6.1　器高 1.7
12	かわらけ	口径 7.6　底径 6.1　器高 1.3	30	かわらけ	口径(7.8)　底径 5.0　器高 1.8
13	かわらけ	口径 7.9　底径 5.8　器高 1.5	31	かわらけ	口径 7.0　底径 5.1　器高 1.9
14	かわらけ	口径(8.1)　底径(5.8)　器高 1.6	32	かわらけ	口径 7.1　底径 4.8　器高 1.8
15	かわらけ	口径(7.7)　底径(5.6)　器高 1.7	33	かわらけ	口径(8.0)　底径(5.2)　器高 2.0
16	かわらけ	口径 8.3　底径 5.1　器高 1.6	34	かわらけ	口径(7.7)　底径(5.4)　器高 1.7
17	かわらけ	口径(7.8)　底径 5.8　器高 1.4	35	かわらけ	口径(6.6)　底径(4.6)　器高 1.6
18	かわらけ	口径(7.7)　底径 5.6　器高 1.5	36	かわらけ	口径(6.8)　底径 5.0　器高 1.7

37	かわらけ	口径 6.9　底径 4.7　器高 1.8	72	かわらけ	口径 (10.6)　底径 6.2　器高 2.9
38	かわらけ	口径 6.5　底径 4.6　器高 1.7	73	かわらけ	口径 (10.2)　底径 (7.8)　器高 2.6
39	かわらけ	口径 6.7　底径 5.1　器高 1.9	74	かわらけ	口径 (10.9)　底径 (7.5)　器高 2.9
40	かわらけ	口径 (7.3)　底径 (5.3)　器高 1.9	75	かわらけ	口径 11.6　底径 7.7　器高 3.1
41	かわらけ	口径 (8.2)　底径 5.0　器高 2.5	76	かわらけ	口径 (11.3)　底径 (8.0)　器高 3.1
42	かわらけ	口径 (6.8)　底径 (4.6)　器高 1.7	77	かわらけ	口径 (11.1)　底径 (7.6)　器高 2.8
43	かわらけ	口径 (7.8)　底径 4.8　器高 2.1	78	かわらけ	口径 (11.5)　底径 (7.2)　器高 2.8
44	かわらけ	口径 7.7　底径 5.5　器高 1.9	79	かわらけ	口径 11.8　底径 7.1　器高 3.1
45	かわらけ	口径 (7.4)　底径 5.5　器高 2.1	80	かわらけ	口径 (11.9)　底径 8.0　器高 2.7
46	かわらけ	口径 (7.1)　底径 (5.2)　器高 2.2	81	かわらけ	口径 11.6　底径 7.4　器高 2.6
47	かわらけ	口径 7.2　底径 5.1　器高 2.1	82	かわらけ	口径 (11.7)　底径 7.5　器高 2.9
48	かわらけ	口径 7.0　底径 4.8　器高 2.1	83	かわらけ	口径 (11.9)　底径 7.6　器高 2.8
49	かわらけ	口径 (7.8)　底径 4.9　器高 2.4	84	かわらけ	口径 (12.0)　底径 8.0　器高 2.7
50	かわらけ (灯明皿)	口径 (7.3)　底径 (5.0)　器高 1.4	85	かわらけ	口径 12.2　底径 8.6　器高 3.0
51	かわらけ	口径 (10.2)　底径 (6.2)　器高 2.8	86	かわらけ	口径 (12.3)　底径 8.0　器高 3.2
52	かわらけ	口径 (9.6)　底径 6.1　器高 2.7	87	かわらけ	口径 (12.0)　底径 7.4　器高 3.3
53	かわらけ	口径 (10.0)　底径 6.3　器高 2.6	88	かわらけ	口径 (11.7)　底径 7.6　器高 3.0
54	かわらけ	口径 (10.2)　底径 6.6　器高 2.6	89	かわらけ	口径 (11.9)　底径 (7.8)　器高 3.1
55	かわらけ	口径 (9.8)　底径 (6.2)　器高 2.9	90	かわらけ	口径 (12.7)　底径 8.0　器高 3.2
56	かわらけ	口径 (10.4)　底径 6.4　器高 2.8	91	かわらけ	口径 (12.8)　底径 7.6　器高 3.2
57	かわらけ	口径 (9.9)　底径 6.4　器高 2.5	92	かわらけ	口径 (12.7)　底径 7.6　器高 3.2
58	かわらけ	口径 10.4　底径 6.4　器高 2.9	93	かわらけ	口径 12.3　底径 8.2　器高 3.1
59	かわらけ	口径 (10.5)　底径 6.8　器高 2.9	94	かわらけ	口径 (12.8)　底径 7.6　器高 3.6
60	かわらけ	口径 (10.3)　底径 6.6　器高 2.4	95	かわらけ	口径 (13.2)　底径 7.6　器高 3.0
61	かわらけ	口径 (10.5)　底径 (7.0)　器高 2.5	96	かわらけ	口径 (13.2)　底径 8.0　器高 3.3
62	かわらけ	口径 (11.1)　底径 (6.4)　器高 2.7	97	かわらけ	口径 (13.2)　底径 8.0　器高 3.4
63	かわらけ	口径 (10.6)　底径 6.2　器高 3.0	98	かわらけ	口径 (13.0)　底径 8.2　器高 3.2
64	かわらけ	口径 (10.4)　底径 6.7　器高 2.9	99	かわらけ	口径 12.9　底径 7.9　器高 3.4
65	かわらけ	口径 9.9　底径 6.2　器高 2.8	100	かわらけ	口径 12.7　底径 8.3　器高 3.3
66	かわらけ	口径 (10.6)　底径 7.0　器高 2.8	101	かわらけ	口径 13.1　底径 8.2　器高 3.4
67	かわらけ	口径 (10.5)　底径 6.2　器高 2.7	102	かわらけ	口径 (12.9)　底径 (8.2)　器高 3.4
68	かわらけ	口径 (10.6)　底径 6.6　器高 2.7	103	かわらけ	口径 (13.5)　底径 7.5　器高 3.5
69	かわらけ	口径 (10.1)　底径 6.2　器高 3.0	104	かわらけ	口径 (13.1)　底径 8.0　器高 3.4
70	かわらけ	口径 (10.2)　底径 (6.4)　器高 3.0	105	かわらけ	口径 13.0　底径 8.8　器高 3.7
71	かわらけ	口径 (10.3)　底径 7.2　器高 3.1	106	かわらけ	口径 13.8　底径 9.4　器高 3.7

107	かわらけ	口径 13.3　底径 8.2　器高 3.2	116	かわらけ	口径 (13.5)　底径 8.0　器高 3.6
108	かわらけ	口径 (13.5)　底径 (8.0)　器高 3.2	117	かわらけ	口径 13.0　底径 7.8　器高 3.7
109	かわらけ	口径 (13.7)　底径 8.2　器高 3.4	118	かわらけ	口径 (13.7)　底径 7.9　器高 3.4
110	かわらけ	口径 (13.7)　底径 7.5　器高 3.3	119	かわらけ	口径 (13.3)　底径 8.2　器高 3.2
111	かわらけ	口径 (13.7)　底径 8.2　器高 3.6	120	かわらけ	口径 (13.7)　底径 8.0　器高 3.8
112	かわらけ	口径 (13.2)　底径 8.0　器高 3.3	121	かわらけ	底径 10.6　器高 2.3
113	かわらけ	口径 (13.9)　底径 8.0　器高 3.4	122	かわらけ	口径 12.6　底径 7.7　器高 3.5
114	かわらけ	口径 (13.3)　底径 (7.8)　器高 3.4	123	かわらけ	口径 (3.6)　底径 (5.1)　器高 6.1
115	かわらけ	口径 13.5　底径 7.4　器高 3.4	124	須恵器 坏身	口径 (14.9)

遺構 8　出土遺物（Fig.10）

1	かわらけ (内折れ)	口径 (5.9)　底径 (3.9)　器高 1.0	7	かわらけ	口径 12.5　底径 8.0　器高 3.2
2	かわらけ	口径 (7.4)　底径 5.4　器高 1.6	8	かわらけ	口径 (13.1)　底径 7.0　器高 3.5
3	かわらけ	口径 7.9　底径 6.3　器高 2.0	9	かわらけ	口径 (12.9)　底径 (7.1)　器高 3.0
4	かわらけ	口径 10.9　底径 6.7　器高 3.1	10	かわらけ	口径 (13.0)　底径 (8.2)　器高 3.7
5	かわらけ	口径 (13.1)　底径 7.0　器高 3.8	11	土師器 甕	底径 (7.9)
6	かわらけ	口径 13.9　底径 7.9　器高 4.1	12	金属製品 銅銭	天禧通宝

遺構14　出土遺物（Fig.11）

1	かわらけ	口径 (7.3)　底径 (5.4)　器高 1.5	15	かわらけ	口径 12.7　底径 8.0　器高 3.5
2	かわらけ	口径 7.8　底径 5.7　器高 1.6	16	かわらけ	口径 (12.8)　底径 (7.8)　器高 3.5
3	かわらけ	口径 7.8　底径 5.6　器高 1.7	17	かわらけ	口径 13.0　底径 8.4　器高 3.8
4	かわらけ (灯明皿)	口径 8.0　底径 5.4　器高 1.8	18	かわらけ	口径 13.4　底径 7.8　器高 3.5
5	かわらけ	口径 (7.8)　底径 (5.6)　器高 1.6	19	青磁 蓮弁文鉢	
6	かわらけ	口径 7.4　底径 5.6　器高 1.8	20	青磁 蓮弁文碗	
7	かわらけ	口径 (7.4)　底径 (6.0)　器高 1.9	21	青磁 蓮弁文碗	
8	かわらけ	口径 (7.2)　底径 (5.2)　器高 2.1	22	骨角製品 裁断骨	長 5.2　巾 2.0　厚 1.8
9	かわらけ (灯明皿)	口径 6.7　底径 4.9　器高 2.0	23	瓦質 火鉢	
10	かわらけ	口径 11.2　底径 7.3　器高 3.0	24	瓦 女瓦	長 (12.9)　巾 (11.8)　厚 (2.5)
11	かわらけ	口径 (11.8)　底径 7.0　器高 3.0	25	金属製品 銅銭	熙寧元宝
12	かわらけ	口径 (12.9)　底径 (9.2)　器高 3.1	26	金属製品 釘	長 (7.3)　径 1.0
13	かわらけ	口径 12.7　底径 7.3　器高 3.1	27	土師器 坏	口径 (11.8)
14	かわらけ	口径 (13.2)　底径 (9.4)　器高 3.3	28	土師器 甕	口径 (18.0)

遺構17　出土遺物（Fig.10）

13	かわらけ	口径(6.2)　底径(5.0)　器高 1.7	15	かわらけ	口径(3.9)　底径 8.0　器高 3.8
14	かわらけ	口径 7.3　底径 5.4　器高 1.8	16	常滑 捏ね鉢	

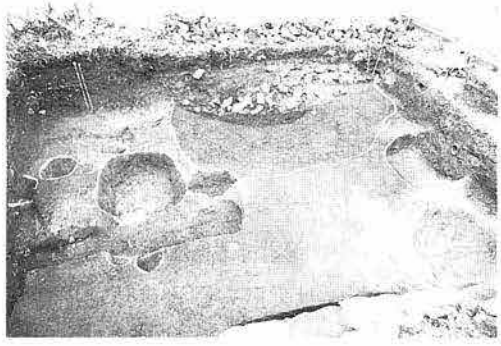
一面　出土遺物（Fig.12）

1	かわらけ	口径 7.4　底径 5.9　器高 1.4	13	かわらけ	口径 12.8　底径 7.2　器高 4.2
2	かわらけ	口径 7.4　底径 5.4　器高 1.6	14	渥美 壷	
3	かわらけ	口径 8.0　底径 6.0　器高 2.0	15	常滑 捏ね鉢	
4	かわらけ	口径(6.8)　底径(5.2)　器高 1.6	16	土師器 坏	口径(13.2)　底径(6.8)　器高(3.6)
5	かわらけ	口径(7.0)　底径(5.0)　器高 2.1	17	須恵器 壺瓶類	口径(10.4)
6	かわらけ	口径(7.6)　底径 5.0　器高 2.2	18	須恵器 坏蓋	最大径(12.6)　内径(11.9)　器高 3.0
7	かわらけ	口径(12.0)　底径(7.9)　器高 2.8	19	土師器 甕	
8	かわらけ	口径 11.7　底径 7.8　器高 2.9	20	須恵器 壺瓶類	
9	かわらけ	口径 11.7　底径 7.8　器高 3.0	21	金属製品 鉄釘	長(5.1)　径 0.5
10	かわらけ	口径(10.9)　底径 7.2　器高 3.4	22	金属製品 銅銭	紹聖元宝
11	かわらけ	口径(12.8)　底径(7.4)　器高 3.3	23	金属製品 銅銭	寛永通宝
12	かわらけ	口径(12.6)　底径(6.6)　器高 3.7	24	金属製品 銅銭	聖宋通宝

写 真 図 版

調査地の前を走る県道鎌倉藤沢線（東から）

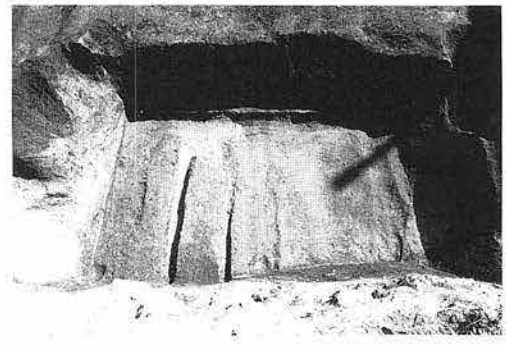
重機による表土前掘状況（南から）



１面全景（南から）

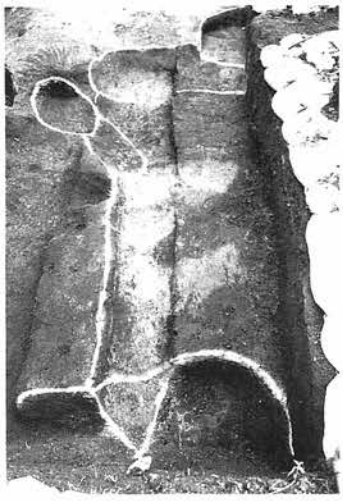
遺構12土壙上面状況

遺構12（南東から）



遺構14（南から）

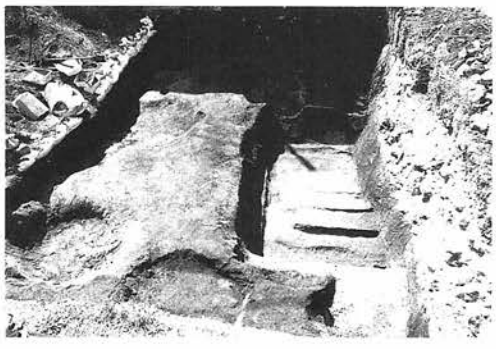
作業風景



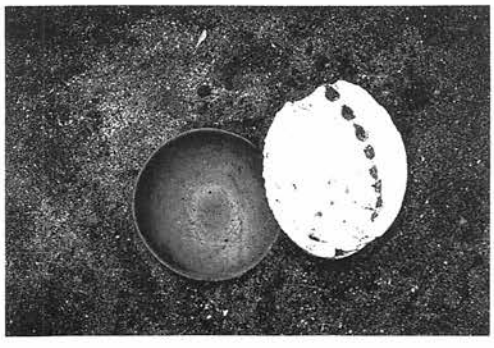
遺構８．10（西から）

遺構12南壁土層

遺構12完掘状況（南から）



２面全景（東から）



遺構12かわらけと鮑出土状況

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成10年度発掘調査報告
巻次	15
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	伊丹まどか
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1999年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
はせこうじしゅうへんいせき 長谷小路周辺遺跡	かながわけんかまくらしはせ 神奈川県鎌倉市長谷1－33－3	204	No.236			1997年9月8日 ～ 1997年10月1日	51.30m²	店舗併用住宅建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長谷小路周辺遺跡	都市遺跡	中世	方形竪穴建築址、土壙ほか	中世－かわらけ、常滑窯製品、舶載陶磁器他	

大倉幕府跡（No.253）

おおくらばくふあと

雪ノ下三丁目６５１番８外地点

例　　言

1．本報文は、大倉幕府跡（神奈川県遺跡台帳No.253）内、鎌倉市雪ノ下三丁目651番８外地点における個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。

2．調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が平成９年（1997年）12月15日から26日まで実施した。

調査面積は約15m²。

3．本報文に関わる整理作業等は、調査員・調査補助員が分担し、執筆・編集は汐見一夫が行った。又、本報に使用した写真は、図版４をリモコン式高所撮影装置によって木村美代治が、他を汐見が撮影した。

4．出土遺物等の調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

5．現地調査から本報作成に至るまで、次の機関・各氏から御指導・御教示・御協力を賜った。

斉藤建設　市内各遺跡発掘調査団　㈳シルバー人材センター

東国歴史考古学研究所　鎌倉考古学研究所

6．調査・整理体制は以下の通り。

調 査 担 当　小林康幸

調　査　員　汐見一夫

調査補助員　杉山知恵子　吉田桂子　渡邊美佐子

作　業　員　石渡辰男　大戸迫猛　河原龍雄　柴崎英輔

杉浦永章　照井三喜　吉本脩三　渡辺久夫

本　文　目　次

第１章　環境と立地 …… 178
第２章　調査の概要 …… 179
第３章　検出した遺構 …… 180
第４章　出土した遺物 …… 182
第５章　まとめ …… 186

挿　図　目　次

図１　調査地点周辺図 …… 178
図２　調査区位置図 …… 179
図３　遺構全測図 …… 180
図４　堆積土層図 …… 181
図５　出土遺物（１） …… 182
図６　出土遺物（２） …… 183
図７　出土遺物（３） …… 184
図８　出土遺物（４） …… 185
図９　出土遺物（５） …… 186

表　目　次

表１　出土遺物計測表 …… 188
表２　出土遺物破片数 …… 189

図　版　目　次

図版１　調査地点近景（南から） …… 193
図版２　１．１面全景（南から） …… 194
　　２．２面全景（南から）
　　３．２面土丹地業（北から・部分）
図版３　１．３面及びトレンチ（南から） … 195
　　２．３面土丹地業及び北側トレンチ
　　３．南側トレンチ土丹地業面
図版４　調査地点より北方（西御門方面）を望む
　　…… 196

第１章　環境と立地（図１）

本遺跡名称は、鶴岡八幡宮東方約300ｍの現県道金沢鎌倉線北沿いに位置し、南北約220ｍ×東西約270ｍの現道筋に沿った方形の範囲が呼称されている。大倉山並の南裾で、滑川右岸域に広がる沖積低地上にあたり、諸文献や付近の調査成果から観ても早くから拓けていたことが知られる。

「大倉（大蔵）」の名は、『吾妻鑑』等の諸資料で大倉稲荷として散見され、地域総称としては南北は瑞泉寺辺りから滑川まで、東西は鶴岡八幡宮から朝比奈切通しまでとされる。治承４年（1180年）石橋山での挙兵後、鎌倉に入った源頼朝が居館を新築しこの付近に幕府を開いたことから大倉幕府と呼ばれ、嘉禄元年（1225年）の焼失で幕府が若宮大路東側に移転されるまで鎌倉の中枢であり、周囲には執政期間の政所が置かれ、多くの御家人・被官の屋敷もあったと推定される。

図１に示した様に、本遺跡内での調査はまだ３地点目である。地点１はトレンチ状の調査、地点２は上層堆積土が近世以降に攪乱されており、共に鎌倉・室町期の生活の痕跡は認められるものの、幕府を推定し得る遺構や出土遺物は顕著とは言い難い。周辺の調査例から観ると、地点５及び８～11で大倉幕府と近接した時期と観られる旧河川流路や道路側溝、掘立柱建物や井戸他の遺構群が高い密度で確認されている。その西方一帯では、区画を暗示する柵列や地点14・15・18・19で検出された側溝、及び地点20で検出された小町大路側溝は、共通して検出される宴会の後処理であると考えられるかわらけ溜り等の遺構群と合せ観ると、鎌倉の区画割りや政所の位置比定に重要な示唆を与えている。

図１　調査地点周辺図

第２章　調査の概要

本調査は、個人専用住宅建設にあたり、敷地東側道路拡幅部分に各種の管が埋設される範囲を対象として実施された。調査地点付近の現況や調査面積・掘削深度を鑑み、調査の進行に伴う残土は敷地内で処理することとした。調査区は、東側道路に沿って南北約９ｍ×東西約1.6mに設定され、施工業者が現地表アスファルト除去後の海抜約12.7m前後から人力にて掘下げ、調査開始とした。

調査面積及び掘削深度を鑑み、出土遺物は層位的に採り上げる様心掛け、検出遺構の記録は方眼グリッドを設定せずに、調査区東側の道路境界線上に任意の点Ｐ１・Ｐ２を設定し、２点間を測量基本軸として光波測定器を用いて実測した。

図２には、調査区付近の４級基準点２点、Ｅ111（Ｘ：75 290.855　Ｙ：24 515.764）・Ｅ112（Ｘ：75 317.625　Ｙ：24 518.975）と、実測基準点Ｐ１・Ｐ２との位置関係を顕した。この測量基本軸は磁北よりも27°　8′　55″東に振れている。

近世以降の堆積土を掘下げる内に、調査区中央付近にはＶ字形に、又、北端には東西方向で既存使用中の埋設管があり、安全上の問題からその範囲を調査対象外と見なさざるを得なかった。埋設管攪乱部分を避けながら掘り下げた為に、調査区は三分割された格好になる。現地表下約50cm程で、部分的に攪乱壙の影響はあるものの概ね近世以降の堆積土を払拭した上面を第１面とした。以下、層位的な変化を捉えながら掘削深度に達するまでに中世期の地業面を計３面確認し、各面毎に記録保存・写真撮影を行い、出土遺物は層位毎に採り上げた。

調査区が狭小なこともあり、建物遺構や溝等の構造物は確認されなかったが、堆積土層は何れも人為的な様相が窺える。遺物は調査範囲の割には多く出土し、テンバコ４箱分、出土単純破片数にして１,000余点を数える。内、かわらけが９割弱を占め、焼物以外の土・石・金属・骨角・木製品類は殆ど出土しなかった。

最終的には規定深度付近まで掘り下げた後、調査区壁三方向の堆積土層断面図を記録した。諸記録保存が終了後に、敷地内に盛った残土を調査区に埋め戻し、関係各方面に調査終了の由伝え撤収した。

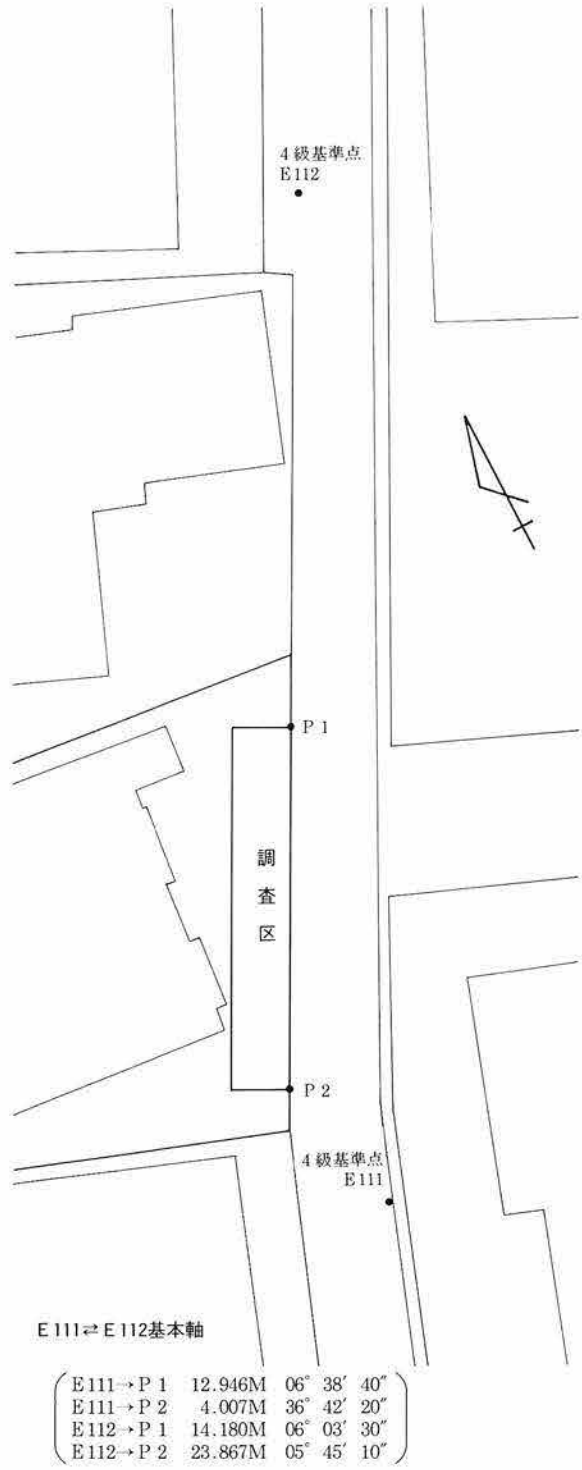


図２　調査区位置図

第３章　検出した遺構

第２章でも触れた様に、本調査では中世期の生活面を３時期捉えたものの、建物や溝といった構造的な遺構は確認されなかった。図３は各面の調査区全測図、図４は調査区北・東・南の土層断面図である。

以下、両図を参照しながら検出された遺構について、中世１面より説明を加える。

１面

最高位現地表下約30cm程で確認した灰褐色粘質土上面を１面としたが、特に人為的な地業や整地が施された様相は顕著ではなく、中世確認面とした方が適切かもしれない。

柱穴状の遺構を６基検出し、遺構１～６の番号を付した。いずれも覆土は黒褐色系で、炭化物を含む。遺構３～６は、上場径20cm～30cm内外を測る不正円形で、深さ10cm～30cm前後。柱痕・礎板等は確認されなかった。遺物は遺構５から瀬戸窯の碗類小片（年代・器種不明）が１点出土した以外は、かわらけ小片が数点づつ出土したに過ぎない。遺構１・２は小土壙状を呈するが性格は不明。遺構２は、底部と南壁を掘過ぎ、図５に図示した遺物は本来下層に帰属する可能性がある。

２面

１面から掘下げ、現地表下約１m程で破砕土丹地業面を検出したレベルを２面とした。図４の９・10層上面で、海抜高約11.8m前後を測り、調査区内ではほぼ水平・平坦である。調査区中央付近、既存埋設管掘り残し部分の間が土丹層は最も密であり、北に向って地

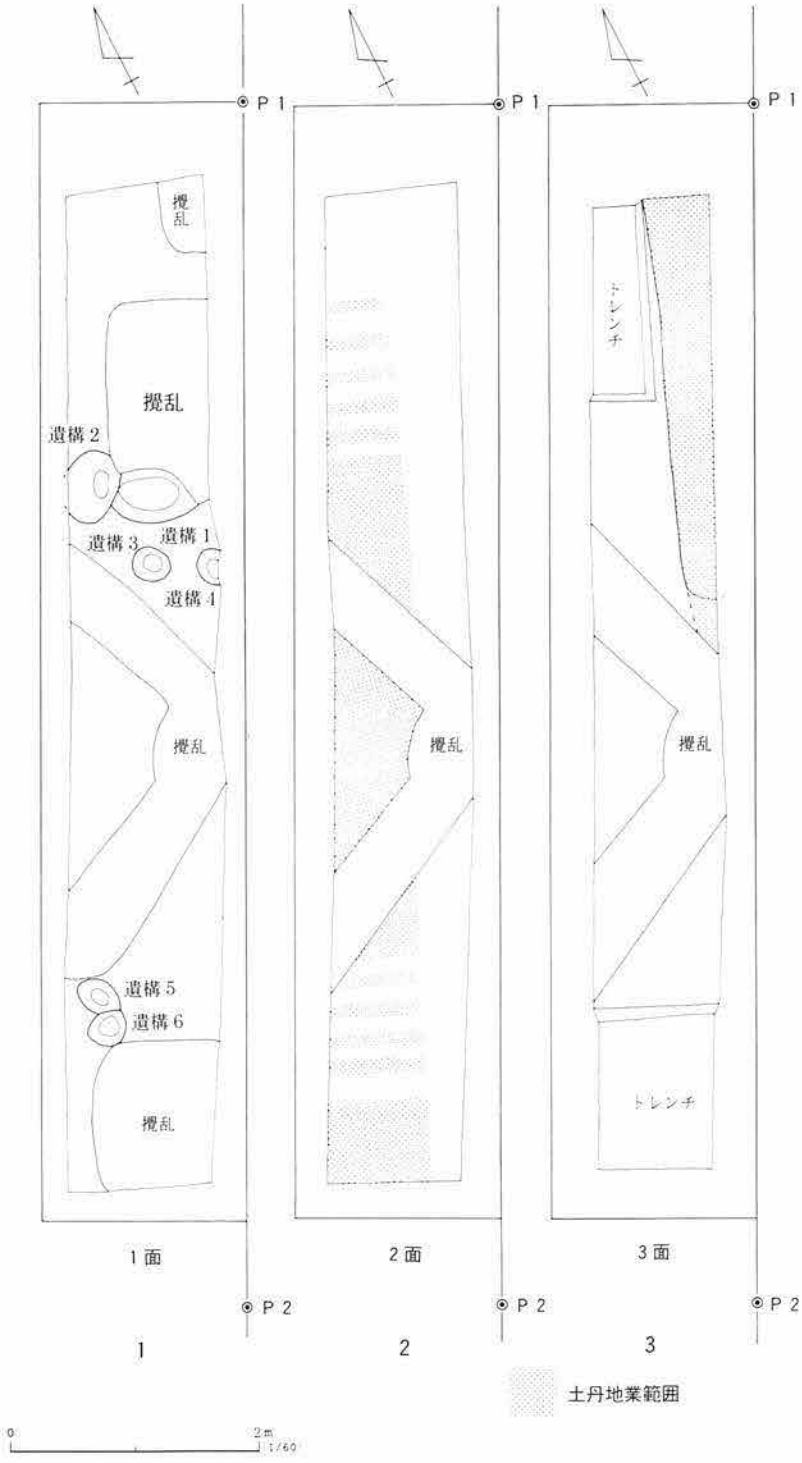


図３　遺構全測図

業の様相はやや弱くなる。南寄りの一部は、1面からの掘下げの際に拳大の土丹を掘り上げてしまったが、本来は地業が続いていたと考えられる。地業はかなり強固で、東側縁片部にはやや大きめの土丹塊を配し、人為的な様相が顕著といえる。側溝は伴わないが、南北に走行する道路或は通路状の遺構とも考えられようか。失われた部分を復元した走行方向は、N－22°－Eを測る。道路或は通路状遺構の範囲外では、土丹粒に依る整地は為されているものの地業はさほど強固ではなく、遺構は全く検出されなかった。

土層注記
1．近現代堆積土。
2．茶褐色粘質土　中世遺物包含層。
3．灰褐色粘質土　土丹・土器粒・炭化物を含む。
4．黒褐色土　炭化物を含む。遺構4覆土。
5．灰褐色土　土丹を多量に含み、しまり悪い。
6．暗褐色粘質土　土丹粒・土器粒を多量に含む。
7．灰（黄）褐色土＋土丹層。
8．黒褐色土　炭化物＋土丹粒＋砂質土
9．灰褐色土丹粒子層　やや砂っぽく、しまり良。
10．褐色粘質土　土丹粒を多量に含み、しまり良。
11．黒褐色粘土＋炭化物層　腐植土を含む。
12．褐色土＋炭＋土丹粒。
13．土丹層　3面の大小土丹による地業層。
14．褐色粘土＋炭層＋灰。
15．炭層　焼土・焼土丹粒を微量に含む。
16．褐色粘質土＋土丹粒子層。
　褐鉄分を含み、堅くしまる。道路状の地業か。
17．褐色粘質土　全体に土丹粒・炭を含む。
18．暗褐色粘質土　腐植土を混入し、しまり悪い。
＊　1面　3層上面。
　2面　9・10層上面。
　3面　16層上面。

図4　堆積土層図

3面

2面から掘下げ、現地表下1.4m程の調査区北端で、強固な土丹地業層を確認しこの上面とほぼ同レベルで拡がる16層上面を3面とした。海抜高約11.8m前後を測り、調査区内ではほぼ水平・平坦である。土丹地業層は層厚約10cmを測り、地業の様相は人為的な様相が顕著であり、南北に走行する道路或は通路状遺構と考えられる。走行方向はN－24°－E程、側溝は確認できなかった。土丹地業範囲外でも、上面は硬化しているが、遺構は全く検出されなかった。

下層確認トレンチ

残土処理や作業の安全を考慮し、3面以下はトレンチに依る部分的な確認作業とした。トレンチは3面の土丹地業範囲を遺し、調査区北端と南端に設定した。

掘削規制深度付近まで掘下げ、岩盤と見紛う程の強固な土丹地業面を確認した。海抜高約11.3m前後を測り、上面には層厚約10cm程の炭層が堆積する。この土丹地業と炭層堆積状況は、南北両トレンチに共通であり、未掘部分も連続していると想われる。2面・3面での確認成果を考え併せると、道路或は通路状遺構とも考えられるが、この確認範囲では断定するには至らない。

第４章　出土した遺物

本章では、出土した遺物について各層位・面毎に触れていく。調査面積の割に、多くの遺物が出土し接合率も比較的高かった。遺物種としてはかわらけが圧倒的に多く出土し、層位的な年代にも依るが、遺跡名称から鑑みると舶載陶磁器・瀬戸は少ないとの印象を受けよう。第３章からも分る様に、個別の遺構或は遺構と直接的に繋がる様な出土状況は認められなかった為に、現地採り上げに沿って層位的に提示した。尚、各出土遺物の計測値及び調査に於ける出土遺物数は、後章末に出土遺物計測表及び出土遺物破片数計数表を付した。又、実測し得なかった遺物については適宜文章中で触れていくこととする。

図５の１～４は、１面上及び１面遺構内の出土遺物。

１・２は、中世層確認後遺構精査時の出土。１は瀬戸窯灰釉の平碗口縁部。釉調は灰緑色を呈しやや厚く掛る。２は備前窯の擂鉢片。遺構精査時に出土した遺物には他に、かわらけ・瀬戸窯縁釉小皿片・産地不明東海系碗類・滑石片があるが、何れも小片の為に図示し得なかった。かわらけには粉質胎土で体部が外反しながら立上がるタイプも数点出土している。３・４は遺構１－２出土遺物。前章で述べた様に、本来は下層に含まれるべき遺物かもしれない。３は轆轤成形のかわらけ。器表褐色を呈し、胎土・焼成共に良好。４は常滑窯の甕。出土時８小破片が接合している。縮尺1/6で図示。

図５の５～11は、１面から掘下げ時概ね図４の３層からの出土遺物で、１面下として扱った。

５～８は轆轤成形のかわらけ。器表褐色乃至赤褐色を呈し、胎土・焼成共に良好。９は瀬戸窯灰釉の瓶子底部。釉調は淡緑色でやや厚く掛り外底面は露胎、梅瓶型の器形になろうか。10は常滑窯甕底部。11の石製品は、赤間産の硯。赤間ヶ石の中で紫石と呼ばれる石材で、成形痕やフチの造りから観ると本来硯箱に入る量産品と思われる。

本層位からは他に、かわらけ、瀬戸窯では折縁深皿・卸皿、常滑窯では甕・捏鉢、瓦質火鉢、滑石が出土しているが、小片の為に図示し得なかった。かわらけには、図示した５のタイプは殆ど含まれず、全体的には６～８の器形が大勢を占める。

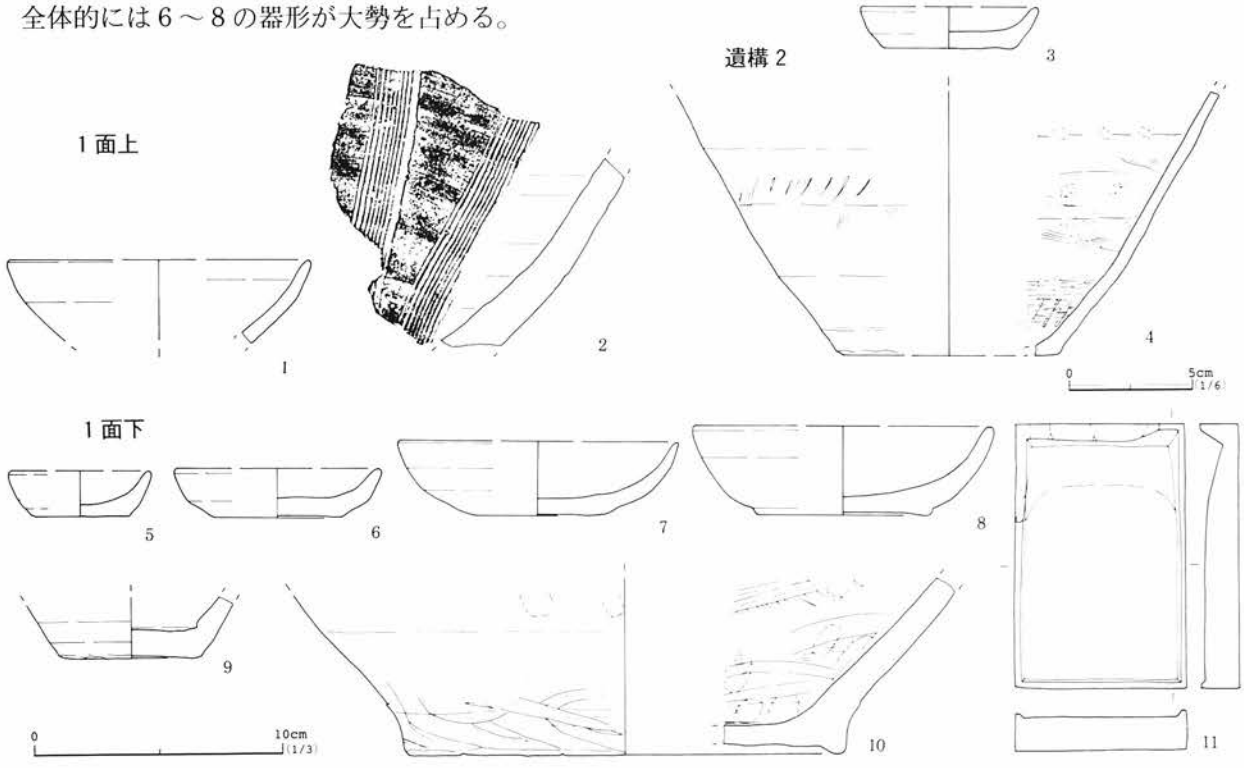


図５　出土遺物（１）

図6・7は2面の土丹層確認まで、概ね図4の5層・6層からの出土遺物で、2面までとして扱った。

1～22は轆轤成形のかわらけで、1～9は小型品、10～21は中型乃至大型、22は白かわらけ。概ね器表淡褐色乃至灰褐色を呈し、胎土・焼成共に良好。小型品は体部外面中位乃至下位に稜が入るタイプが主流を占め、一定の割合で7～9の様な器高の高い碗型が出土している。中型や大型品は、体部外面上位乃至中位に稜が入るタイプが主流で、図示できた個体は少ないが、体部下位に稜が入りやや内湾気味に立ち上がるものも出土している。図示したかわらけは、器形から観た出土傾向をほぼ反映している。

23は瀬戸窯灰釉の卸皿。灰黄色系の釉は浸け掛け。他に灰釉浸け掛けの折縁深皿片が出土している。24は常滑窯の捏鉢。図示し得ない小片も、弱く内外双方に引かれるか外のみに引かれるタイプが主流を占める。25・26は常滑窯の甕。図示し得ない口縁部片では25の様な形態は少なく、26の様な所謂N字状口縁形態が多く観られるが、幅広の縁帯部が頸部に張付く様なものは殆ど出土していない。甕の底部片には、捏鉢に転用されたものも数点観られた。

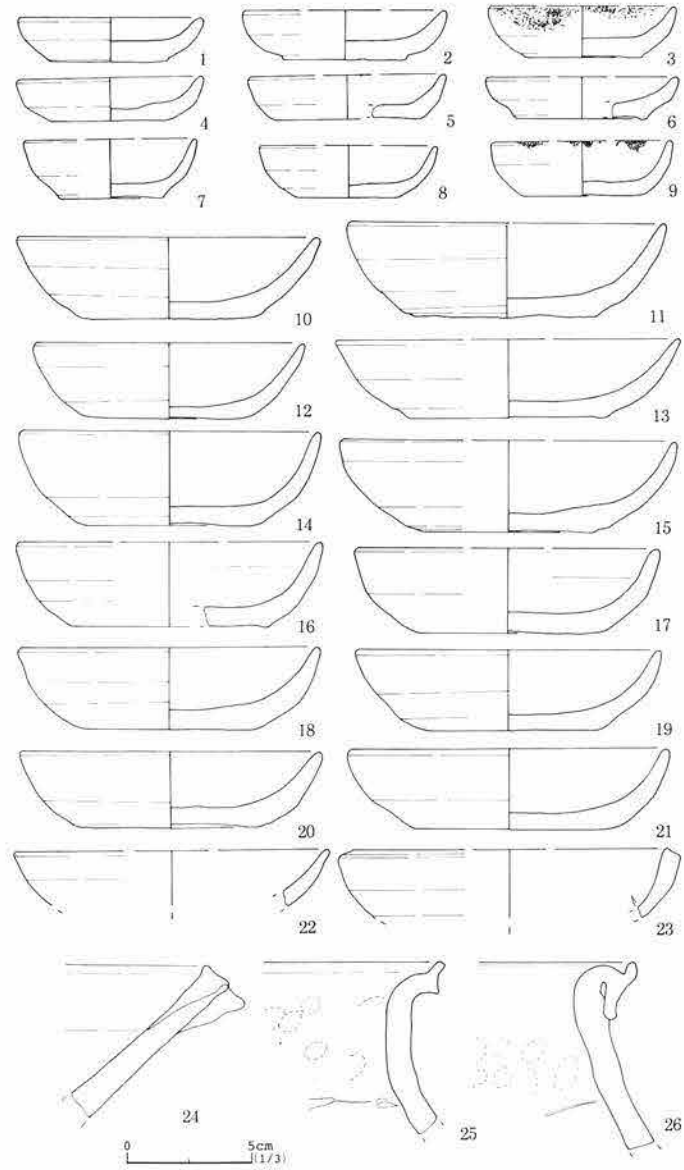


図6　出土遺物（2）

図7は瓦で全て女瓦。27は鐙瓦の可能性もあり、凸面は細い縄目叩き文をナデ調整、凹面成形時に布と黒色砂粒を併用し、釘穴は焼成前にあけられる。28の凸面は横位ナデによる段差が生ずる。各年代等は原廣志氏に実見して頂き、27～30は13世紀後半～14世紀、31は13世紀前半との御教示を賜った。
他に図示し得ない出土遺物には、龍泉窯系青磁蓮弁文碗、南部山茶碗窯系捏鉢、吉備系土師質土器碗、瓦器質輪花型火鉢、食物残滓の貝類（アカニシ他）がある。

図8の1～37は図6・7より下層、概ね図4の9層～12層からの出土遺物。

1～23は轆轤成形のかわらけで、1は極小品、2～11は小型品、12～23は中型乃至大型品。器表淡褐色乃至灰褐色を呈し、胎土・焼成共に良好。小型品に器形から観たバリエーションが、中型乃至大型品に内湾気味の器形がそれぞれ増えるものの、図6・7のかわらけと大きな年代差は感じられない。図示したかわらけは、器形から観た出土傾向及び相対的な出土量を概ね反映している。

24～30は舶載陶磁器類で、24は白磁の皿。内底の梅月文は型捺し。25・26は白磁口兀皿。25の体部下半～外底面は無釉。27・28は龍泉窯青磁蓮弁文碗。何れも釉調は淡灰緑色で、やや失透する。29・30は青白磁梅瓶。10層・11層を中心に5片出土しているが接合はしなかった。

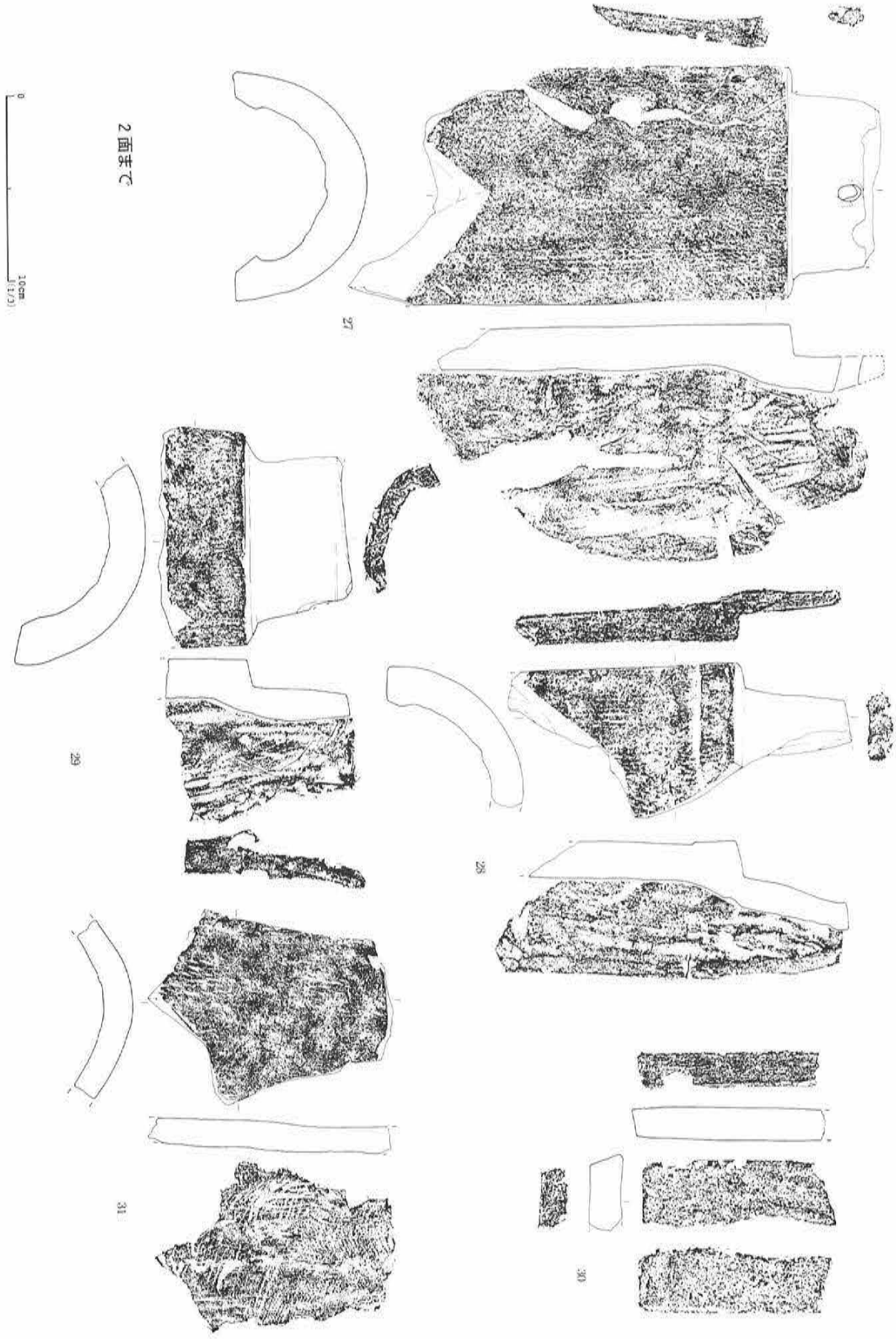


図7　出土遺物（3）

31は常滑窯の甕。内面は滑らかに磨耗し、捏鉢に転用されている。当該層位からは多くの常滑片が出土しているが、何故か口縁部片は少ない。図示し得なかったが口縁部の形態は、甕は所謂N字状口縁のもの、捏鉢は内外双方に弱く引かれるものである。32は当該層位から唯一出土した瀬戸窯灰釉卸皿。編集時のミスで表2には漏れている。黄灰緑色の釉は刷毛塗り。33は南部糸山茶碗。内底面は滑らかに磨耗し、外低高台部には籾殻痕が残る。

34は土器質浅鉢型火鉢。35は瓦器質輪花型火鉢。36は瓦質の火鉢。当該層位から火鉢類は9片出土しているが、瓦器質乃至瓦質胎土のものは35・36を含めて3片のみ、他は34と同一個体の可能性もある土器質の胎土である。

37の石製品は滑石鍋。石質は黒色味を帯びた暗銀灰色で、長崎県西彼杵半島産と観られる。鍔部はかなり退化し、内外面共に磨耗が著しく調整痕ははっきりしない。

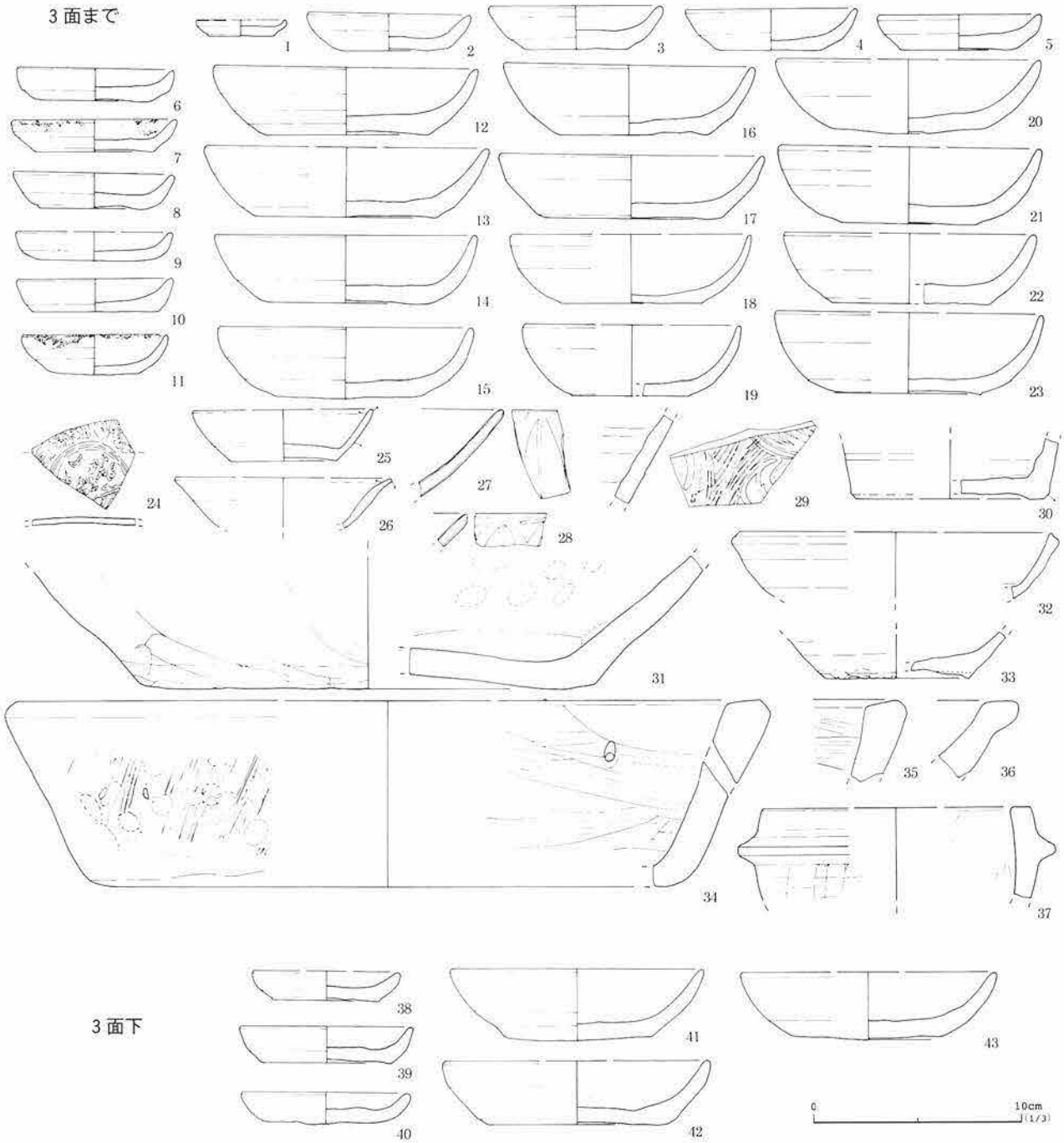


図8　出土遺物（4）

当該層位からは他に、泉州窯系緑釉陶器、南部山茶碗窯系捏鉢、石製品鳴滝産仕上砥、食物残滓貝類（アカニシ他）が出土している。

図8の38～43は3面より下層、図4の15層南北トレンチ内炭層中の出土遺物で、全て轆轤成形のかわらけ。器表灰褐色乃至淡褐色を呈し胎土・焼成共に良好。トレンチ内からは多量のかわらけが出土しているが、盛土・整地の際紛れ込んだものか或は土圧に因り破砕したのか、殆どが粉々の状態であり出土破片数の割には図化し得なかった。トレンチ内からは他に、龍泉窯系青磁蓮弁文碗、常滑窯甕胴部、用途不明木片が出土している。

図9には、埋め戻しの時や調査中に手違いに因り、帰属する層位が不明になってしまったものを、採集遺物としてここに含めた。

1～6は轆轤成形のかわらけ。器表淡褐色系を呈し、1は胎土やや粗いが、他は胎土・焼成共に良好。7は瀬戸灰釉の卸皿。灰緑色の釉は浸け掛。

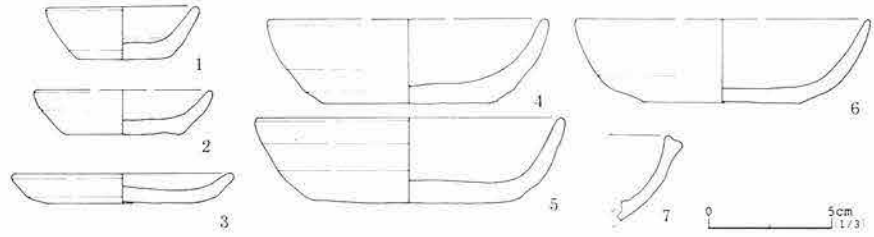


図9　出土遺物（5）

第5章　まとめ

狭小な調査区ではあるが、今時調査の成果は大きい。中世前期の鎌倉の中心域でありながら調査例が少ない遺跡範囲の中で、部分的な攪乱を受けているものの、現地表下には中世期の遺構と遺物が良好に遺存していた。建物址や溝等の構造物は確認されなかったが、2面以下で検出された土丹地業面が道路状遺構とすれば、現況道路が中世の道筋を概ね踏襲している可能性がある。これは、古絵図に描かれた本調査地点付近の様相や、最近の鎌倉市街地内の調査結果と矛盾するものではない。但し、仮に道路状遺構としても、当時一般的に人が往来するいわば公道であったのか、区画内に取込まれる形での路地・通路的な性格なのかは、今回の調査範囲からでは想像の域を到底脱し得ない。

出土遺物から観た年代は、手捏ね成形のかわらけが全く出土しなかったことや他の出土遺物の年代を観ても、大倉幕府がこの地に在った時期までは遺構面の掘下げが及ばなかったと観られる。2面～3面下にかけては年代的には近接しており14世紀前半を前後する時期であろう。1面は明確に遺構に伴う遺物がない為はっきりしないが、かわらけの形態等で観ると外傾外反傾向でやや厚手の一群が上層から出土していることから、2面と隔りがあり14世紀後半より遡れない。

第1章で触れた様に、大倉幕府跡とされる遺跡地範囲内での発掘調査は、本調査で未だ3地点目に過ぎない。これは遺跡範囲内には民家が多く発掘調査に拘る諸々の事柄を思えば、現状では面的或は層位的にまとまりのある考古学的成果を挙げるのは困難と言わざるを得ない。今回の調査も、管理設予定範囲内という極めて限られた範囲ではあったが、遺構・遺物共に一定の成果を得られた。たとえ点的な調査ではあっても、鎌倉時代の中枢であった遺跡地の様相を把握し、資料を蓄積することが慣用であろう。

▲　雪ノ下三丁目651番８外（本報告調査地点）

１．清泉小学校内

２．雪ノ下字大倉耕地569－1地点

馬淵和雄『大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下字大倉耕地569番１地点発掘調査報告書』1990年３月　大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団

横小路周辺遺跡

３．二階堂字荏柄９番１地点

菊川英政『横小路周辺遺跡発掘調査報告書　―二階堂字荏柄９番１地点―　』1991年３月　横小路周辺遺跡発掘調査団

４．雪ノ下５丁目557番１地点

野本賢二「横小路周辺遺跡(No.259)　雪ノ下５丁目557番１地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　14　平成９年度発掘調査報告(第２分冊)』平成10年３月　鎌倉市教育委員会

大倉幕府周辺遺跡群

５．二階堂字荏柄38番１地点

馬淵和雄「２．大倉幕府周辺遺跡群　二階堂字荏柄38番１(No.49)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　9　平成４年度発掘調査報告(第２分冊)』平成５年３月　鎌倉市教育委員会

６．雪ノ下字天神前562番29地点

福田誠　他「１．大倉幕府周辺遺跡群(No.49)　雪ノ下字天神前562番29地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　12　平成７年度発掘調査報告(第１分冊)』平成８年３月　鎌倉市教育委員会

７．雪ノ下大倉耕地565－4

菊川英政「４．大倉幕府周辺遺跡(No.49)　雪ノ下大倉耕地565番４地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　7　平成２年度発掘調査報告』平成３年３月　鎌倉市教育委員会

８．雪ノ下四丁目620番５地点

馬淵和雄「大倉幕府周辺遺跡群(No.49)　雪ノ下四丁目620番５地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　14　平成９年度発掘調査報告(第２分冊)』平成10年３月　鎌倉市教育委員会

９．大倉南御門Ａ地点（未報告）

10．大倉南御門Ｃ地点（未報告）

11．大倉南御門Ｂ地点（未報告）

12．雪ノ下三丁目607番外地点

菊川英政「２．大倉幕府周辺遺跡群(No.49)　雪ノ下三丁目607番外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　10　平成５年度発掘調査報告(第１分冊)』平成６年３月　鎌倉市教育委員会

13．雪ノ下三丁目606番１地点

菊川英政「７．大倉幕府周辺遺跡群(No.49)　雪ノ下三丁目606番１地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　9　平成４年度発掘調査報告(第３分冊)』平成５年３月　鎌倉市教育委員会

政所跡

14．雪ノ下三丁目965番地点

瀬田哲夫「２．政所跡(No.247)　雪ノ下三丁目965番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　8　平成３年度発掘調査報告』平成４年３月　鎌倉市教育委員会

15．雪ノ下三丁目966番１地点

瀬田哲夫「１．政所跡(No.247)　雪ノ下三丁目966番１地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　8　平成３年度発掘調査報告』平成４年３月　鎌倉市教育委員会

16．雪ノ下三丁目971番６地点（未報告）

17．雪ノ下三丁目970番２地点（未報告）

18．雪ノ下三丁目987番１・２地点

手塚直樹　宮田真『政所跡』1991年３月31日　政所跡発掘調査団

19．雪ノ下三丁目988番地点

手塚直樹　田畑佐和子「８．政所跡(No.247)　雪ノ下三丁目988番」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　9　平成４年度発掘調査報告(第３分冊)』平成５年３月　鎌倉市教育委員会

北条高時邸跡

20．小町三丁目426番３地点

原廣志他「北条高時邸跡(No.281)　小町三丁目426番３地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　12　平成７年度発掘調査報告(第１分冊)』平成８年３月　鎌倉市教育委員会

表1　出土遺物計測表

層位遺構	挿図No.	遺物No.	種別	計測値 単位：cm ( )=復元数値 [ ]=残存数値	備考
1面	5	1	瀬戸 灰釉平碗	口径 (12.2)	
		2	備前 擂鉢		
		3	土器類 かわらけ	口径 (7.0) 底径 5.4 器高 1.7	
		4	常滑 甕	底径 (18.0)	
1面下	5	5	土器類 かわらけ	口径 (5.6) 底径 2.0 器高 1.9	
		6	土器類 かわらけ	口径 (8.2) 底径 (5.4) 器高 2.0	
		7	土器類 かわらけ	口径 (11.2) 底径 6.0 器高 3.0	
		8	土器類 かわらけ	口径 (12.0) 底径 (7.0) 器高 3.6	
		9	瀬戸 灰釉瓶子	底径 5.8	
		10	常滑 甕	底径 (18.8)	
		11	石製品 赤間ヶ石硯	口径 11.8 底径 6.9 器高 1.6	
2面まで	6	1	土器類 かわらけ	口径 7.2 底径 4.7 器高 1.8	
		2	土器類 かわらけ	口径 (7.9) 底径 5.0 器高 2.3	
		3	土器類 かわらけ	口径 (7.4) 底径 4.8 器高 2.1	燈
		4	土器類 かわらけ	口径 7.3 底径 5.0 器高 1.7	
		5	土器類 かわらけ	口径 (7.8) 底径 (6.1) 器高 1.8	
		6	土器類 かわらけ	口径 (7.5) 底径 (5.2) 器高 1.7	
		7	土器類 かわらけ	口径 (6.8) 底径 4.2 器高 2.4	
		8	土器類 かわらけ	口径 (7.0) 底径 4.2 器高 2.1	
		9	土器類 かわらけ	口径 (7.1) 底径 5.0 器高 2.2	燈
		10	土器類 かわらけ	口径 11.9 底径 7.4 器高 3.3	
		11	土器類 かわらけ	口径 12.1 底径 7.5 器高 3.8	
		12	土器類 かわらけ	口径 10.8 底径 6.5 器高 3.1	
		13	土器類 かわらけ	口径 (13.8) 底径 (8.0) 器高 3.2	
		14	土器類 かわらけ	口径 12.0 底径 7.3 器高 3.8	
		15	土器類 かわらけ	口径 13.4 底径 7.0 器高 3.7	
		16	土器類 かわらけ	口径 (12.2) 底径 (8.0) 器高 3.4	
		17	土器類 かわらけ	口径 (12.1) 底径 8.0 器高 3.5	
		18	土器類 かわらけ	口径 12.1 底径 7.4 器高 3.2	
		19	土器類 かわらけ	口径 12.1 底径 7.4 器高 3.3	
		20	土器類 かわらけ	口径 11.9 底径 7.9 器高 3.1	
		21	土器類 かわらけ	口径 12.7 底径 8.1 器高 3.2	
		22	土器類 かわらけ	口径 (12.6)	白
		23	瀬戸 灰釉卸皿	口径 (12.7)	
		24	常滑 捏鉢		
		25	常滑 甕		
		26	常滑 甕		
	7	27	女瓦	口径 [29.1] 底径 12.8 器高 2.2	
		28	女瓦	口径 [13.4] 底径 [10.6] 器高 1.5	
		29	女瓦	口径 [12.1] 底径 [10.6] 器高 2.4	
		30	女瓦	口径 [10.5] 底径 [4.3] 器高 1.8	
		31	女瓦	口径 [13.4] 底径 [10.6] 器高 1.5	
3面まで	8	1	土器類 かわらけ	口径 4.2 底径 3.2 器高 0.8	内折
		2	土器類 かわらけ	口径 7.6 底径 5.0 器高 1.9	
		3	土器類 かわらけ	口径 8.2 底径 5.0 器高 2.1	
		4	土器類 かわらけ	口径 8.0 底径 5.3 器高 2.1	
3面まで	8	5	土器類 かわらけ	口径 7.7 底径 5.6 器高 1.7	
		6	土器類 かわらけ	口径 7.4 底径 5.7 器高 1.6	
		7	土器類 かわらけ	口径 7.6 底径 5.8 器高 1.6	燈
		8	土器類 かわらけ	口径 7.5 底径 5.1 器高 1.7	
		9	土器類 かわらけ	口径 7.4 底径 5.4 器高 1.4	
		10	土器類 かわらけ	口径 7.3 底径 6.2 器高 1.6	
		11	土器類 かわらけ	口径 6.9 底径 4.3 器高 2.0	燈
		12	土器類 かわらけ	口径 12.6 底径 8.3 器高 3.3	
		13	土器類 かわらけ	口径 (13.6) 底径 8.8 器高 3.4	
		14	土器類 かわらけ	口径 12.5 底径 8.2 器高 3.3	
		15	土器類 かわらけ	口径 12.2 底径 7.12 器高 3.5	
		16	土器類 かわらけ	口径 11.9 底径 8.0 器高 3.4	
		17	土器類 かわらけ	口径 12.5 底径 7.9 器高 3.1	
		18	土器類 かわらけ	口径 (11.4) 底径 6.8 器高 3.4	
		19	土器類 かわらけ	口径 (10.4) 底径 (5.6) 器高 3.4	
		20	土器類 かわらけ	口径 (12.5) 底径 7.4 器高 3.6	
		21	土器類 かわらけ	口径 (12.4) 底径 (6.6) 器高 3.7	
		22	土器類 かわらけ	口径 (12.0) 底径 (7.6) 器高 3.4	
		23	土器類 かわらけ	口径 (12.8) 底径 7.0 器高 3.9	
		24	中国 白磁皿		
		25	中国 白磁口兀皿	口径 (8.0) 底径 5.0 器高 2.5	
		26	中国 白磁口兀皿	口径 (10.4)	
		27	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗		
		28	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗		
		29	中国 青白磁梅瓶		
		30	中国 青白磁梅瓶	底径 (9.0)	
		31	常滑 甕	底径 (22.0)	
		32	瀬戸 灰釉卸皿	口径 (15.0)	
		33	土器類 南部系山茶碗	底径 (7.0)	
		34	土器質 浅鉢型火鉢	口径 (35.8) 底径 (28.8) 器高 9.0	
		35	瓦器質 輪花型火鉢		
		36	瓦質 火鉢		
		37	石製品 滑石製鍋	口径 (13.0)	
3面下	8	38	土器類 かわらけ	口径 (6.9) 底径 (4.8) 器高 1.4	
		39	土器類 かわらけ	口径 (8.1) 底径 6.2 器高 1.8	
		40	土器類 かわらけ	口径 7.9 底径 6.0 器高 1.5	
		41	土器類 かわらけ	口径 12.0 底径 7.3 器高 3.5	
		42	土器類 かわらけ	口径 (13.7) 底径 (8.8) 器高 3.1	
		43	土器類 かわらけ	口径 (12.2) 底径 (7.3) 器高 3.3	
採集	9	1	土器類 かわらけ	口径 6.0 底径 3.9 器高 2.1	
		2	土器類 かわらけ	口径 (7.0) 底径 5.0 器高 1.8	
		3	土器類 かわらけ	口径 8.7 底径 6.6 器高 1.2	
		4	土器類 かわらけ	口径 (11.1) 底径 7.0 器高 3.4	
		5	土器類 かわらけ	口径 12.2 底径 8.5 器高 3.5	
		6	土器類 かわらけ	口径 11.8 底径 6.8 器高 3.3	
		7	瀬戸 灰釉卸皿		

表2　出土遺物破片数

層位・面		採　集	1面上	1面	1面	1面	1面	1面	1面	1面下	2面迄	3面迄	3面下			
遺構名		(層位等不明)	—	遺構1	遺構2	遺構3	遺構4	遺構5	遺構6	—	—	—	—	破片数計	項目計	百分率
掲載点数		7	2	0	2	0	0	0	0	7	31	37	6	**92**		
挿図No.																
かわらけ	糸切り	74	14	2	14	4	1	4	1	107	356	291	148	**1,016**		
	手捏ね													**0**	1,016	87.4%
舶載陶磁器	青磁	1									1	8	1	**11**		
	白磁											4		**4**		
	青白磁											5		**5**		
	その他											2		**2**	22	1.9%
国内産陶土器類	瀬戸窯	3	2					1		4	3			**13**		
	常滑窯	4		1	11					12	16	11	2	**57**		
	渥美窯													**0**		
	山茶窯										1	3		**4**		
	他陶器類													**0**		
	他土器類		2								2			**4**		
	火鉢	1								2	1	9		**13**		
	瓦										12			**12**	103	8.9%
土製品														**0**	0	0.0%
石製品			1							2		3		**6**	6	0.5%
銅銭含 金属製品														**0**	0	0.0%
漆器含 木製品													2	**2**	2	0.2%
骨角製品														**0**	0	0.0%
自然遺物等											4	4		**8**	8	0.7%
中世以前														**0**	0	0.0%
近世以降		6												**6**	6	0.5%
破片数計		**89**	**19**	**3**	**25**	**4**	**1**	**5**	**1**	**127**	**396**	**340**	**153**	**1,163**	1,163	100%

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成10年度発掘調査報告
巻次	15
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	汐見一夫
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1999年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
おおくらばくふあと 大倉幕府跡	かながわけんかまくらしゆきのした 神奈川県鎌倉市雪ノ下三丁目651番8外地点	204	No.242	35° 19 15″	139° 33′ 15″	19981215 ～ 19981226	14.94m²	個人専用住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大倉幕府跡	官衙	鎌倉時代	ピット 土壙 土丹地業面	かわらけ 瓦 舶載陶磁器 国内産陶磁器	

写　真　図　版

▲　調査地点近景（南から）

図版２

▶１．１面全景（南から）

▲２．２面全景（南から）

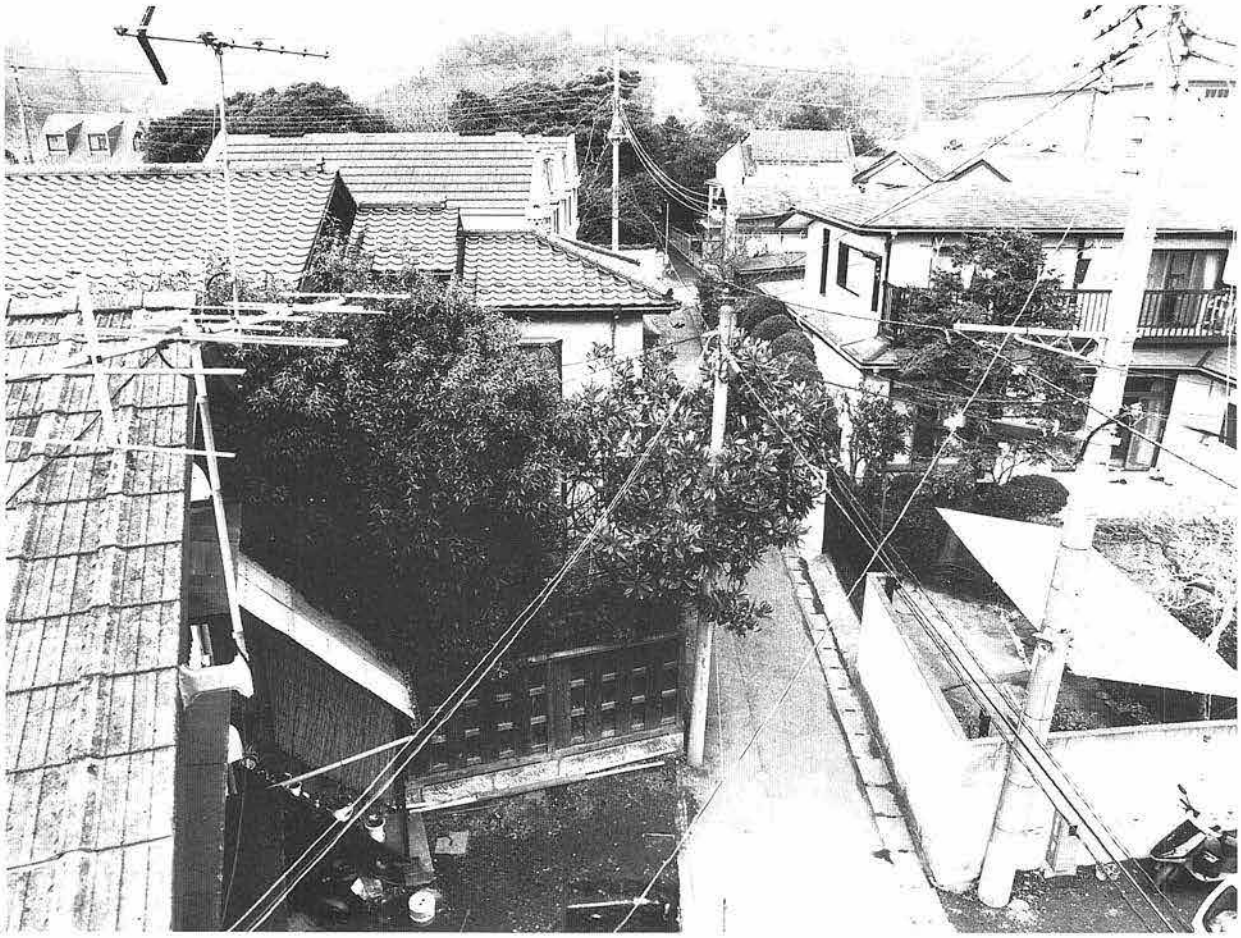
▲３．２面土丹地業（北から・部分）

◀1．3面及びトレンチ（南から）

▲2．3面土丹地業及び北側トレンチ

▲3．南側トレンチ土丹地業面

図版 4



▲　調査地点より北方（西御門方面）を望む

倉久保遺跡（No.226）

くらくぼいせき

山崎字富士塚８６８番８２地点

例　　言

1．本書は鎌倉市山崎字富士塚868番82に所在する倉久保遺跡の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、個人専用住宅に伴う防災工事に際し、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会によって実施されたものである。
3．発掘調査は、平成10年１月７日から同年１月10日にかけて実施された。出土遺物及び記録類は鎌倉市教育委員会で保管している。
4．本書の執筆・編集は田村良照が担当した。また写真撮影は田村と大畑明子が行い、図版作成では深尾義子、遺物実測では岩崎紀子の協力を得た。
5．調査体制は以下のとおりである。

調 査 主 体　鎌倉市教育委員会
調 査 担 当　田村良照
調　査　員　大畑明子・若松美智子
調査員補助　青木綾子・龜山千恵子・荒井ソノ・岩田節子・梅木信行・梅沢登喜子・蒲谷由利子・高野和弘・成田サキ・町井俊逸・渡辺王夫

本　文　目　次

第１章　調査の経緯と経過 …… 199
第２章　遺跡の位置と環境 …… 200
第３章　発見された遺構と遺物 …… 202
第４章　まとめ …… 204

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 201
第２図　第１号横穴墓 …… 203
第３図　第１号横穴墓出土遺物 …… 204

図　版　目　次

図版１：A．第１号横穴墓調査前（北西より）
B．第１号横穴墓調査後（北西より）
…… 207
図版２：A．第１号横穴墓発掘風景
B．左側壁の小穴
C．右側壁の小穴
D．棺座奥壁 …… 208
図版３：A．フラスコ形横瓶出土状態（１）
B．フラスコ形横瓶出土状態（２）
C．フラスコ形横瓶 …… 209

第１章　調査の経緯と経過

今回の調査は、鎌倉市山崎字富士塚868番82所在の個人専用住宅に伴う防災工事に先立ち、開口している横穴墓１基の記録保存を目的として、鎌倉市教育委員会によって実施された国庫補助事業である。

該当住宅は昭和41年頃に新築され、その時にはすでにこの横穴墓は開口しており、南側にさらに１・２基が顔をのぞかせていたとのことであるが、他の横穴墓は30数年を経過して再び埋没したとのことである。

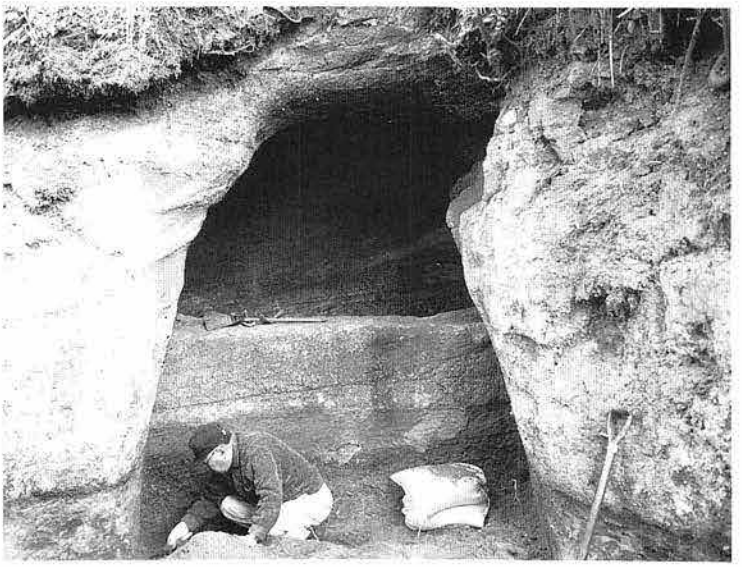
今回調査対象となった横穴墓は、玄門から墓道にかけての部分が宅地造成の際に削り取られ、さらに天井部は高棺座部分を残すだけで大部分が崩落してしまっている。また比較的残りのよい高棺座床面にも焚き火をした痕跡などがあり、かなり荒らされているなという印象を受けた。したがって人骨・副葬品などの出土はまったく期待できないという認識で、横穴墓の構造を克明に記録することを主眼として調査が開始された。

調査は平成10年１月７・８・10日の３日間に実施された。まず初日は、現況写真を撮影後に横穴墓内に堆積した土の排除から着手した。現況を鑑みると、堆積土は近年の流入・崩落土と見られることからそれらを一気に排除して床面の検出を急いだ。ところが初日の午後、棺座前面の堆積土を排除している際に、もう少しで床面が顔を出すという位置から須恵器フラスコ型横瓶の完形品１点が出土したのである。こうした思いがけない副葬品の出土に恵まれ、初日に横穴墓内の堆積土出しと精査を終了した。

翌日は写真撮影を行い、その後実測を始める予定であったが、天気が崩れ大雪の予報が出ていたので実測は順延され、午後３時ごろに作業を切り上げた。

１月９日は前夜からの大雪で10数年ぶりの積雪を記録したため調査は休みとなった。

最終日の１月10日は横穴墓の実測図を作成する。午後、すべての作業を終了し、鎌倉市教育委員会による調査完了確認を経て発掘現場を撤収する。



第２章　遺跡の位置と環境

本横穴墓群は鎌倉市山崎字富士塚868番82に所在し、湘南モノレール湘南町屋駅の東方約250ｍに位置する。地形的には、市域北西部を流れる柏尾川の沖積地に向かって独立丘陵状に張り出した「天神山」と呼ばれる丘陵の基部付近の山腹に分布する。

鎌倉市域は県内でも横穴墓が多く分布する地域として知られ、その分布状況は鎌倉市史考古編（注１）や県埋蔵文化財包蔵地台帳（注２）によってほぼ明らかにされている。これらの資料を参照すると、本横穴墓群の所在する鎌倉市山崎およびその周辺は、市域でも横穴墓の比較的密集する地域の一つであることがわかる。

第１図は、本横穴墓群を中心に周知の横穴墓群の分布状況を図示したものである。まず鎌倉市史考古編で赤星氏は、鎌倉市山崎に所在する横穴墓群を「山崎横穴群Ａ区」と「山崎横穴群Ｂ区」という名称で紹介し、山崎には２箇所に横穴墓群の分布することを明示している。本横穴墓群は地番から後者の山崎横穴墓群Ｂ区に該当する可能性が高い。

この山崎横穴墓群Ｂ区は昭和32年に６穴が発掘調査された。報告書は刊行されていないが、鎌倉市史の中で赤星氏が形態的特徴と出土遺物について記述されている。それらを参照する限り、本墓はそのいずれにも該当しないようである。この点に関しては第４章でもう少し詳しく述べることとし、つぎに周辺に分布する横穴墓群について概観してみたい。

山崎横穴墓群Ａ区　山崎865番地に所在する。２群36穴から成る大規模な横穴墓群であるが、それらは宅地造成によってほとんどが消滅してしまった。鎌倉市史の中で赤星氏は、「現在36穴が開口しているが、尚多数埋没している。昭和25年市川規平、昭和26年吉田格その他２・３の人達が発掘している。」と述べられているように、戦後、数人の研究者によって調査がなされ、吉田氏によって概要が報告されている（注３）。

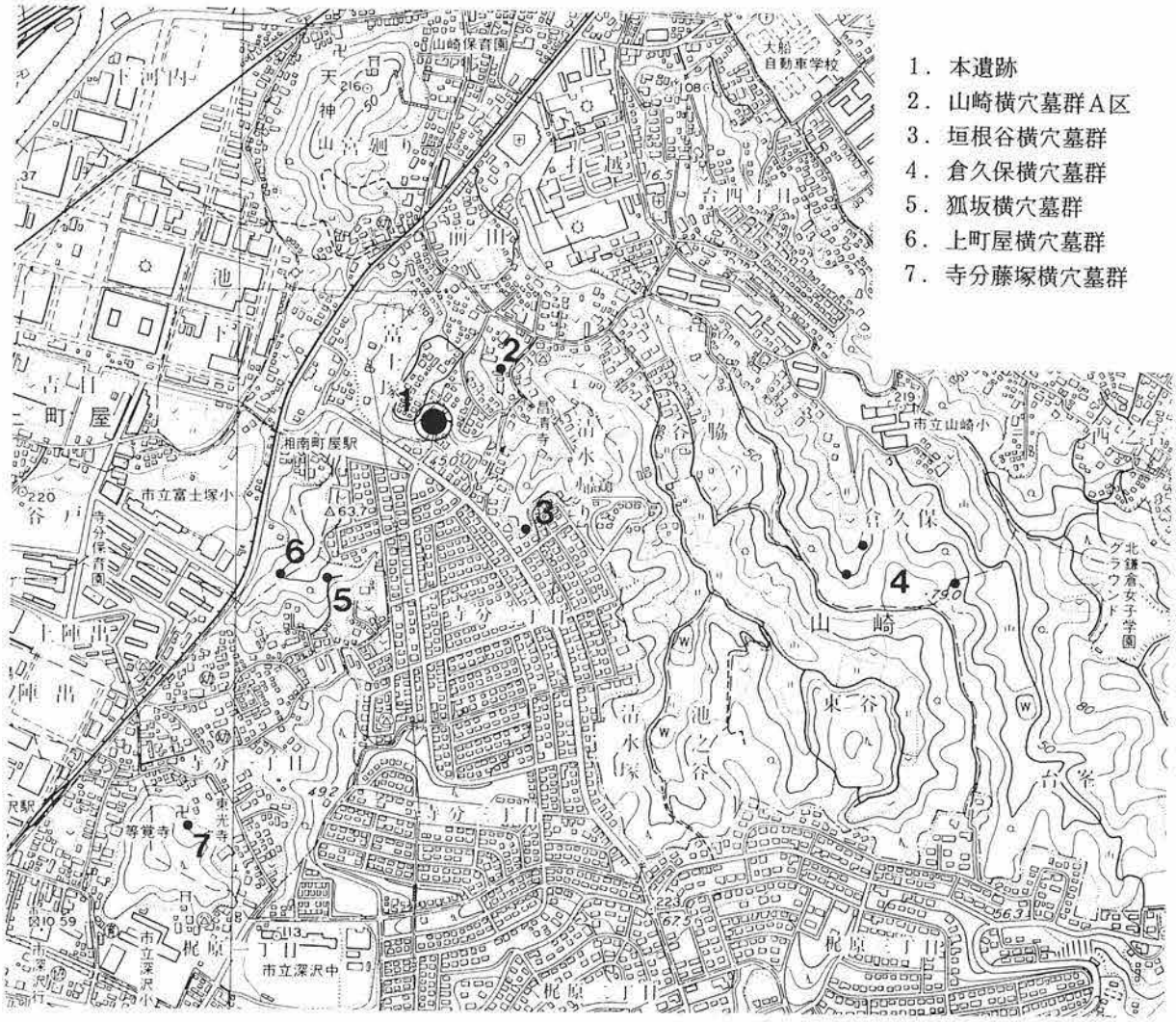
垣根谷横穴墓群　包蔵地台帳には昭和35年の記録として「垣根谷奥の山腹、尾根に近い部分に占地。10穴。他に多数埋没。大部分が低いドーム天井を有する。」と紹介されているが、昭和58年にはすでに消滅してしまっていたらしい。

倉久保横穴墓群　鎌倉市史には２穴開口しているとされ、「共に前半崩落し、奥半分を残す。共に奥壁アーチ形。」と紹介されている。しかし昭和58年の包蔵地台帳作成の時点では埋没して所在地が不明となっている。第１図に示したのは推定地である。

狐坂横穴墓群　寺分に所在する。平面形が撥形、横断面形がアーチ形で高棺座をもつ１穴と、その他に２・３穴の存在が鎌倉市史に紹介されており、昭和58年にも存在が再確認されている。

上町屋横穴墓群　上町屋の富士塚西側の山腹凹部の尾根に近い部分に所在する。鎌倉市史では３穴が紹介され、さらに周辺域にも横穴墓の分布が伝えられている。包蔵地台帳にはそのうち３穴の存在することが確認されている。

寺分藤塚横穴墓群　寺分一丁目に所在する。平成８年に集合住宅建設に伴って本格調査が実施され、３群10穴が発掘された(注4)。群の全貌が把握されたＡ群（仮称）は８穴から成り、それらにはいずれも２ｍ前後のきわめて高い高棺座が設けられている。出土遺物からこの横穴墓群は７世紀後半～８世紀前半にかけて造営されたことがわかった。また尾根の反対側に１穴（Ｂ群）が発見されたが群集するか否かについては明らかにし得なかった。さらにＡ群の東側20ｍほどの所に１穴（Ｃ群）分布することが



第1図　遺跡位置図

確認されている。

以上、本横穴墓群と周辺に分布する横穴墓群の概要をまとめてみたが、鎌倉市山崎とその近隣には文献あるいは遺跡台帳に明記されているだけでも7箇所に横穴墓群が存在し、総計100穴を超えるほど分布していたと見られるが、それらの多くは記録されることもなく、すでに大多数が消滅してしまったことは残念である。

注　記

1）赤星直忠　1959『鎌倉市史　考古編』　鎌倉市史編纂委員会

2）神奈川県教育庁文化財保護課　1983『神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳』

3）吉田　格　　「鎌倉市山崎の横穴」『武蔵野』第31巻3・4合弁号

4）土屋浩美　1997「寺分藤塚遺跡の調査」『第七回鎌倉市遺跡調査・研究発表会資料』鎌倉市教育委員会・鎌倉考古学研究所

第３章　発見された遺構と遺物

第１号横穴墓

位置　北西向き斜面の頂部付近に、北西方向に開口している。玄室床面は標高約40m付近にある。

遺存状態　墓道と玄室半分は失われ、天井部は棺座付近にわずかに残っている程度である。また壁面はかなり風化している。

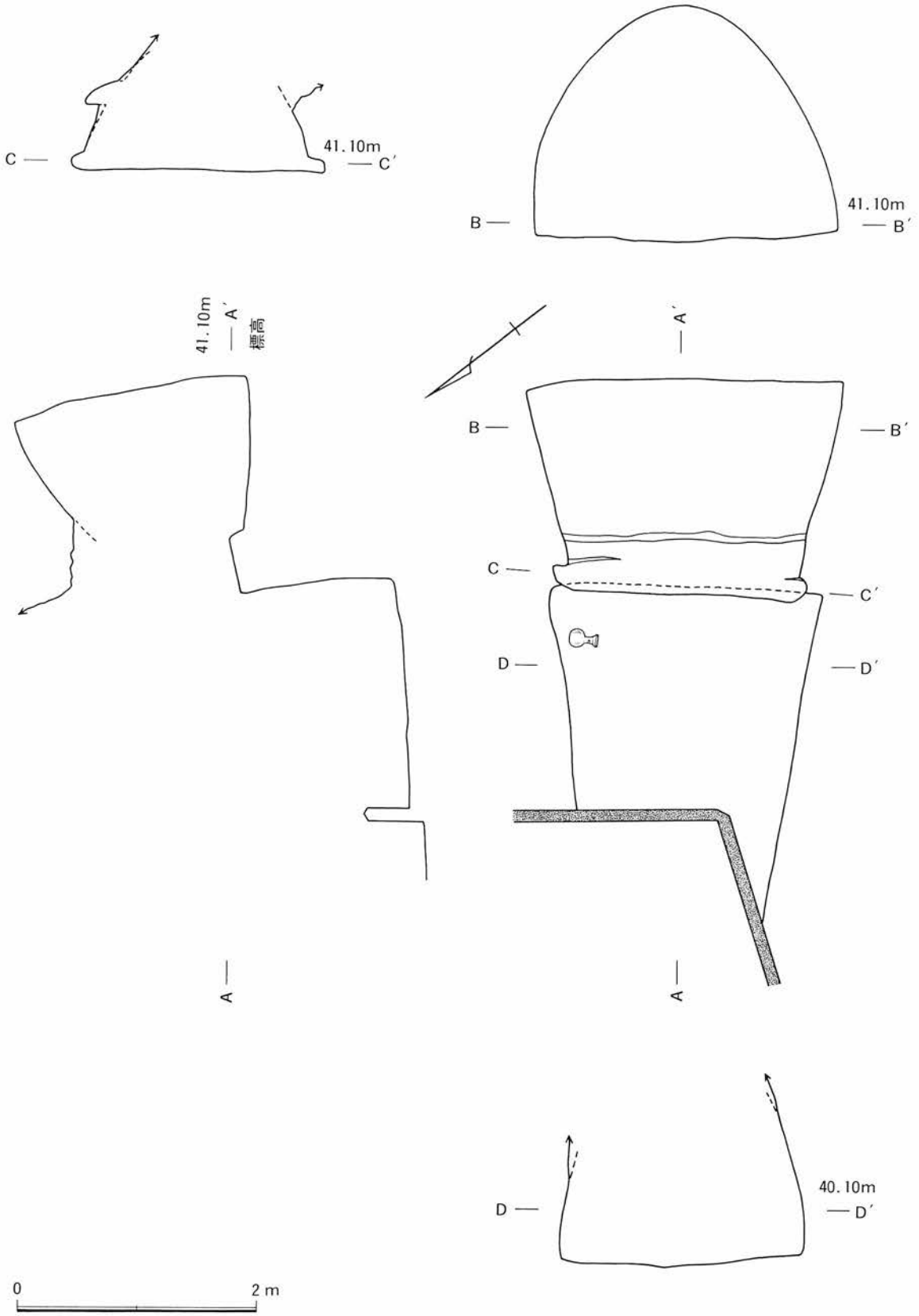
流入土　玄室床面上に50～60cmの厚さで堆積しており、上層は腐食土、下層は天井・側壁からの崩落土によって形成されている。一方、棺座上には薄い堆積土と焚き火の痕跡やビール瓶などの廃棄物が散乱していた。

構造　本墓はＮ－41°－Ｗに主軸を採り、玄室の奥に有縁の高棺座をもつ構造である。残存長は主軸線上で約4.6mを測る。

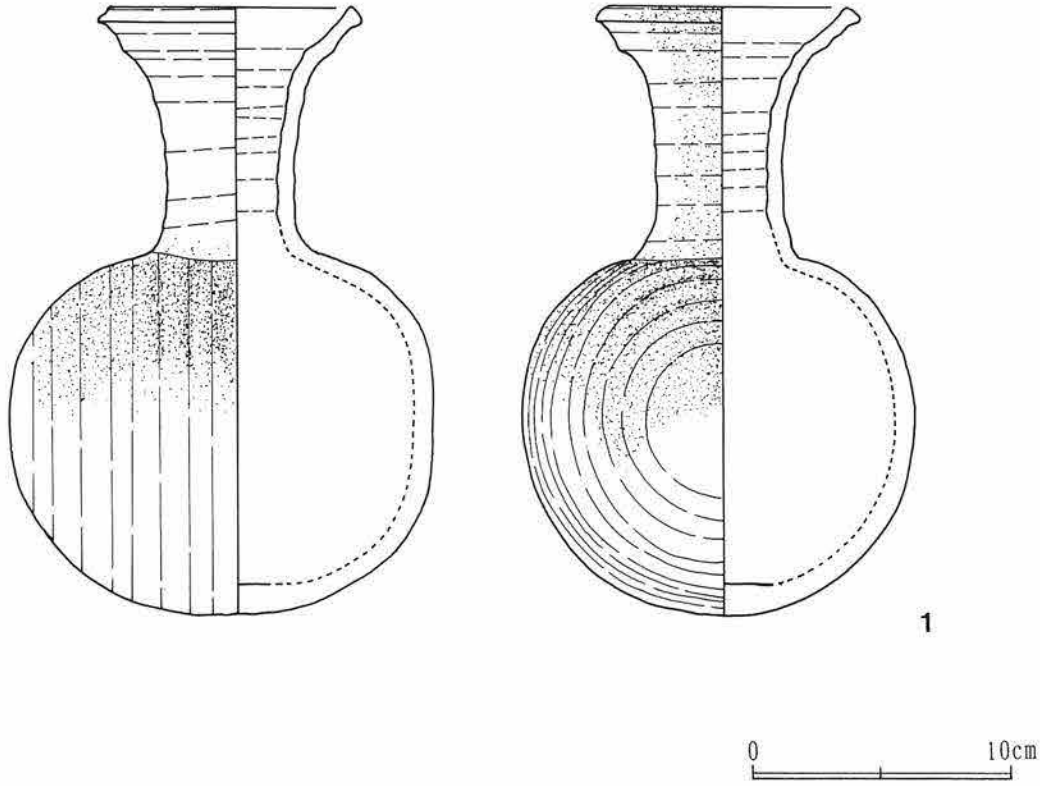
玄室　天井部はすっかり崩落し、床面も奥側半分が遺存するだけである。したがって形態は判然としないが、おそらく平面形は側壁が直線的に玄門部にいたる撥形を呈し、天井は横断面形がアーチ形を呈する構造であったと見られる。規模は現存長2.82m、奥壁幅2.28mを測る。床は羨門に向かって約４°の傾斜で下降している。床面には羨門側から施された突き斧状工具痕が多数残されているため一見すると粗雑な感を受けるが、全体としては平坦に仕上げられている。排水溝・敷石などの付帯施設はまったく認められない。

棺座　玄室床面から1.3mの高さを有するいわゆる有縁の高棺座である。主軸長1.82m、奥壁幅2.67m最大高1.98mの規模を有し、前端には幅約40cm、高さ約15cmの造り付けの縁が存在する。奥壁はアーチ形を呈し、約11°前傾している。天井は内湾ぎみに玄室側に急激に下降する。玄室天井にこの傾斜のまま続くとは思えないので、棺座前端部付近でおそらく傾斜を変えるのであろう。したがって玄室奥壁の前傾状態と天井部のこのようなあり方から、玄室と棺座は一連の掘削作業によって成立したとは考え難い。つまり、玄室完成後に一定期間をはさんで棺座を増築したのではないかと考えられるのである。床面には幅８～10cmの手斧状工具痕がおびただしく残されている。排水溝・敷石などの付帯施設は認められない。天井から側壁にかけては幅10cmほどの手斧状工具によるいわゆる肋状痕が認められる。大谷氏（住宅所有者）の話では、昭和40年代前半ごろにはこの肋状痕があざやかに残されていたとのことであるが、現在では風化が進みわずかに観察される程度である。また縁上の側壁には、角材をはめ込んだような小穴が２個ずつ左右対象の位置に穿たれている。扉のような施設が存在したものと考えられる。

出土遺物　１は高棺座前面の玄室床面上より出土した須恵器フラスコ型横瓶の完形品である。法量は口径9.5cm、胴部最大径17.6cm、器高23.8cmを測る。口縁部は大きく外反し、口縁部下に突帯１条が巡る。胎土は緻密で、磁鉄鉱が多く含まれる。また口縁部から肩部にかけて自然釉が付着している。さらに底部には焼成する際の台の痕跡あるいは重ね焼き痕とみられる粘土屑が楕円状（10.5cm×9.7cm）に付着している。焼成はきわめて良好で、灰釉陶器に似たような硬質感をもつ。色調は灰白色を呈する。東海地方西部産と見られるが、仮に湖西古窯址産であるとすれば、器形的特徴より湖西編年第Ⅲ期（645年～701年）に比定されよう。



第2図　第1号横穴墓



第３図　第１号横穴墓出土遺物

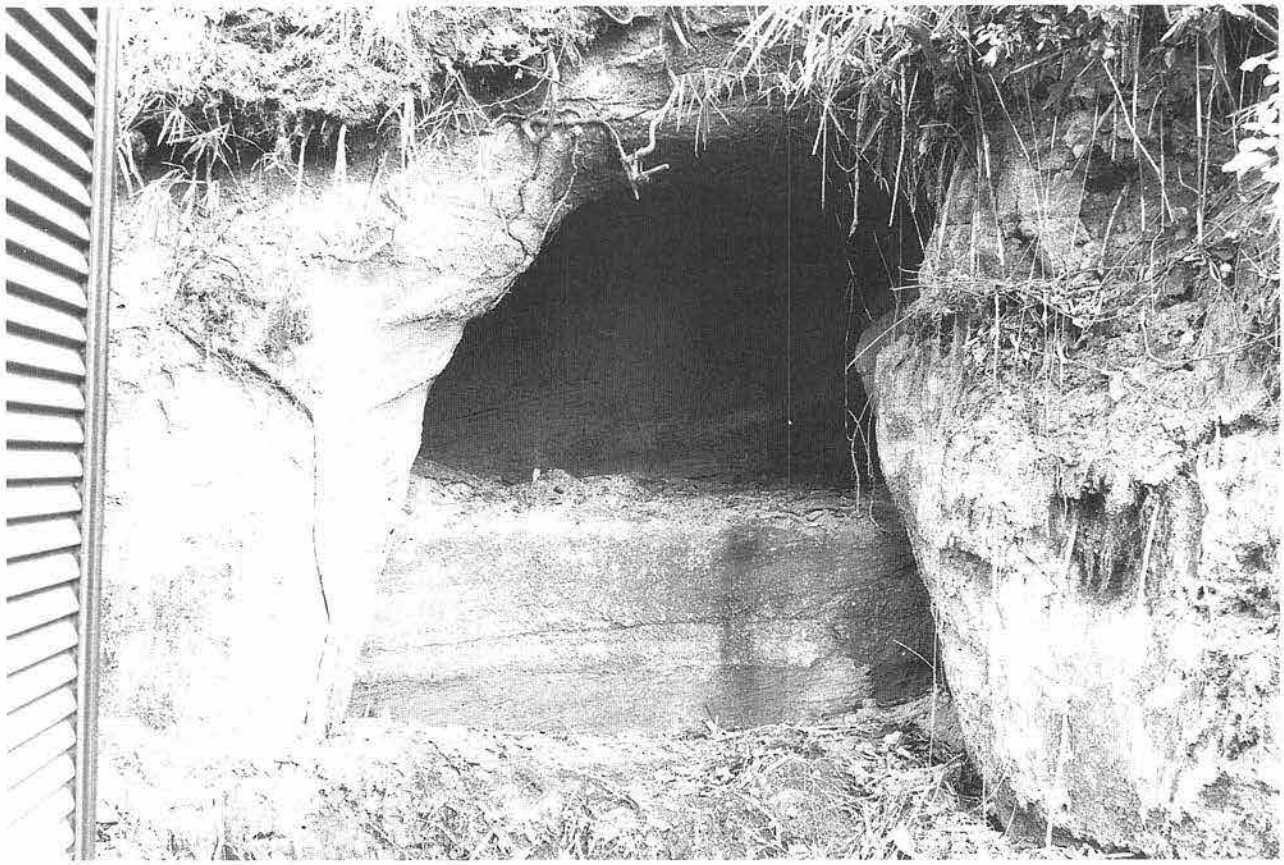
第４章　ま　と　め

ここでは調査で得られた成果と問題を指摘してまとめにかえたい。

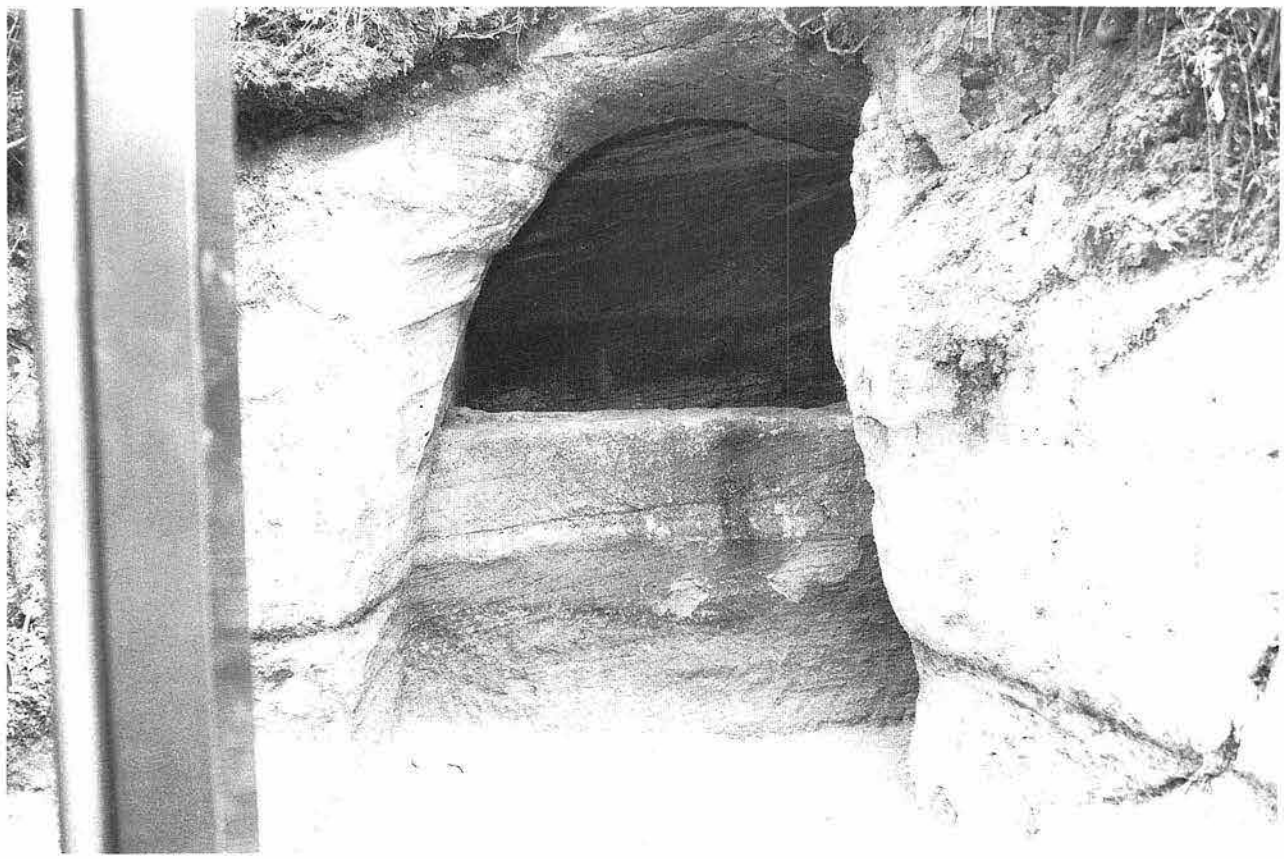
まず今回の調査での最大の成果は、高棺座の横穴墓から７世紀後半の須恵器が出土したことである。鎌倉市域に特有の横穴墓として高棺座と棺室構造の横穴墓が存在することは、早くから知られていた。このうち高棺座は造付石棺が退化（簡略化）する過程で、低棺座→高棺座へと変化するとされている。しかし資料的制約もあって、これまで高棺座が７世紀後半段階までさかのぼることを明らかにした報告例は少ない。今回たった１穴だけの調査ではあったが、上記のような点において重要な知見を与えてくれたといえよう。

つぎに問題点であるが、本遺跡は第２章で述べたように、地番の照合から鎌倉市史で赤星氏が紹介された「山崎横穴群Ｂ区」であると見られる。現況は今回調査した１穴が開口しているだけであるが、並びに２穴の埋没していることを確認したので昭和58年作成の県遺跡台帳に「３穴、高棺座のあるもの１」と明記されている内容と一致する。したがって鎌倉市史が編纂された昭和34年ごろに６穴開口していたものが昭和58年に３穴となり、さらに平成10年には１穴を除いて他は再埋没したと考えられるのである。しかしこの点に関しては疑問点も残る。というのは、昭和32年に一度調査のなされた横穴墓から、はたして須恵器の完形品が出土するものであろうか。こうした点に加え、鎌倉市史に高棺座の横穴墓という記述がまっくないのも変である。このように文献との照合という問題点に関しては現時点では明確にし得なかったが、埋没している横穴墓が今後調査され、その成果を合わせて検討しても遅くなかろう。

写　真　図　版

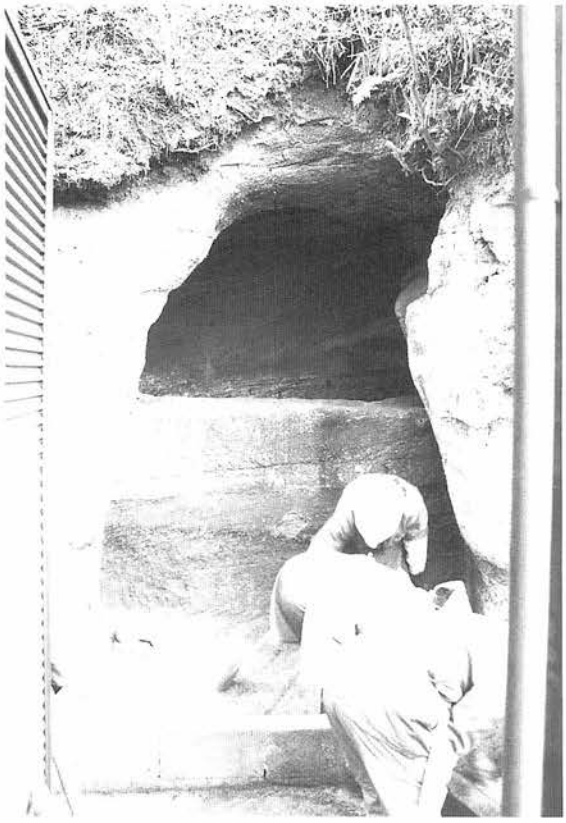


A．第１号横穴墓調査前（北西より）

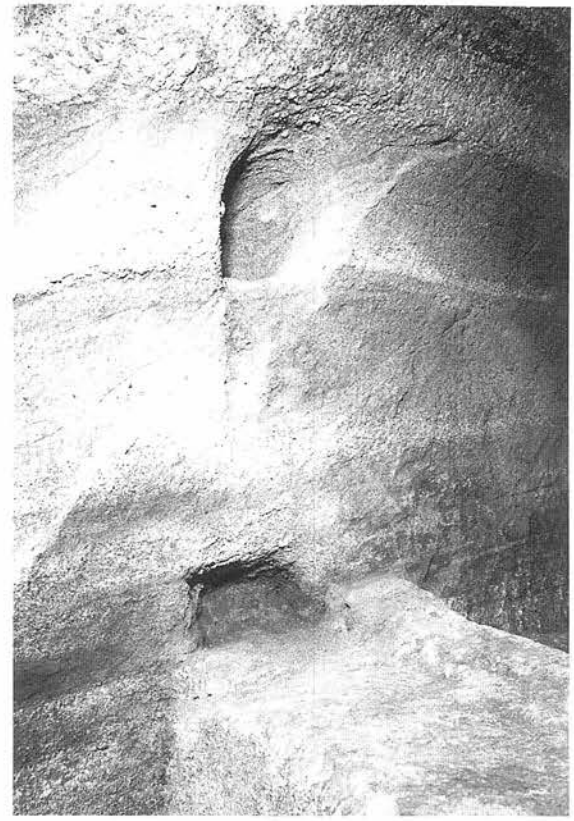


B．第１号横穴墓調査後（北西より）

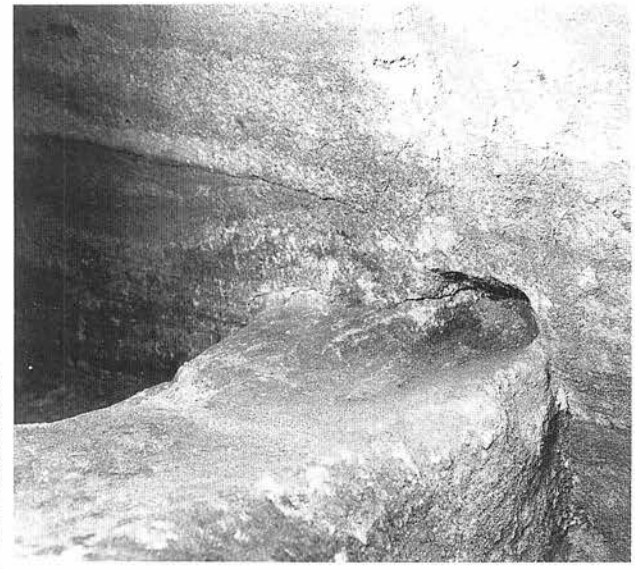
図版 2



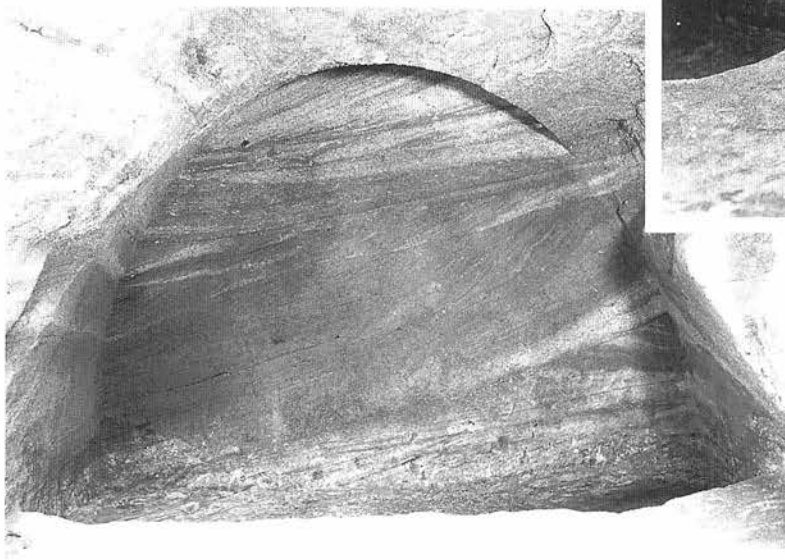
A．第 1 号横穴墓発掘風景



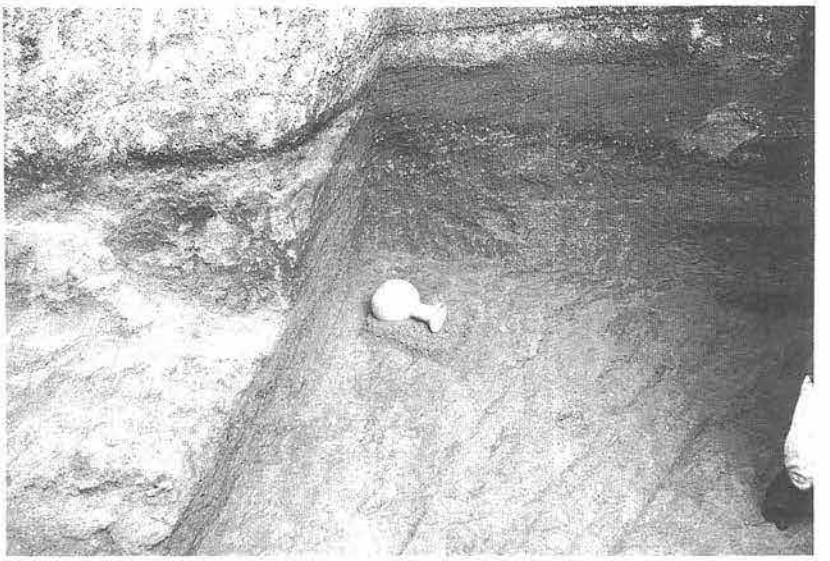
B．左側壁の小穴



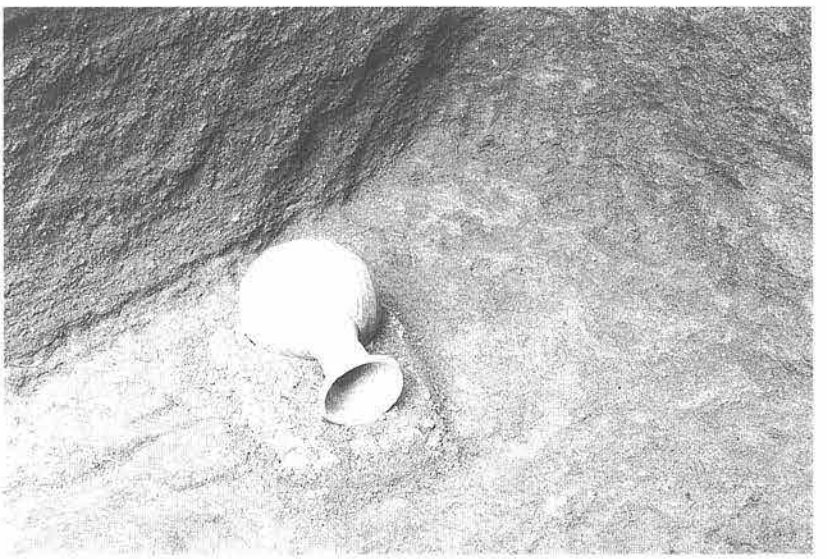
C．右側壁の小穴



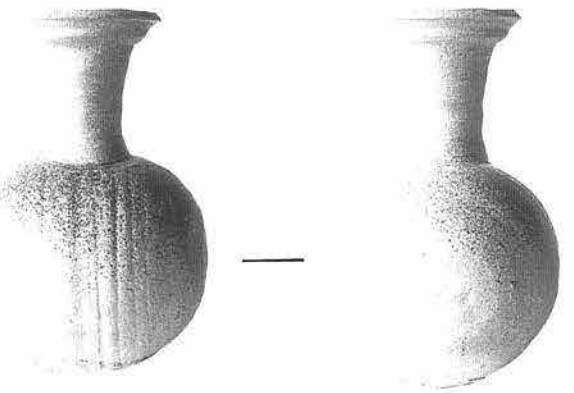
D．棺座奥壁



A．フラスコ形横瓶出土状態（1）



B．フラスコ形横瓶出土状態（2）



C．フラスコ形横瓶

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成10年度発掘調査報告
巻次	15
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	田村良照
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1999年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
くらくぼいせき 倉久保遺跡	かながわけんかまくらしやまざき 神奈川県鎌倉市山崎字富士塚868番82	204	№226			19980107 ～ 19980110	10m²	防災工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
倉久保遺跡	墓	古墳時代 後期 7世紀	横穴墓	フラスコ形横瓶	本横穴墓群は鎌倉市史に記載される「山崎横穴群B区」に該当する

よここうじしゅうへんいせき
横小路周辺遺跡（No.259）

二階堂字横小路93番11地点

例　　言

1．本報は鎌倉市二階堂字横小路93番11地点の個人専用住宅建設に伴う発掘調査報告である。

2．発掘調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成10年１月14日から３月７日である。

3．調査体制

担　当　者　手塚直樹

調　査　員　小林重子・野本賢二・小柳津シゲ子

調査補助員　岡陽一郎・鍛治屋勝二・田畑衣理

作　業　員　奥山利平、萱野輝雄、河原龍男、柴崎英輔、田口康雄、照井三喜、山崎一男、吉本脩三（鎌倉市シルバー人材センター）

4．本報の執筆は岡（第１章）、野本（第２～４章）が、編集は野本が行った。資料整理作業は調査員、調査補助員が行った。

5．本報に使用した写真は遺構を野本が、遺物を馬淵和雄が撮影した。

6．本遺跡に関する発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

7．本報作成にあたっては、次の方々より御教示、御協力を得た。記して感謝の意を表す。（敬称略、五十音順）

菊川英政、汐見一夫、田村良照、継実、原廣志、福田誠、馬淵和雄

本　文　目　次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 215
第２章　調査の経緯と経過 …… 219
第３章　発見された遺構と遺物 …… 220
　第１節　Ⅰ区 …… 220
　第２節　Ⅱ区 …… 250
第４章　まとめ …… 253

挿　図　目　次

図１　調査地点と周辺の遺跡 …… 216
図２　遺跡の位置 …… 217
図３　グリッド配置図 …… 219
図４　１面遺構全図 …… 220
図５　１面溝 …… 220
図６　１面溝出土遺物 …… 220
図７　１面井戸 …… 221
図８　１面井戸出土遺物 …… 221
図９　２面遺構全図 …… 222
図10　２面建物１ …… 223
図11　２面建物２ …… 223
図12　２面柱穴列 …… 224
図13　２面土坑 …… 224
図14　２面上出土遺物 …… 225
図15　3a面上炭層等範囲 …… 225
図16　3a面遺構全図 …… 226
図17　3a面建物１ …… 227
図18　3a面建物２ …… 228
図19　3a面土坑・柱穴出土遺物 …… 229
図20　3a面上出土遺物 …… 229
図21　3b面上炭層等範囲 …… 229
図22　3b面遺構全図 …… 230
図23　3b面建物１ …… 231
図24　3b面建物２ …… 232
図25　3b面土坑・柱穴 …… 233
図26　3b面P106・145出土遺物 …… 233
図27　3b面土坑・柱穴出土遺物 …… 234
図28　3b面溝 …… 235
図29　3b面溝出土遺物 …… 236
図30　3b面上炭層中一括廃棄 …… 236
図31　3b面上一括廃棄出土遺物 …… 237
図32　3b面上出土遺物 …… 238
図33　４面遺構全図 …… 239
図34　４面建物１ …… 240
図35　４面建物２・柱穴列 …… 241
図36　４面柱穴出土遺物 …… 242
図37　４面井戸 …… 243
図38　井戸出土遺物 …… 243
図39　４面上一括廃棄 …… 244
図40　４面上一括廃棄出土遺物 …… 244
図41　４面上出土遺物 …… 245
図42　Ⅰ区中世以前遺構全図 …… 246
図43　焼土Ｂ土師器出土状況 …… 246
図44　砂礫層土器出土状況 …… 246
図45　中世以前遺物 …… 247
図46　表土出土遺物 …… 248
図47　Ⅰ区土層図 …… 249
図48　Ⅱ区遺構全図 …… 251
図49　Ⅱ区土層図 …… 251
図50　Ⅱ区出土遺物 …… 252
図51　遺構変遷図 …… 255

表　目　次

遺物観察表（1）…… 256
遺物観察表（2）…… 257
遺物観察表（3）…… 258
遺物観察表（4）…… 259
遺物観察表（5）…… 260

図　版　目　次

図版1　1．Ⅰ区近現代地鎮遺物
出土状況（北西から）…… 263
2．Ⅰ区1面全景（南から）…… 263
3．Ⅰ区3a面全景（南から）…… 263
図版2　1．Ⅰ区3a面建物1・2
（東から）…… 264
2．Ⅰ区3b面全景（南から）…… 264
3．Ⅰ区3b面鏡出土状況
（南東から）…… 264
図版3　1．Ⅰ区3b面遺物一括廃棄出土状況
（西から）…… 265
2．Ⅰ区4面全景（南から）…… 265
3．Ⅰ区焼土B土師器出土状況
（北東から）…… 265
図版4　1．Ⅰ区弥生土器（高坏）
出土状況（東から）…… 266
2．Ⅱ区1面全景（東から）…… 266
3．Ⅱ区2面全景（東から）…… 266
図版5　出土遺物 …… 267

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

本調査地点の位置する二階堂は、現在の鎌倉市街地の北方、横浜市金沢区へ通じる県道金沢・鎌倉線（六浦道）の北の広い地域一帯を指す。かつて二階堂の荏柄天神社の石段脇の民家で井戸工事中に、縄文土器（諸磯式）が出土し[註1]、六浦道の反対側に当たる南御門では、弥生時代の集落の存在が確認されているため[註2]、周辺には古くから人の居住があったのであろう。

これより後、古代においては現在の御成小学校の地に鎌倉郡衙が置かれ、六浦道の前身となる道路は、奈良時代末までは相模国府から浦賀水道経由で、房総半島を目指す東海道としての役割を担っていた。そのため該当期の鎌倉が当地域の政治・交通の中心であったこたは、疑うべくもない。しかし、この時代の調査地点周辺の具体的な様子については明らかではない。鎌倉郡衙は10世紀中頃に廃絶するが、先述の六浦道はそれ以降も依然として機能し続けていたと考えられる。本調査地点のすぐ北方で行われた発掘調査の際に出土した数十片の土師・須恵器や[註3]、向荏柄遺跡で確認された奈良・平安時代の住居址の存在は[註4]、この間の遺跡周辺の利用の一環を物語る。なお、『和名類聚抄』には「荏草郷」という郷名が登場するが、そこでは“エカラ”という読みがなされている。この郷の位置については調査地点に程近い、現在の荏柄天神社を中心とする一帯と考えられている。同社との位置関係を考慮すれば、本調査地点も荏草郷に属していたであろう。

この時期も含め、鎌倉幕府成立までの鎌倉の様子については不明な点が多い。しかし、近年の研究を参考にするならば、すでに鎌倉は11世紀の段階で貞盛流平氏の根拠地であった可能性があり、この時期に平直方の娘婿となった源頼義以降、源氏の根拠地と化したとされている[註5]。この時期にも前述の六浦道が主要道路として機能していたことは、鎌倉時代以前の創建と伝えられる古寺社－御霊神社・甘縄神明社・窟堂（いわやどう）・荏柄天神社・杉本寺－が、この道路に沿って位置する点にも現れる。なお、頼義の子孫であり鎌倉を本拠とした義朝の“楯”（現在の寿福寺）も、この道路沿いに位置する。この時期の鎌倉については前述の寺社や楯、さらに源氏の家人の屋敷の存在が予想されており、ある程度都市的な様相を呈していたと考えられる[註6]。この二つの遺跡と前述の荏柄天神社・杉本寺が、それぞれ本調査地点とは指呼の間にある点を考慮に入れれば、この周辺も何らかの利用がなされていたとしてもおかしくない。

この地の周辺が大きく変化するのは、頼朝の鎌倉入部以後である。彼もまた六浦道沿いの大倉に居を構えたが、その周辺には御家人の屋敷も設けられた。『吾妻鏡』には荏柄天神社前に住んだ宇佐美判官[註7]を始めとして、本調査地点の近辺の居住した御家人の記事が散見する。さらに奥州合戦の後に開始された永福寺造営は、この付近にも大きな影響を及ぼした。本調査地点の近辺でも、この造営に伴うと考えられる河川の埋め立てが確認されている[註8]。これを含めた大規模な地形改変と考えても良いのではなかろうか。

このようにして造営された永福寺ではあったが、ここで実に様々な行事が行われたことは『吾妻鏡』に詳しい。また永福寺の周辺には、「一伽藍」[註9]を始めとする宗教施設が存在していた。ちなみに現在の鎌倉宮付近に位置していたと考えられている東光寺の創建は、承元３年（1209）とも建久四年（1193）ともいわれている[註10]。これらのことから、当時この付近は、御家人の屋敷と宗教施設が混在していたのであろう。本調査地点に隣接し、関取橋付近から永福寺へと向かう現在の道路は、“二階堂大路”の後身と考えられており、周辺では常に人の姿が見られたと思われる。

図１　調査地点と周辺の遺跡

図2　遺跡の位置

やがて嘉禄元年（1225）、幕府は若宮大路沿いへと移転する。それと共に都市の中心も従来よりは西に移動することとなった。そのため本調査地点付近の記事は、『吾妻鏡』からも減るものの、前述の寺社が機能し続けている点から判断すれば、この付近がさほどの変化をしたとは考えられない。むしろ諸資料にはしばしば登場する当地周辺の火災の記事は、絶え間無い土地の利用を物語っていよう。

こうした中、幕府滅亡を迎えるわけであるが、これに伴う南北朝の内乱では杉本寺の背後に設けられた杉本城で合戦が行われ、その後も父親の後醍醐天皇と対立した護良親王は、東光寺に幽閉されている。ちなみに彼は中先代の乱の最中に暗殺されるが、この際藪の中に捨てられた親王の首は、理智光院の長老の手によって手厚く葬られたという。これらを踏まえれば、本調査地点も少なからぬ影響を受けたのではなかろうか。幕府滅亡後の建武3年（延元元年・1336）、将軍御所は京都室町に移される。しかし、東国を押さえる目的を持つ足利義詮（尊氏の子）は鎌倉に入り、後の貞和5年（正平四年・1349）には彼の弟の基氏が東国の小幕府である鎌倉府を設置する。なお鎌倉府の主である鎌倉公方の屋敷は、六浦道沿いの浄明寺一帯に存在していた。以後、鎌倉公方は永享の乱の後、康正元年（1455）に足利成氏が下総国古河に移るまで存在し続ける。

この間、調査地点付近では北条貞時を開基とする覚園寺は幕府滅亡後、後醍醐天皇の勅願所を経て、足利氏の祈願所となっている。幕府有力者である二階堂道蘊の開基による瑞泉寺も、似たような転身を図っている。また、紅葉ヶ谷には鎌倉公方の足利氏満の菩提を弔うべく、永安寺という寺院も創建されている。新たな支配者の下で安定を取り戻しつつあったのであろう。そして鎌倉府体制下の鎌倉自体、鎌倉府関係者、そして町衆などの様々な人々が暮らす、東国の中心都市であり続けた。しかし、常に水面下に存在し続けた幕府と鎌倉公方の対立や、関東管領である上杉氏内部の争いは、後に応永23年（1416）の上杉禅秀の乱や、永享10年（1438）に発生した永享の乱を引き起こす。特に後者は関東における応仁の乱の役割を果たし、以後関東は戦乱の時代へと突入する。その間、前述の永安寺も永享の乱では足利持氏・満貞の自刃の場となっている。

こうした流れの中で当地付近の様子も変化する。享徳3年（1454）成立の『鎌倉年中行事』において、永福寺は「近代」の火災の後は吉書始の際には書かれなくなったとされるため、15世紀中頃には廃絶したと考えられている。同様に鎌倉公方との関係を有する覚園寺も、衰微したのではなかろうか。理智光寺についても時代は下るが天文16年（1547）の日付のある文書中で、「利知光寺慈恩院」という充所で登場する。寺が衰えたため、同じ宗派の浄光妙寺慈恩院の管理下のにあったとするのは妥当である。荏柄天神社についても、今川範忠の鎌倉侵入に際して神体が略奪されたという。後に鎌倉を訪れた万里集九が見た、荏柄天神社社殿の梁上の「兵燼之余痕」は、これに関係したものであったのか。なお、彼は瑞泉寺一覧亭の跡地にも立ち寄っており、当寺の衰微の様子が窺われる。廃絶年代が不明である東光寺の場合もその衰退の開始をこの時代と考えてもよいのではなかろうか。

やがて鎌倉を勢力範囲に収めたのが、小田原を本拠とする後北条氏である。同氏は鎌倉の様々な寺社領の安堵を行うと同時に、いくつかのものについては再建を行った。当地周辺では覚園寺・理智光寺などは安堵を受け、荏柄天神社が造営された。同氏によって行われた安堵は形を変え、基本的には豊臣・徳川氏の時代にも引き継がれるが、近世を迎えた鎌倉に昔日の面影がなかったことは周知の事実である。江戸時代の延宝8年（1680）、本調査地点付近を訪れた自住軒一喜子の目に映ったのは、「又武士の屋敷の跡々としては名は夥しけれ共皆麦畠のみなり」という姿であり、大塔宮の土牢（現在の鎌倉宮）を見学する際には「田道」を進んでいる。彼は覚園寺の庭園がきれいである旨を記すが、その際「凡鎌倉中に古跡あらんが昔の堂とおぼしきは此所也」と言っている。他の寺社の様子については、推して知るべしであろう。近世には鎌倉が観光地化するとはいえ、基本的にはこうした光景は近代、鎌倉が別荘地・宅地化するまで続くこととなる。

なお、近代以降東光寺の跡と考えられる地には鎌倉宮が設けられ、同宮の参道を兼ねる形で新しい道（現在のバス通り）が造られている。ここに及び、現代の調査地点近辺の原形は成立したのである。

註

（1）『鎌倉市史』考古編、25頁。

（2）「大倉幕府周辺遺跡群（No.49）雪ノ下四丁目620番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14（第2分冊）』鎌倉市教育委員会、1998。

（3）『横小路周辺遺跡　二階堂字横小路110番3地点－永福寺関連遺跡の調査－』横小路周辺遺跡発掘調査団、1996。

（4）『向荏柄遺跡発掘調査報告書』向荏柄遺跡発掘調査団編、鎌倉市教育委員会、1985。

（5）野口実『武家の棟梁の条件　中世武士を見直す』中央公論社、1994。

（6）岡陽一郎「中世居館再考－その性格をめぐって－」『中世の空間を読む』五味文彦編、吉川弘文館、1995。

（7）『吾妻鏡』建長3年10月7日条。

（8）前掲註（3）参照。

（9）『吾妻鏡』承元3年10月10日条。

（10）『鎌倉廃寺事典』　貫達人・川副武胤編、有隣堂、1980。
「中前代蜂起事」（『太平記』巻第13、角川文庫、1982）
この間の事情については山田邦明「室町時代の鎌倉」『中世を考える　都市の中世』五味文彦編、吉川弘文館、1992。を参照。

第２章　調査の経緯と経過

平成９年11月、当該地において基礎の構築される地盤の柱状改良及び敷地の一部を切り下げて車庫を建設する内容の計画の建築確認申請があった。このため鎌倉市教育委員会で試掘調査を実施したところ、地表下40cmで遺構面が確認された。このため設計変更を含め、事業者と協議したが設計変更等が不可能とのことで、平成10年１月14日から３月７日にかけて発掘調査が行われた。

調査は北の住宅部分をＩ区、南の車庫部分をII区とし、Ｉ区に関しては残土を場内処理とする関係上図３のとおり調査区を狭めた。

調査経過は以下の通りである。

１月14日　機材搬入、掘り下げ開始
１月26日　II区１面全景撮影
１月27日　Ｉ区２面全景撮影
１月28日　Ｉ区２面・II区１面平面実測
２月３日　Ｉ区3a面全景撮影
２月４日　Ｉ区3a面平面実測
２月10日　Ｉ区3b面全景撮影
２月11日　Ｉ区3b面平面実測
２月17日　Ｉ区４面全景撮影
２月18日　Ｉ区４面平面実測
２月19日　II区２面平面実測
２月27日　ラジコンヘリによる全景写真撮影
２月28日　調査終了、Ｉ区人力による埋め戻し
３月７日　Ｉ区埋め戻し完了、機材撤収

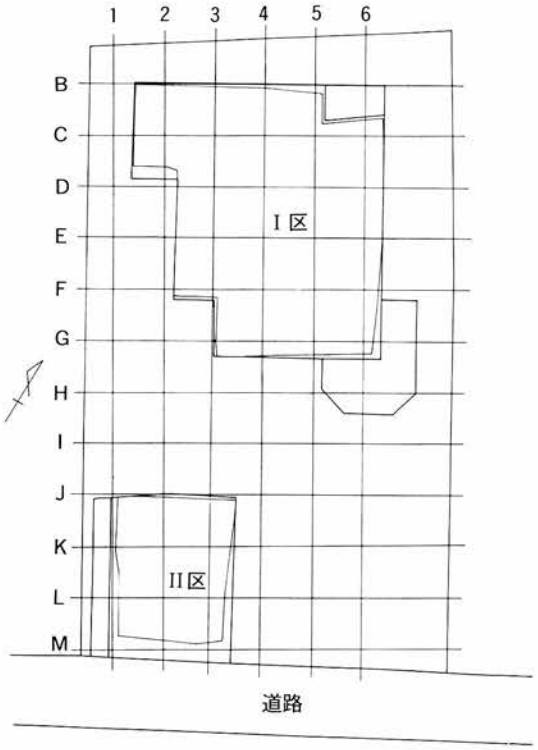


図３　グリッド配置図

調査地周辺は南の二階堂川に向かって傾斜しており、Ｉ区北では海抜16.5m、II区付近で15.3m、さらに敷地南の道路は14mとなっており、最大高低差は2.5mを数える。

第３章　発見された遺構と遺物

第１節　Ｉ区

１．１面（図４）

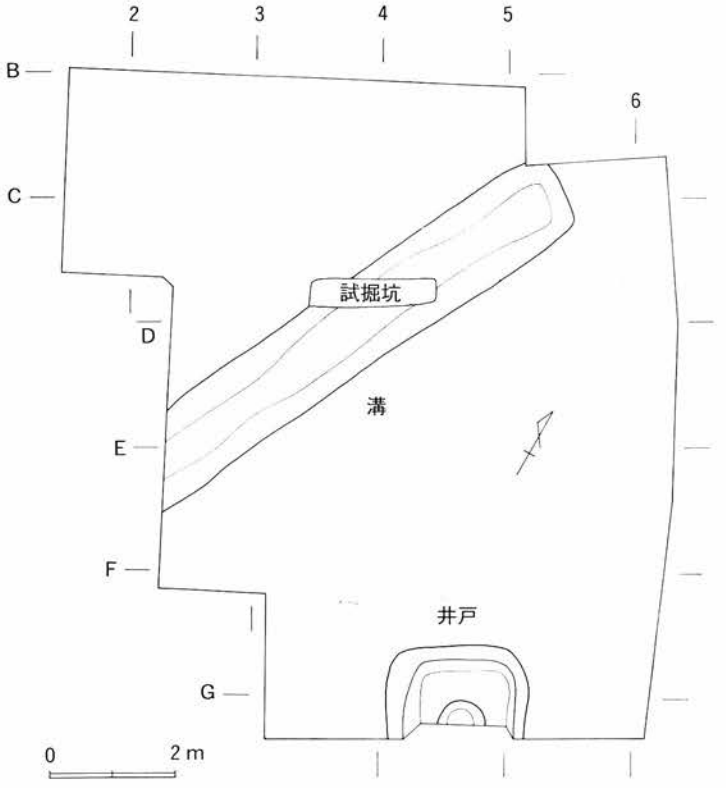
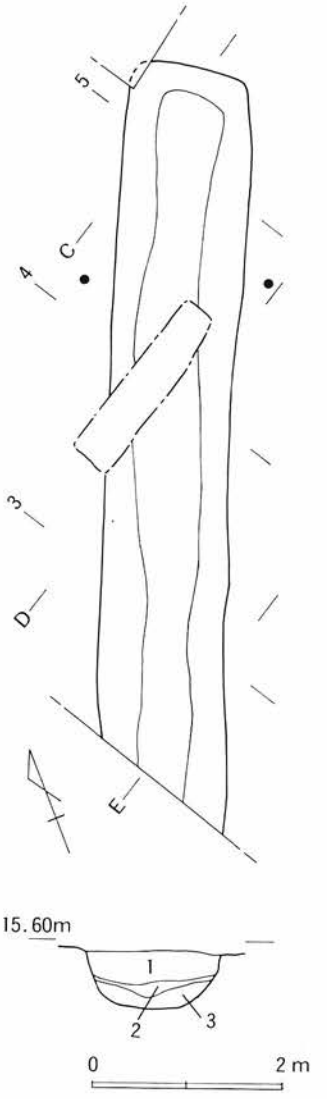


図４　１面遺構全図

地表面から30～40cm掘り下げると中世遺物包含層が確認され、さらに30cm下げると２面となる泥岩地業層が広がる。海抜は15.5m。泥岩地業面上から掘りこまれる遺構を掘り上げると、溝と井戸が他の遺構よりも明らかに新しいため、１面として分けた。



１．黄灰褐色土　泥岩多く含む
２．灰褐色砂質土
３．灰褐色粘質土

図５　１面溝

溝（図５）

Ｉ区北東から西に流れる。５－Ｃ付近で途切れている。上幅140cm、下幅60cm、確認面からの深さ100cm。断面は逆台形に近く、底面レベルは東端、西端ともに変わらず海抜14.9mである。南北軸方位はＮ－27°－Ｅである。調査地点南の道路とは30°と大幅にずれる。

出土遺物の内訳は、かわらけ272点（手づくね２点、ロクロ87点、成形不明183点）、青磁碗２点、瀬戸窯製品２点、常滑窯製品10点、白かわらけ１点、平瓦２点、獣骨２点の計291点である。実測しえたのは図６の１～４である。１～３はロクロ成形のかわらけで、口縁は外

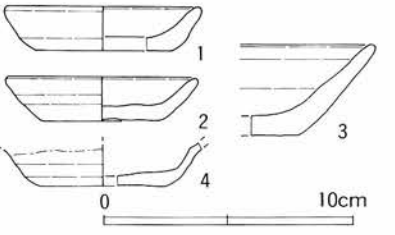


図６　１面溝出土遺物

反気味に立ち上がる。粉質である。4は瀬戸窯の皿である。

井戸（図7）

Ⅰ区南壁際の4－E・Gグリッドに位置する。平面は方形を呈すると考えられる。堀り方は一辺220cm、確認面からの深さ60cmを数える。南北軸方位はN－29°－Wである。下場中央には「水溜」と考えられる穴が掘られている。側板等の部材の検出はなかった。

出土遺物の内訳はかわらけ266点（手づくね1点、ロクロ265点）、青磁2点、瀬戸窯製品5点、常滑窯製品（甕）13点、白かわらけ1点、瓦器碗1点、瓦質火鉢2点、瓦3点、釘1点の計294点である。

5～14はロクロ成形のかわらけで器肉厚く、粉っぽい。口縁が外反する。15は手づくね成形の白かわらけの口縁部片で、口径16cm前後と思われる。16～18は瀬戸窯製品。16は平碗で50％が残存する。17は盤の底部片。18は器種不明である。径は12cm前後と思われる。

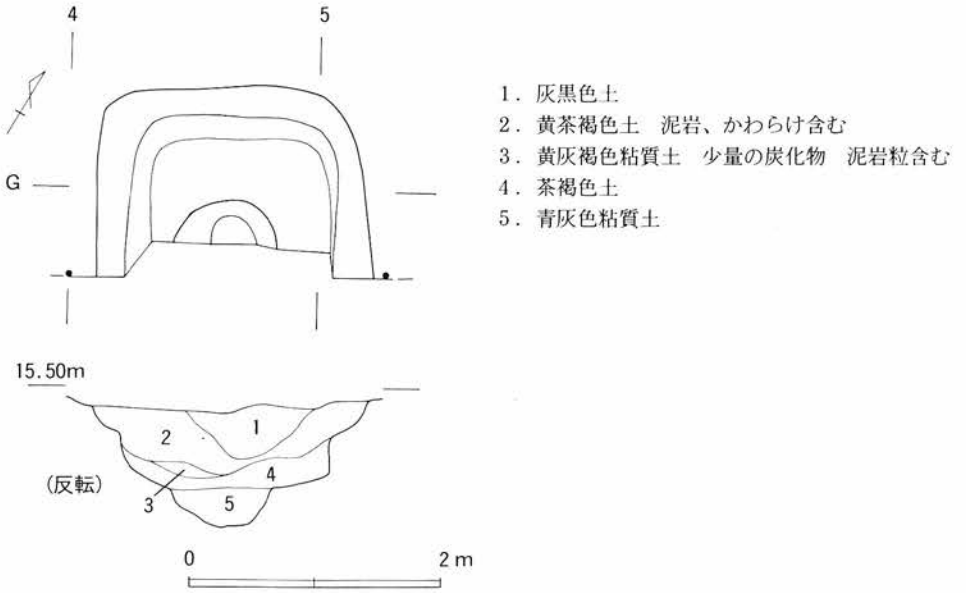


図7　1面井戸

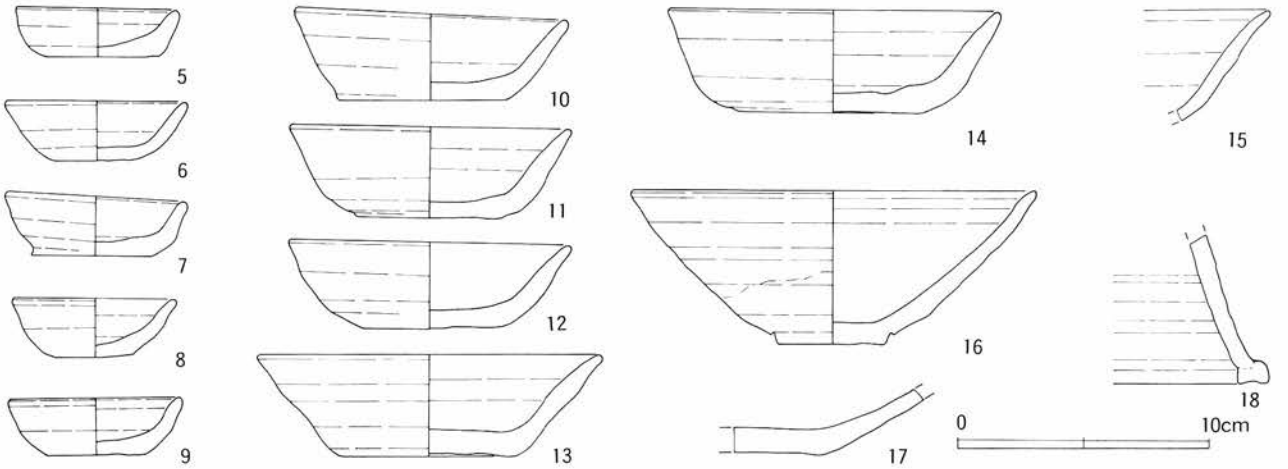


図8　1面井戸出土遺物

2．2面（図9）

強固な泥岩塊による地業面で、間層を含めた厚さは40cmとなる。面の30％は攪乱や0面の遺構で損なわれているが、掘立柱建物2棟、柱穴列2列、その他の柱穴約80口、土坑2基が発見された。

建物1（図10）

掘立柱建物である。I区北（2・3－B・Cグリッド）に位置する、確認規模は東西2間、南北1間で、柱間は芯々距離で約200cm。南北軸方位はN－32°－Wである。柱穴6口すべてから礎板の検出はなかった。遺物はP18からかわらけ4点、P14からかわらけ8点、常滑窯甕1点、釘1点が出土している。いずれも小破片のため図示しえるものはない。

建物2（図11）

掘立柱建物である。I区東（5－C～Eグリッド）に位置する。確認規模は東西1間、南北2間で、柱間は芯々距離で約200cm。南北軸方位はN－31°－Wである。柱穴4口すべてに礎板が残る。遺物はP66からかわらけ4点、青白磁小皿1点、渥美窯甕1点、P2からかわらけ35点、常滑窯甕1点が出土し

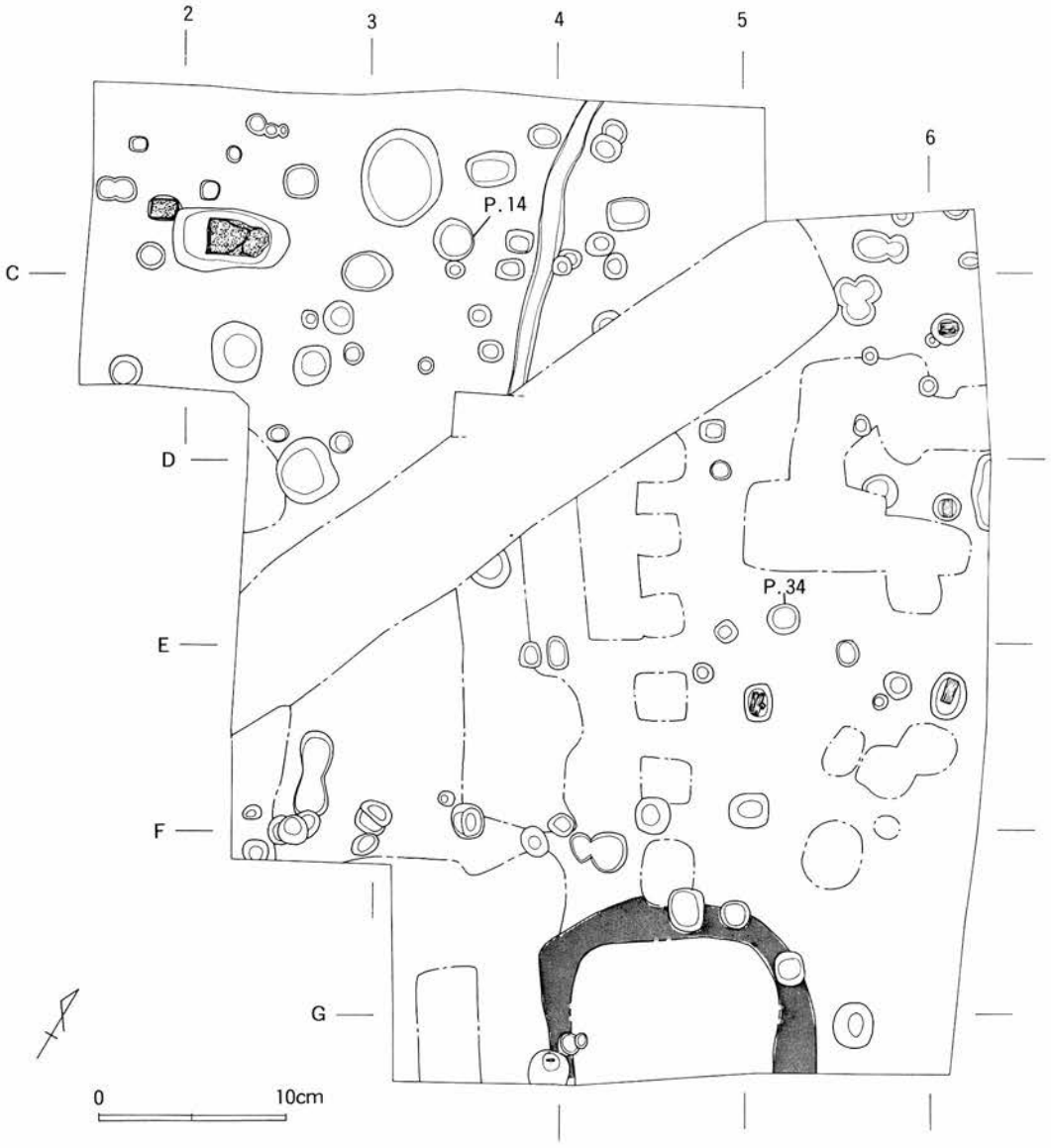


図9　2面遺構全図

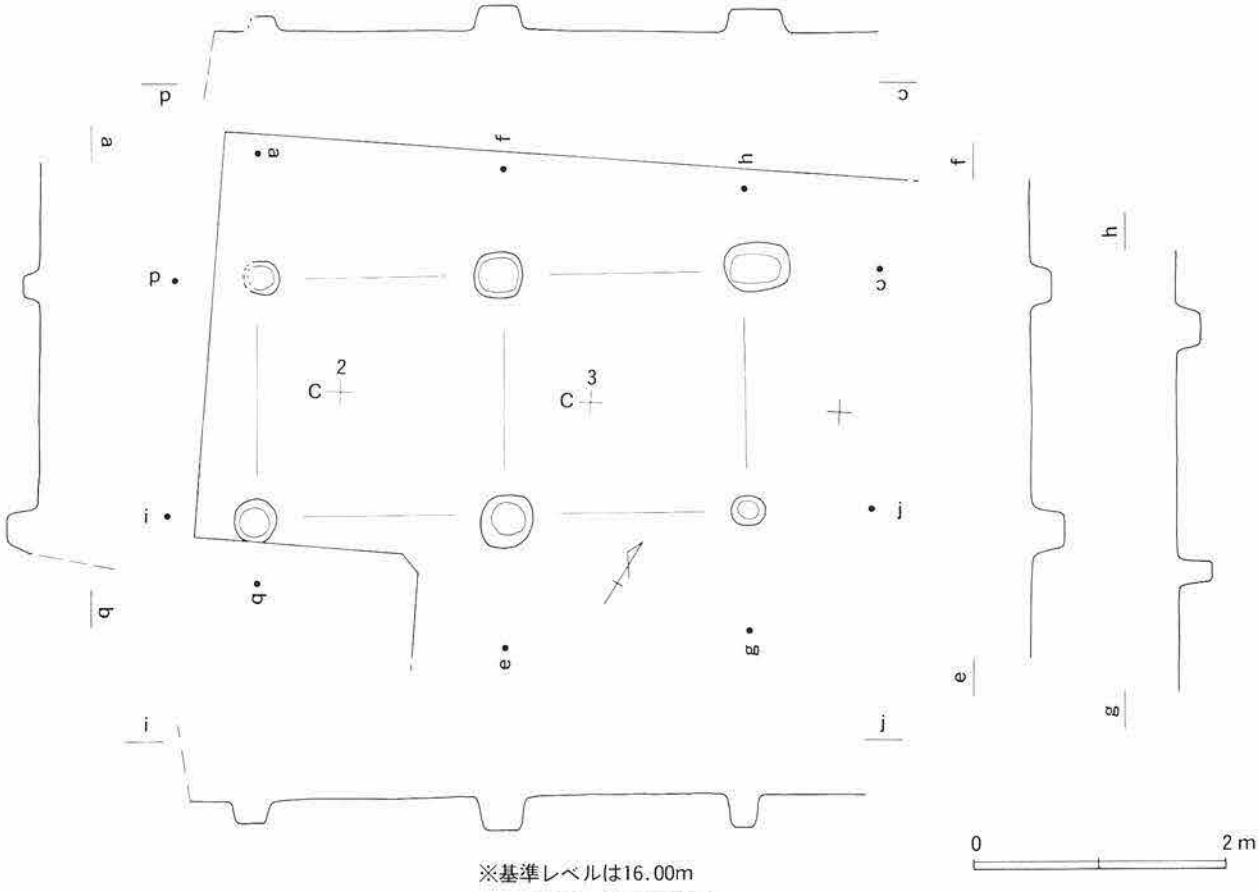


図10　2面建物1

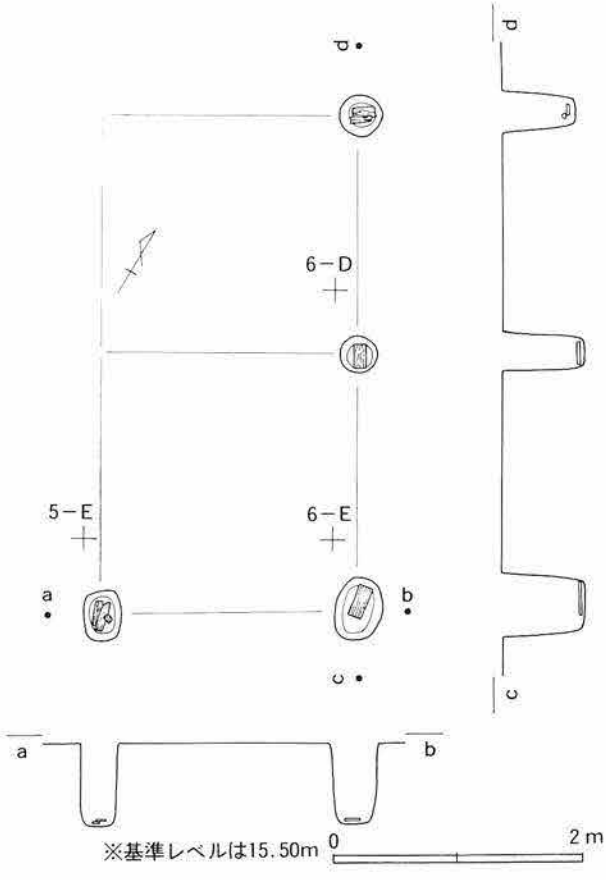


図11　2面建物2

ている。いずれも小破片のため図示しえるものはない。

柱穴列1（図12）

Ⅰ区南のFライン上に位置する。確認規模は東西5間で、柱間は芯々距離で100cmを数える。礎板の検出はなかった。遺物はP73からかわらけ2点、常滑窯甕1点、P42からかわらけ2点、P39からかわらけ3点、P34からかわらけ5点、砥石（中砥）1点が出土している。いずれも小破片のため図示しえるものはない。

柱穴列2（図12）

Ⅰ区南西角の3−Gグリッドに位置する（煩雑なため平面図は2面ではなく、3a面に入れた）。2穴のみであるが、柱穴内の礎板等の配置が全く同じなため柱穴列としてここで取り上げた。確認規模は東西1間で、柱間は芯々距離で120cmを数

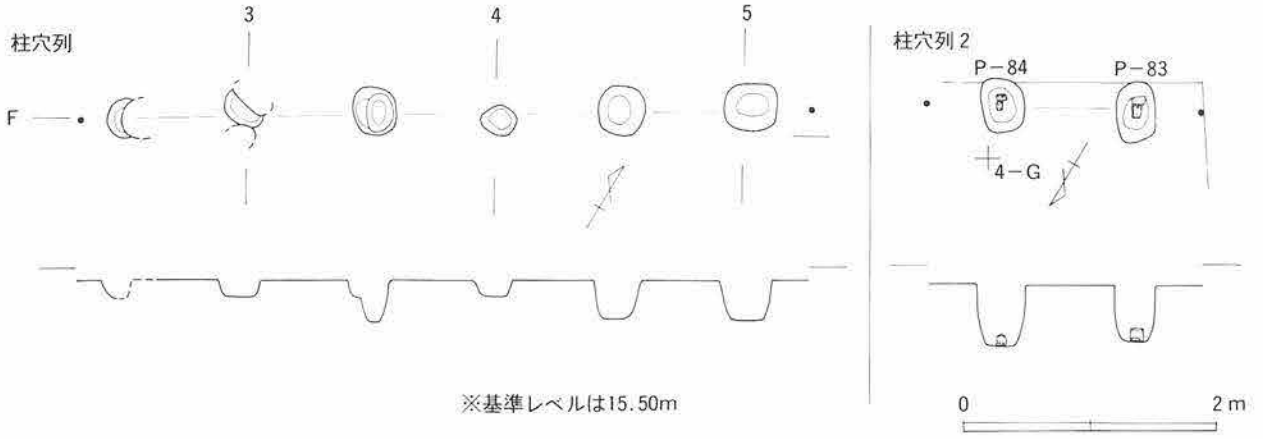


図12　2面柱穴列

える。柱穴内にはいずれも礎板と考えられる板とその南に柱状の部材が据えられていた。柱状部材の下には板は据えられていなかった。柱状部材の規格はP84（東）が遺存高6.5cm、幅7cm、厚さ3cm、P83（西）は遺存高10cm、幅10cm、厚さ5cmを数える。礎板は他の柱穴の礎板に比べると半分くらいである。P83は覆土上面が鉄分でかなり硬化していた。

遺物はP84からかわらけ7点、常滑窯甕1点。P83からかわらけ3点、常滑窯甕1点が出土している。いずれも小破片のため図示しえるものはない。

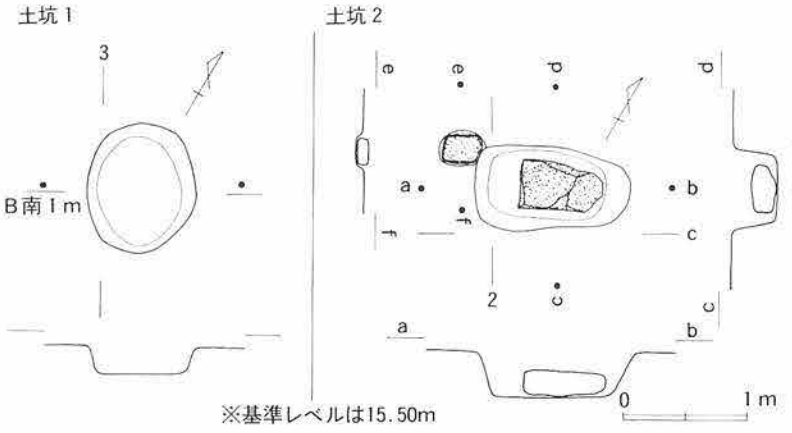


図13　2面土坑

土坑1（図13）

Ⅰ区北西の3－Bグリッドに位置する。平面形は楕円を呈し、径104cm、深さ22cmを数える。覆土は炭・泥岩粒を多く含む暗茶褐色土。ごみ穴であろうか。遺物はかわらけ(すべてロクロ成形)38点、常滑窯甕3点が出土している。19はロクロ成形のかわらけで底部から縁にかけて内彎して立ち上がる。

土坑2（図13）

Ⅰ区北西の2－Bグリッドに位置する。平面形は長楕円を呈し、長軸124cm，短軸68cm、深さ36cmを数える。土坑内には長さ65cm、幅39cm、高さ20cmの凝灰質砂岩の切石が配されており、切石の裏面はノミ痕が顕著であった。遺構の性格は不明である。

遺物はかわらけ8点、常滑窯壺2点が出土しているが、いずれも小破片のため図示しえるものはない。

柱穴及び2面上出土遺物（図14）

20はP14から出土。ロクロ成形のかわらけで、器肉やや薄めで、底部から口縁にかけて内彎気味に立ち上がる。胎土は砂粒を多く含む。21はP34から出土。愛媛県の伊予地方産と思われる砥石で中砥である。22～25は面上出土のものである。22・23はロクロ成形のかわらけで底部から口縁にかけて内彎気味

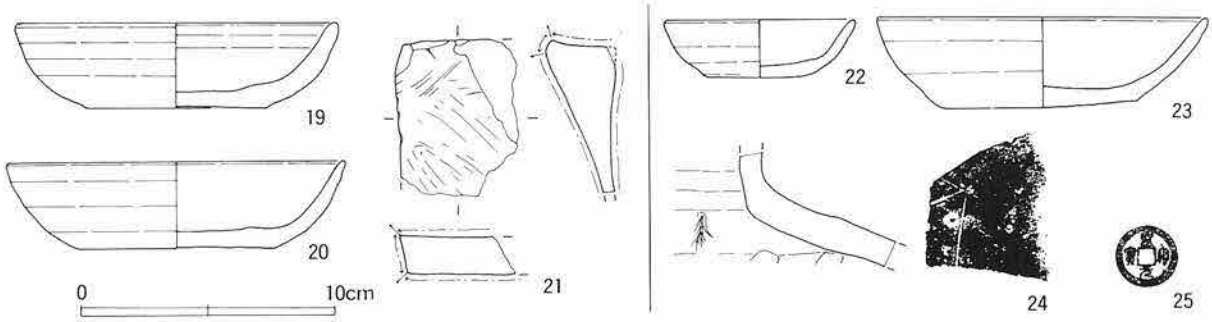


図14　2面上出土遺物

に立ち上がる。面上出土のかわらけは概ねこのタイプである。24は常滑窯甕の頸部片で、外面に線刻されているが全容は不明である。25は銅銭で熙寧元寶である。

3．3a面（図16）

2面を構成する泥岩塊地業層及びその下の間層を剝がすと図15のように焼土面、破砕泥岩地業面、海砂面、炭面が部分的に広がっていた。いずれも1cm以下と薄い。Ⅰ区北西の部分は海砂の上に破砕泥岩を敷き詰めているようである。以上の面を剝がすと遺構面（3a面）が確認できた。海抜は約15.2mを数える。

遺構は礎石建物1棟、掘立柱建物1棟、塀（堀り方）1条、柱穴60口、土坑2基を発見した。

建物1（図17）

礎石建物である。Ⅰ区北、Cライン付近に位置する。中間を1面溝に切られるものの確認規模は東西3間、南北は1間の4分の1である。柱間は芯々距離で東西215cm、南北50cmを数える。南北軸方位はN－34°－W。北の礎石列は40～50cm大なのに対し、南の礎石列は30cm大と小振りである。このことから、南北間は建物の縁束部分と考えられ、建物の南の限界であることがわかる。礎石は南列東端の泥岩を除いてすべて安山岩である。

建物2（図18）

掘立柱建物である。確認規模は東西3間、南北3間で、柱間は芯々距離で約200cmを数える。南北軸方位はN－

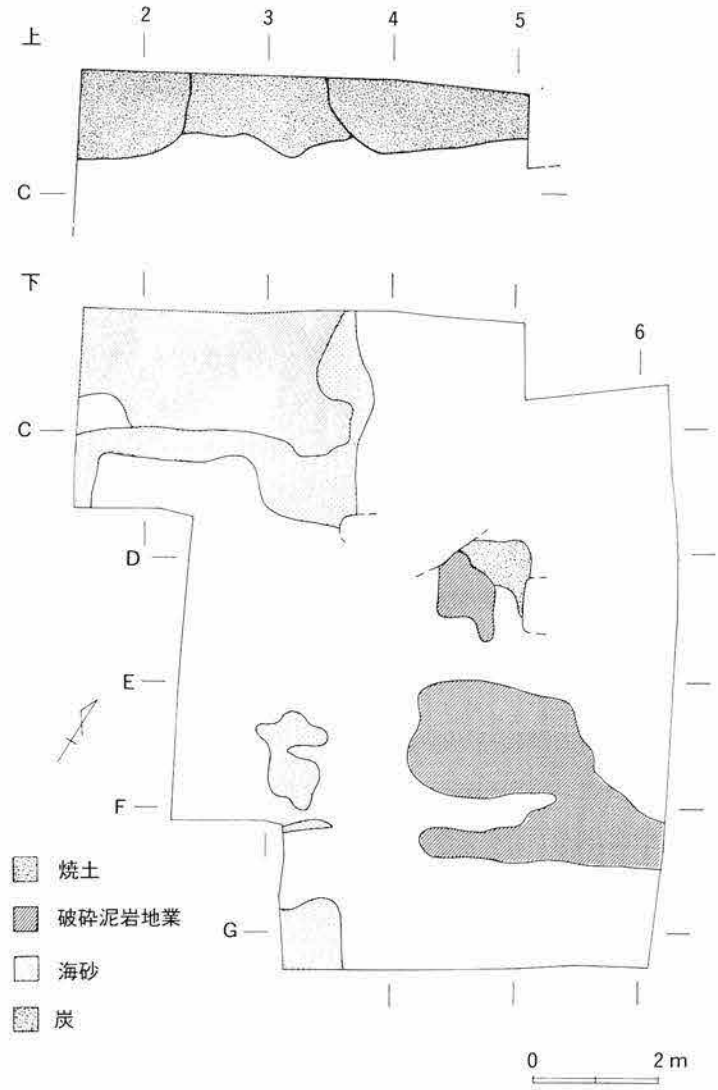


図15　3a面上炭層等範囲

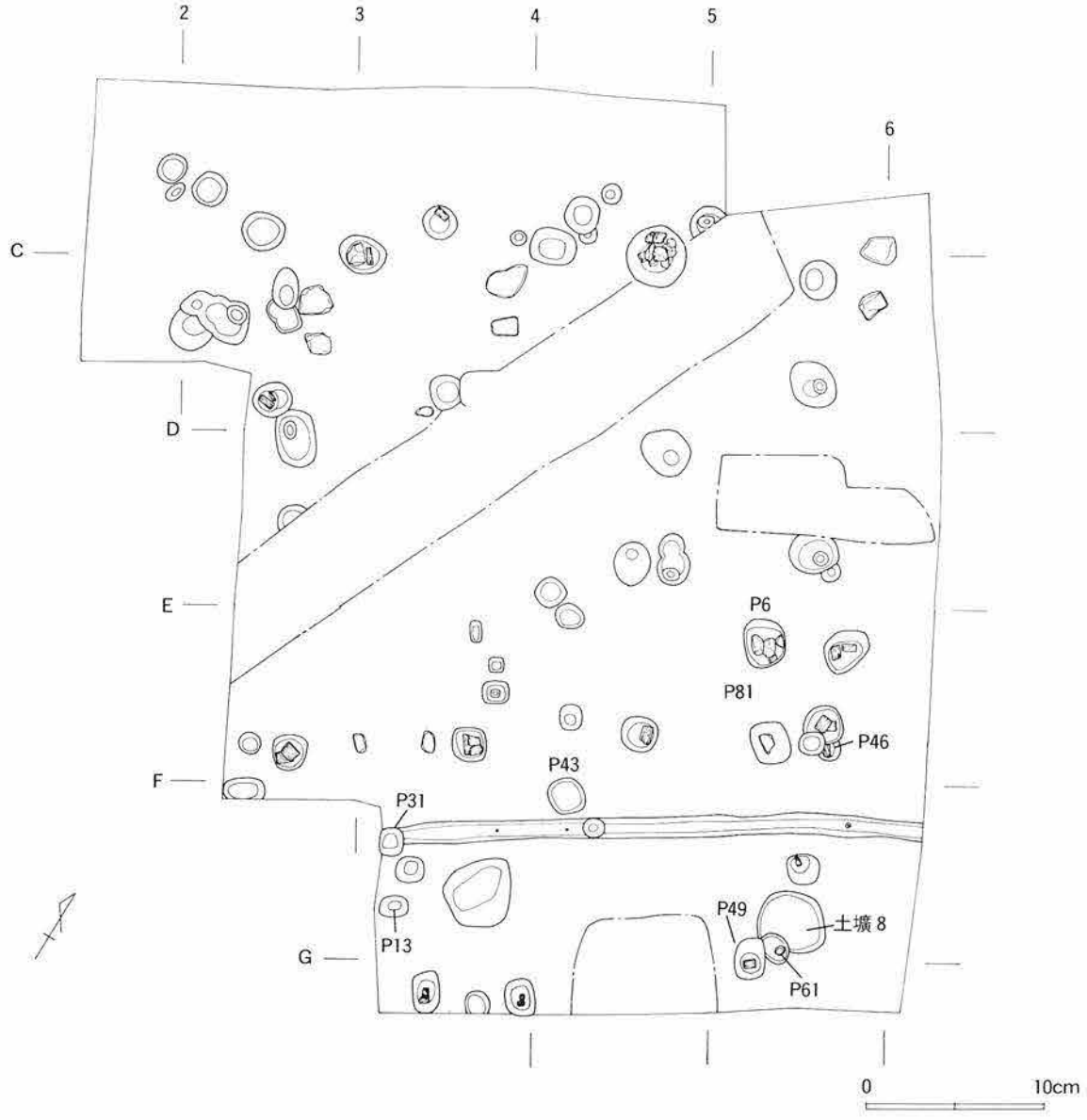


図16　3a面遺構全図

32°－W。遺物はP36からはかわらけ（手づくね）１点、渥美窯甕３点、平瓦（凸面斜格子叩き目）１点、P11からはかわらけ２点（手づくね１、ロクロ１）、P8からはかわらけ（成形不明）３点、常滑窯甕１点、P4からはかわらけ43点（手づくね15、ロクロ16、成形不明12)、常滑窯甕１点、P30からかわらけ８点（ロクロ５、成形不明３)、P17からはかわらけ２点（手づくね１、成形不明１)、常滑窯甕１点、丸瓦１点、P27からはかわらけ３点（成形不明)、P2からかわらけ35点（手づくね５、ロクロ６、成形不明24)、常滑窯甕１点が出土している。いずれも小破片のため図示しえるものはない。

塀（図18)

Ｉ区南、Ｆライン付近に位置する。建物２の約１m南を東西に平行に走る。南北軸方位はＮ－55°－Ｅである。図18で建物２と一緒にしたが同時期のものかは判断しがたい。上幅24cm、深さ20cmを数える。南北軸方位はＮ－55°－Ｅ。下場中央に３カ所杭の痕跡があった。復元すると80cm間隔に杭が打たれていたことになる。このことから塀、それも屋敷を区画するようなものでなく、間仕切り的な塀の

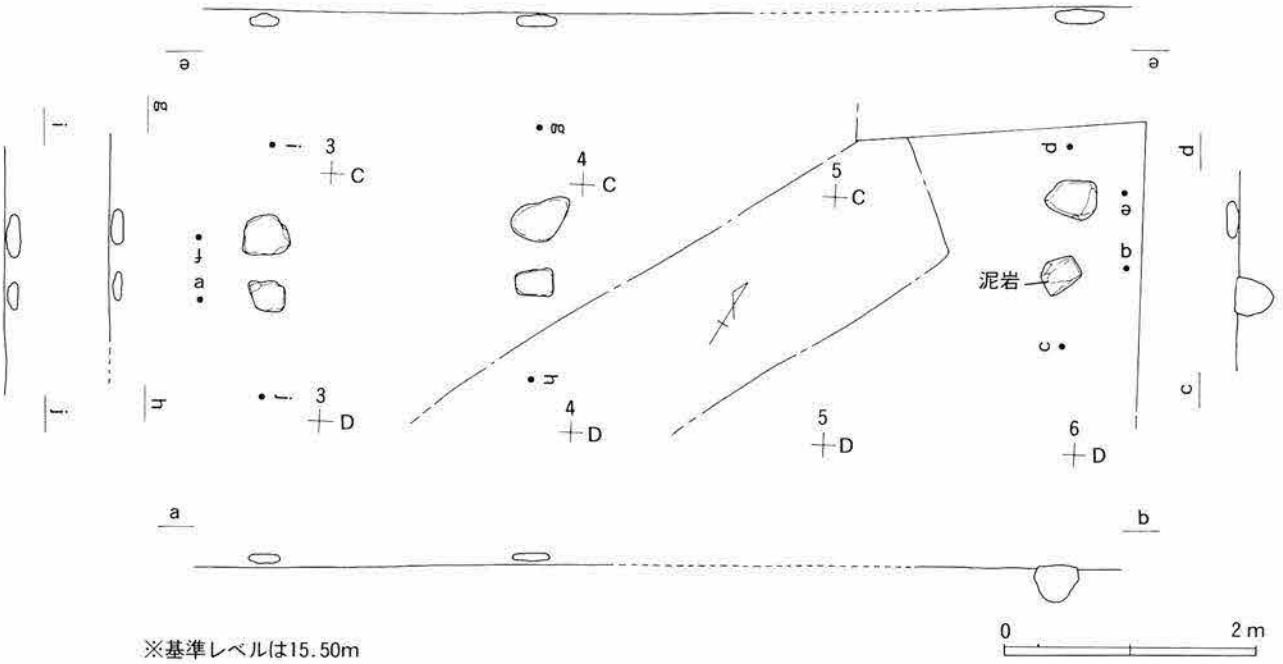


図17　3a面建物１

掘り方と推定する。遺物はかわらけ31点（ロクロ27、成形不明４）、常滑窯製品２点（甕１、鉢１）、白かわらけ７点、滑石製鍋１点、砥石（仕上げ砥）１点であるが、いずれも小破片のため図示しえるものはない。

3a面土坑・柱穴出土遺物（図19）

26は白磁の四耳壺の肩部。土坑８から出土。27・28は手づくね成形のかわらけで、27はP43、28はP49から出土。29・30はロクロ成形のかわらけで29はP31、30はP61から出土。31は手づくね成形の白かわらけ、32は常滑窯Ｉ類の鉢でともにP6から出土。33は滑石製の鍋でP13から出土。

3a面上出土遺物（図20）

内訳はかわらけ709点（手づくね56、ロクロ338、成形不明315）、舶載陶磁器13点（青磁４、白磁４、青白磁４、黄釉盤１）、渥美窯壺１点、常滑窯製品18点（甕９、鉢９）、山茶碗１点、白かわらけ27点、瓦質火鉢１点、瓦９点（丸瓦１、平瓦８）、銅銭４点、砥石（仕上げ砥）１点の計784点である。

34～36はロクロ成形のかわらけ。34・35は砂粒多く含み、36は粉質。37は白磁の四耳壺の口縁部片。38・39は青白磁で、38は水注の注口部、39は小壺。40は渥美窯の壺の口縁部片。41は常滑窯Ｉ類鉢の口縁部片。42は山茶碗。43～46は銅銭。

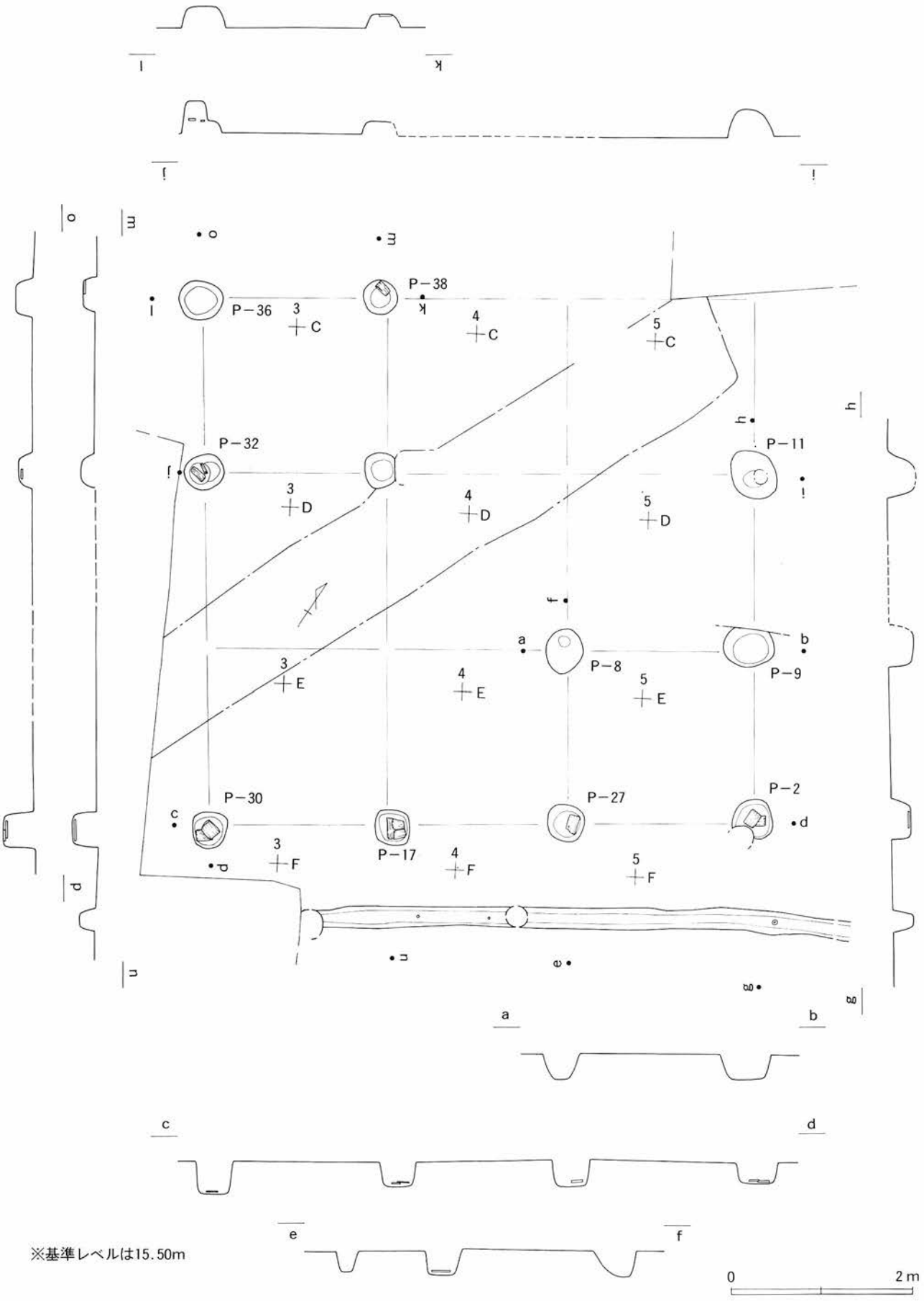

P−36
P−38
P−32
P−11
P−8
P−9
P−30
P−17
P−27
P−2
3
4
5
C
D
E
F
a
b
c
d
e
f
g
h
i
j
k
l
m
n
o
p
※基準レベルは15.50m
0
2 m

図18　3a面建物 2

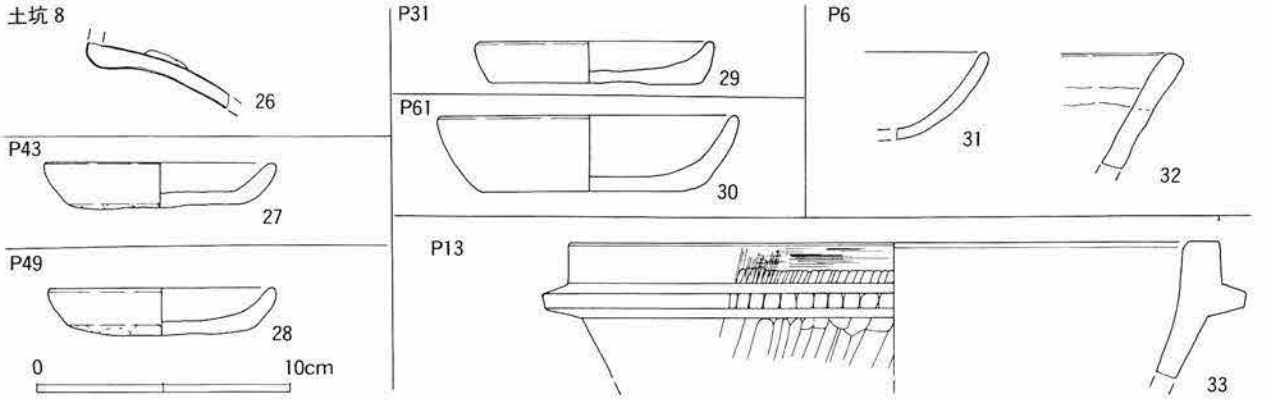


図19　3a面土坑・柱穴出土遺物

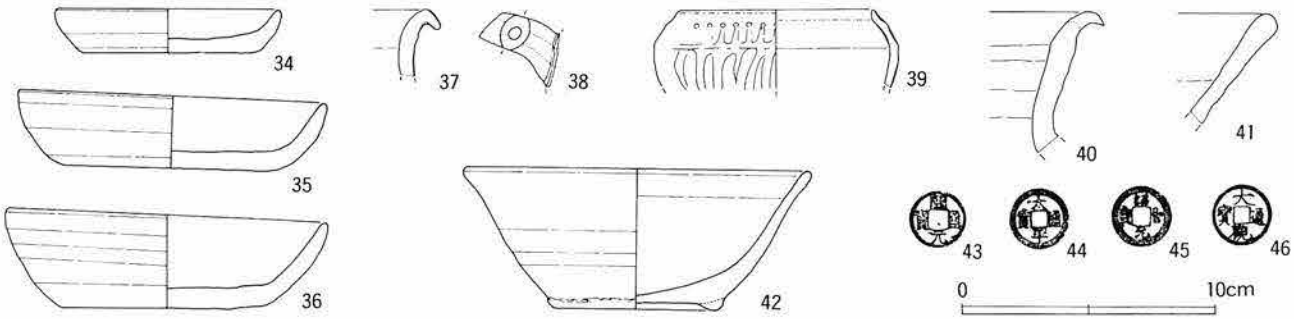


図20　3a面上出土遺物

4．3b面（図22）

2a面を10cm掘り下げると北西にかわらけ片が集中し、南東部分は炭面が部分的に広がる。この炭中にかなりの量の遺物が含まれていた。さらに、この炭層を剝がすと遺構面（3b面）が確認できた。海抜は15.1mを数える。遺構は掘立柱建物２棟、柱穴列１列、柱穴約130、塀（堀り方）２条、溝１条、遺物一括廃棄１カ所である。

建物１（図23）

掘立柱建物である。Ⅰ区全体に広がる。確認規模は東西３間、南北３間で、柱間は芯々距離で200～210cm。南北軸方位はN－36°－W。遺物はP87からは木製品２点（箸１、下駄１）、P110からはかわらけ18点（手づくね９、ロクロ７、成形不明２）が出土している。図27－64・65はともにロクロ成形のかわらけで器肉厚く、やや内彎気味に立ち上がる。P110からの出土。

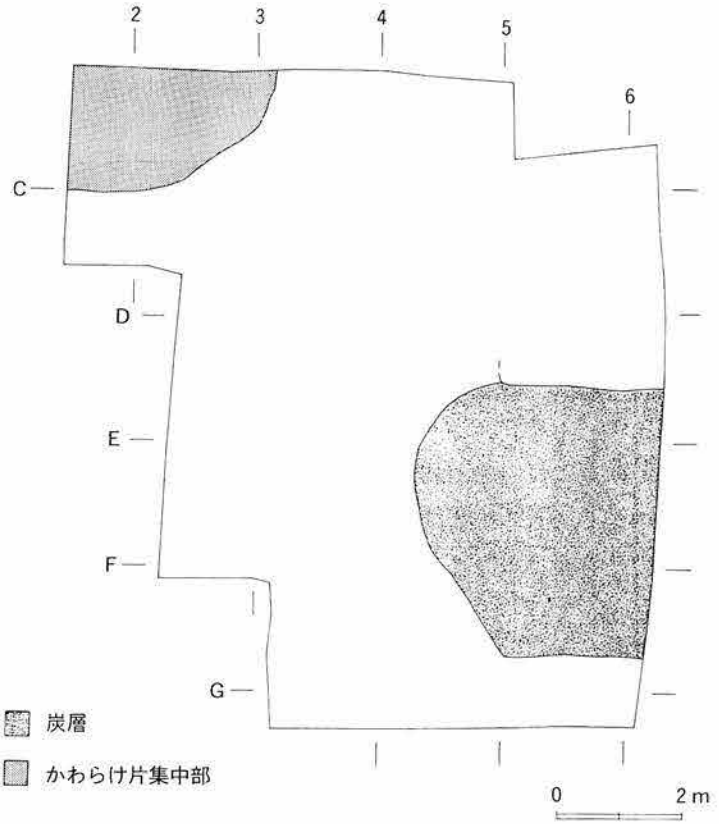


図21　3b面上炭層等範囲

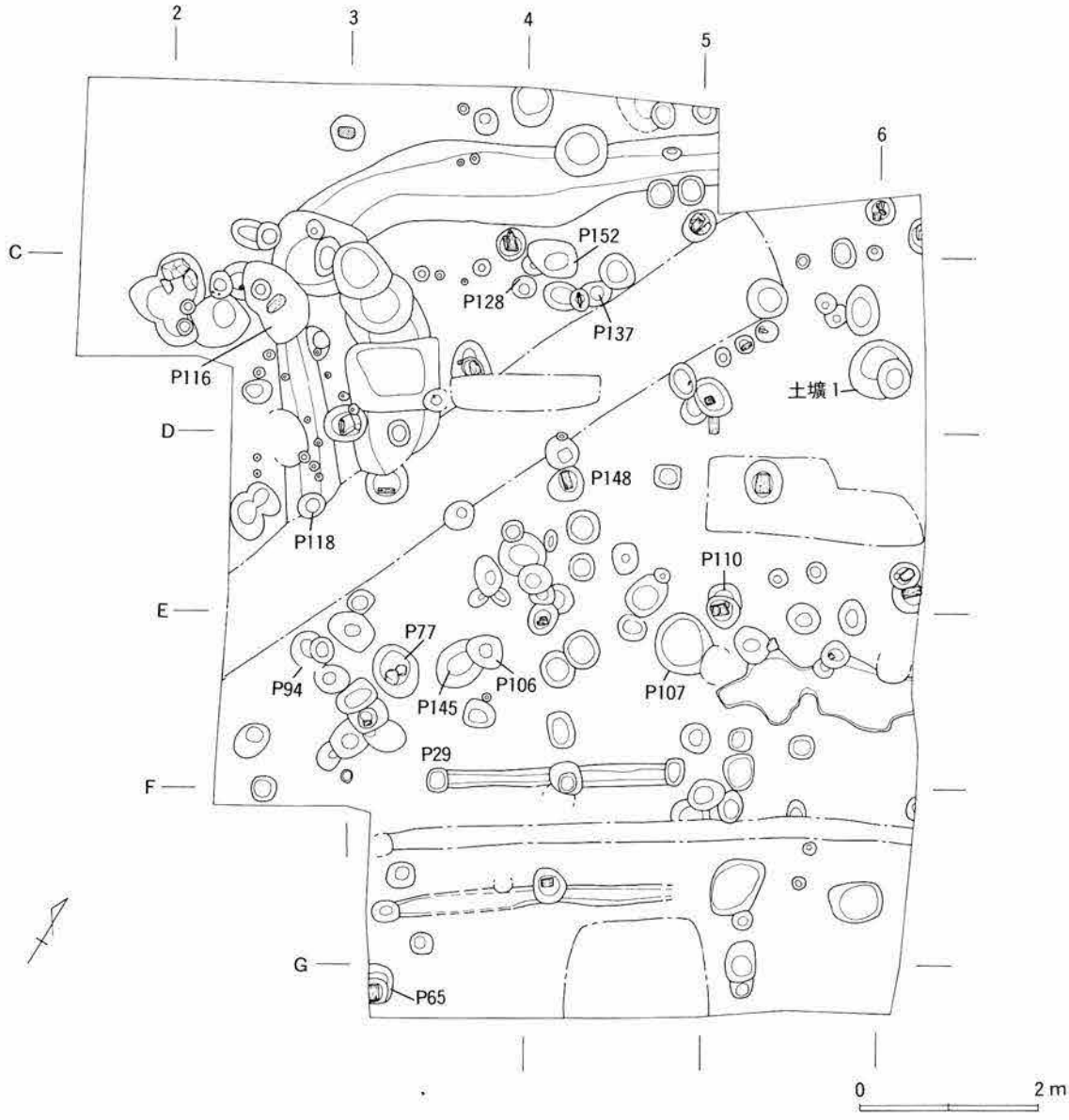


図22　3b面遺構全図

建物２（図24）

掘立柱建物である。Ⅰ区中央に位置する。確認規模は東西２間、南北２間で、柱間は芯々距離で210cmを数える。南北軸方位はN－30°－W。遺物はP100からかわらけ４点（手づくね３、ロクロ１）、丸瓦１点、P191からはロクロ成形のかわらけ１点、常滑窯甕１点が出土している。いずれも小破片のため図示しえるものはない。

塀１

3a面の塀（堀り方）と同性格の遺構を発見した。Ｆライン付近に位置し、東西に走る。上幅24cm、下幅12cm，深さ８cm。南北軸方位はN－55°－E。3a面のように下場中央に杭の痕跡はない。遺物は成形不明のかわらけ１点が出土しているが小破片のため図示しえない。

塀２

Ｆライン付近に位置し、東西に走る。上幅20cm、下幅10cm、深さ20cmを数える。南北軸方位はN－

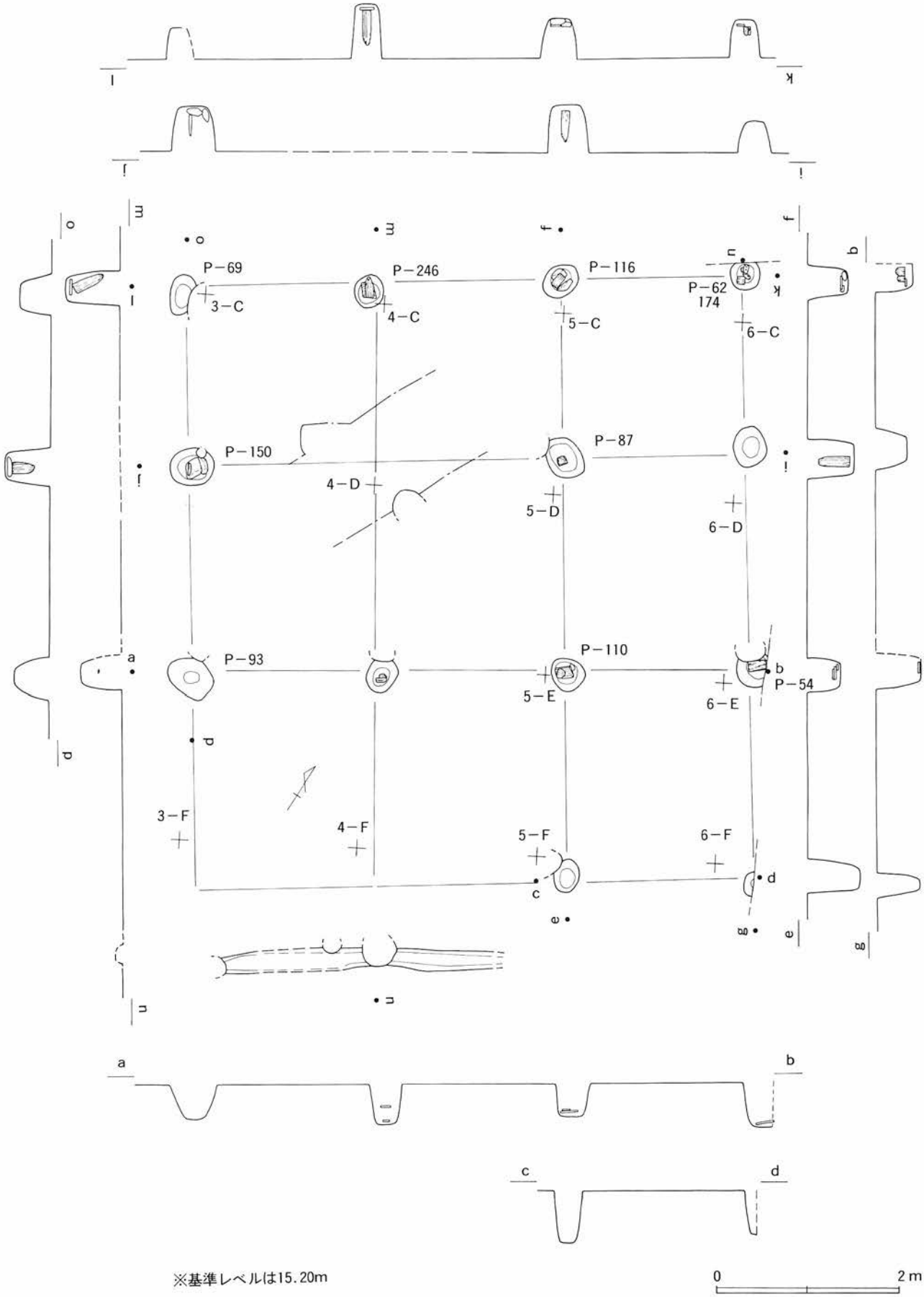

P−69
P−246
P−116
P−62
174
3−C
4−C
5−C
6−C
P−150
P−87
4−D
5−D
6−D
P−93
P−110
P−54
5−E
6−E
3−F
4−F
5−F
6−F
※基準レベルは15.20m
0
2m

図23　3b面建物1

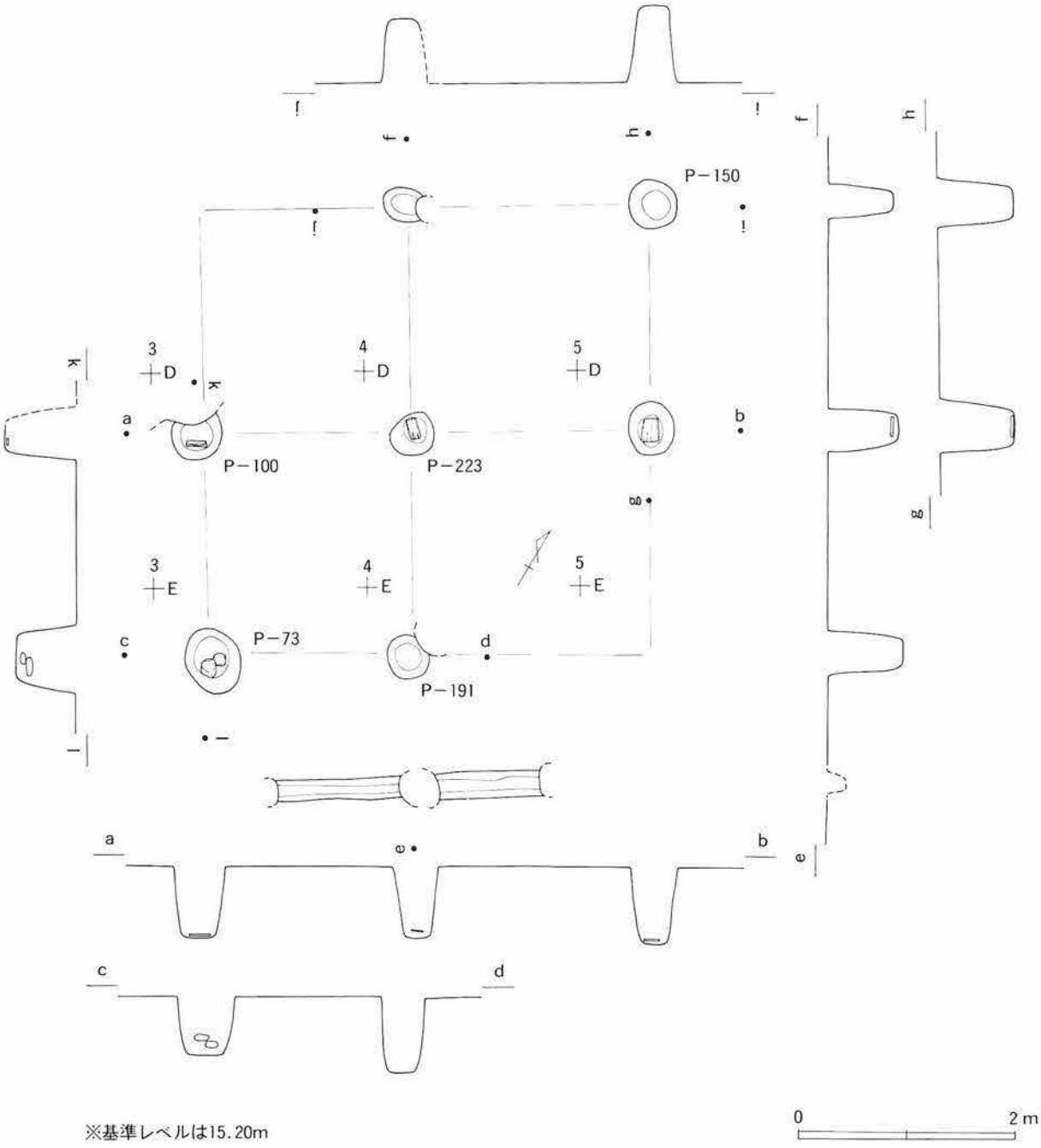


図24　3b面建物２

59°－E。塀１同様、下場中央に杭の痕跡はない。遺物の出土はない。

P148（図25）

Ⅰ区中央、４－Dグリッドに位置する。柱穴中央に12cm四方の土の違いがあった。この中には火を受け、硬化した壁土が充塡していた。建物が火事で焼けた時に、柱の跡に壁土が混入したと考えられる。遺物は手づくね成形のかわらけが１点出土しているが小破片のため図示しえない。

P106・145（図25）

３－Eグリッドに位置する。P106がP145を切る。P145からは軒平瓦の瓦当部１点、丸瓦１点、平瓦１点、P106からは安山岩と平瓦２点、釘１点が出土した。

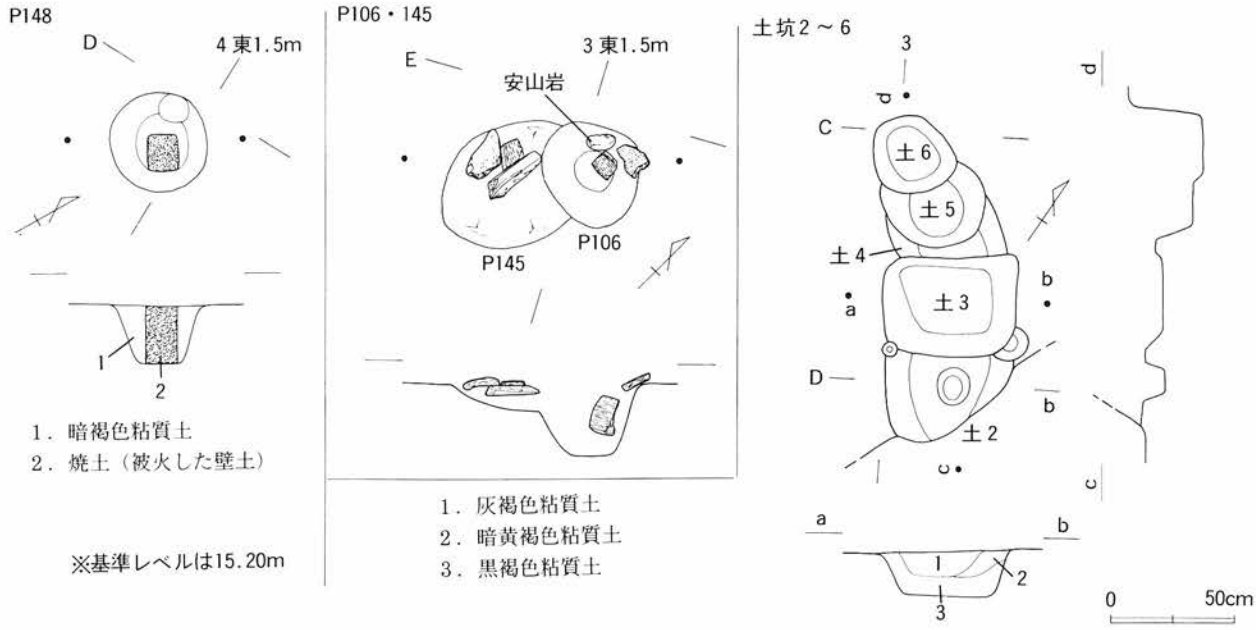


図25　3b面土坑・柱穴

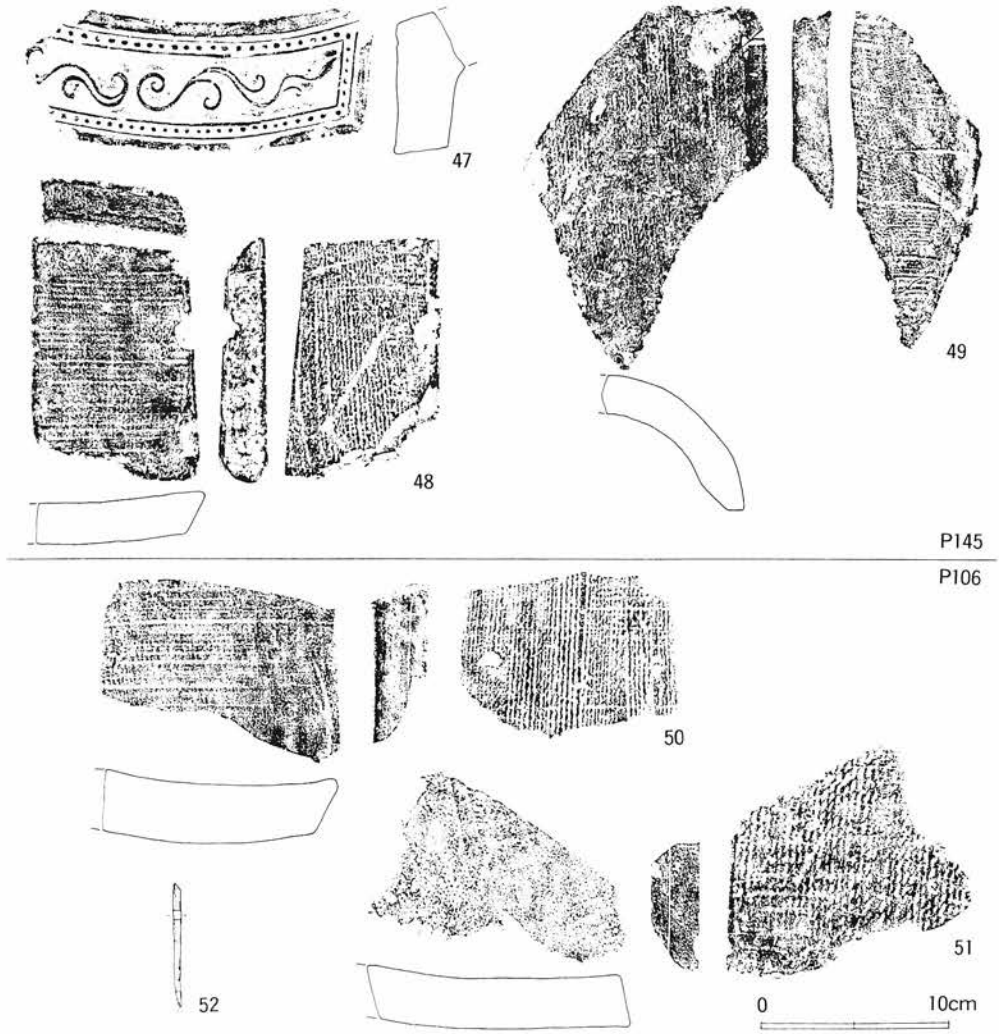


図26　3b面P106・145出土遺物

図26－47は均正唐草文の軒平瓦。中心に花弁がなく、唐草の周囲に二重の界線で囲まれた珠文帯が巡っ

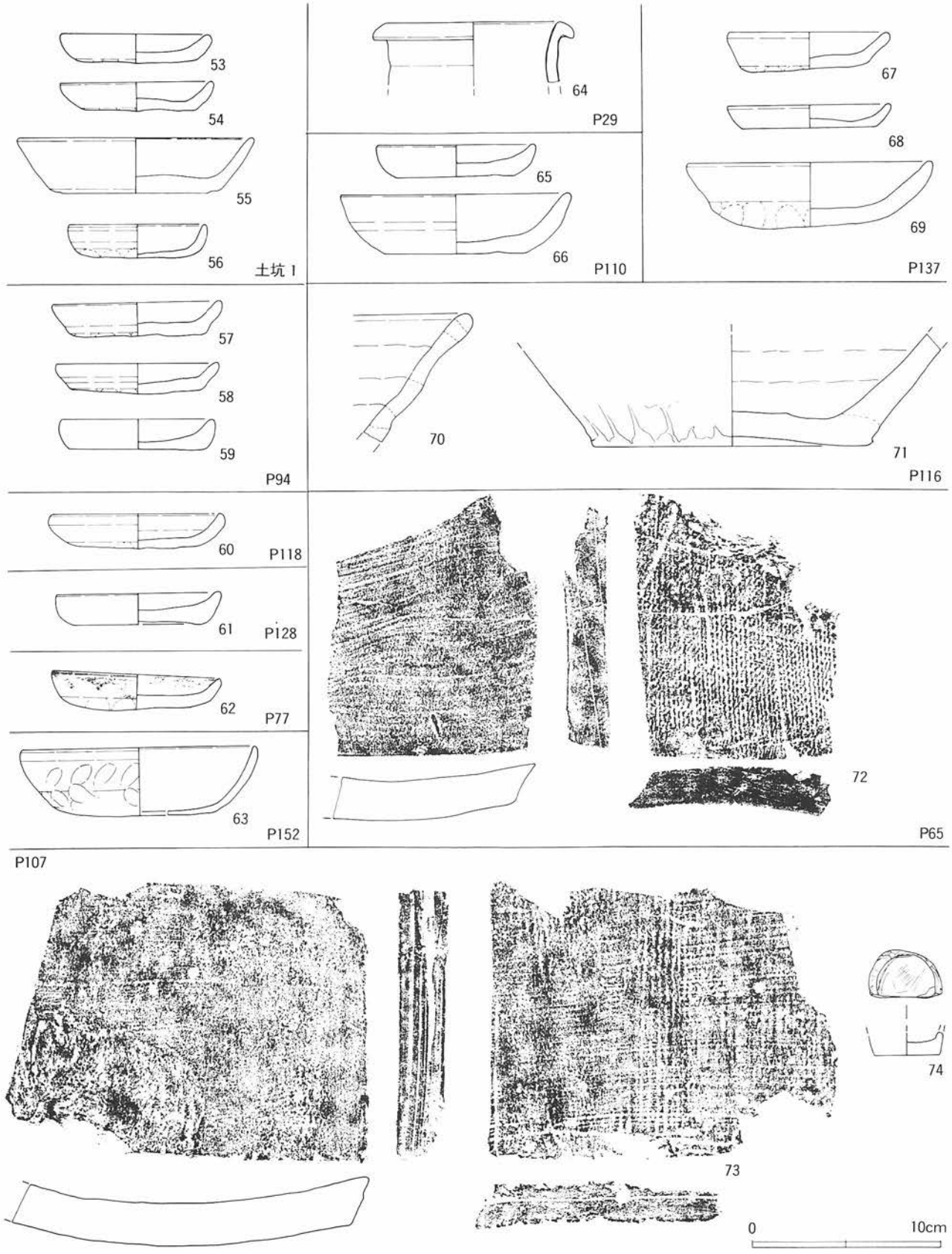


図27　3b面土坑・柱穴出土遺物

ている。瓦当の文様は調査地点北東の永福寺から出土しているもの（YNⅠ－04）と同笵である(註)。49は丸瓦で筒部凸面に縄の叩き目を有する。48・50・51は平瓦でいずれも凸面に縄の叩き目を有する。52は鉄製の釘。

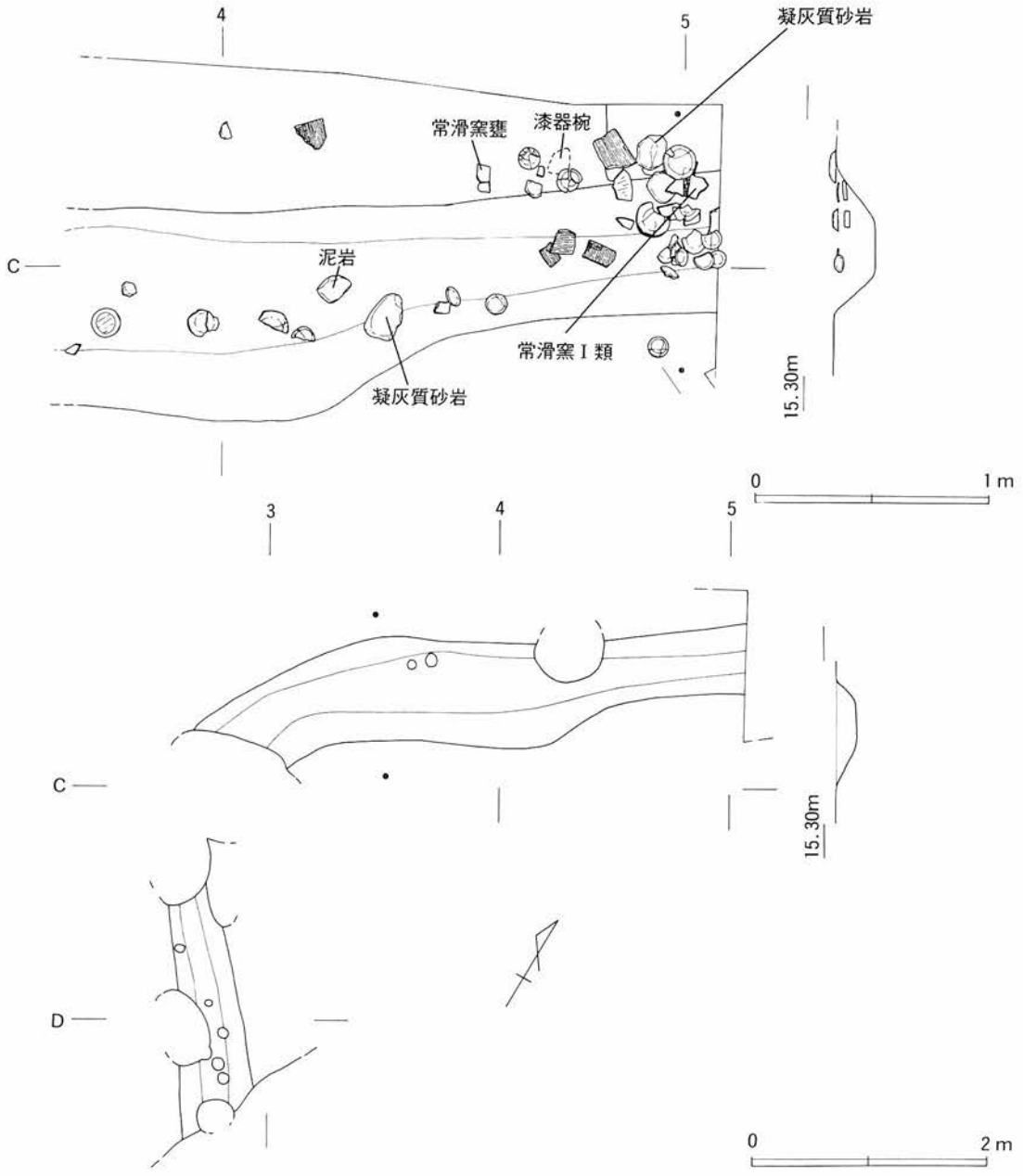


図28　3b面溝

註

福田誠『永福寺跡　国指定史跡永福寺跡環境整備事業に発掘調査報告書－平成８年度－（第２分冊）』　鎌倉市教育委員会　1997年

土坑２～６（図25）

３－Ｃグリッドに位置する。図のように切り合うが、遺構プランが不明瞭だったため、一括に堀り上げた。遺物は土坑５・６からかわらけ29点（手づくね３、ロクロ18、成形不明８）、常滑窯製品６点（甕２、鉢４）、白かわらけ５点が出土しているが、いずれも小破片のため図示しえるものはない。

その他の遺構出土遺物（図27）

53～55・57～62・65～69はかわらけで、53・54・57・58・60・62・67・69は手づくね成形、55・59・61・65・66・68はロクロ成形。56・63は手づくね成形の白かわらけ。64は白磁の四耳壺の口縁部片。70

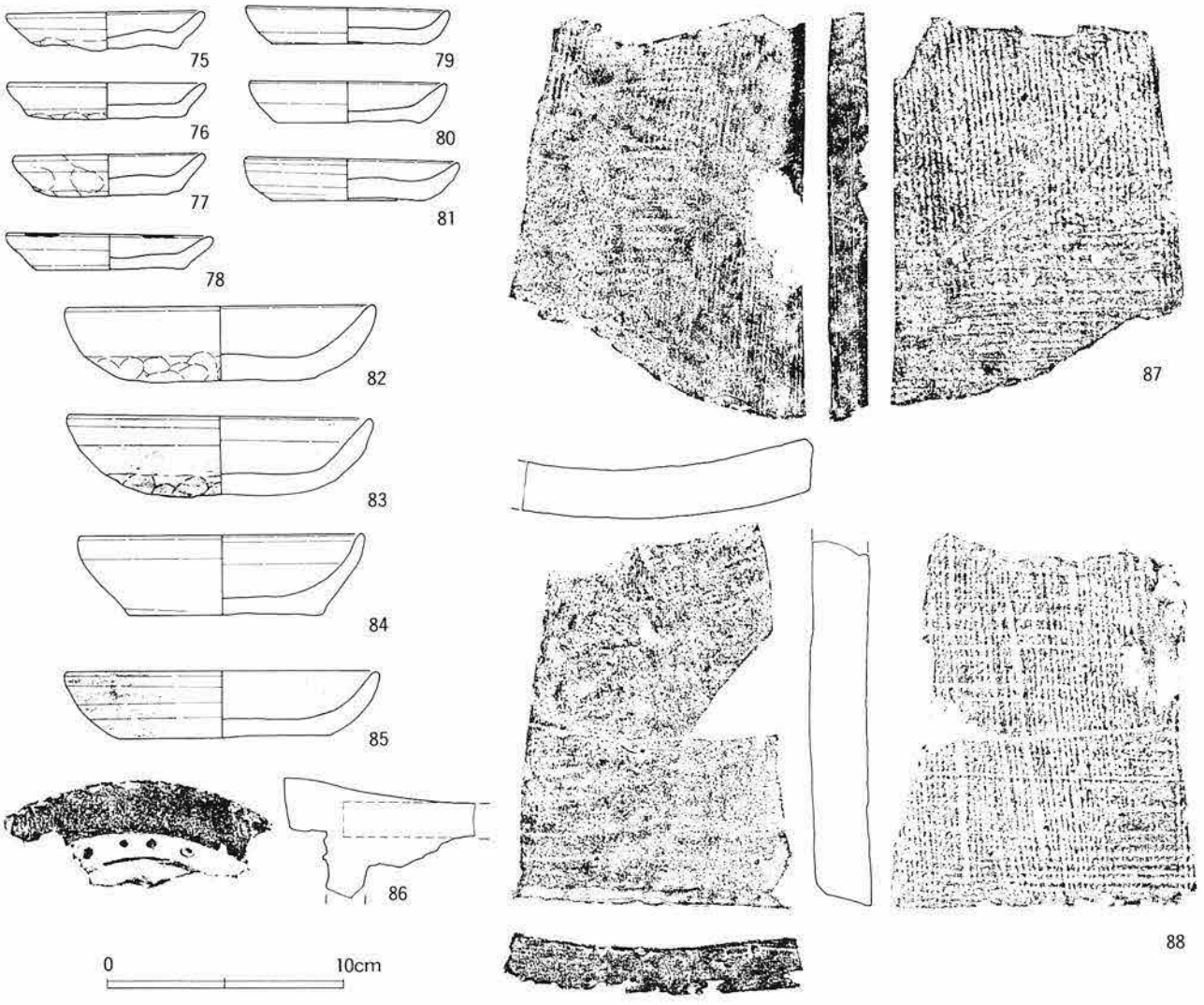


図29　3b面溝出土遺物

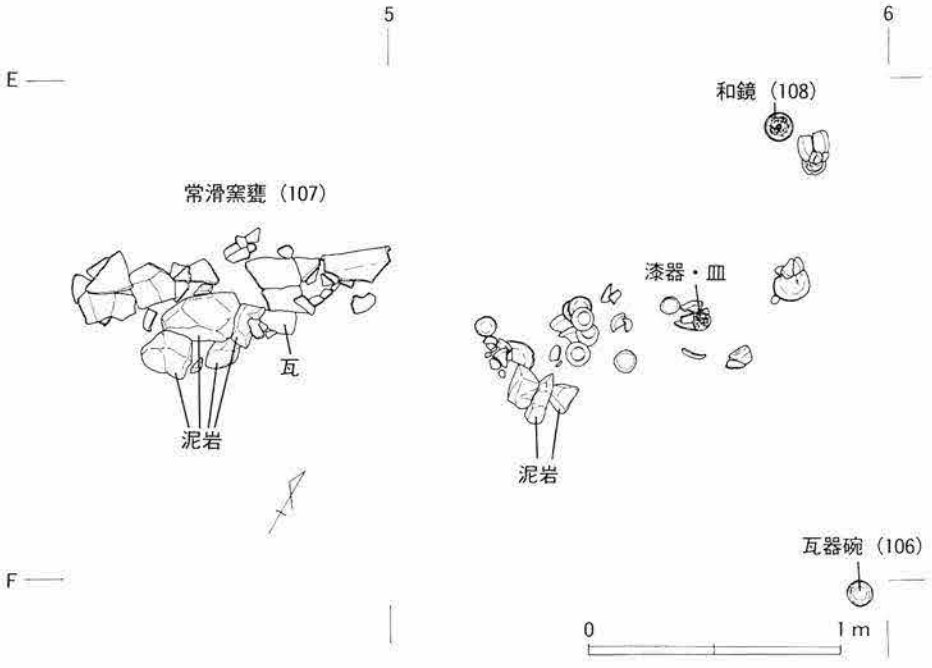


図30　3b面上炭層中一括廃棄

は常滑窯Ⅰ類鉢の口縁部片。71は常滑窯甕の底部。72・73は凸面に縄の叩き目を有する平瓦である。74は滑石製品で鍋のミニチュアと考えられるが不明である。53～56は土坑1、57～59はP94、60はP118、61はP128、62はP77、63はP152、64はP29，65・66はP110、67～69はP137、70・71はP116、72はP65、73・74はP107から出土している。

溝（図28）

Ⅰ区北に位置する。5－Bグリッドから西へ伸び、3－Bグリッドで南に屈曲する。Eライン以南は溝の続きは確認できなかった。上幅44～88cm、下幅15～52cm、深さ18cm前後である。遺物は3ライン以東から多く出土した。内訳はかわらけ170点（手づくね59、ロクロ80、成形不明31）、渥美窯甕5点、常滑窯製品11点（甕8、鉢3）、白かわらけ2点、瓦12点（軒丸瓦1、丸1、平6）、銅銭1点とアカニシ（貝）である。75～85はかわらけで、75～78・82・83は手づくね成形、79～81・84・85はロクロ成形である。小型の手づくね成形（75～78）はすべて平底状である。86はで三巴文軒丸瓦の瓦当部。87・88は凸面に縄の叩き目を有する平瓦である。

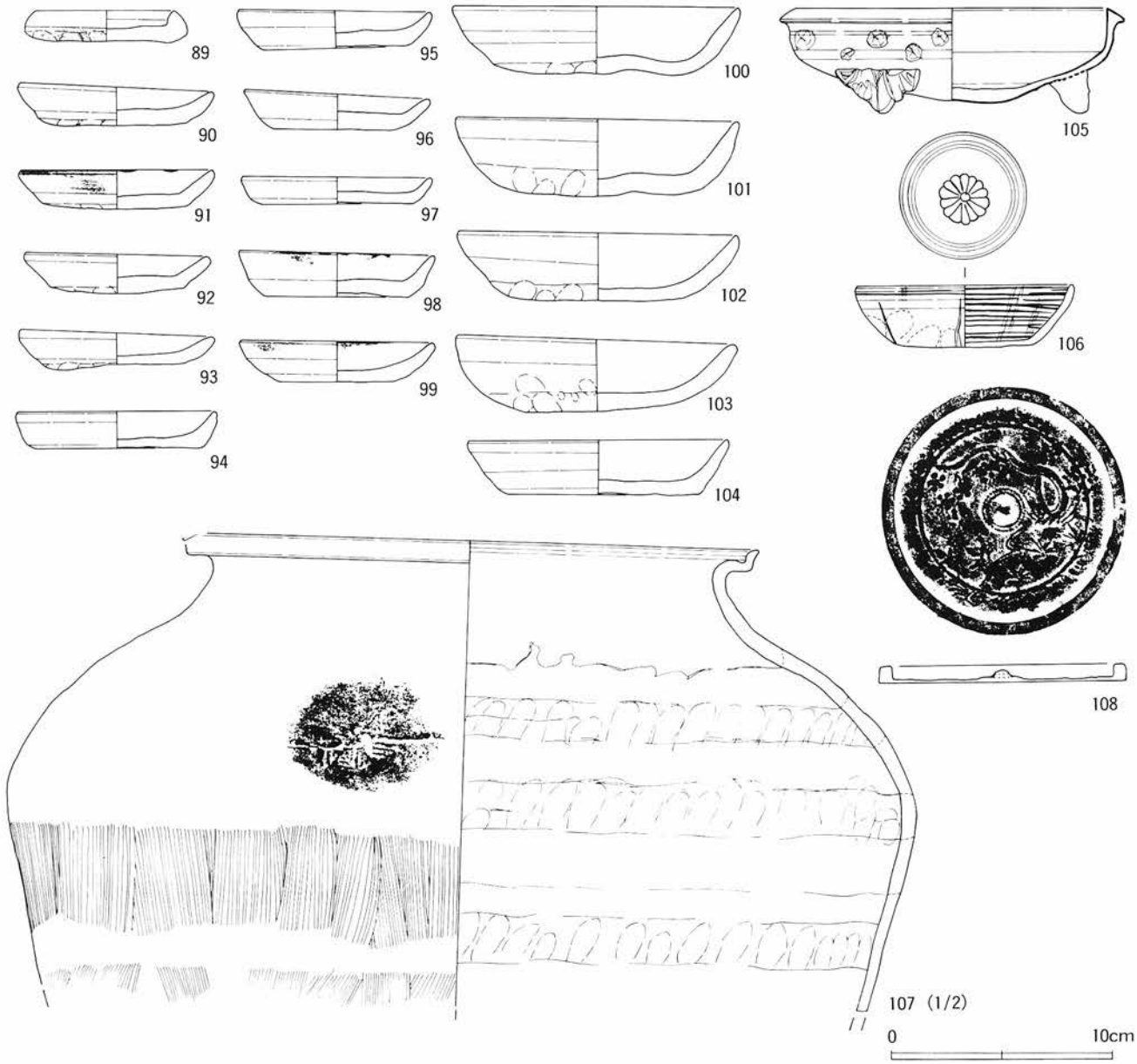


図31　3b面上一括廃棄出土遺物

一括廃棄遺構（図30）

E－4・5グリッドに明確な掘り込みを持たず、面上に広がる。遺物の密度は薄いが「遺物一括廃棄」として取り扱う。東西3m、南北2mを数える。西方は常滑窯の甕の胴部上半が、内面を上にむけて潰れており、そのそばには泥岩塊　が集中していた。東方にはかわらけが散在し、二枚重ねの漆器皿、完形の瓦器碗、鏡が点在する。出土遺物の内訳はかわらけ117点（手づくね48、ロクロ40、不明29）、白磁1点、常滑窯甕6点、白かわらけ2点、瓦器1点、瓦5点（丸瓦1、平瓦4）、和鏡1点である。

図31－89～104はかわらけで、89～93・100～103は手づくね成形（89は内折れ）、94～99・104はロクロ成形。小型のロクロ成形は器高が低く、口径と底径の差があまりないものがほとんどであるが、99のような底径が口径に比べて短いものも2、3点ある。105は白磁の水盤もしくは香炉である。釉は黄味をおび器肉は薄い。体部外面に珠文が2段にわたって付き、底部脇に獣脚が3つ付くと思われる。106

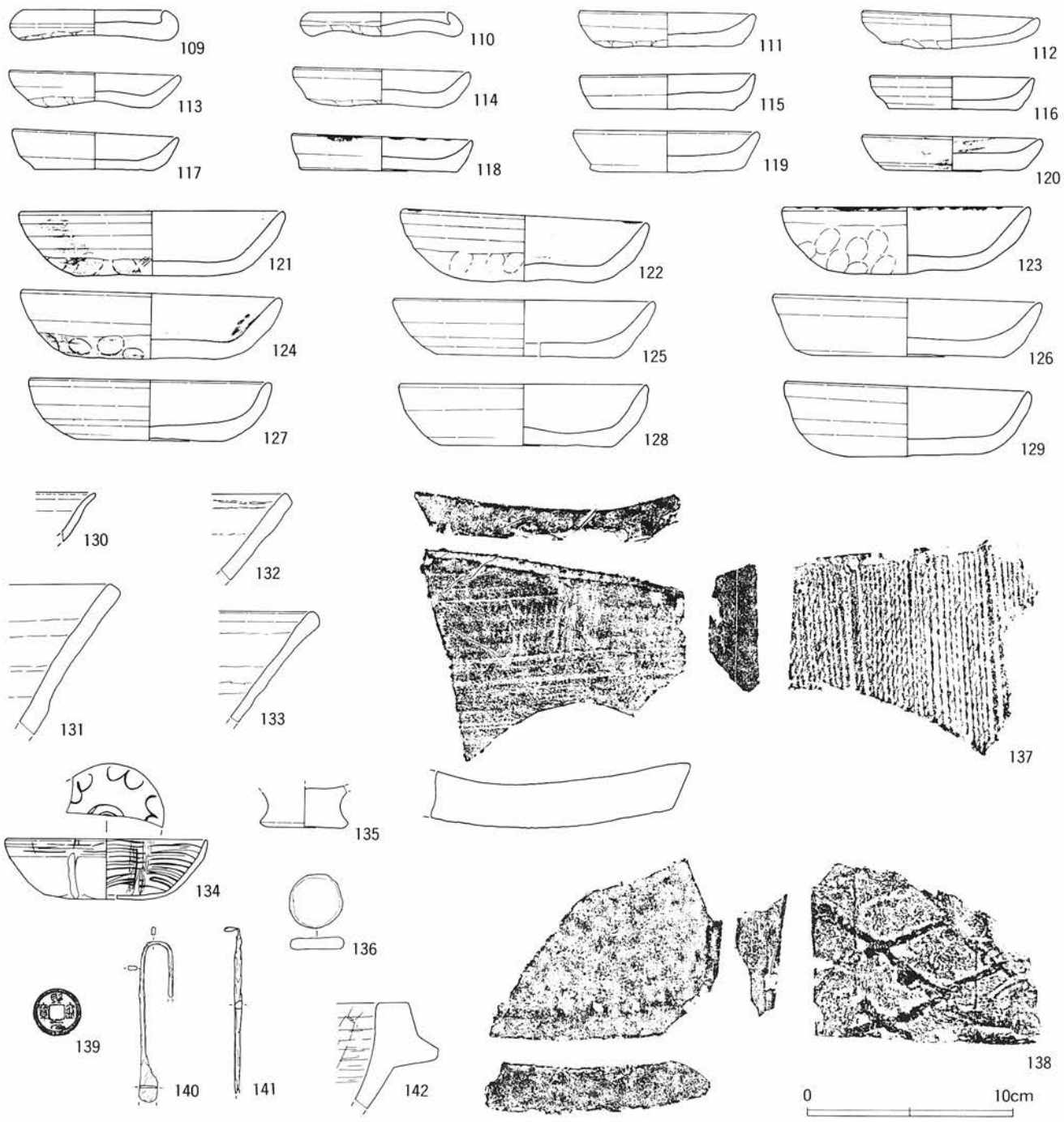


図32　3b面上出土遺物

は完形の瓦器埦である。内底中央には菊花（14弁）の暗文が施されている。107は胴部上半分（40%）が残る常滑窯甕である。108は鏡で背面を上に向けた状況で出土し、残存状況は良好であった。2a面下を掘り下げた時、出土したものであるが、遺構内にあったものかは不明である。背面の文様は梅樹と二羽の雀、洲浜、草である。

3b面上出土遺物(図32)

109から129はかわらけで、109～114・121～124は手づくね成形（109・110は内折れ）、115～120・125～129はロクロ成形である。130は白磁の口兀皿。131～133は常滑窯II類鉢の口縁部片。134は瓦器碗で内底面に連結状の暗文を配している。135はかわらけ質製品の底部で器種は不明。136は円盤状土製品でロクロ成形のかわらけの底部を転用している。137・138は平瓦で137は縄、138は斜格子の叩き目を凸面に

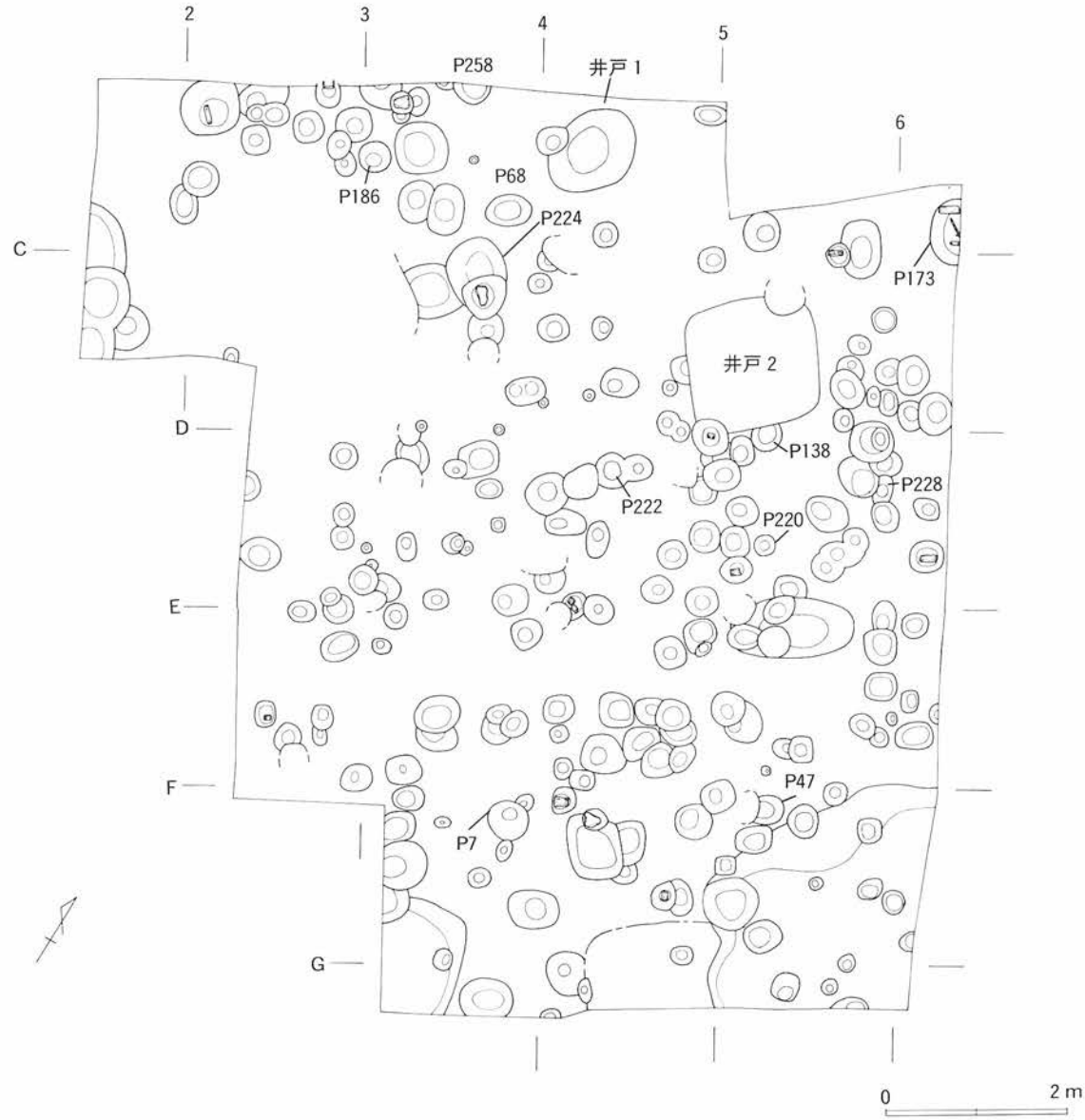


図33　4面遺構全図

有する。139は銅銭（熙寧元寶）。140は鉄製の鋏。141は鉄製の釘。142は滑石製の鍋である。

5．4面（図33）

3b面から20cm掘り下げると中世基盤層となる。北西から南東にかけて傾斜しており、北西あたり（B・C－1～4グリッド）の海抜は15.1m、南東隅あたり（F・G－5・6グリッド）の海抜は14.7mとなる。南東隅の部分からは4～5cm大の玉石が30個強出土した。池と考えられなくもないが調査区が狭く、不明と言わざるを得ない。

遺構は掘立柱建物2棟、柱穴列4列、柱穴約180口、井戸2基、土坑8基が発見されている。

建物1（図34）

掘立柱建物である。I区中央（D・F－2～5グリッド）に位置する。確認規模は東西3間、南北2間で、柱間は芯々距離で200cm。南北軸方位はN－30°－W。遺物はP224からかわらけ6点（手づくね

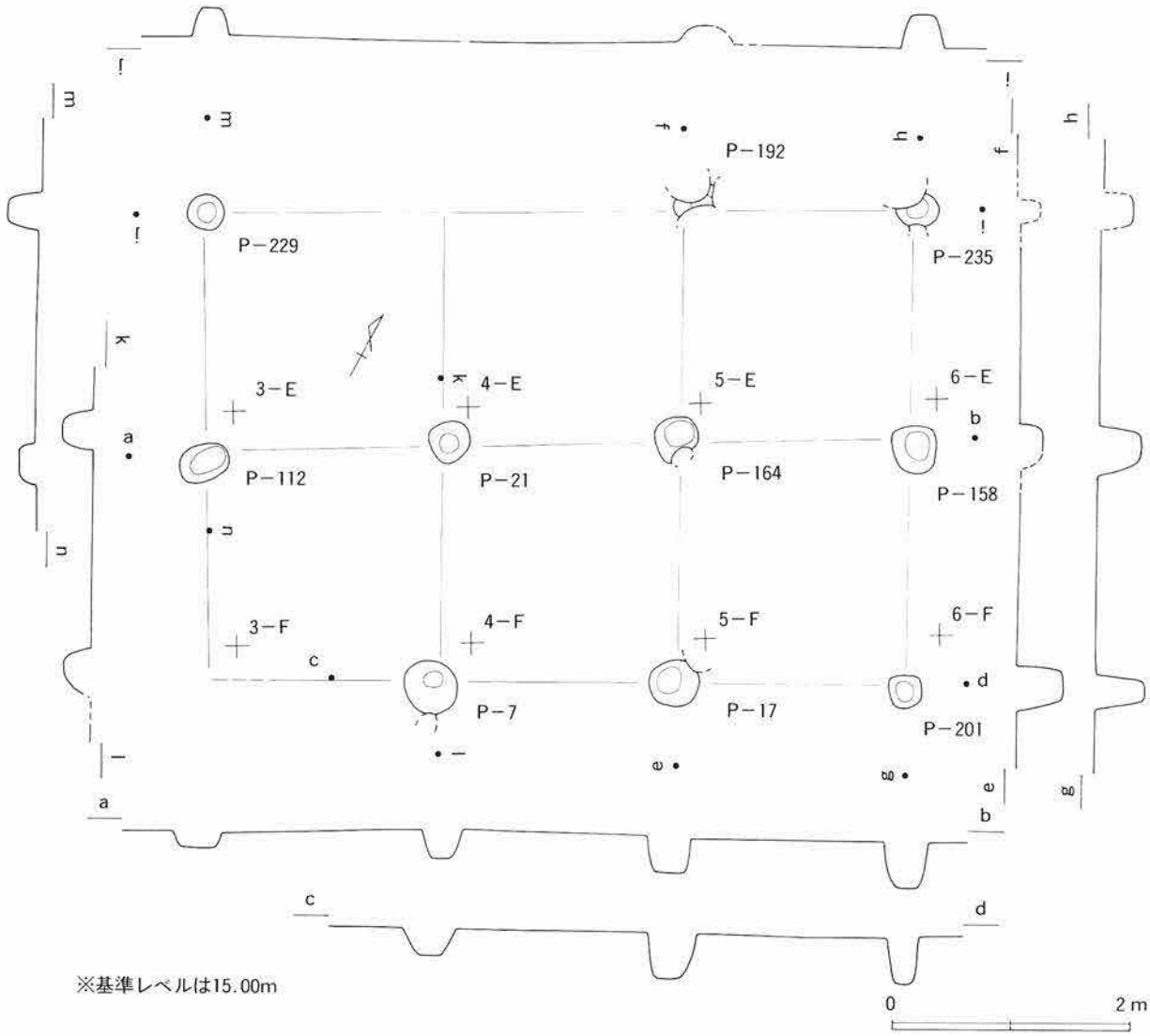


図34　4面建物1

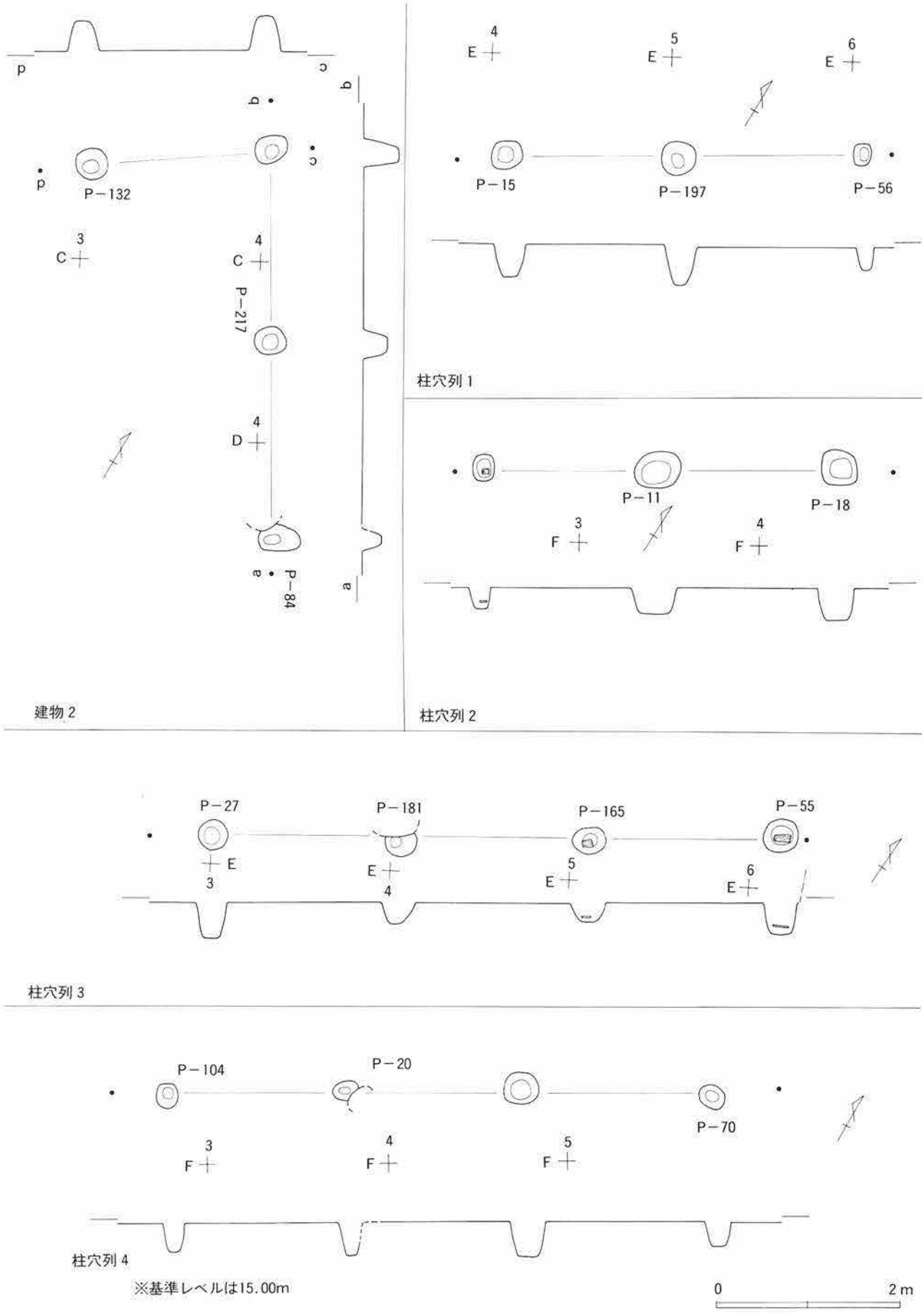


図35　4 面建物 2・柱穴列

1、ロクロ2、成形不明3)、青磁1点、白かわらけ2点、瓦器椀1点が、P21からかわらけ9点(手づくね3、ロクロ2、成形不明4)が、P7からはかわらけ(ロクロ)3点が、P17からはかわらけ3点(手づくね2、成形不明1)が出土した。

建物2(図35)

掘立柱建物である。I区北西(B・D−2・3グリッド)にに位置する。確認規模は東西1間、南北2間で、柱間は芯々距離で200〜210cmである。南北軸方位はN−34°−W。遺物はP217からかわらけ2点(ロクロ1、成形不明1)、白かわらけ1点が出土した。いずれも小破片のため図示しえなかった。

柱穴列1(図35)

Eライン南に位置する。建物の一部とも考えられるが柱穴列とした。確認規模は東西2間で、柱間は芯々距離で200cmである。南北軸方位はN−60°−W。遺物はP15からかわらけ(手づくね)1点、常滑窯甕1点が、P97からかわらけ2点(ロクロ1、成形不明1)が出土した。いずれも小破片のため図示しえなかった。

柱穴列2(図35)

Eライン南に位置する。これも建物の一部とも考えられるが柱穴列とした。確認規模は東西2間で、柱間は芯々距離で200cmである。南北軸方位はN−58°−W。遺物はP18からかわらけ3点(ロクロ2、

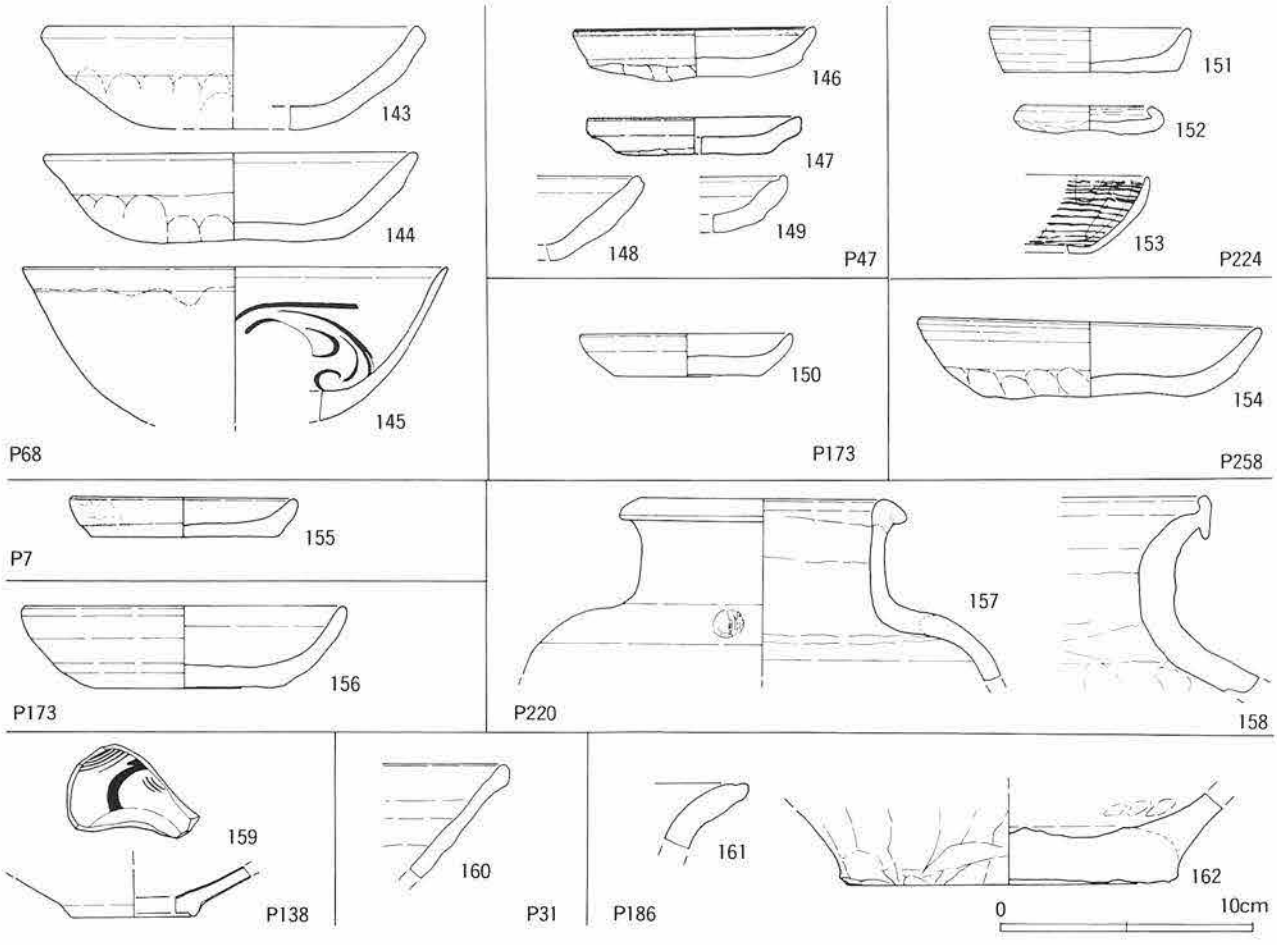


図36　4面柱穴出土遺物

成形不明１)、常滑窯甕２点が出土した。いずれも小破片のため図示しえなかった。

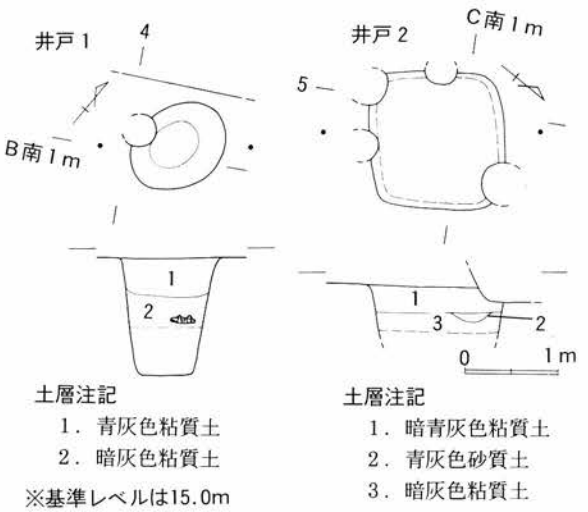


図37　４面井戸

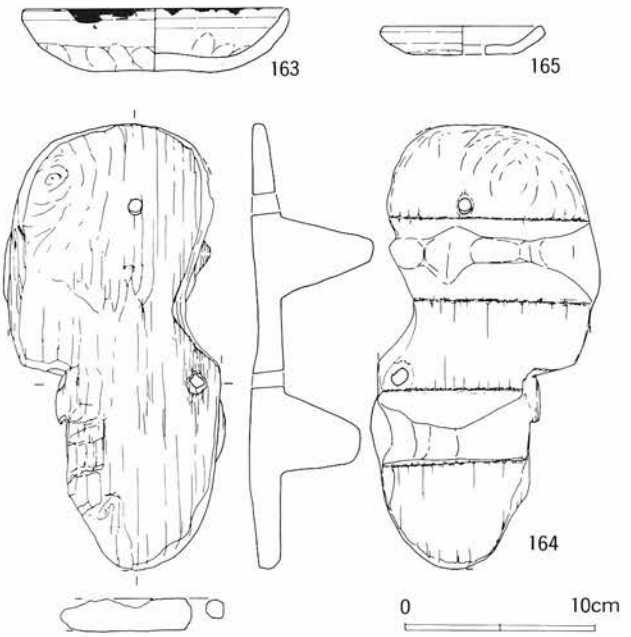


図38　４面井戸出土遺物

柱穴列３（図35）

Ｅライン上に位置する。これも建物の一部とも考えられるが柱穴列とした。確認規模は東西３間で、柱間は芯々距離で210～220cmである。南北軸方位はＮ－57°－Ｗ。遺物はP27からかわらけ２点（手づくね１、ロクロ１)、P181からスラグ３点が出土したが、いずれも小破片のため図示しえなかった。

柱穴列４（図35）

Ｅライン南に位置する。これも建物の一部とも考えられるが柱穴列とした。確認規模は東西３間で、柱間は芯々距離で220cmである。南北軸方位はＮ－62°－Ｗ。遺物はP104からかわらけ３点（ロクロ１、成形不明２)、P100からかわらけ４点（手づくね３、ロクロ１)、丸瓦１点が出土した。いずれも小破片のため図示しえなかった。

柱穴出土遺物（図36）

143・144・146～152・154～156はかわらけで、143・144・146～149・154は手づくね成形、150・151・155・156はロクロ成形である。145は青磁の劃花文碗で、内面見込みに蓮華文が配されている。152は手づくね成形の白かわらけ。153は瓦器埦。157は常滑窯の壺の胴部上半で二次焼成を受けている。158は常滑窯の甕の口縁部。159は青白磁の碗の底部片。160は常滑窯Ｉ類の鉢の口縁部。161・162は渥美窯の甕で、

161が口縁部、162が底部である。

井戸１（図37）

北壁際（Ｂ－４グリッド）に位置する。平面形は楕円を呈する。長軸110cm、短軸86cm、深さ124cm。井戸としては小規模であるため、別性格のものとも考えられるが、ここでは井戸とした。遺物はかわらけ３点（手づくね２、ロクロ１）、渥美窯甕２点、木製品６点（下駄１、用途不明５）と壁土１点が出土している。

図38－163は手づくね成形のかわらけで、灯明皿として使われたらしく、口唇にタールが付着している。164は連歯式の下駄である。

井戸２（図37）

５－Ｃグリッドに位置する。平面形は方形を呈する。一辺140cmを数える。深さは未完掘のため不明。井戸２を切る柱穴の掘り方から側板らしき部材が確認できた。南北主軸方位はＮ－40°－Ｗ。
遺物はかわらけ８点（手づくね３、ロクロ２、成形不明３）、常滑窯甕３点が出土している。図38－165は手づくね成形のかわらけで、口唇の面取りがなされている。

遺物一括廃棄（図39）

Ｅ・Ｆ－６グリッドに位置する。明確な掘り込みを持たず、面上に広がる。範囲は半径40cmとごく小規模であるが「遺物一括廃棄」として取り扱う。出土遺物の内訳はかわらけ７点（手づくね５ロクロ２）、漆器椀１点と木片、スラグ１点、玉石（４～５cm大）４点である。図40－166は手づくね成形のかわらけで底部は丸底状である。167は黒漆地の漆器椀である。残存状況が悪いが輪高台と思われる。

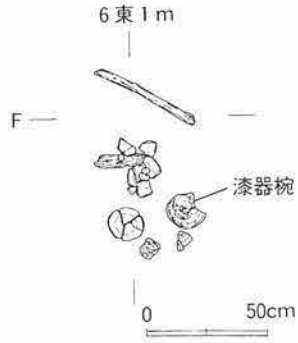


図39　４面上一括廃棄

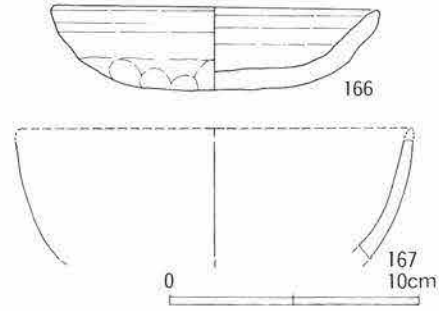


図40　４面上一括廃棄出土遺物

４面上出土遺物（図41）

出土遺物の内訳はかわらけ468点（手づくね成形96、ロクロ188、成形不明184）、舶載陶磁器19点（青磁６、白磁９、青白磁１、緑釉盤２、褐釉１）、国産陶磁器30点（瀬戸窯５、渥美窯６、常滑窯19）、土器・土製品16点（白かわらけ14、瓦器埦２）、瓦10点（丸瓦１、平瓦９）、金属製品２点、石製品（滑石製鍋）１点、骨製品１点と、その他に貝（アカニシ）１点、獣骨１点、玉石28点である。

168～176はかわらけで、168～169・173～175は手づくね成形、170～172・176はロクロ成形である。手づくね成形は器肉厚く、外面の指頭調整部と横ナデ調整との間の段が顕著なもの（168・169・173・174）が主流である。外面の指頭調整部と横ナデ調整との間の段が無く、口縁端部が尖るもの（175）も若干量ある。177は手づくね成形の白かわらけで底部中央を穿孔している。178～180は白磁である。178は碗の口縁部片で、口縁部を外反させ端部を水平にしている。179は口兀皿の口縁部片。180は皿で内底見込みに草花文が彫られている。181は瀬戸窯の入れ子の口縁部片で片口となっている。182は瀬戸窯の陶丸。183は常滑窯Ⅰ類鉢口縁部片。184は常滑窯Ⅱ類鉢の口縁部片で、口縁端部が少し外反する。185

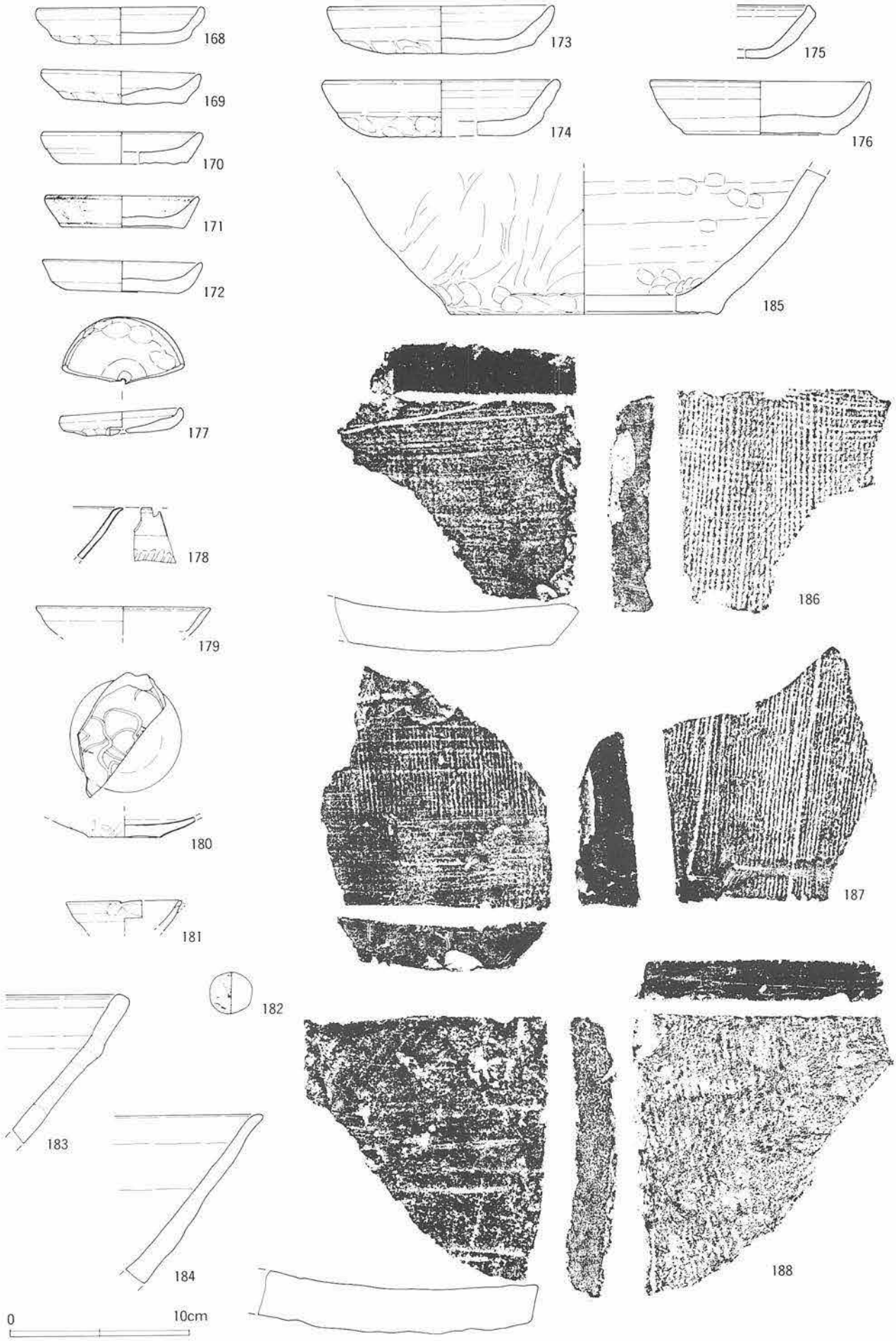

168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
0
10cm

図41　4面上出土遺物

は常滑窯甕の底部。186～188は平瓦。186・187は凸面縄の叩き目を有する。188は東海系で色調は灰褐色で端面に自然釉が掛かる。凸面は横方向の糸切り痕が認められる。

6．中世以前（図42）

中世基盤層上面までの調査であったが、この面で中世以前と考えられる焼土３カ所（Ａ～Ｃ）と、水磨した泥岩と粗砂を覆土とする遺構？の範囲を確認した。

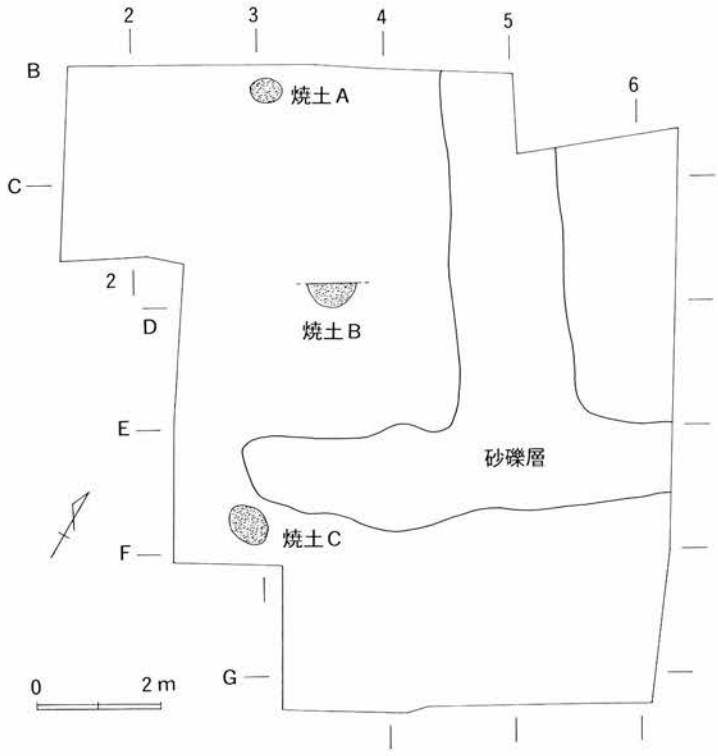


図42　Ｉ区中世以前遺構全図

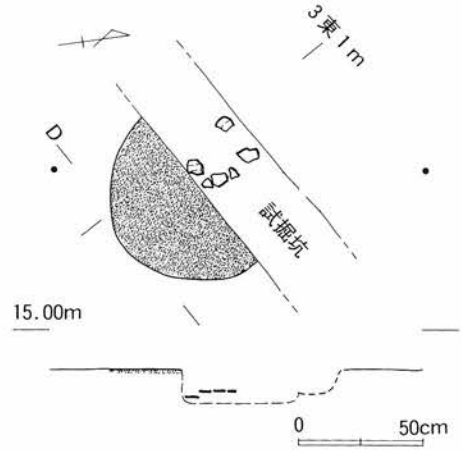


図43　焼土Ｂ土師器出土状況

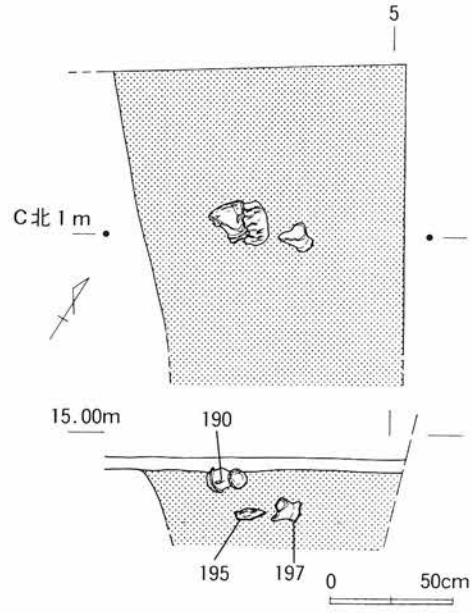


図44　砂礫層土器出土状況

焼土

範囲は焼土Ａが径50cm、Ｂが径80cm、Ｃが径60cmである。焼土Ｂ（図43）からは奈良・平安時代（８世紀代）の土師器の破片が11点出土した。内訳は坏２点、鉢１点、甕８点である。図45－217・218は坏の口縁部片で217は相模型である。219は鉢の口縁部片で内面ナデ調整している。焼土Ａ・Ｃから土器の出土はなかったが同時期のものと考えられる。

これらとは別にＩ区北西の中世基盤層（黒褐色土）中から８世紀代の土師器133点、須恵器23点が出土している。200～205は須恵器。200～202は坏蓋。203は坏の底部片。204は甕の胴部片。205は長頸瓶の口縁部片で暗灰緑色の釉が掛かる。206～216は土師器。206～210は甕の口縁部片。211～213は甕の底部片で212の外底面には木葉痕がある。214～216は坏の口縁部片。216は相模型で外底ヘラケズリ。これらの状況からＩ区直下もしくは近辺に住居址の存在が推測されるが、掘削深度規制によってその確認はできなかった。

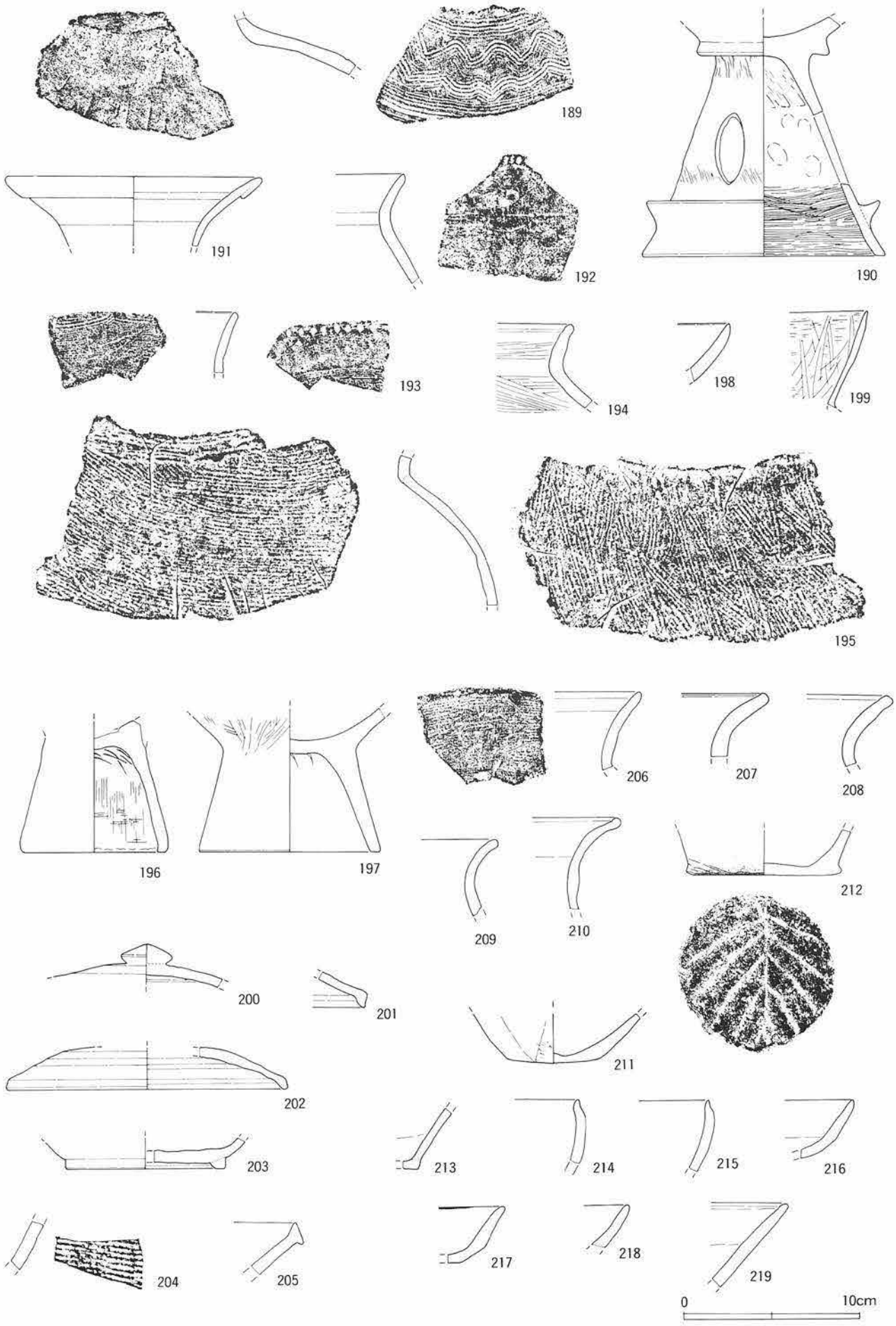

189
190
191
192
193
194
198
199
195
196
197
206
207
208
209
210
212
200
201
211
202
203
213
214
215
216
204
205
217
218
219
0
10cm

図45　中世以前遺物

弥生時代後後期～古墳時代前期（？）の遺構

平面形は図42のとおりT字状を呈する（Eラインを境にして北と南で覆土の差があるようにもみえたが、はっきり分けることができなかった）。水磨した泥岩と粗砂を覆土とする。これも掘削深度規制の関係上、範囲確認のみとなった。中世4面精査時、範囲内の4－Bグリッドで弥生時代後期後半の高坏の脚部（図45－190）を発見した。この土器の下を少し掘り下げると、古墳時代前期土師器台付甕2点（脚台部・図45－197、頸部から胴部中位にかけての破片・図45－195）が出土した（図44）。このほかに範囲内を掘り込む中世遺構を掘り上げ時に、弥生時代後期後半の土器1片と古墳時代前期の土師器34片が出土した。弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての土器が入り交じり、本遺構の性格、埋没等は不明と言わざるを得ない。

図45－189・190は弥生時代後期後半の土器。189は壺の頸部片。外面に櫛描の沈線文が配される。搬入品で西遠江型山中式である。190は高坏の脚部。裾部に鍔が付き、楕円の透かし穴が開く。裾部下半内面には横位のハケ調整が残る。胎土は在地産の土であるが、器型から西遠江の伊場式の系譜を引くものである。

191～199は古墳時代前期の土器。191は壺の口縁部片で口縁を折り返している。内面ナデ調整。192～

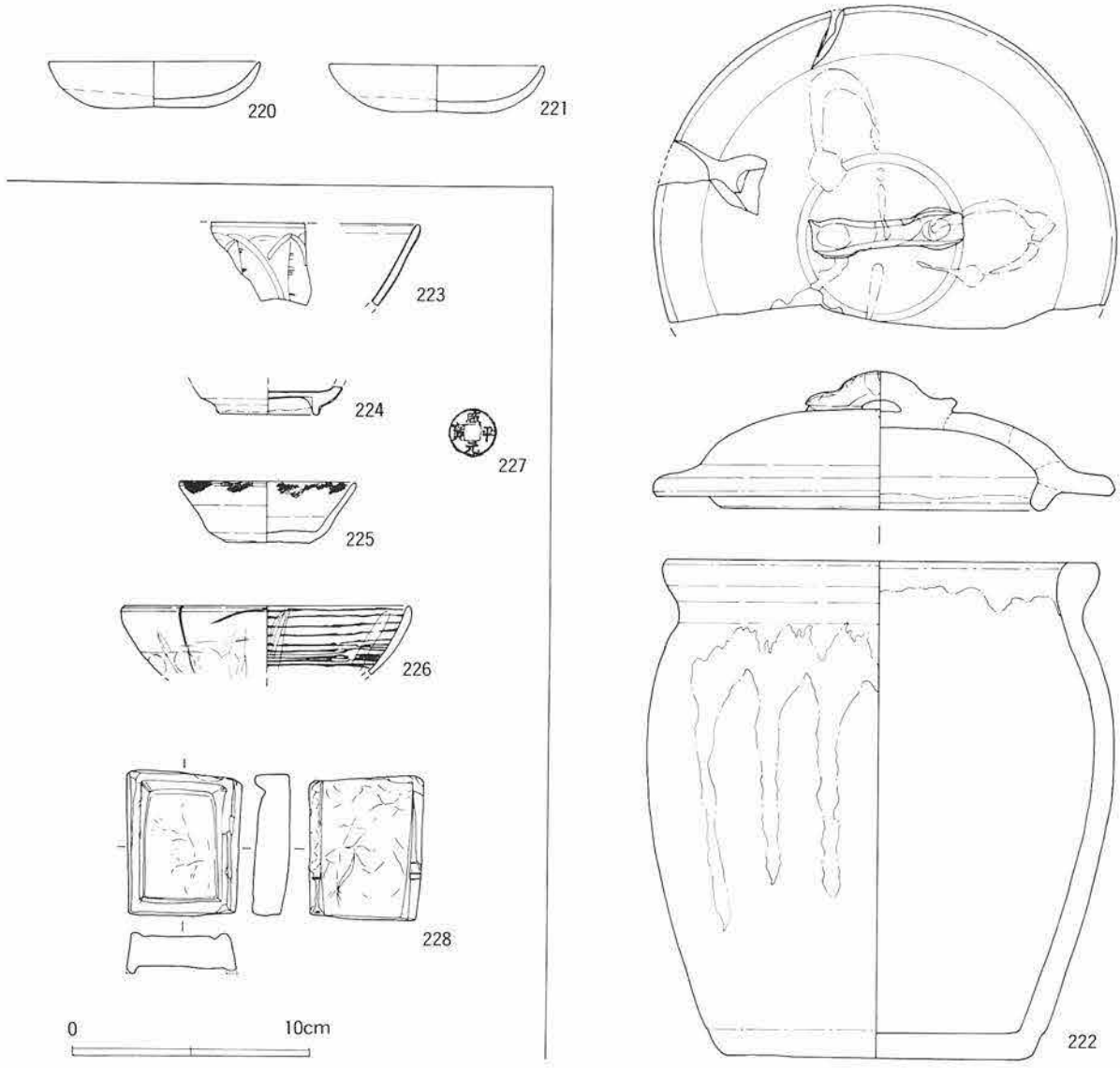
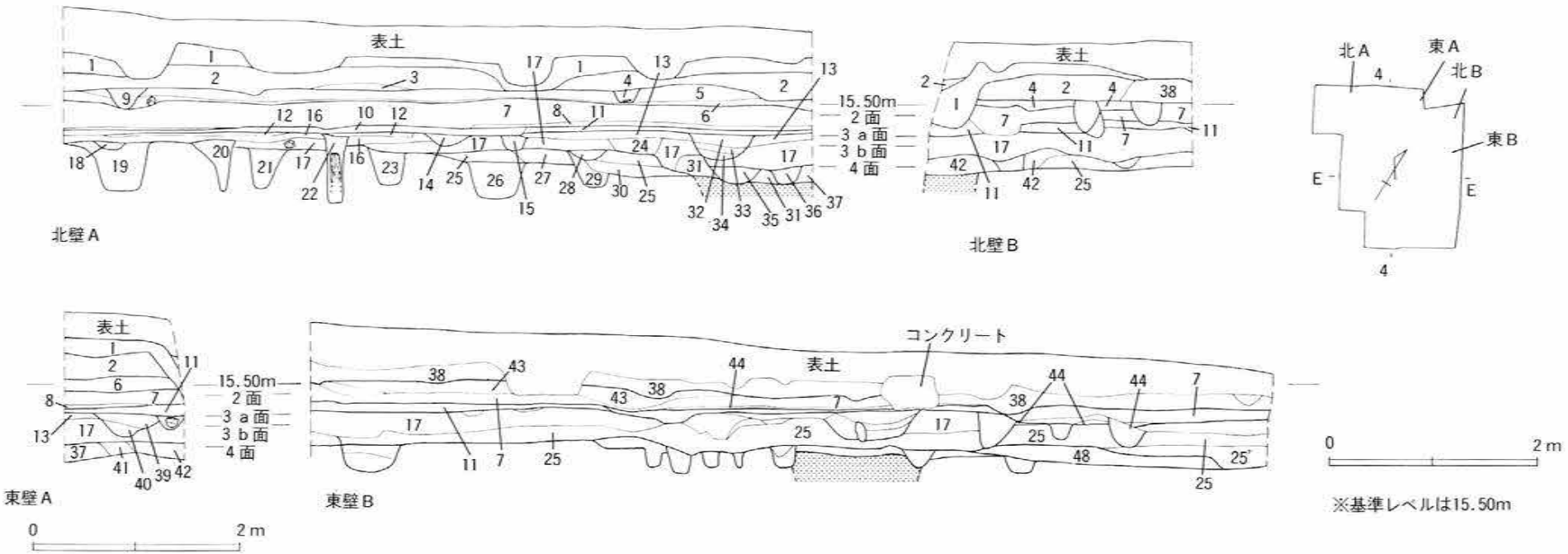


図46　表土出土遺物



土層注記

1. 明黄褐色粘質土　小泥岩を多く含む。しまり良い。
2. 黄褐色粘質土　小・大泥岩を多く含む。底層部に炭化物が集中する。
3. 黄褐色粘質土
4. 黄褐色粘質土　かわらけ片含む。
5. 泥岩地業層
6. 黄色粘質土
7. 泥岩地業層
8. 暗赤褐色土
9. 明褐色粘質土　泥岩含む。
10. 茶褐色弱粘質土　泥岩粒・炭化物・やまずなを含む。
11. 茶褐色粘質土
12. 茶褐色弱粘質土　11に比べ、多くの泥岩を含む。
13. 明褐色粘質土　土丹、かわらけ片含む。粘性強。
14. 暗褐色弱粘質土
15. 暗褐色弱粘質土
16. 明灰褐色砂質土　貝殻粒を多く含む。固くしまる。
17. 明灰褐色粘質土　泥岩、木片、炭化物含む。固くしまる。
18. 暗灰色弱粘質土　固くしまる。
19. 暗灰色粘質土
20. 暗灰色粘質土
21. 暗灰色粘質土
22. 明褐色粘質土
23. 明灰色弱粘質土
24. 暗茶褐色弱粘質土　17より土丹を多く含む。しまり良い。
25. 暗灰色弱粘質土　泥岩、炭化物、焼土粒を含む。固くしまる。
26. 暗灰色粘質土
27. 暗褐色弱粘質土　鉄分、焼土粒、泥岩を含む。固くしまる。
28. 茶褐色弱粘質土
29. 暗灰色粘質土
30. 暗灰色粘質土　粘性強。しまり弱い。泥岩、炭化物含む。
31. 暗青灰色弱粘質土　多量の泥岩・鉄分を含む。
32. 暗褐色粘質土
33. 茶褐色弱粘質土　} 3b面溝1履土
34. 明褐色弱粘質土
35. 暗灰色粘質土
36. 暗灰色粘質土
37. 暗灰色弱粘質土　泥岩粒含む。しまり良し。
38. 明黄褐色粘質土
39. 明褐色粘質土　} 3b面溝1履土
40. 暗褐色粘質土
41. 茶褐色粘質土　17と同質。
42. 暗茶褐色粘質土
43. 明黄褐色粘質土
44. 炭化層

図47　I区土層図

194は甕の口縁部片で192・193は口唇部にキザミがある。194は台付甕の頸部から胴部中位にかけての破片で、内外面ともにハケ調整されている。196・197は台付甕の脚台部。198は高坏の口縁部片。199は坩の口縁部片で内外面ともにヘラミガキ。

表土出土遺物（図46）

220～222は近現代の地鎮遺物である。グリッド５－Ｄから出土。表土掘り下げ時発見のため、遺構内に納められていたかどうかは確認できなかった。蓋をされた小甕の北西脇に陶器皿が２枚重なり、寄り掛かるように出土した（図版１－１）。小甕の頸部には銅製の針金が巻かれていたが腐食が進んでおり、当初の状況は保っていない。小甕内から埋納物は発見されなかった。出土レベルは小甕の底部で丁度１面上５cmである。

220・221は陶器の皿で内面と外面体部中位まで白色の釉が掛かる。222の小甕は内外面ともに鉄釉が掛けられている。

223は青磁蓮弁文碗の口縁部片。224は青磁の折腰鉢の底部片。225は瀬戸窯の入子で口唇部にタールが付着する。226は瓦器碗。227は銅銭（咸平元寶）で周縁部を加工している。228は硯で当初使用していたものを30％切除して裏面に再度、硯面を加工している。なお、再度作り出した硯面は未使用である。

第２節　II区（図48）

１．１面

地表面から北で20cm下、南で70cm下で中世遺物包含層を発見し、その下にＩ区２面同様の泥岩塊の地業面が広がる。海抜は北が14.8m、南が14.4m。Ｉ区２面が海抜15.5mであるから最大90cmの高低差があることとなる。II区の３分の１南は掘削深度を越えるため、未調査となった。遺構は柱穴１口のみで遺物の出土はない。

図50－234は１面直上から出土したかわらけである。

２．２面

１面を構成する泥岩地業層、その下の暗灰褐色土を剥がすと炭層が広がる（図48）。この炭層中に多くの遺物が含まれていた。。出土遺物の内訳はかわらけ1090点（手づくね54、ロクロ450、成形不明586）、青磁２点（蓮弁文碗１、不明１）、白磁（不明）２点、青白磁合子２点、黄釉盤１点、常滑窯製品９点（鉢２、甕７）、瓦器埦１点、白かわらけ29点、瓦５点（丸瓦１、平瓦４）、釘１点の計995点をである。かわらけの成形不明としたもののほとんどがロクロ成形と考えられるため、ロクロ成形のかわらけが圧倒的に占めるのがわかる。かわらけと常滑窯甕の口縁部の形態からＩ区３面と同時期である。

図50－235～242はかわらけで、235・236は手づくね成形、237～242はロクロ成形。ロクロ成形は口径と底径の数値が近く、器肉が厚めである。243は手づくね成形の白かわらけ。244は青磁蓮弁文碗の口縁部片。245は青白磁合子の蓋。246は黄釉盤の口縁部片。

炭層を剥がすと２面を構成する泥岩地業層が広がる。海抜は北が14.7m、南が14mでＩ区３（ｂ）面が海抜15.1mであるから最大高低差は110cmを数える。遺構は土坑と安山岩１個が発見された。

土坑

北壁際の２－Ｊグリッドに位置する。平面は楕円を呈すると思われ、東西210cmを数え、深さは掘削

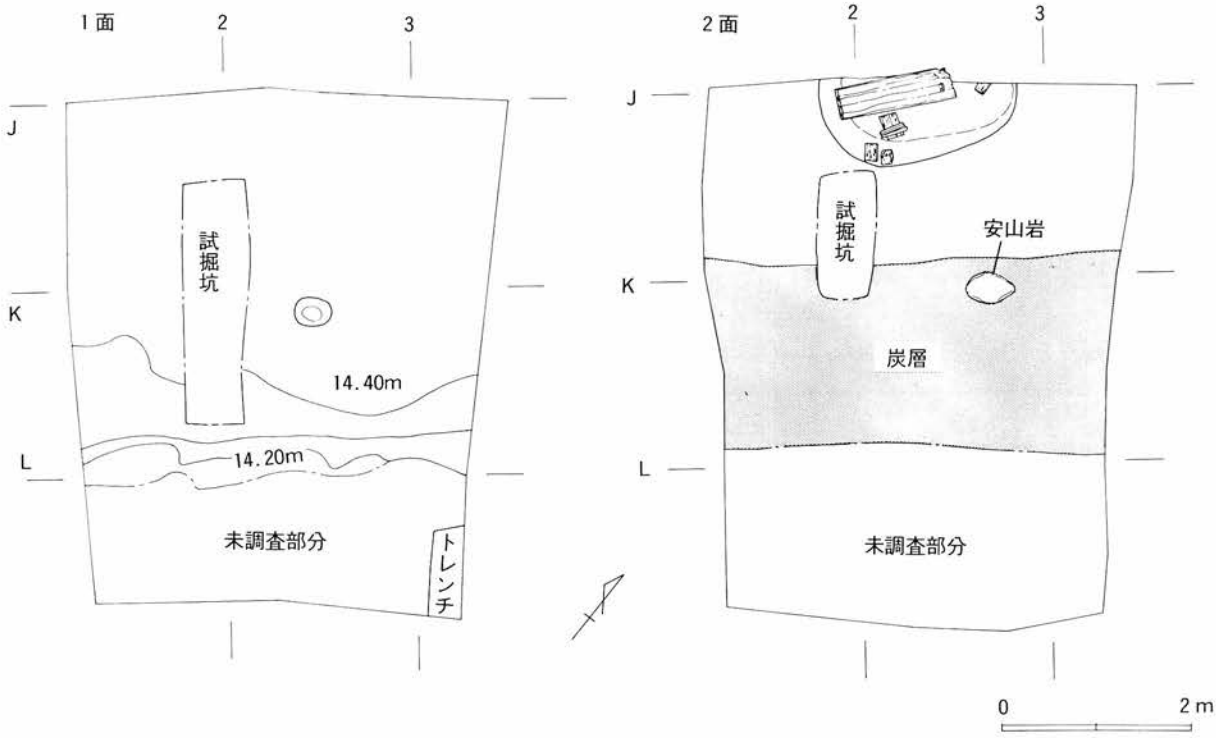
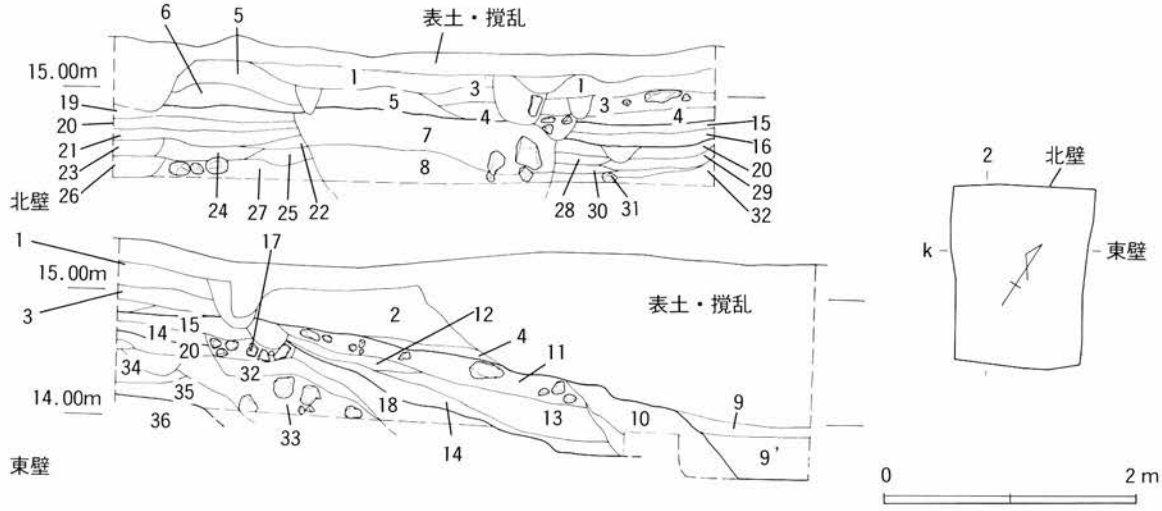


図48　II区遺構全図



土層注記

1．茶褐色土
2．黄褐色土
3．暗茶褐色土
4．黄茶褐色土
5．黄茶褐色土
6．明茶褐色土
7．明茶褐色土
8．暗青灰色土
9．茶褐色土（近世以降耕作土）
10．黄灰茶色土（近世以降？）
11．黄褐色土
12．明茶褐色土
13．暗灰褐色土
14．炭層（かわらけ多く含む）
15．明灰茶色土
16．泥岩地業層
17．暗茶褐色土
18．炭層
19．灰茶褐色土
20．泥岩地業層
21．暗黄褐色土
22．灰茶褐色土
23．茶褐色土
24．茶褐色土
25．暗青灰色土
26．明灰茶色土
27．黒褐色土
28．明灰褐色土
29．明茶褐色土
30．灰茶褐色土
31．暗灰褐色土
32．暗灰茶色土
33．黄褐色土
34．灰茶褐色土
35．黒褐色土
36．黒褐色土（中世基盤層）

図49　II区土層図

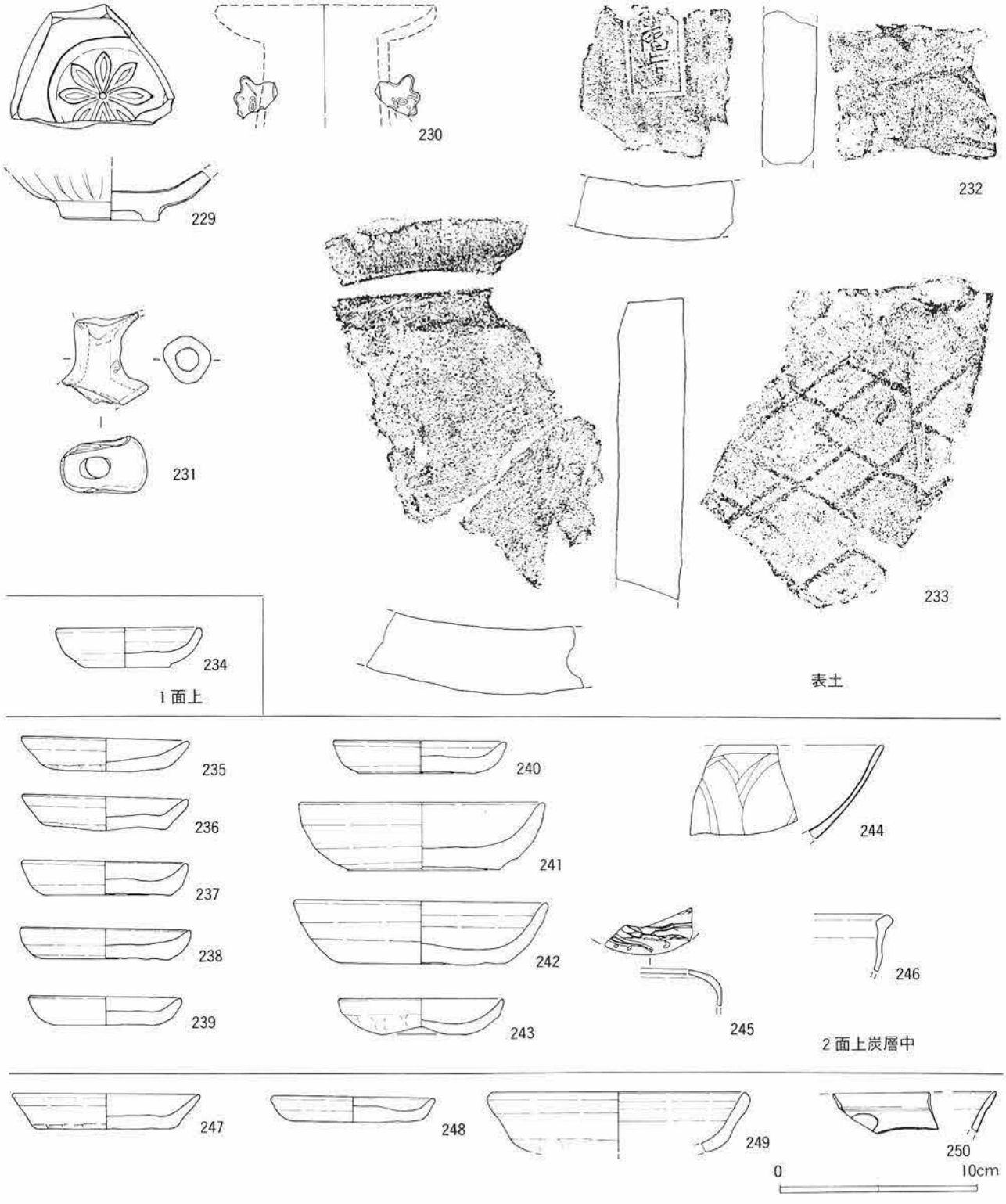

229
230
231
232
233
234
1面上
表土
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
2面上炭層中
247
248
249
250
0
10cm

図50　II区出土遺物

深度規制のため完掘していないので不明。土坑内から多くの木材が発見された。その中で使用用途不明の板が目を引く。長さ123cm，幅32～34cm，厚さ９cmを数える。板の端に８×４cmの長方形の穴（鼻刳）が貫通している。板の主軸方位はＮ－51°－Ｅ。板の使用用途が不明なので、遺構の性格は不明といわざるを得ない。

図50－247～250は２面調査終了後、Ⅱ区全体を掘削深度まで掘り下げた時出土したものである。247～249はかわらけで、247・249は手づくね成形、248はロクロ成形。250は青磁の劃花文碗の口縁部片である。

図50－229～233は表土出土遺物で、229は青磁蓮弁文碗の底部片。内底中央に蓮華文が配される。230は青磁花生の耳部で鯱の意匠である。231は用途不明の土製品で、棒のまわりに粘土を巻き付け、さらに両端に漏斗状の粘土を繋いである。胎土は在地産のものではなく、硬質である。232・233は凸面斜格子の叩き目を有する平瓦で、232の凹面には「永福寺」の押印がなされている。

第４章　まとめ

今回の調査では中世４面４時期と奈良・平安時代（８世紀代）の焼土、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構の発見という多大な成果をおさめた。この項ではまとめとして、遺構の年代等について古い順に述べることとする。

弥生時代後期～古墳時代前期の遺構

この遺構？の覆土と同内容の覆土をもつ遺構が調査地点300m西方の大倉幕府周辺遺跡群（鎌倉市遺跡台帳No.49）内二階堂字荏柄38番１地点（図１－６）で発見されている[註]。報告では弥生時代後期の自然流路とされ、土器の一括廃棄が一カ所発見されている。この遺構付近に弥生時代後期の住居址が発見されている。当調査地点も自然流路と考えられなくもないが、遺構を掘り上げていないこと等、性格については近辺の調査事例の増加を待ちたい。

奈良・平安時代（８世紀代）の焼土

第１節の６で述べたようにＩ区中世基盤層直下もしくは近辺に当該期の住居址が存在する割合は高いと思われる。図１－５地点では８世紀後半から10世紀後半にかけての住居址７軒、図１－６地点でも８世紀を中心とする住居址８軒が発見されており、当該期の集落が二階堂（二階堂川両岸）一帯に広がっている可能性がある。

中世Ⅰ期

Ⅰ区４面（中世基盤層上面）の時期である。出土遺物から12世紀末から13世紀前半と考えられる。遺構の南北主軸方位は調査地点南の二階堂大路を踏襲していると考えられる道とほぼ直行、もしくは平行関係にある。

中世Ⅱ期

Ⅰ区３面とⅡ区２面の時期である。出土遺物から13世紀半ばと考えられる。遺構面上の炭層はこの時

期の火災によるものと考えられる。『吾妻鏡』建長3年（1251）10月7日条に「（前略）薬師堂谷焼亡。延二階堂大路南。宇佐美判官荏柄家前到也。」と見えるが、考古資料との微細な一致は見出せない。遺構の南北主軸方位はⅠ期同様、調査地点南の二階堂大路を踏襲していると考えられる道とほぼ直行、もしくは平行関係にある。

中世Ⅲ期

Ⅰ区2面とⅡ区1面の時期である。年代を比定する積極的な資料は乏しいものの少ない出土遺物から13世紀後半から14世紀初頭と考えたい。遺構の南北主軸方位はⅠ・Ⅱ期同様、調査地点南の二階堂大路を踏襲していると考えられる道とほぼ直行、もしくは平行関係にある。

中世Ⅳ期

Ⅰ区1面とした時期である。生活面は削平されているものの溝と井戸が発見され、15世紀代の遺物が出土している。15世紀というと「鎌倉府」が調査地点東方の浄明寺地域に置かれた時期に相当する。遺構（溝）の南北主軸方位は、鎌倉時代の中世Ⅰ～Ⅲ期に比べて大幅にずれている。土地区画の方向性を示すと考えられる溝から察すると、鎌倉幕府滅亡後のいつかに土地利用形態は一変したようである。が、どれを基軸としたのかは不明と言わざるをえない。この大倉（二階堂）一帯では当該期の遺構が少なからず発見されているが、後世の削平等で鎌倉時代の遺構に比べて調査例が少ない。当該期の土地利用形態の解明は調査事例の増加を待ちたい。

註

馬淵和雄「4．大倉幕府周辺遺跡群の調査」『第2回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』鎌倉市考古学研究所 1992年

馬淵和雄「2．大倉幕府周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9（第2分冊）』鎌倉市教育委員会 1993年

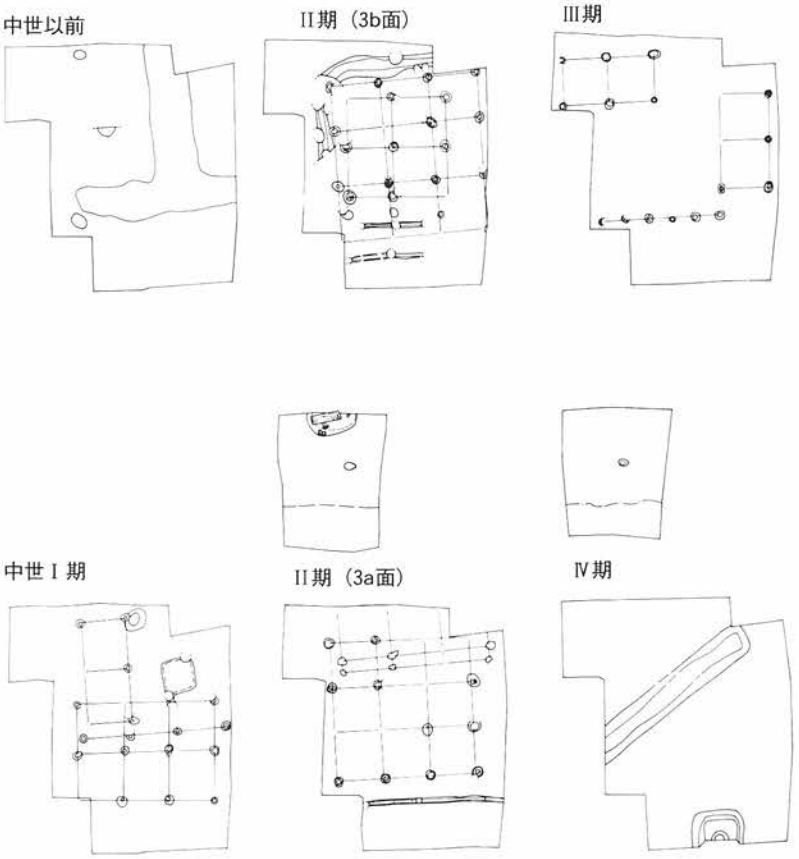


図51　遺構変遷図

遺物観察表（1）

図版番号	番号	種類	計測値【単位はｃｍ・（）は復元】	観察事項
図６	1	かわらけ	口径（8.0）底径（5.8）　器高1.8	ロクロ成形　胎土；橙色
	2	かわらけ	口径（7.8）底径（4.8）　器高1.8	ロクロ成形　胎土；淡褐色
	3	かわらけ	器高3.7	ロクロ成形　胎土；橙色
	4	瀬戸窯　入子	底径（5.0）	ロクロ成形　釉；灰緑色　胎土；淡黄褐色
図８	5	かわらけ	口径6.6　底径4.6　器高1.95	ロクロ成形　胎土；淡橙色
	6	かわらけ	口径7.4　底径3.7　器高2.4	ロクロ成形　胎土；淡橙色
	7	かわらけ	口径7.3　底径4.9　器高2.9	ロクロ成形　胎土；橙褐色
	8	かわらけ	口径6.6　底径3.4　器高2.35	ロクロ成形　胎土；淡橙色
	9	かわらけ	口径（7.0）底径4.0　器高2.0	ロクロ成形　胎土；橙色
	10	かわらけ	口径11.0　底径6.8　器高3.45	ロクロ成形　胎土；淡橙色
	11	かわらけ	口径11.2　底径5.9　器高3.65	ロクロ成形　胎土；橙色
	12	かわらけ	口径11.3　底径6.0　器高3.5	ロクロ成形　胎土；淡肌色
	13	かわらけ	口径（13.8）底径7.0　器高4.1	ロクロ成形　胎土；淡橙色
	14	かわらけ	口径13.3　底径7.3　器高4.1	ロクロ成形　胎土；橙色
	15	白かわらけ		ロクロ成形　胎土；白色
	16	瀬戸窯　平碗	口径（16.2）底径（4.4）器高6.2	胎土；淡黄褐色　釉；灰緑色
	17	瀬戸窯　盤		胎土；淡黄褐色　釉；灰緑色
	18	瀬戸窯　器種不明		胎土；淡黄褐色　釉；灰白色
図１４	19	かわらけ	口径（13.0）底径（7.2）器高3.4	ロクロ成形　胎土；茶褐色
	20	かわらけ	口径13.6　底径7.8　器高3.5	ロクロ成形　胎土；明茶褐色、砂粒多く含む
	21	砥石　中砥	残存長6.1　最大幅4.3　厚さ2.6	産地；伊予（愛媛県）　３面使用
	22	かわらけ	口径（7.8）底径（4.4）器高2.2	ロクロ成形　胎土；淡橙色
	23	かわらけ	口径13.6　底径8.0　器高3.6	ロクロ成形　胎土；淡橙色
	24	常滑窯　甕		胎土；灰黒色　器表；灰緑色　外面に線刻
	25	銅銭　聖宋元寶		初鋳；北宋1101年　篆書
図１９	26	白磁　四耳壺		胎土；灰白色　釉；白色（青み）
	27	かわらけ	口径9.0 器高1.8	手づくね成形　胎土；淡褐色
	28	かわらけ	口径9.0 器高1.9	手づくね成形　胎土；淡褐色　二次焼成
	29	かわらけ	口径9.3　底径8.4　器高1.7	ロクロ成形　胎土；淡褐色　二次焼成
	30	かわらけ	口径13.4　底径7.8　器高3.2	ロクロ成形　胎土；淡肌色
	31	白かわらけ		手づくね成形　胎土；白色
	32	常滑窯　鉢Ｉ類		胎土；灰色　口縁端部に自然釉
	33	滑石製　鍋	口径（26.0）	外面煤付着
図２０	34	かわらけ	口径9.1　底径6.8　器高1.8	ロクロ成形　胎土；淡褐色
	35	かわらけ	口径12.4　底径8.5　器高2.9	ロクロ成形　胎土；淡褐色
	36	かわらけ	口径13.0　底径8.3　器高3.7	ロクロ成形　胎土；橙色
	37	白磁　四耳壺		胎土；白色　釉；白色（青み）
	38	青白磁　水注		胎土；白色　釉；水色
	39	青白磁　壺	口径（8.0）	胎土；白色　釉；水色　口縁露胎
	40	渥美窯　壺		胎土；灰褐色　器表；黒褐色
	41	常滑窯　鉢Ｉ類		胎土；灰褐色
	42	山茶碗	口径（14.0）底径（3.5）器高5.6	胎土；灰色　自然釉；口唇～内面　外底糸切り後、高台貼付　高台畳付けに籾殻痕
	43	銅銭　開元通寶		初鋳；唐621年　楷書
	44	銅銭　太平通寶		初鋳；北宋976年　楷書
	45	銅銭　紹聖元寶		初鋳；北宋1094年　行書
	46	銅銭　大観通寶		初鋳；北宋1107年　楷書
図２６	47	軒平瓦	高さ6.8　瓦当部厚2.7	胎土；灰色　表面；黒色　瓦当面；均正唐草文周囲に二重の界線に囲まれた珠文帯巡る　ＹＮＩ－０４と同笵（永福寺Ｉ期）
	48	平瓦	厚さ2.0	胎土；灰褐色　凸面；縄目痕　凹面；横位の糸切り痕
	49	丸瓦	厚さ2.2	胎土；灰褐色　凸面；縄目痕　凹面；布目痕
	50	平瓦	厚さ2.9	胎土；淡橙色～明茶色　凸面；縄目痕　凹面；横位の糸切り痕
	51	平瓦	厚さ2.8	胎土；灰褐色　凸面；縄目痕
	52	鉄製　釘	残存長6.7　一辺0.4	
図２７	53	かわらけ	口径8.0　器高1.6	手づくね成形　胎土；淡褐色　二次焼成
	54	かわらけ	口径8.2　器高1.6	手づくね成形　胎土；橙色
	55	かわらけ	口径（12.6）底径（9.2）器高3.0	ロクロ成形　胎土；淡褐色

遺物観察表（2）

	56	白かわらけ	口径（7.4）　器高1.8	手づくね成形　胎土；白色　器表全体に肌色の顔料塗布
図２７	57	かわらけ	口径（9.0）器高1.8	手づくね成形　胎土；淡褐色
	58	かわらけ	口径8.7　器高1.6	手づくね成形　胎土；淡褐色
	59	かわらけ	口径8.2　底径7.4　器高1.6	ロクロ成形　胎土；橙色
	60	かわらけ	口径（9.0）器高1.9	手づくね成形　胎土；淡肌色
	61	かわらけ	口径8.7　底径6.8　器高1.7	ロクロ成形　胎土；赤橙色
	62	かわらけ	口径9.0　器高1.9	手づくね成形　胎土；淡褐色
	63	白かわらけ	口径（12.9）器高3.6	手づくね成形　胎土；淡黄白色
	64	白磁　四耳壺	口径（9.4）	胎土；灰白色　釉；淡黄褐色
	65	かわらけ	口径8.4　底径6.4　器高1.7	ロクロ成形　胎土；淡褐色
	66	かわらけ	口径（13.4）底径（7.8）器高3.2	ロクロ成形　胎土；淡茶褐色　外底スノコ痕
	67	かわらけ	口径8.5　器高1.85	手づくね成形　胎土；淡褐色
	68	かわらけ	口径8.8　底径7.2　器高1.2	ロクロ成形　胎土；淡肌色　外底スノコ痕
	69	かわらけ	口径13.0　器高3.5	手づくね成形　胎土；淡褐色
	70	常滑窯　鉢Ｉ類		胎土；灰色　自然釉；口唇～体部外面
	71	常滑窯　甕	底径15.0	胎土；灰黒色　器表；暗茶褐色
	72	平瓦	厚さ2.3	胎土；灰色　凸面；縄目痕
	73	平瓦	厚さ2.2	胎土；灰色　凸面；縄目痕
	74	滑石製品	底径3.4	鍋のミニチュア？
	75	かわらけ	口径8.6　器高1.6	手づくね成形　胎土；淡褐色
図２９	76	かわらけ	口径8.6　器高1.6	手づくね成形　胎土；淡褐色
	77	かわらけ	口径8.3　器高1.8	手づくね成形　胎土；淡肌色
	78	かわらけ	口径9.0　器高1.5	手づくね成形　胎土；淡褐色　外底スノコ痕
	79	かわらけ	口径8.5　底径6.4　器高1.8	ロクロ成形　胎土；橙色　外底スノコ痕
	80	かわらけ	口径8.9　底径6.5　器高1.8	ロクロ成形　胎土；淡褐色　外底スノコ痕
	81	かわらけ	口径8.8　底径6.6　器高1.5	ロクロ成形　胎土；淡褐色
	82	かわらけ	口径（13.4）器高3.2	手づくね成形　胎土；淡肌色
	83	かわらけ	口径13.2　器高3.4	手づくね成形　胎土；淡褐色
	84	かわらけ	口径（12.4）底径8.4　器高3.4	ロクロ成形　胎土；淡肌色
	85	かわらけ	口径13.5　底径9.0　器高2.9	ロクロ成形　胎土；淡橙色　二次焼成
	86	軒丸瓦		胎土；灰色　表面；灰黒色　瓦当面；内区に三巴文、外区に珠文巡る
	87	平瓦	厚さ1.9	胎土；灰黒色　凸面；縄目痕
	88	平瓦	厚さ2.4	胎土；灰色　凸面；縄目痕
	89	かわらけ	口径6.4　器高1.5	手づくね成形　胎土；淡肌色
図３１	90	かわらけ	口径9.0　器高1.8	手づくね成形　胎土；淡肌色、砂粒多く含む
	91	かわらけ	口径9.0　器高1.8	手づくね成形　胎土；淡肌色
	92	かわらけ	口径8.6　器高1.8	手づくね成形　胎土；淡褐色
	93	かわらけ	口径9.0　器高1.7	手づくね成形　胎土；淡肌色　外底スノコ痕
	94	かわらけ	口径9.2　底径7.0　器高1.7	ロクロ成形　胎土；淡褐色　外底スノコ痕
	95	かわらけ	口径9.0　底径6.6　器高1.7	ロクロ成形　胎土；淡褐色　外底スノコ痕
	96	かわらけ	口径8.6　底径5.4　器高1.6	ロクロ成形　胎土；淡褐色　外底スノコ痕
	97	かわらけ	口径8.8　底径7.0　器高1.3	ロクロ成形　胎土；淡褐色　外底スノコ痕
	98	かわらけ	口径9.0　底径6.1　器高2.0	ロクロ成形　胎土；明茶褐色　外底スノコ痕　口縁タール付着
	99	かわらけ	口径9.0　底径5.2　器高1.9	ロクロ成形　胎土；明茶褐色　外底スノコ痕
	100	かわらけ	口径13.3　器高3.1	手づくね成形　胎土；淡褐色
	101	かわらけ	口径13.1　器高3.5	手づくね成形　胎土；淡褐色
	102	かわらけ	口径13.0　器高3.1	手づくね成形　胎土；淡肌色
	103	かわらけ	口径13.0　器高3.3	手づくね成形　胎土；明茶褐色
	104	かわらけ	口径12.1　底径8.8　器高2.5	ロクロ成形　胎土；明茶褐色　二次焼成
	105	白磁　水盤	口径（14.4）底径5.4　器高4.8	胎土；淡黄白色　釉；黄白色、見込みと外底露胎
	106	瓦器　碗	口径9.8　底径5.8　器高2.85	外面黒色処理、内底中央に菊花の暗文
	107	常滑窯　甕	口径（53.0）胴部最大径（83.6）	胎土；灰黒色　器表；茶褐色～乳黄白色　自然釉肩部まで掛かる
	108	鏡	径11.4　厚さ0.1　周縁部幅0.55　周縁部厚0.6	銅製　鏡背面；州浜梅樹双雀文　紐座；菊座
	109	かわらけ	口径（7.2）　器高1.5	手づくね成形　胎土；淡褐色
図３２	110	かわらけ	口径7.0　器高1.2	手づくね成形　胎土；淡褐色
	111	かわらけ	口径8.8　器高1.7	手づくね成形　胎土；淡褐色
	112	かわらけ	口径8.8　器高1.7	手づくね成形　胎土；淡褐色

遺物観察表（3）

図３２	113	かわらけ	口径8.5　器高1.7	手づくね成形　胎土；淡橙色
	114	かわらけ	口径8.7　器高1.9	手づくね成形　胎土；淡褐色
	115	かわらけ	口径8.7　底径7.0　器高1.7	ロクロ成形　胎土；淡褐色
	116	かわらけ	口径8.2　底径6.5　器高1.6	ロクロ成形　胎土；淡肌色　外底スノコ痕
	117	かわらけ	口径8.3　底径5.9　器高1.8	ロクロ成形　胎土；淡褐色　外底スノコ痕
	118	かわらけ	口径9.0　底径7.6　器高1.7	ロクロ成形　胎土；橙色　外底スノコ痕　二次焼成
	119	かわらけ	口径9.2　底径7.6　器高2.1	ロクロ成形　胎土；橙色　外底スノコ痕
	120	かわらけ	口径9.0　底径6.7　器高1.2	ロクロ成形　胎土；淡褐色　外底スノコ痕
	121	かわらけ	口径13.2　器高3.2	手づくね成形　胎土；淡褐色　二次焼成
	122	かわらけ	口径12.3　器高3.2	手づくね成形　胎土；橙茶褐色　口縁タール付着
	123	かわらけ	口径12.4　器高3.3	手づくね成形　胎土；明茶褐色　口縁タール付着
	124	かわらけ	口径13.0　器高3.3	手づくね成形　胎土；淡茶褐色　二次焼成
	125	かわらけ	口径13.0　底径8.8　器高2.8	ロクロ成形　胎土；橙色
	126	かわらけ	口径13.4　底径9.5　器高2.9	ロクロ成形　胎土；淡橙色　外底スノコ痕
	127	かわらけ	口径(12.0) 底径7.0　器高3.0	ロクロ成形　胎土；淡橙色～淡褐色
	128	かわらけ	口径12.3　底径8.6　器高3.1	ロクロ成形　胎土；淡橙色　外底スノコ痕
	129	かわらけ	口径12.3　底径8.3　器高3.4	ロクロ成形　胎土；淡茶褐色
	130	白磁　口兀皿		胎土；白色　釉；白色（青み）
	131	常滑窯　鉢Ｉ類		胎土；灰色
	132	常滑窯　鉢Ｉ類		胎土；灰色　自然釉；口縁に掛かる
	133	常滑窯　鉢Ｉ類		胎土；灰色　自然釉；口縁に掛かる
	134	瓦器　碗	口径(10.0) 底径（6.0）　器高3.0	胎土；灰白色　表面黒色処理　内面見込み；連結輪状の暗文
	135	かわらけ質製品	底径4.4	ロクロ成形　胎土；淡茶褐色
	136	円盤状土製品	径2.6　厚さ0.6	胎土；橙色　ロクロ成形かわらけ底部転用
	137	平瓦	厚さ2.2	胎土；灰色　凸面；縄叩き目
	138	平瓦	厚さ2.6	胎土；灰白色　凸面；斜格子叩き目
	139	銅銭　熙寧元寶		初鋳；北宋１０６８年　篆書
	140	鉄製　鋏	残存長8.1　握り幅0.4・厚さ0.2 刃幅0.9・厚さ0.25	
	141	鉄製　釘	残存8.3　一辺0.35	
	142	滑石製　鍋		割れ口切り出し痕
図３６	143	かわらけ	口径（15.0）器高3.9	手づくね成形　胎土；淡橙色
	144	かわらけ	口径（14.8）器高3.5	手づくね成形　胎土；淡橙色
	145	青磁　劃花文碗	口径（17.0）	胎土；灰白色　釉；暗灰緑色　内面蓮華文
	146	かわらけ	口径9.8　器高2.2	手づくね成形　胎土；淡褐色　一部火受けている
	147	かわらけ	口径（8.8）器高1.5	手づくね成形　胎土；淡肌色
	148	かわらけ		手づくね成形　胎土；淡肌色
	149	かわらけ		手づくね成形　胎土；橙色
	150	かわらけ	口径（8.6）底径5.8　器高1.7	ロクロ成形　胎土；淡茶褐色
	151	かわらけ	口径（8.1）底径（7.0）器高1.8	ロクロ成形　胎土；淡茶褐色　外底スノコ痕
	152	白かわらけ	口径（5.1）器高1.1	手づくね成形　内折れ　胎土；白色
	153	瓦器　碗	器高3.1	胎土；灰白色　表面黒色処理
	154	かわらけ	口径13.9　器高3.0	手づくね成形　胎土；淡橙色
	155	かわらけ	口径9.2　底径7.5　器高1.6	ロクロ成形　胎土；淡茶褐色　外底スノコ痕　全体火受けている
	156	かわらけ	口径（13.0）底径（8.0）器高3.3	ロクロ成形　胎土；淡茶褐色　外底スノコ痕
	157	常滑窯　壷	口径（9.8）	胎土；灰褐色　器表；灰緑色　二次焼成
	158	常滑窯　甕		胎土；灰色　器表；灰緑色～明茶褐色
	159	青白磁　碗	底径（5.0）	胎土；白色　釉；水青色　内底見込み文様（不明）配す
	160	常滑窯　鉢Ｉ類		胎土；灰褐色
	161	渥美窯　甕		胎土；灰色　器表；暗褐色
	162	渥美窯　甕	底径（13.6）	胎土；灰褐色
図３８	163	かわらけ	口径14.2　器高3.4	手づくね成形　胎土；橙色　口縁一部タール付着
	164	木製　下駄	長さ23.6　幅10.9　残存高0.7	
	165	かわらけ	口径（8.8）　器高1.5	手づくね成形　胎土；淡茶褐色
図４０	166	かわらけ	口径13.4　器高3.3	手づくね成形　胎土；淡茶褐色
	167	漆器　椀	口径（16.0）	黒漆地　文様なし？ 備考；残存状況不良
図４１	168	かわらけ	口径（9.6）器高2.1	手づくね成形　胎土；橙褐色
	169	かわらけ	口径9.1　器高1.9	手づくね成形　胎土；淡褐色
	170	かわらけ	口径（9.2）底径（7.2）器高1.8	ロクロ成形　胎土；淡茶褐色　外底スノコ痕

遺物観察表（4）

図41	171	かわらけ	口径8.8　底径7.0　器高1.8	ロクロ成形　胎土；淡褐色　全体的に火受けている
	172	かわらけ	口径9.1　底径6.4　器高1.8	ロクロ成形　胎土；淡褐色　外底スノコ痕
	173	かわらけ	口径（13.0）器高2.8	手づくね成形　胎土；橙色
	174	かわらけ	口径（13.6）器高3.2	手づくね成形　胎土；淡肌色
	175	かわらけ	器高2.9	手づくね成形　胎土；橙色
	176	かわらけ	口径12.5　底径8.4　器高3.1	ロクロ成形　胎土；明茶褐色　外底スノコ痕
	177	白かわらけ	口径（7.1）器高1.3　孔径0.2	手づくね成形、内折れ　胎土；淡肌色　底部中央を穿孔
	178	白磁　端反り碗		胎土；白色　釉；白色
	179	白磁　口兀皿	口径（10.0）	胎土；白色　釉；白色（青み）
	180	白磁　皿	底径（4.2）	胎土；白色　釉；白色（やや青み）内底見込み草花文
	181	瀬戸窯　入子	口径（6.6）	胎土；淡黄灰色　口唇に自然釉掛かる　片口
	182	瀬戸窯　陶丸	径2.2	胎土；灰褐色　一部自然釉掛かる
	183	常滑窯　鉢Ⅰ類		胎土；灰褐色
	184	常滑窯　鉢Ⅱ類		胎土；赤茶灰色　器表；茶褐色
	185	常滑窯　甕	底径（15.4）	胎土；明茶褐色
	186	平瓦	厚さ2.3	胎土；明茶褐色　凸面；縄目　凹面；横方向の糸切り痕
	187	平瓦	厚さ2.4	胎土；灰褐色　表面；灰黒色　凸面；縄目　凹面；縄目、横方向の糸切り痕
	188	平瓦（東海系）	厚さ2.1	胎土；灰褐色　端面に釉掛かる　凸面；横方向の糸切り痕？　凹面；縦方向糸切り痕
図45	189	弥生　壷		胎土；淡褐色　外面に櫛描沈線文　備考；弥生後期後半・西遠江型山中式
	190	弥生　高坏	脚台径14.0	胎土；淡橙色　裾部外面に鍔付く　3カ所に木の葉状のスカシ　裾部下半内面に横位のハケ調整　備考；弥生後期・西遠江伊場式の系譜、在地産
	191	土師器　壷	口径（14.8）	胎土；淡橙色（胎芯黒色）硬質　口縁折り返し　内面；ナデ調整　備考；古墳前期
	192	土師器　甕		胎土；淡茶褐色（赤橙色）　口唇部にキザミ　外面；ハケ調整、火受けている　内面；ナデ調整　備考；古墳前期
	193	土師器　甕		胎土；淡褐色　口唇部にキザミ　内外面ともにハケ調整　口唇火受けている　備考；古墳前期
	194	土師器　甕		胎土；淡茶褐色　外面；ハケ調整、火受けている　備考；古墳前期
	195	土師器　台付甕		胎土；淡茶褐色　外面、内面ともにハケ調整　外面火受けている　備考；古墳前期
	196	土師器　台付甕	脚台径（8.5）脚台部高6.5	胎土；淡茶褐色～赤橙色　表面剥離　備考；古墳前期
	197	土師器　台付甕	脚台径（10.4）脚台部高6.0	胎土；淡茶褐色　備考；古墳前期　表面磨滅
	198	土師器　高坏		胎土；茶褐色　内外面ともにヘラミガキ　備考；古墳前期
	199	土師器　坩		胎土；淡茶褐色～赤橙色　内外面ともにヘラミガキ　備考；古墳前期
	200	須恵器　坏蓋		胎土；灰褐色　ツマミ；擬宝珠形　内面中央磨滅　備考；8世紀前半
	201	須恵器　坏蓋		胎土；灰褐色　備考；8世紀代
	202	須恵器　坏蓋	径（16.4）	胎土；灰褐色　天井部回転ヘラケズリ　備考；8世紀代
	203	須恵器　坏	高台径（9.2）	胎土；灰色　高台貼付　備考；8世紀前半
	204	須恵器　甕		胎土；淡茶褐色　外面；平行叩き　備考；8世紀代
	205	須恵器　長頸瓶		胎土；灰褐色　内外面ともに釉（暗灰緑色）掛かる　備考；8世紀代
	206	土師器　甕		胎土；橙色、砂粒含む　内面；横位のハケ調整　外面；ナデ調整　備考；8世紀代
	207	土師器　甕		胎土；淡肌色、砂粒含む　内外面ともにナデ調整　備考；8世紀代

遺物観察表（5）

図45	208	土師器　甕		胎土；淡橙色、砂粒含む　内外面ともにナデ調整　備考；8世紀代
	209	土師器　甕		胎土；淡橙色、砂粒含む　内外面ともにナデ調整　備考；8世紀代
	210	土師器　甕		胎土；淡橙色、砂粒含む　内外面ともにナデ調整　備考；8世紀代
	211	土師器　甕	底径（5.4）	胎土；淡茶褐色、砂粒多く含む　外底部ヘラケズリ　備考；8世紀代
	212	土師器　甕	底径9.0	胎土；淡茶褐色、砂粒多く含む　外底面に木葉痕　火受けている　備考；8世紀代
	213	土師器　甕		胎土；淡茶褐色、砂粒多く含む　備考；8世紀代
	214	土師器　坏		胎土；淡橙色
	215	土師器　坏		胎土；淡橙色
	216	土師器　坏		胎土；淡褐色　外底ヘラケズリ　備考；相模型、8世紀代
	217	土師器　坏		胎土；淡茶褐色　外底ヘラケズリ　備考；相模型、8世紀代
	218	土師器　坏		胎土；黄茶褐色
	219	土師器　鉢		胎土；赤橙色、砂粒含む　内面ナデ調整
図46	220	陶器　皿	口径9.0　底径3.8　器高2.0	胎土；白色　釉；白色（青み）　備考；近現代
	221	陶器　皿	口径9.0　底径3.8　器高2.0	胎土；白色　釉；白色（青み）　備考；近現代
	222	甕（蓋付き）	甕；口径18.7　底径13.5　器高21.0　蓋；径19.7　受け部径14.1　高さ5.9	胎土；灰褐色　釉；赤茶褐色　蓋摘み貼付　備考；近現代
	223	青磁　蓮弁文碗		胎土；灰色　釉；灰緑色
	224	青磁　鉢	底径4.4	胎土；灰褐色　釉；暗灰緑色
	225	瀬戸窯　入子	口径（7.6）底径3.6　器高2.6	胎土；淡黄褐色　自然釉口唇に掛かる　口縁タール付着
	226	瓦器　碗	口径（12.4）	胎土；灰褐色　表面黒色処理
	227	銅銭　咸平元寶	径2.05	初鋳；北宋998年　楷書　周縁部加工
	228	石製品　硯	長さ6.4　幅4.9　高さ1.7	黒色粘盤岩　断面；台形　当初使用の硯を30％切除し、裏面に再度硯面をつくりだしている　再加工後は未使用
図50	229	青磁　蓮弁文碗	底径5.0	胎土；灰白色　釉；草緑色　内底見込みに蓮華文
	230	青磁　花生		胎土；灰白色　釉；水青色　耳部；鯱
	231	用途不明　土製品	孔径1.2	胎土；肌色、硬質　棒に粘土を巻き付けて製作　外面ナデ調整
	232	平瓦	厚さ2.7	胎土；灰色　凸面；斜格子叩き目　凹面；「永福寺」の押印（YNⅡ03a、永福寺Ⅱ期）
	233	平瓦	厚さ3.2	胎土；灰色　凸面；斜格子叩き目
	234	かわらけ	口径7.6　底径4.5　器高2.0	ロクロ成形　胎土；淡橙色　外底スノコ痕
	235	かわらけ	口径8.6　器高1.7	手づくね成形　胎土；淡橙色
	236	かわらけ	口径8.5　器高1.7	手づくね成形　胎土；淡橙色
	237	かわらけ	口径8.5　底径6.4　器高1.7	ロクロ成形　胎土；淡橙色　外底スノコ痕
	238	かわらけ	口径8.8　底径6.6　器高1.5	ロクロ成形　胎土；橙色　外底スノコ痕
	239	かわらけ	口径7.8　底径5.8　器高1.5	ロクロ成形　胎土；橙色　外底スノコ痕
	240	かわらけ	口径8.9　底径6.0　器高1.7	ロクロ成形　胎土；淡褐色　外底スノコ痕
	241	かわらけ	口径12.6　底径7.8　器高3.5	ロクロ成形　胎土；橙色　外底スノコ痕
	242	かわらけ	口径（13.0）底径8.8　器高3.2	ロクロ成形　胎土；淡橙色　外底スノコ痕
	243	白かわらけ	口径（8.3）　器高1.8	手づくね成形　胎土；淡肌色
	244	青磁　蓮弁文碗		胎土；灰色　釉；青灰緑色
	245	青白磁　合子蓋		胎土；淡黄褐色　釉；水色
	246	黄釉　盤		胎土；灰色　釉；黄褐色
	247	かわらけ	口径（9.6）器高1.8	手づくね成形　胎土；淡橙色
	248	かわらけ	口径8.4　底径6.6　器高1.8	ロクロ成形　胎土；橙色　外底スノコ痕
	249	かわらけ	口径（13.0）	手づくね成形　胎土；淡茶褐色
	250	青磁　劃花文碗		胎土；灰色　釉；灰緑色

写 真 図 版

◀1．Ⅰ区近現代地鎮遺物
出土状況（北西から）

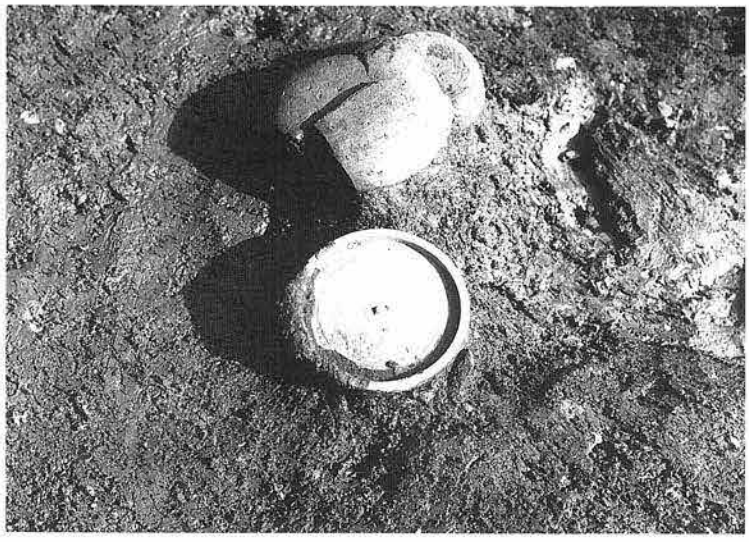
2．Ⅰ区2面全景（南から）▶

◀3．Ⅰ区3a面全景（南から）

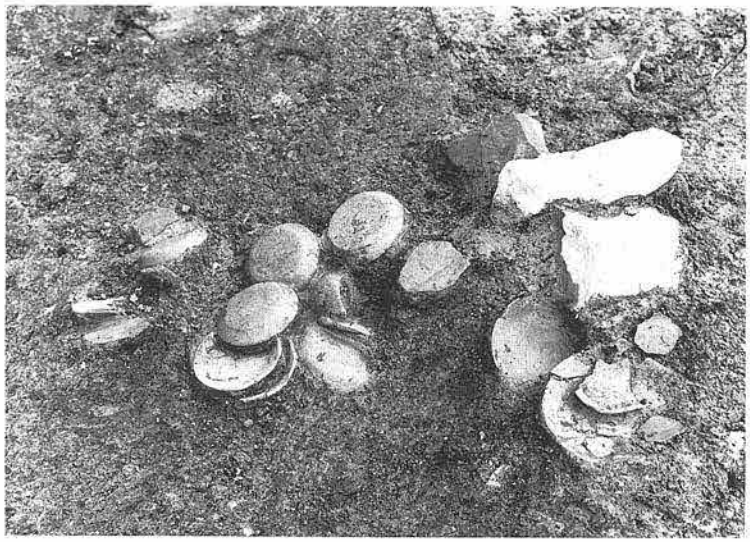
図版 2

◀1．Ⅰ区3a面
建物1・2（東から）

2．Ⅰ区3b面全景（南から）▶

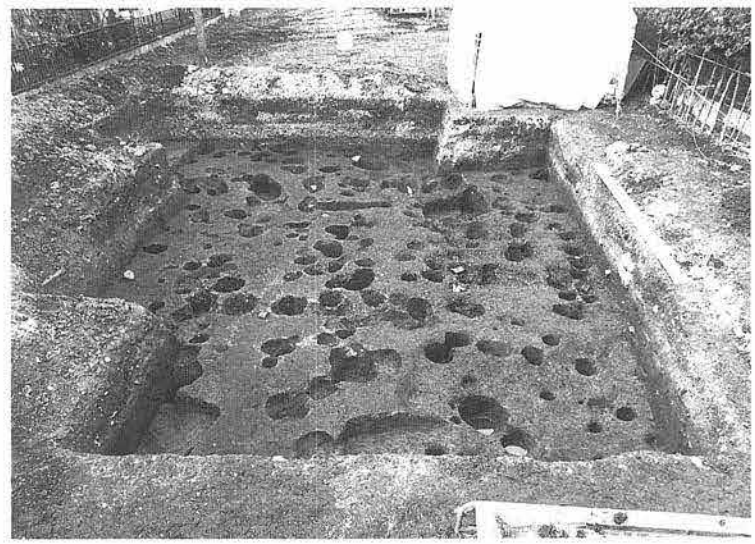


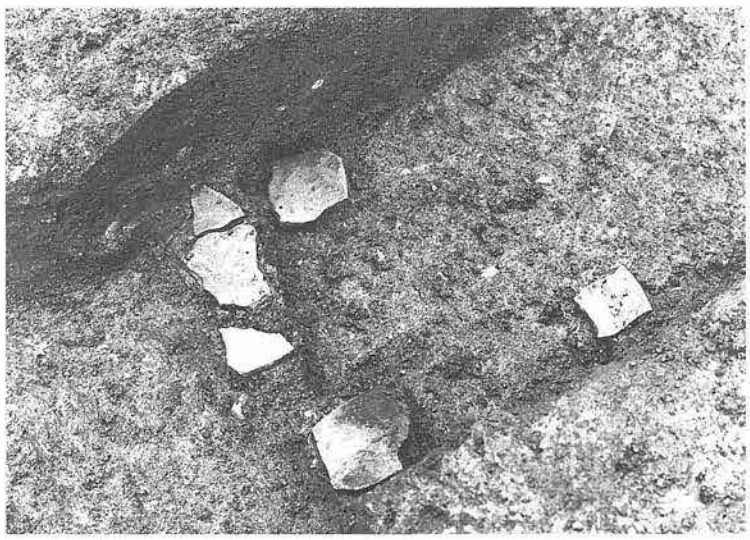
◀3．Ⅰ区3b面鏡出土状況
（南東から）



◀1．Ⅰ区3b面遺物
一括廃棄出土状況（西から）

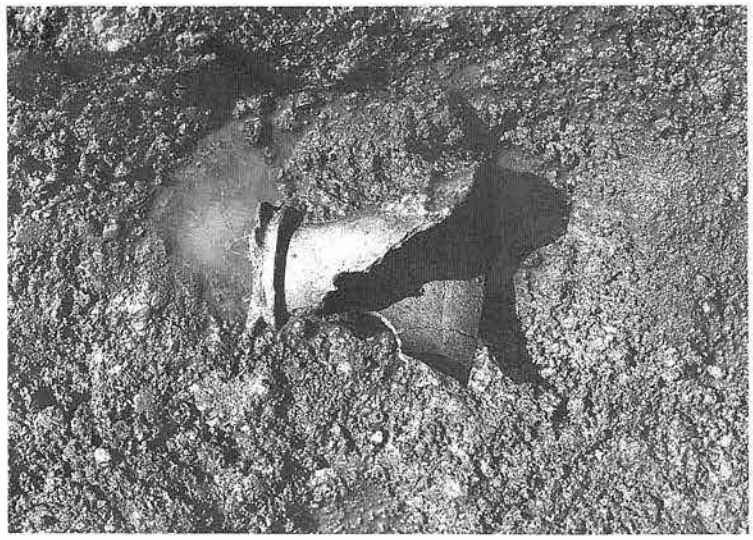
2．Ⅰ区４面全景（南から）▶





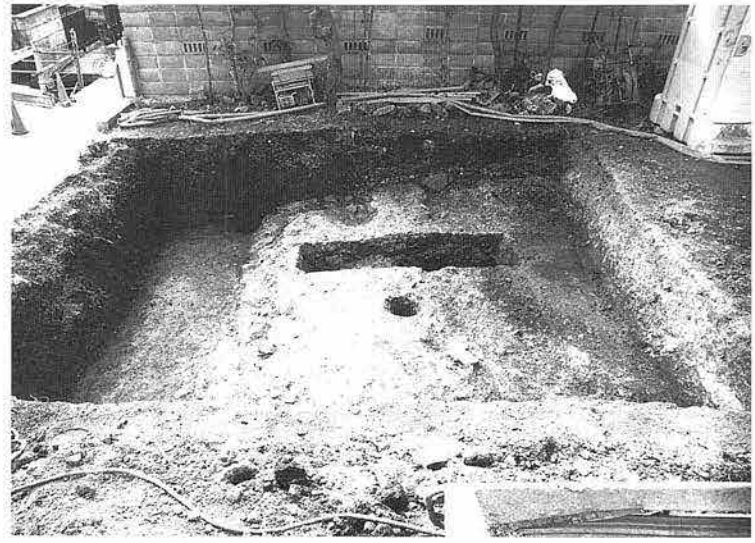
◀3．Ⅰ区焼土Ｂ土師器
出土状況（北東から）

図版 4



◀1．Ⅰ区弥生土器（高坏）
出土状況（東から）

2．Ⅱ区1面全景（東から）▶



◀3．Ⅱ区2面全景（東から）

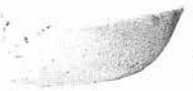
89

92

100

5

6


12

157

14

16

47

108

190

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成10年度発掘調査報告
巻次	15
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	岡陽一郎　野本賢二
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1999年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
よここうじしゅうへんいせき 横小路周辺遺跡	かながわけんかまくらしにかいどうあざよここうじ 神奈川県鎌倉市二階堂字横小路93番11	204	№259	35° 19′ 18″	139° 34′ 8″	1998.1.14 ～ 1998.3.7	142.38	個人専用住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
横小路周辺遺跡	都市	古墳時代前期 奈良平安時代 弥生後期 中世	礎石建物 掘立柱建物棟 溝	弥生時代：土器 古墳時代：土師器 奈良平安時代 ：土師器 ：須恵器 中世：かわらけ 国産・舶載 陶磁器 鏡	

瑞泉寺周辺遺跡（No.338）

ずいせんじしゅうへんいせき

二階堂字紅葉ヶ谷653番３地点

例　　言

1．本書は鎌倉市二階堂字紅葉ヶ谷653番３地点に所在する、個人専用住宅の建設に先だち行われた瑞泉寺周辺遺跡（県遺跡台帳No.338）の発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は平成10年３月９日から同年４月26日にかけて、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。

3．本書使用の遺構図及び遺物実測図は調査員が分担し、原稿執筆は、第１章、第２章、第３章第１節を福田　誠が、第３章第２節を神山晶子が、第４章を福田が担当した。編集は福田が行った。

4．本書に使用した写真のうち個別遺構は福田・菊川　泉が、遺物撮影は福田が行った。
全景写真は木村美代治がポール式高所撮影装置を用いて撮影した。

5．発掘調査の体制は以下の通りである。

主任調査員　福田　誠

調　査　員　木村美代治　菊川　泉　神山晶子　丹　行正　本城　裕　福田陽子

作　業　員　㈳鎌倉市シルバー人材センター

川原龍雄　吉本脩三　渡辺久夫　宮崎　明

6．発掘調査資料（記録図面・写真・出土遺物）は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。

目　　次

第１章　調査地点の位置と歴史的環境 …… 272
第２章　調査の経過と層序 …… 277
第３章　検出した遺構と遺物 …… 277
　第１節　遺構 …… 277
　第２節　遺物 …… 278
第４章　まとめ …… 282

挿　図　目　次

図１　調査地点位置図 …… 273
図２　調査地点と周辺図 …… 273
図３　調査グリッド配置図 …… 274
図４　遺構全測図 …… 275～276
図５　かわらけ溜り …… 278
図６　包含層とかわらけ溜りの遺物 …… 279
図７　かわらけ溜りの遺物 …… 281

表１　かわらけ溜り出土のかわらけ法量表 …… 282

図　版　目　次

図版１　全景 …… 285
図版２　溝 …… 286
図版３　かわらけ溜り …… 287
図版４　トレンチ調査 …… 288
図版５　包含層・かわらけ溜りの遺物 …… 289
図版６　かわらけ溜りの遺物 …… 290

第１章　調査地点の位置と歴史的環境

瑞泉寺周辺遺跡は、相模湾に面した鎌倉の沖積平野を取り囲む標高100m前後の丘陵中の東方の谷間に位置する。この谷間は約600万年前の新生代第三紀に形成された凝灰質砂岩と泥岩が、浸食作用で削られ形作られた谷で、二階堂川に架かる通玄橋から始まり、最も奥の瑞泉寺までの東西方向に延びる間が紅葉ヶ谷と呼ばれている。調査地点の二階堂字紅葉ヶ谷653番３は紅葉ヶ谷の中程、瑞泉寺に向かう道筋の北側、南に向かって開く小さな谷戸で、国指定史跡永福寺跡の東方150m程の位置である。

縄文時代前期の海進期（約5,000～6,000年前）には、海面が今より約10m近く上昇し、入り込んだ海水により鎌倉湾が形成され、現在の鶴岡八幡宮付近まで海岸線が迫っていたと考えられる。縄文時代後期の海退期（約4,000年前）よりしだいに平野部分の陸地化が進み、弥生時代（約2,000年前）にはさらに乾燥が進み、海岸線付近では堆積した砂によって砂丘が形成されていった。砂丘の背後（北側）にはラグーン（後背湿地）が形成され、旧市内を流れる最大の河川である滑川を始め二階堂川、扇川、佐助川などが流れ込んでいた。砂丘や河川によって作られた自然堤防上に、点々と人々が居住を始めたと考えられている。

奈良時代には鎌倉郡の郡衙（郡役所）が置かれ、政治経済の重要な位置を占めていたと考えられる。平安期には、源頼義が石清水八幡宮を勧請した元八幡宮、八幡太郎義家の生まれた甘縄の館、亀ヶ谷の義朝の居館等の存在が知られ、源頼朝が鎌倉に入る1180年以前から源氏相伝の地であった。

調査地点のある紅葉ヶ谷は、鎌倉時代を通して幕府の重要な施設である御所、鶴岡八幡宮、勝長寿院、永福寺などの東方に位置し、鎌倉時代中期には夢窓疎石により瑞泉院が開かれ、鎌倉時代以降谷戸内にも多くの人々が居住したものと考えられる。

紅葉ヶ谷の最も奥にある瑞泉寺は山号を錦屏山と号して、臨済宗円覚寺派の禅寺である。開基は二階堂道蘊、開山は夢窓疎石、中興開基は足利基氏である。

開山の夢窓疎石（建治元年1275～正平六年1351）は、始め平塩山寺で空阿に天台を学び後、京都建仁寺で無隠円範に導かれ禅宗に帰する。鎌倉建長寺の一山一寧に参した後、嘉暦二年（1327）に瑞泉寺の前身である瑞泉院を開いている。

嘉暦元年（1326）南芳庵を永福寺脇に建て（南芳庵も本院落成までの庵居である。）後に、南芳庵の北に瑞泉院を建て（二階堂道蘊が疎石のために創建したもの。）移る。翌年の嘉暦二年の夏（1327）観音殿及び山頂に徧界一覧亭を建てている。方丈の裏手には国指定史跡「瑞泉寺庭園」がある。観音殿、徧界一覧亭が建てられた時期に庭も造られたと考えられる。後ろの山から水を引き、岩盤を穿った池（貯清池）に水をたたえ、崖面に岩窟（座禅窟・天女窟）がある。京都の天竜寺や西芳寺より約10年前の創建である。瑞泉寺庭園、一覧亭は正面に富士山を望むことが出来る。創建当初から寺地を山腹に求め、富士山の眺望を風景に点じようとした意図が見て取れる。江戸時代になって徳川光圀（1628～1700）が再興し、木造千手観音菩薩像を本尊として寄進している。現在の建物は昭和10年建立の宝形造の建物である。

また紅葉ヶ谷には永安寺（廃寺）があったことが知られている。瑞泉寺門外に位置し、山号は蓬萊。詳しい位置等は不明であるが、瑞泉寺山門の手前を右手に入った所と伝えられている。鎌倉御所足利氏満の菩提を弔うため創建したもので、後に足利持氏・満貞が永享10年（1438）に幕府に対して兵を挙げ、翌11年に当寺で自害している。その後瑞泉寺塔頭となり、のち廃している。

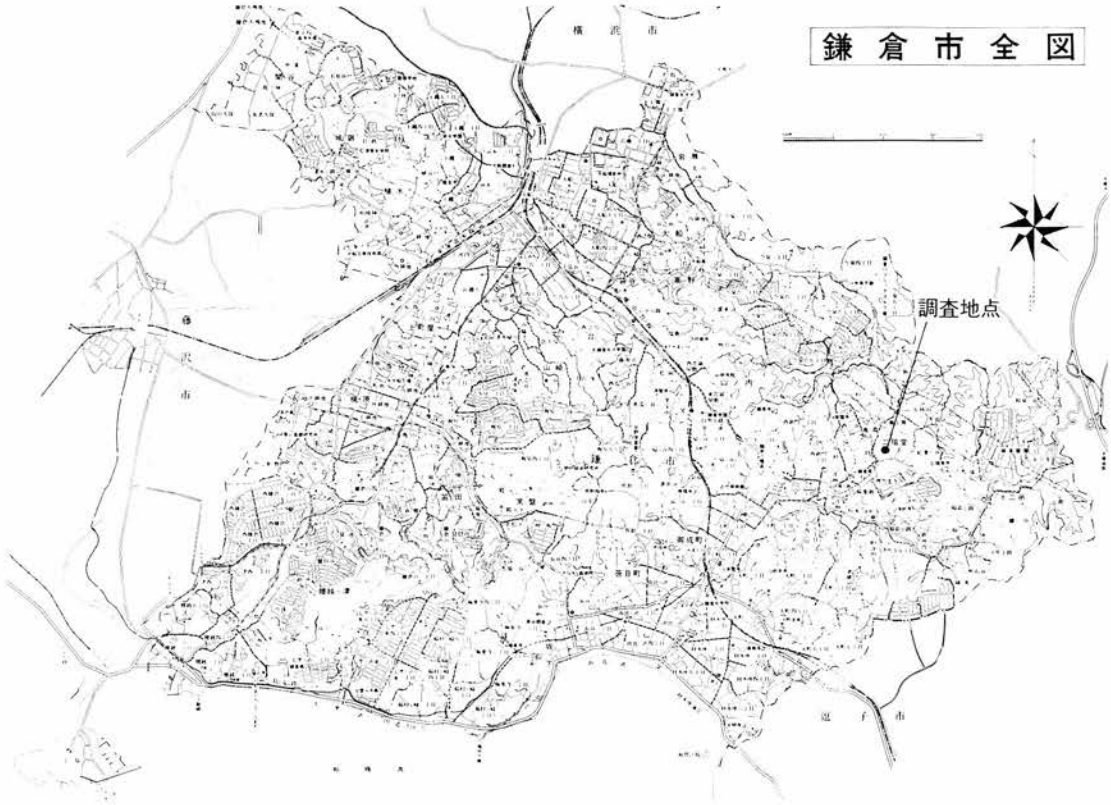


図1　調査地点位置図

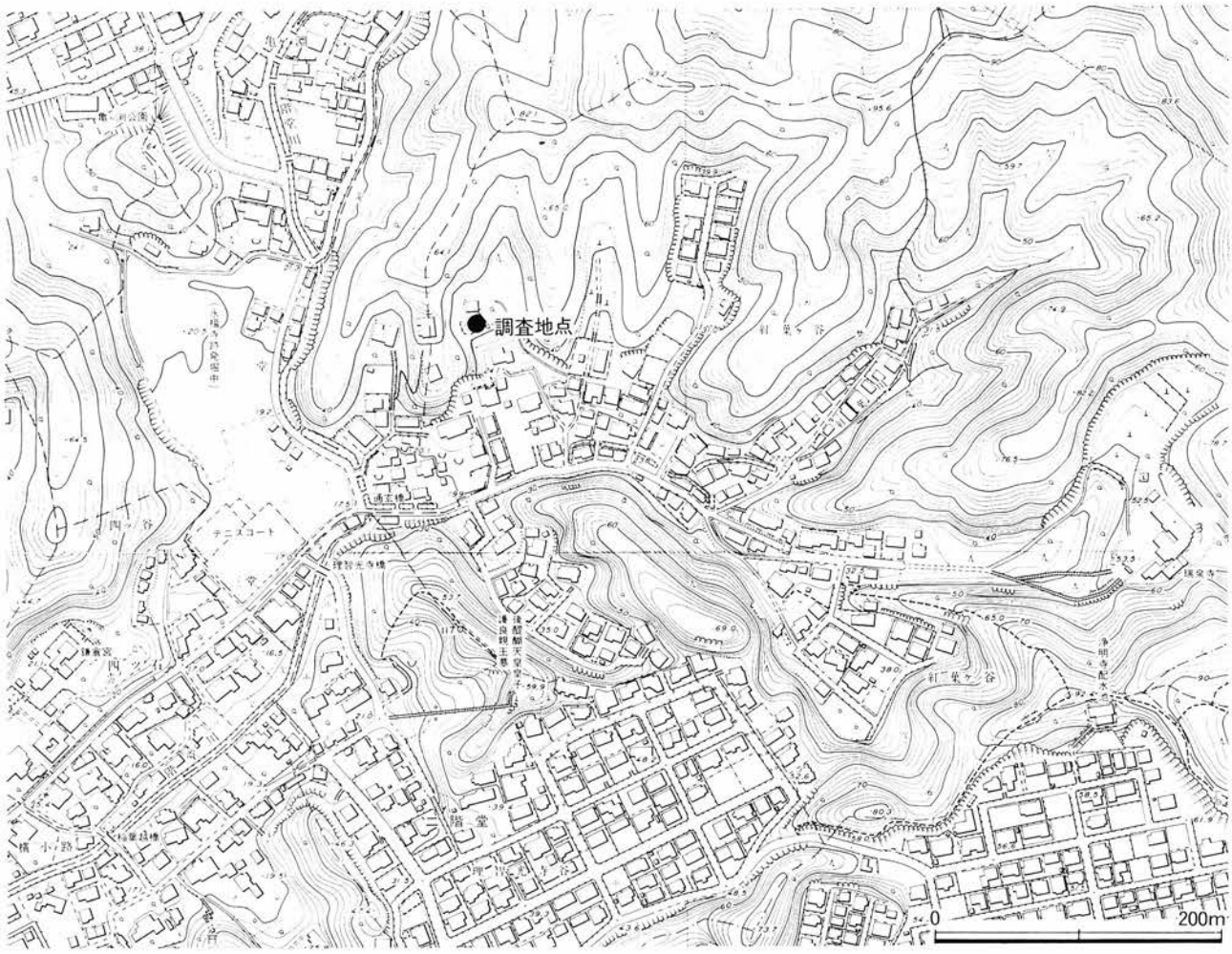


図2　調査地点と周辺図

町名の二階堂は、源頼朝が創建した永福寺三堂の内「二階堂」名が残ったものである。

16世紀末、徳川家康関東入国以来、周辺の集落が集まって二階堂村となる。江戸時代には村の一部が天領に、後の大部分が社寺に寄進されていた。寄進されていた社寺は東慶寺、覚園寺、杉本寺、荏柄天神一乗院があげられる。天領は代官支配であったが、幕末には幕府の退勢が目立ち、次第に諸大名に預けられていった。嘉永五（1852）年に彦根藩、安政元（1854）年に長州萩藩、安政六（1859）年に肥後熊本藩、文久３（1861）年に下総佐倉藩と次々に預け替えとなる。慶応３（1867）年に佐倉藩から再び天領に戻ったが、翌年大政奉還があり明治維新となった。

明治初年、二階堂村には46軒あり、紅葉ヶ谷内に９軒を数える。斉藤姓が３軒、渡辺姓が３軒、石渡姓が２軒、城田姓が１軒である。

当初韮山県に属したがその年12月に神奈川県に改まった。明治４（1871）年廃藩置県が実施され、社寺領は上知され二階堂村は明治新政府のもと神奈川県第16大区７番組に編入された。明治９（1876）年の改革で、第16大区７小区に入り二階堂となった。明治17（1884）年に谷合四か村の組み合わせに入り、明治22（1889）年の町村制で東鎌倉村に、明治27（1894）年には東西鎌倉村が合併して鎌倉町が成立した。昭和14（1939）年に腰越村と合併し、鎌倉市制がしかれ鎌倉市二階堂となる。

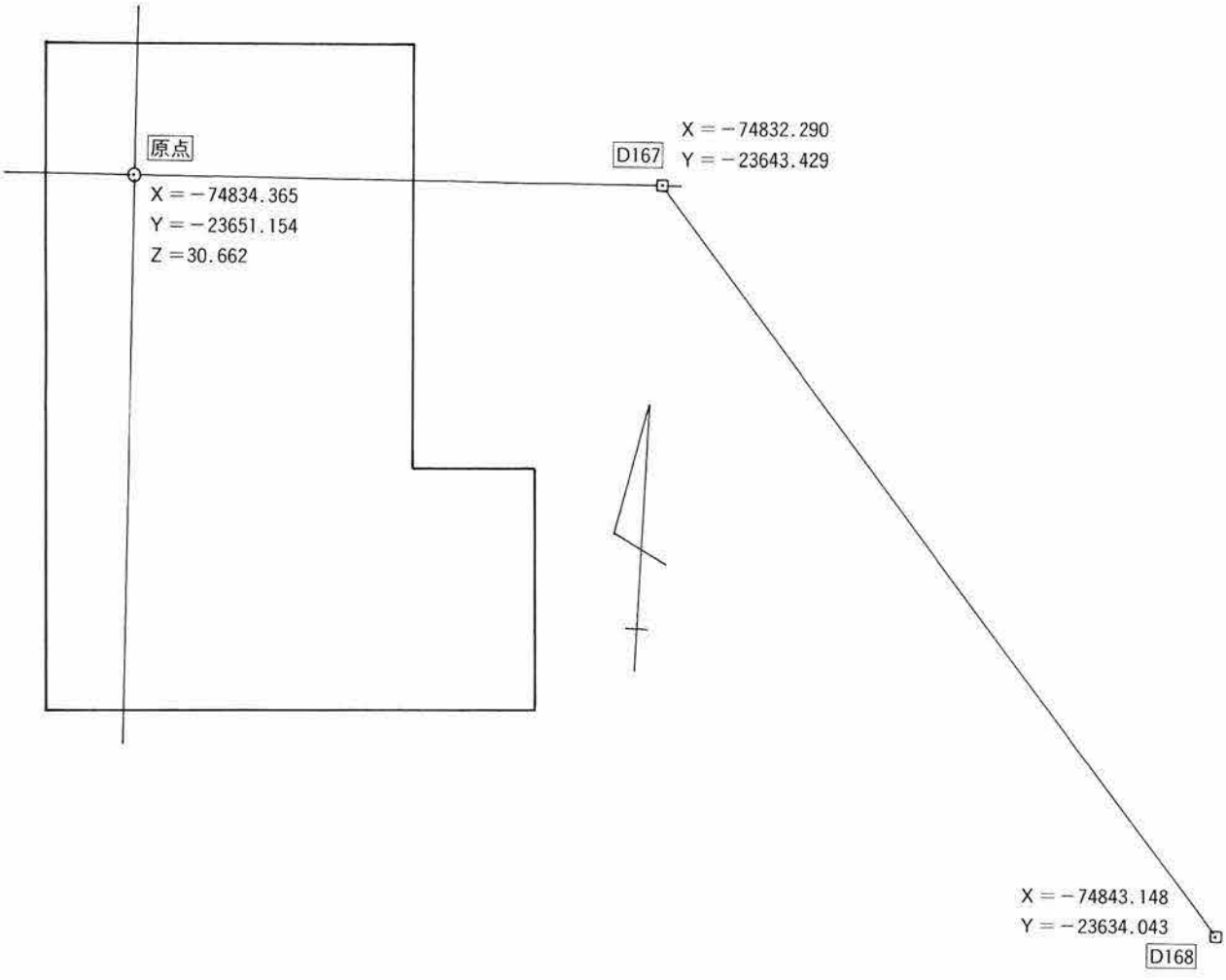
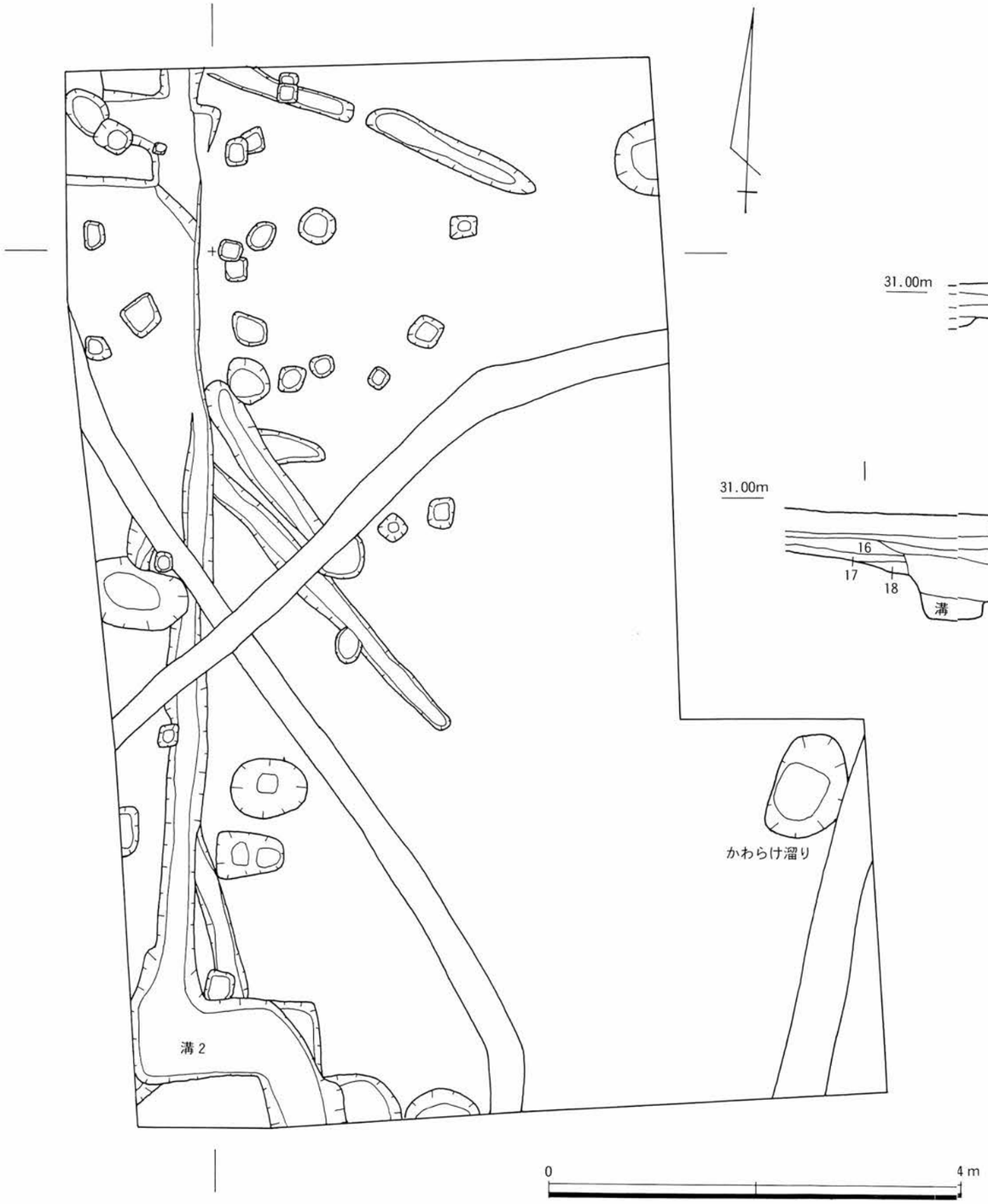
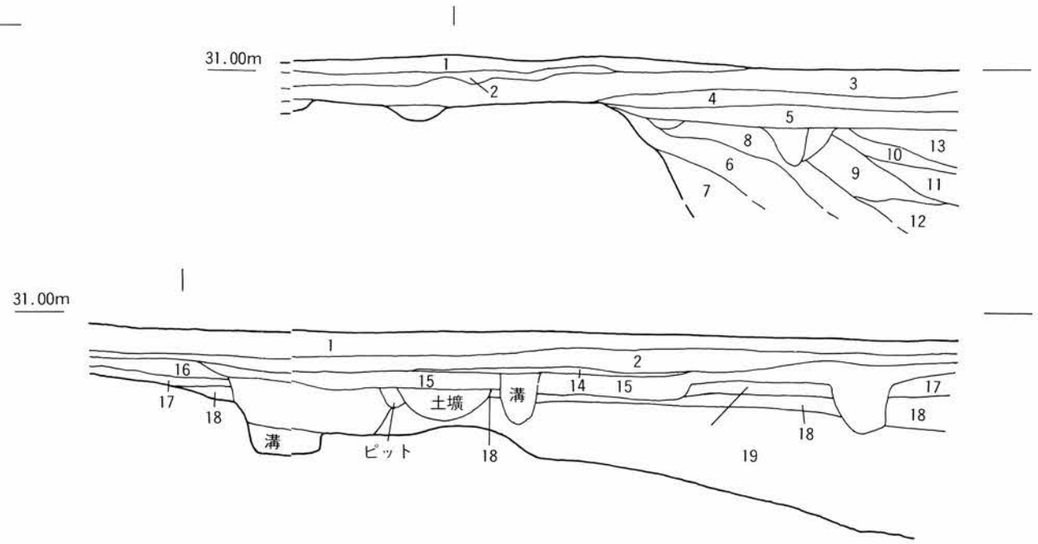


図３　調査グリッド配置図





1　表土
2　旧表土
3　明茶色砂質土
4　茶灰色土
5　茶灰色粘質土　土丹ブロック・かわらけ片混入
6　茶褐色粘質土　土丹粒・かわらけ片少量混入　しまり良し
7　明茶灰色粘質土　土丹ブロック混入　しまり良し
8　暗茶褐色粘質土　土丹粒混入　しまり良し
9　明黄茶色砂質土　土丹ブロック多く混入　しまり弱し
10　淡茶色粘質土　大きな土丹ブロック混入
11　明茶褐色粘質土　土丹粒混入
12　黄茶色粘質土　土丹粒混入
13　茶灰色土　大きな土丹ブロック混入　かわらけ片少量混入
14　茶灰色土
15　黄灰色土　土丹粒混入
16　暗茶灰色土
17　明茶灰色粘質土
18　茶灰色粘質土　土丹粒多く混入
19　砂質土及び大土丹

図 4　遺構全測図

第２章　調査の経過と層序

本遺跡の発掘調査は、平成10年３月９日から表土掘削及び機材の搬入を開始し、同年４月26日まで行った。

先だって行なわれた試掘結果を基に、重機で表土を約50～60cm掘り下げ第１面を検出した。グリッドは、建築予定範囲の南北軸方向にあわせて設定した。グリットの基準とした原点（X＝－74834.365 Y＝－23651.154）は、市内４級基準点D167（X＝－74832.290　Y＝－23643.429）とD168（X＝－74843.148　Y＝－23634.043）を基準に設定したものである。調査中に使用したレベル原点の海抜は、30.662mである。

排土は、調査終了時に再び埋め戻すために周囲に山積みにした。調査地は南に向かって開口する最大幅約40m、奥行き約80m程の、小さな谷内に二段ある雛壇状の平坦地の一段目にあたる。調査はまず、表土を現地表から約50～60cmまで重機で掘削した。調査地の西脇は、山の尾根を高さ約10mまで切り崩した崖面となっていた。切り崩した部分にあたる調査地の西半分は、岩盤を平坦に削った面となっていた。検出した面は僅かに谷の中央に向かって下り、調査区の東端では表土から約60cmの深さとなる。南壁面を利用して土層の堆積状況を観察した結果、自然地形の岩盤の落ち込みと、この上に岩盤の切り崩した岩を積み上げた地業面が確認された。この岩を積み上げた上に造られた中世地業面とおぼしき２時期にわたる土層が認められた。

４月26日に埋め戻し及び器材の搬出も含め、全ての調査を終了した。検出した遺構の詳細は次章に譲る。

第３章　検出した遺構と遺物

第１節　遺構

ａ．１面

調査地の西側は、山の尾根を高さ約10mまで切り崩した崖面となっていた。崖面の裾には幅約70cm、深さ30cm程の溝が巡っていた。山際の排水溝と思われる。切り崩した部分にあたる調査地の西半分は、岩盤を平坦に削った面となる。東半分では自然地形の岩盤の落ち込みと岩盤を切り崩した岩が積み上げた地業面を確認した。この地業面とおぼしき土層は、２層にわたることが認められた。この２層のうちの上層と平坦に削り出された岩盤面を１面とした。

１面の広がりは現地表から50cm程度の深度で、岩盤と土丹を含む粘質土で構成される。締まりが比較的良いが、後世の撹乱を受けているのが目立った。１面とした面は少なくとも中世から近世まで生活面として使われていたようである。精査の結果、遺構も室町期まで遡ると推定される柱穴を中心に溝、かわらけ溜りが検出された。精査中に出土した遺物から考えて、１面は概ね14世紀前葉に使用されはじめたと思われる。室町期の陶磁器片やかわらけ、寛永通宝、幕末・明治期以降の近世陶磁器片など数百年にわたる遺物が出土した。

かわらけ溜り

調査区の南東で検出した遺構である。試掘調査時に一部が検出されていた。長さ約１m、幅約70cm、

深さ約20cm程の窪みの周囲に鎌倉石を並べた土壙である。このかわらけ溜りは大きく上層と下層に分かれる。下層から2個のかわらけが出土した。下層は一旦土丹により埋め込まれ、上層から大中小のかわらけ約34個体（内小型の2個体は、かわらけ2個を身と蓋にして中に3cm大の砂利8個を納めた状態）と、燭台か柄香炉と思われる鉄製品、火打ち石が出土した。炭化物も多く確認されていることから、この場所で火を焚いて、地鎮等の祭祀を行なったものと考えられる。かわらけから14世紀前葉の遺構と考えられる。

溝

調査地の中から溝は8条検出された。この内3条の溝は近現代の撹乱であった。残り5条の溝の内溝2が中世まで遡るものと思われた。

溝2

長さ約10m、幅約40cm、深さ約20cm程の溝である。底面のレベルから調査区の西側を、北から南に流れていたと考えられる溝である。調査区の南隅で西からの流れ込みがあり、枡形に岩盤を（長さ170cm、幅70cm、深さ40～50cm）掘り窪めている。この底面より出土したかわらけは14世紀前半のものである。

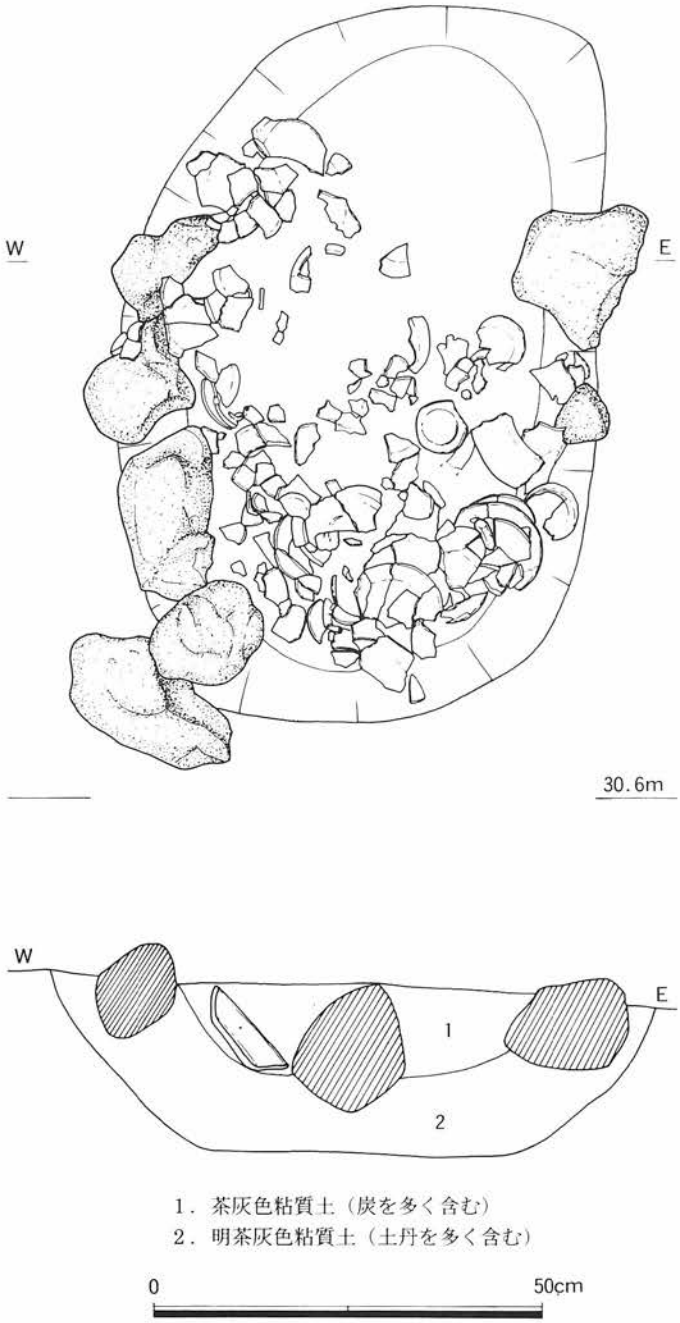


図5　かわらけ溜り

b．2面

調査地の東側で1面の約20cm下にある地業面を検出した。この面を構成しているのは、締まりの良い目の細かい粘質土で東の谷の中央に向かって緩く傾斜していく。遺構の密度は低く、若干の柱穴と土壙を検出したが図示出来るものではない。

第2節　遺物

1面包含層、1面2溝、2面包含層、2面遺構の遺物

図6は、1面包含層、1面2溝、2面包含層、2面土壙1、2面柱穴1から出土した遺物である。1～8は1面包含層の遺物。

1～5はかわらけである。全て轆轤成形。1は口径12.0cm、底径7.9cm、器高2.7cm。2は口径12.7cm、底径7.9cm、器高3.3cm。3は口径12.2cm、底径6.9cm、器高3.5cm。4は口径13.1cm、底径8.5cm、器高3.2cm。5は口径7.8cm、底径5.4cm、器高1.8cm。1のみやや器高が低いものの、全体的に底部が小さく、緩やかなカーブで立ち上がり、口縁に向けて薄くなる、概ね14世紀中葉に

見られる形態のものである。

6は瀬戸の盤口縁部。やや粗いが淡黄灰色の締まった素地をもち、表裏とも淡黄緑色で透明な釉が施される。

7は青磁。印花文碗底部片である。見込み部分に菊の模様が施される。素地は灰色で精良緻密。淡緑灰色の透明な釉である。

8は寛永通宝。1636年初鋳。裏は青海波文を有する。

9～12は1面2溝の遺物である。

9は轆轤成形のかわらけ。口径12.5cm、底径7.3cm、器高3.4cm。内、外面ともナデ痕が強く、素地は土丹粒、砂粒を多く含み、粗い。燈明皿として使用されている。

10は瀬戸褐釉の鉢。口縁から外体部にかけ施釉され、素地には小砂を多く含む。

11は青磁の連弁文碗。素地は精良緻密で淡灰白色。釉は緑青色で半透明、口縁部露胎。

12は鉄釘断片。残存長7.7cm。

13～22は2面包含層から出土した遺物。

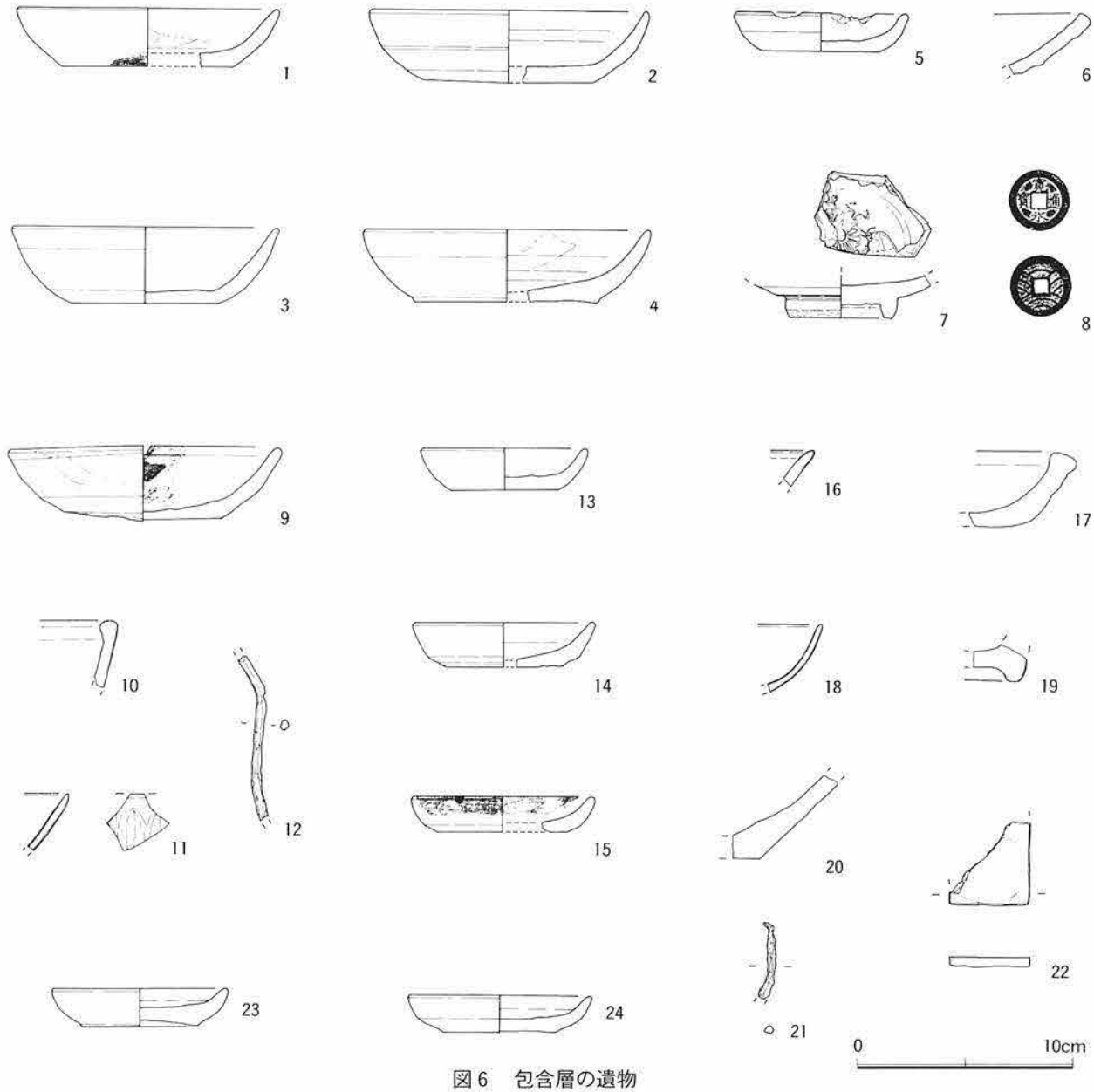


図6　包含層の遺物

13～15は轆轤成形のかわらけ。13は口径7.5cm、底径5.0cm、器高1.9cm。14は口径8.3cm、底径5.4cm、器高2.1cm。15は口径8.5cm、底径6.0cm、器高1.65cm。14、15は器高が低く底部のやや張った13世紀後半に多く見られるもの、13は底部がやや小さく器壁は滑らかに湾曲する14世紀初頭の様相を呈する。

16は小片のため歴然としないが、瀬戸の碗若しくは皿。素地は精良、淡緑の透明な釉が口縁にのみ施される。

17も瀬戸の盤口縁部片。長石粒を含み粗く、締まりの悪い素地をもち、白濁する半透明の釉が施される。

18は青磁碗。淡灰色の精良緻密な素地に淡緑灰色の透明な釉が施される。内、外面とも細かな貫入が認められる。

19は白磁四耳壺か。二次焼成を受け、釉は青白磁とも思われるような、やや青みを帯びた半透明を呈する。素地は灰白色で精良緻密。

20は手焙り、底部片。内面は僅かに摩滅。

21は鉄釘。残存長3.6cm。

22は砥石。仕上砥、鳴滝産か。１面のみ使用。残存長3.9cm、幅3.7cm、厚さ５mm。

23は２面土壙１のかわらけ。口径8.0cm、底径5.4cm、器高1.8cm。

24は２面柱穴１のかわらけ。口径8.3cm、底径5.2cm、器高1.75cm。23、24はその器形より、ともに14世紀初頭のものかと思われる。

かわらけ溜り出土の遺物

図７はかわらけ溜りから出土した遺物である。

１～34のかわらけは、１～16の口径が概ね７cm代サイズの小型のもの、17～22の口径11cm前後の中型のもの、23～34の口径13cm以上の大型のものに分けられる。口径で大中小のセットがあり、比率的器高が高く、底面も小さく器壁の薄い14世紀前葉の様相を呈する。

中でも15、16は、15が蓋、16は身という形で、口縁を合わせ、中には３cm大の砂利が８個納められた状態での出土であった。蓋部である15の口縁部欠損は故意のものであろう。地鎮等、呪術的な意味合いのあるものか。

35は瓦片。珠文と巴文の一部が認められる鐙（軒丸）瓦の瓦当である。永福寺出土瓦の分類によると、Ⅰ期（創建1192年～寛元宝治年間修理1248年頃）に使用された鐙瓦の内、縁が狭く珠文間も狭いＹＡII 02ｂの型式に分類されるものである。色調は灰色でやや軟質の素地である。

36は砥石小片。仕上砥で鳴滝産か。両面とも使用痕を有し、狭面の３面の痕跡は成形時のものと思われる。1.8cm×1.9cmの大きさで、厚さは２mm。黄灰色。

37は火打ち石。長石か。半透明の乳白色を呈す。部分的に淡茶色。2.3cm×1.8cm大。

38は鉄製品。用途不明。花菱形の皿に柄が付く。柄は約３mmの厚さの２枚が重なり、中程に鋲が打たれる。燭台か柄香炉と思われる。

かわらけ溜りは大きく上層と下層に分かれ、下層から検出されたのが39、40のかわらけである。その形態は上層・下層のかわらけともに14世紀前葉の特徴を備えたものである。

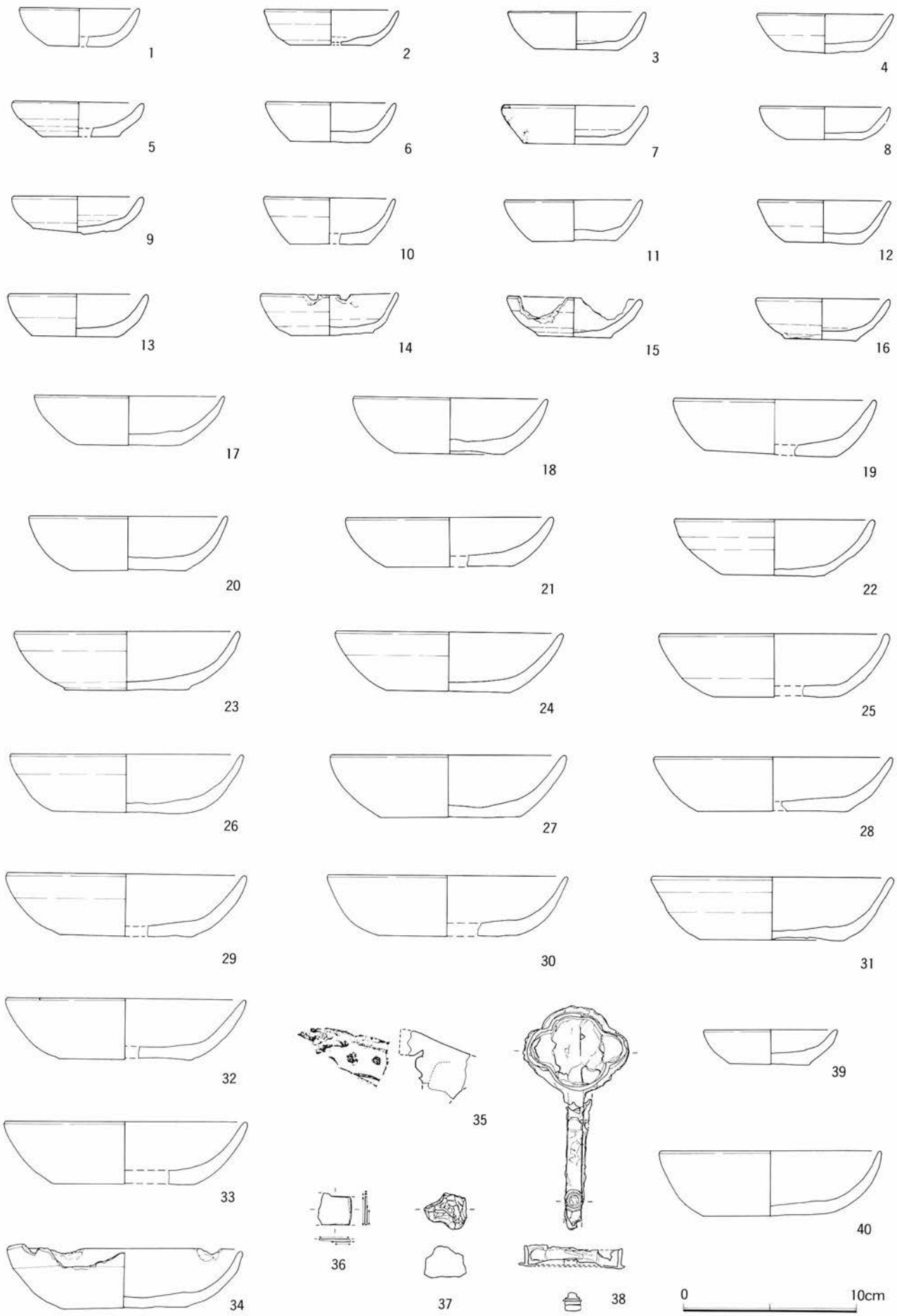


図7　かわらけ溜りの遺物

第4章　まとめ

調査地の西側は、山の尾根を高さ約10mまで切り崩した崖面である。崖面の裾には幅約70cm、深さ30cm程の岩盤を穿った排水溝が巡っていた。切り崩した部分にあたる調査地の西半分は、岩盤を平坦に削り面を造っていた。2層検出された地業層と平坦に削り出された岩盤面の遺構から出土した遺物から、山の尾根を切り崩し谷内を利用始めた時期は14世紀前葉と考えられる。この時期は紅葉ヶ谷が本格的に開発されていった（夢窓疎石が南芳庵を永福寺脇に建て、この後に南芳庵の北に瑞泉寺の前身である瑞泉院を建てた）時期に当たる。

かわらけ溜りの遺物は、何らかの祭祀を行なった後一括して廃棄（埋納）されたものと考えられる。寺院関連の建物等遺構は確認されなかったが、瑞泉寺（院）、永安寺を中心に、谷内が開発されていった時期を考えると、紅葉ヶ谷に面し14世紀前葉に地業された当調査地もまた何らかの関連性があるものと思われる。この後、谷内で連綿と土地として利用されていったようで、江戸時代の出土遺物がそれを物語っている。また、明治初年の記録に紅葉ヶ谷内には現在の土地の所有者と同姓の渡辺姓が3軒見え、江戸時代末からのつながりがあったものと考えられる。

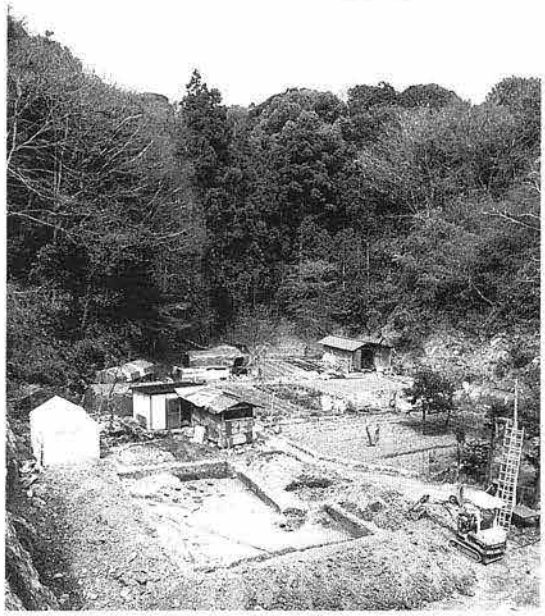
参考文献
『鎌倉廃寺事典』有隣堂　1980年
『鎌倉市史』社寺編　鎌倉市　吉川弘文館　1959年
『としよりのはなし』鎌倉市教育委員会　1971年

表1　かわらけ溜り出土のかわらけ法量表

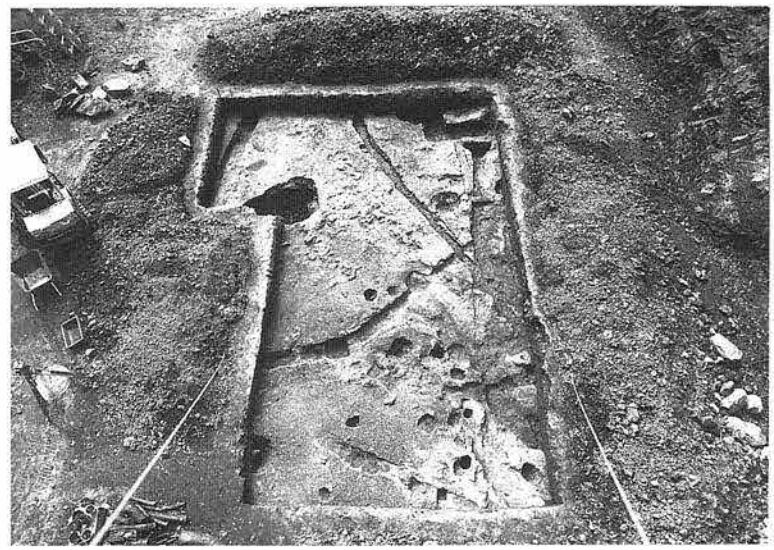
No.	口　径	底径	器高	底部形	No.	口　径	底径	器高	底部形	No.	口　径	底径	器高	底部形
1	6.8	3.6	2.2	糸切り	13	7.8	4.9	2.5	糸切り	25	13.0	7.2	3.6	糸切り
2	7.6	4.6	2.1	糸切り	14	7.8	4.8	2.3	糸切り	26	13.2	7.6	3.4	糸切り
3	7.7	4.8	2.2	糸切り	15	7.6	4.2	2.3	糸切り	27	13.4	8.1	3.6	糸切り
4	7.7	4.5	2.3	糸切り	16	7.6	4.1	2.4	糸切り	28	13.5	8.6	3.1	糸切り
5	7.4	4.4	2.0	糸切り	17	10.8	6.0	2.9	糸切り	29	13.6	7.7	3.6	糸切り
6	7.3	4.6	2.3	糸切り	18	11.0	6.3	3.2	糸切り	30	13.7	8.0	3.5	糸切り
7	8.1	5.9	2.3	糸切り	19	11.5	7.6	3.1	糸切り	31	13.8	8.3	3.6	糸切り
8	7.8	4.2	1.9	糸切り	20	11.2	6.6	3.1	糸切り	32	13.7	7.8	3.5	糸切り
9	7.3	5.0	2.1	糸切り	21	11.7	7.3	2.9	糸切り	33	13.8	8.1	3.6	糸切り
10	7.4	4.5	2.7	糸切り	22	11.4	5.9	3.2	糸切り	34	13.4	7.0	3.4	糸切り
11	7.7	4.8	2.4	糸切り	23	12.8	7.1	3.4	糸切り	39	7.6	4.6	2.0	糸切り
12	7.5	4.5	2.4	糸切り	24	12.9	7.1	3.4	糸切り	40	12.6	7.3	3.8	糸切り

単位はcm

写　真　図　版



◀1．調査地遠景



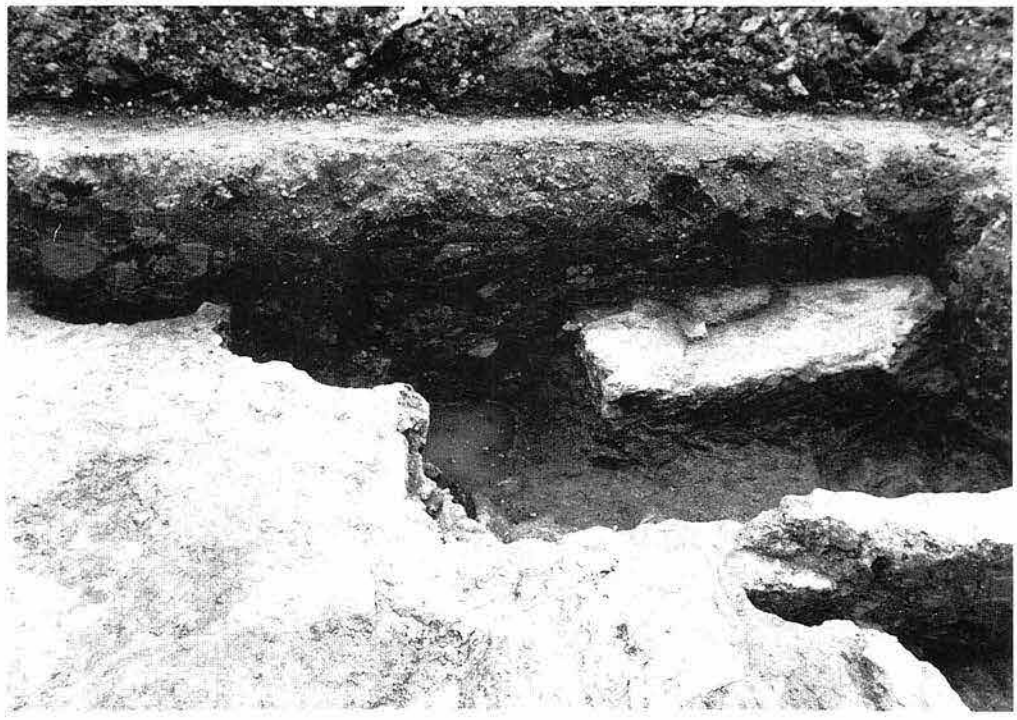
▲2．第1面全景（北より）

◀3．第2面全景（北より）

全　景

▲1．溝 2

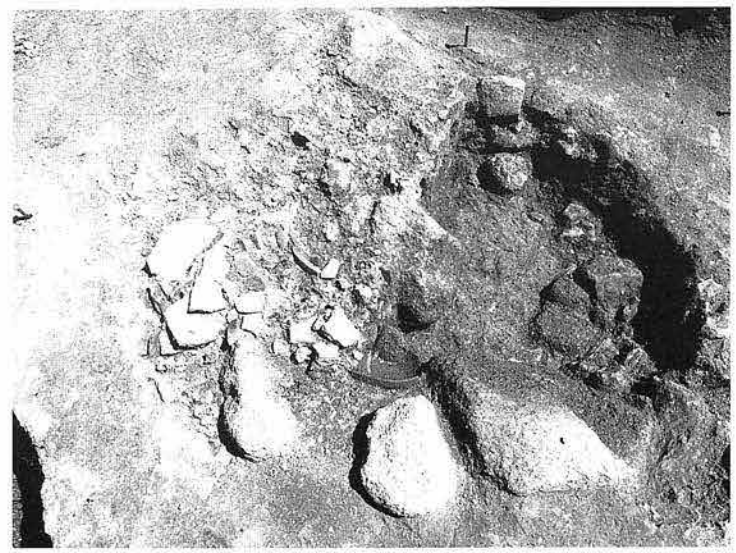
▼2．溝 2



溝

◀1．かわらけ溜り検出状況

▲3．かわらけ溜り出土遺物



▲2．かわらけ溜りセクション

◀4．かわらけ溜り完掘状況

▲1．トレンチ（東より）

▼2．トレンチ（南より）

トレンチ調査

図6－1　－2　－3　－6

－4　－5　－8　－7

－9　－10　－11　－12

－13　－14　－15　－16　－17

－18　－19　－20　－22　－21

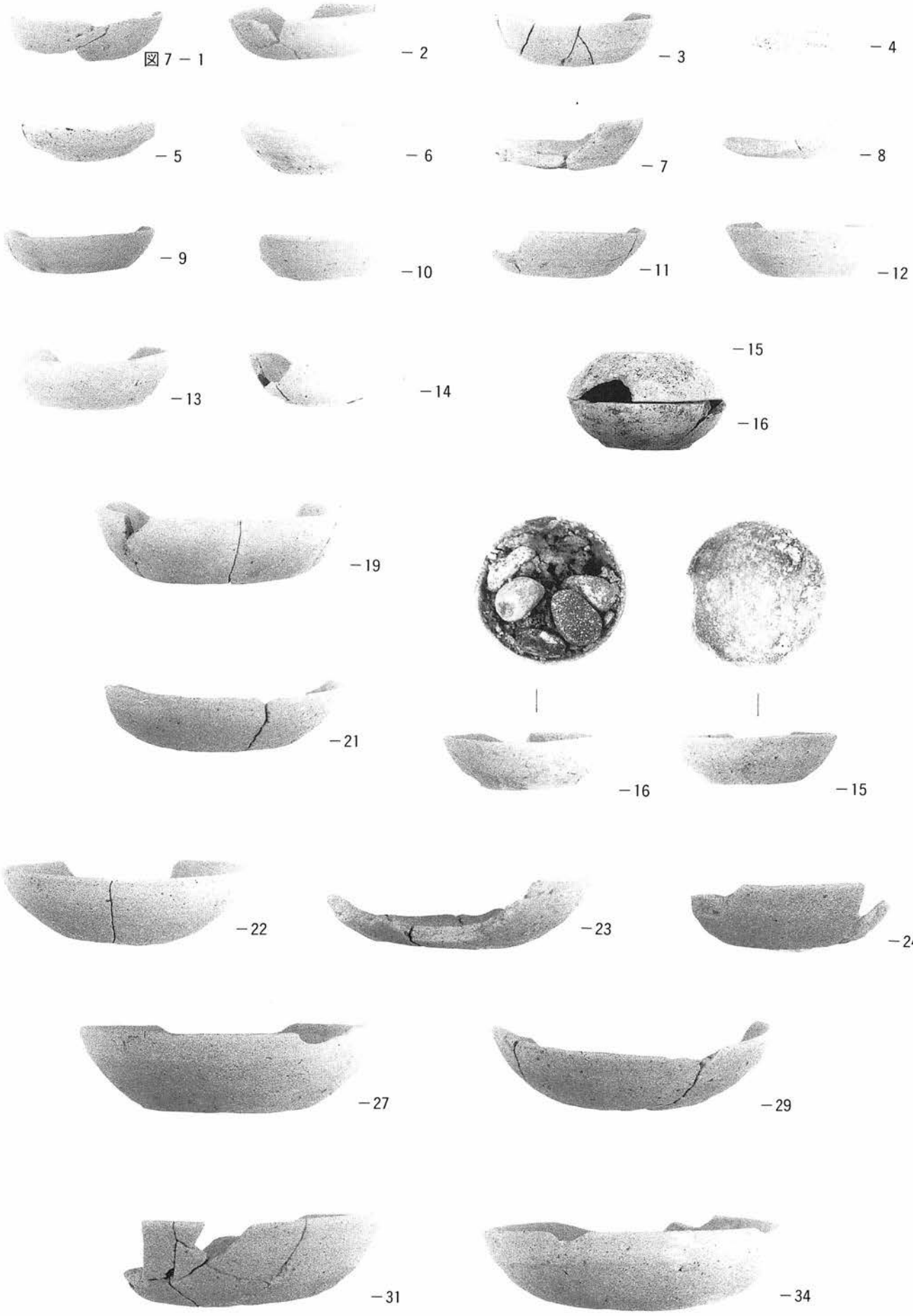
－23　－24

図7－40　－39　－38

－37　－35　－36

包含層・かわらけ溜りの遺物

図版 6



かわらけ溜りの遺物

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成10年度発掘調査報告
巻次	15
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	福田　誠　菊川　泉　神山晶子
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248－8686　神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	平成11年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
ずいせんじしゅうへんいせき 瑞泉寺周辺遺跡	かながわけんかまくらしにかいどうあざもみじがやつ 神奈川県鎌倉市二階堂字紅葉ヶ谷653番3	14204	338	35度 19分 29.5秒	139度 34分 28.4秒	19980309 ～ 19980426	59.94m²	住宅建設に係わる事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
瑞泉寺周辺遺跡	都市	鎌倉時代 ～ 室町時代	・掘立柱建物 ・土壙 ・溝	・かわらけ ・常滑甕 ・青磁 ・銭	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告　15

平成10年度発掘調査報告（第２分冊）

発　行　日　　平成11年３月

編集・発行　　鎌倉市教育委員会

印　　刷　　（有）湘南グッド